五月

女子文壇

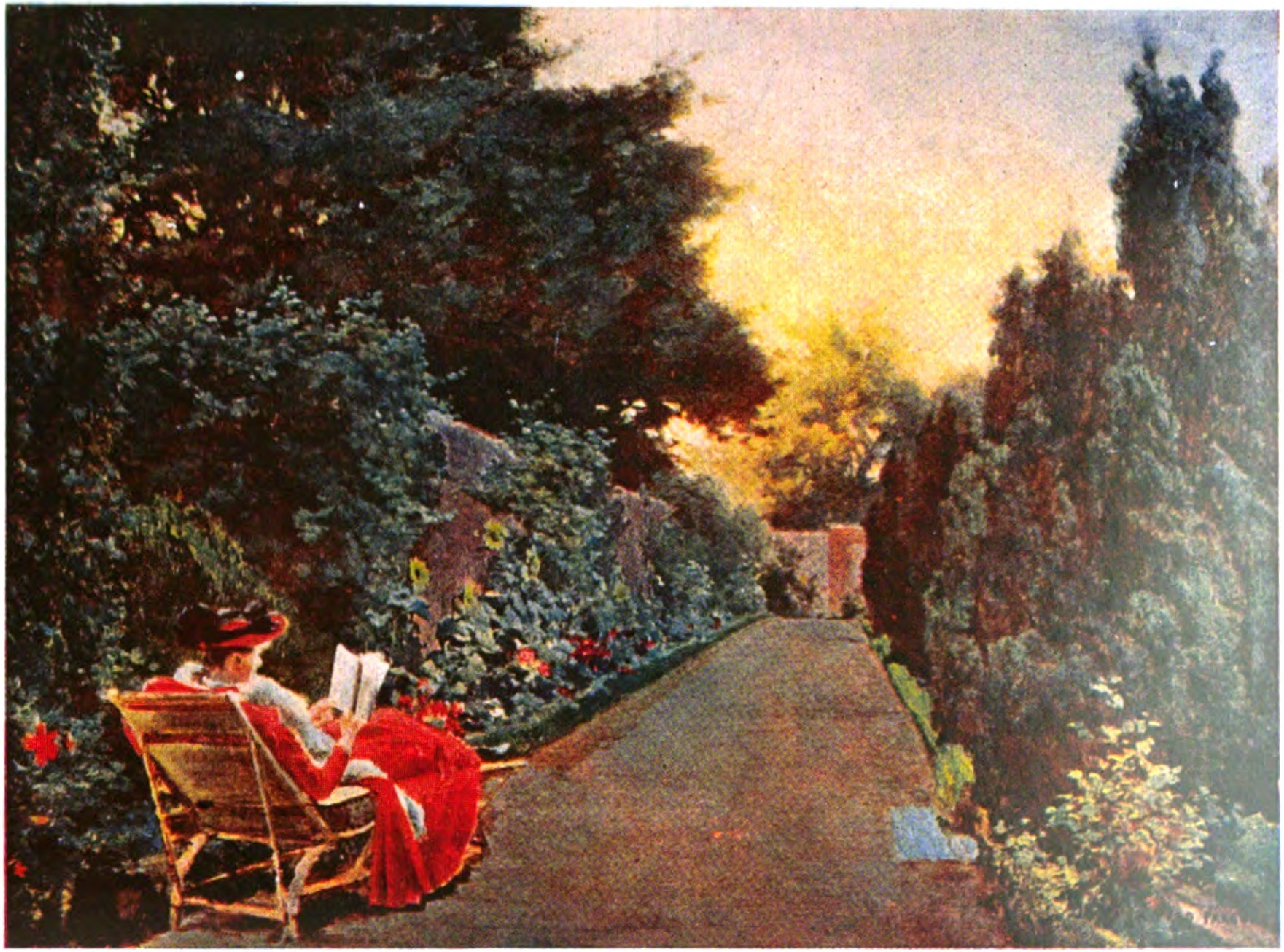


第五年第六號

女子文壇
第五年第六號

目次

薄暮の光



（大江原色版部）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

如何なる婦人も見遁せぬ雜誌

婦人世界

五月一日發行　四卷第六號　一冊拾五錢　郵税一錢五厘　半年分郵税共一圓九錢　一ヶ年二圓[illegible]錢

◎夫婦情愛論……村井弦齋

◎主人と女中　欄本號より新設す……女中を使ふ主人は必ず讀むべく、人に使はるゝ女中も必讀

◎如何せば夫は機嫌よく働いてくれるか……一

◎本誌獨得歴史講談　本號にも面白きもの掲

◎離婚の不幸に陥りし柴田環女史を訪ふ記……婦人記者

◎天才ある婦人の結婚は果して幸福なるか……理學博士　田中正平

◎高橋男爵令嬢と共に送りし米國の三年……周防京子

◎弟と共に苦學して成功せし婦人の苦心實歴……小林富子

◎新婚の西洋婦人を訪ふ記……記者

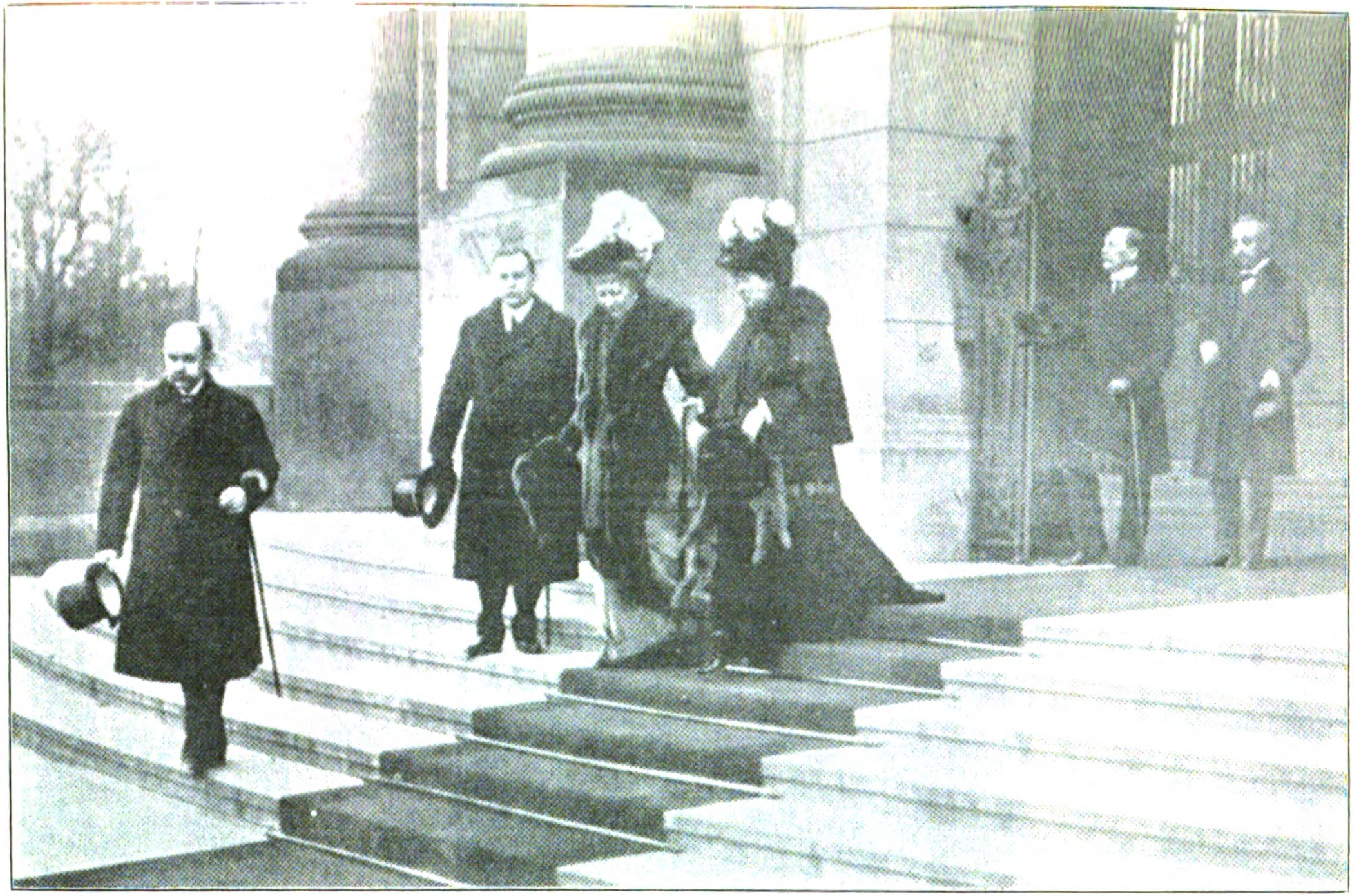
一◎弦齋夫人料理談　は弦齋氏の食事法……

◎米國人の家庭に於ける育兒の實際……一記者

◎私は姑として如何に嫁に對するか……棚橋絢子

東京京橋南紺屋町十二　實業之日本社　（郵便振替貯金口座參貳六番）（電話新橋八七四番）　賣捌全國書店

（ヒノ二）



此圖は獨逸皇后陛下が英國皇后陛下を伴ひて有名なるホーヘンツロン博物館を御巡覽の後、今しも退出遊ばさるゝ所なり

英獨両國母陛下

文士の夫人



沼波瓊音氏夫人



馬場胡蝶氏夫人と愛兒



德田秋聲氏夫人と愛兒

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



新輸入 肉體美容 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艷美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製分壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

根本的色白くなる内服劑 サーサパリラ

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑強なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒瘡毒リウマチス等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を淸淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の内服水劑なり(注意)從來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當舘にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

價壹劑二圓七拾錢△參劑七圓九拾錢△五劑拾貳圓拾錢

色白特効 ペーアス石鹸

此石鹸は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を揭げん**皮膚を潤澤軟密**にし**色を白くし、粗糙質**を治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薰るは館主の實驗保證する所なり、乞ふ昨今世上に濫々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する内國製の粗惡品と玉瓦混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む)

壹個代價送料共八拾五錢△三個函入同上貳圓參拾錢

以上三種專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新舘藥房**

月やくおろし

本劑は片腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ケ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用ふれば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衞生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は一劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効な**類似偽藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「一手專賣元日新舘藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



世界無比 最新發明藥 あざ

入墨は廿日 ほくろそばかす、なまづ、いぼは拾日目に必ず美麗に除去すること**保險附**新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も**痕跡**を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の**美質**を完うせよ來館者へは山の如き全治者の**感謝狀**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に**世界唯一**の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨ほくろを除去し又一はそばかす、なまづ、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送付すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割增し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす)着金即刻小包郵送す

以上專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新舘藥房**

衛生經濟 家事實修法

挿畫數個入
菊版最優美
正價金六拾錢
郵稅金八錢

下田歌子女史著

●婦人の最も心すべきは一家經濟と衛生となりこれを外にしては家庭の幸福遂に望むべからず

▲衛生に叶ひ經濟に適する食物として如何なるものを採るべきか。

▲衛生に適し經濟に叶ふ衣服として如何なるものを用ふべきか。

▲衛生に叶ひ經濟に適する家屋として如何なるものを撰ぶべきか。

以上の外家事百般の注意、網羅して本書にあり、實用的に可成通俗的にしたるを以て、直ちに實際に應用し得べし。著者は多年の實驗と深遠なる學理とを以て本書を編述したり、家庭をして幸福ならしめんとする婦人の必ず一讀すべきものなり。

●家庭農藝談

川井甚平君 千葉敬止君共著

再版

菊版高尚製本
定價金四拾錢
郵稅金八錢

●子供

愛國婦人會長岩倉公爵夫人 育兒會幹事中山夫人題歌
東京外國語學校教授尺秀三郎君著

再版

大和綴美本密書百十七個入
定價金六拾錢 送料金八錢

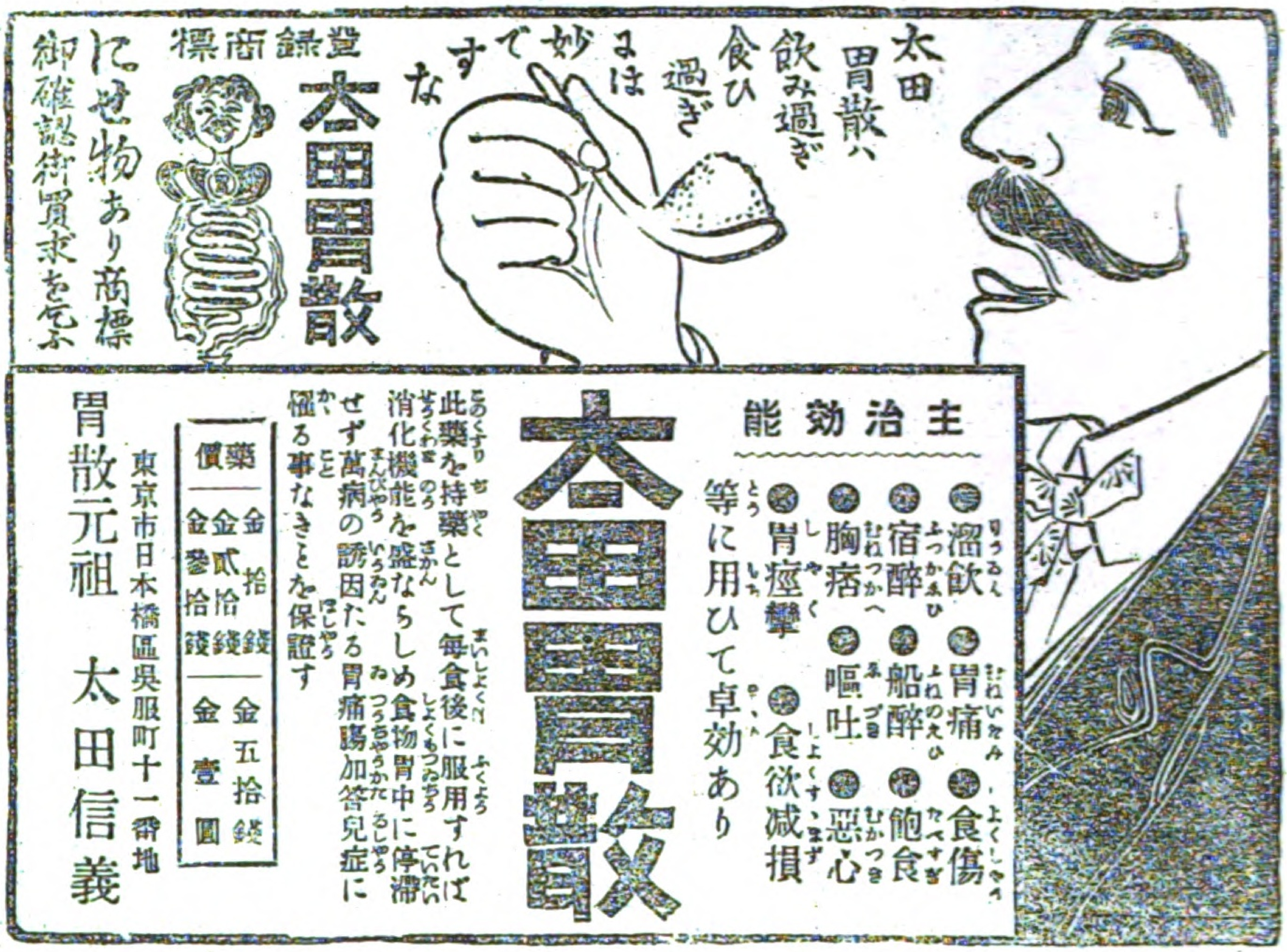
發兌元
東京本郷森川町一
振替口座九三〇八
育成會

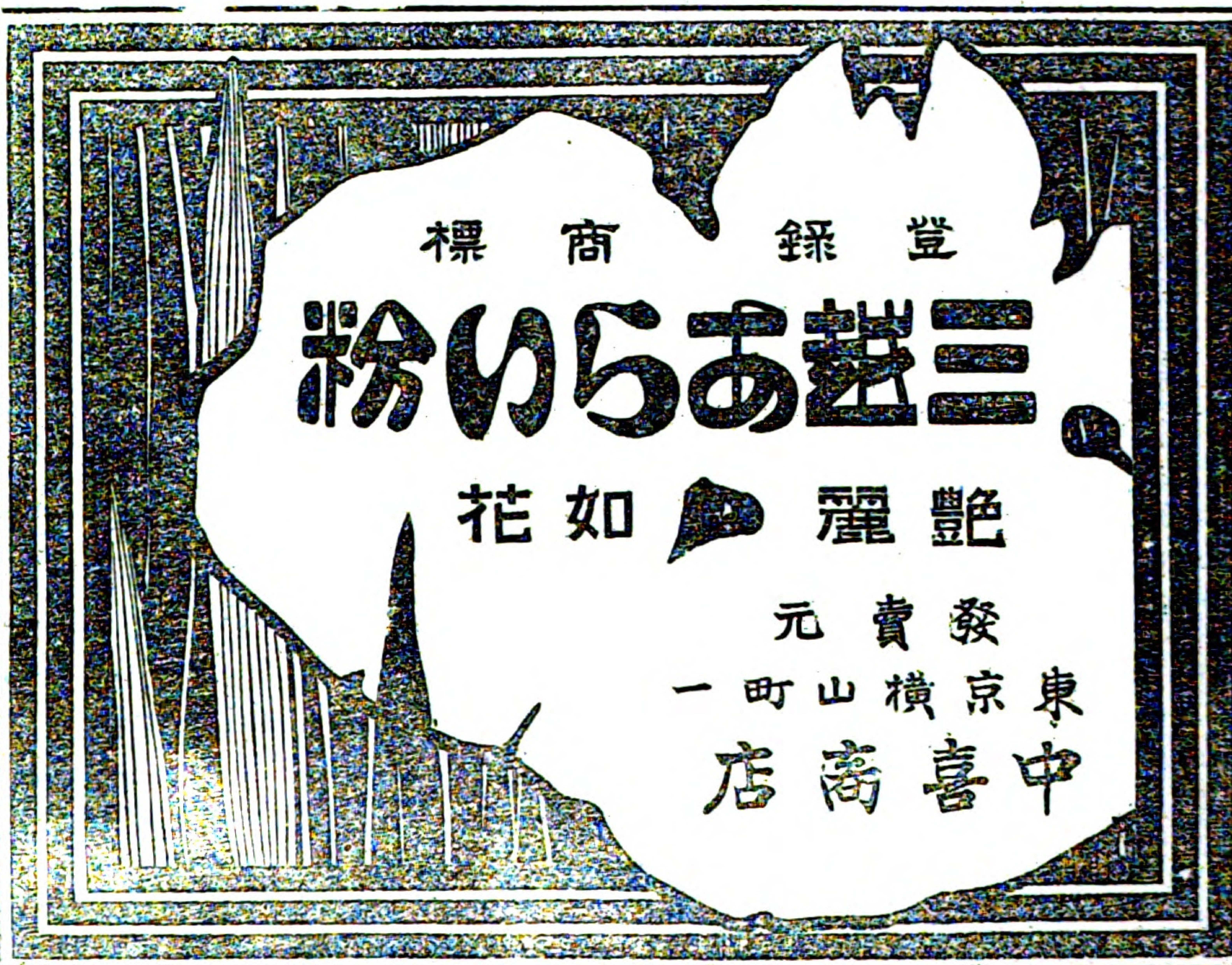
月見草



竹久夢二筆

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ





女子文壇の廣告に依り御申込の節は其旨御書添を乞ふ

◉大發展紙數增加◉

材料豐富

少年之友

記事清新

五月一日發行　四卷五號　（價）一冊郵税共金九錢　六冊全金四十八錢

美麗なる口繪

◎アレキサンダー大王の少年時代（悍馬を乗り懲らす處）……谷洗馬筆◎軍用駱駝の輸送◎初夏の花（庭園の藤、菖蒲、芍薬）◎少年風船乘◎英領コロンビヤに於ける鮭獵……

面白きお噺

◉探險船日東丸 長田令二 ◉象の鼻の由來 野口米次郎 ◉水族館内の戰爭 カアウード氏 ◉春の蝶々 深井武司 ◉月の話 むらさき ◉初夏 ひでまろ ◉高飛競爭 てる子 ◉少女小說 孝子さんの心配 花園波南 ◉社前の舞 村田犀川

好きな讀物

△少年十二訓
△五月の花
△米人の見たる日本
△少年日記
△繪さがし
△泣く顔、鼻たらし、怒る顔

◀毎號懸賞 少年文壇▶

○長文○短文○日記文○短詩○和歌○俳句○お笑草○新考物○少年倶樂部○筆蹟○スケッチ

發行所 東京神田旅籠町一丁目 文光堂（振替口座一九五五）

賣捌 東京堂◎東海堂◎北隆館◎良明堂◎上田屋◎至誠堂

春の演奏



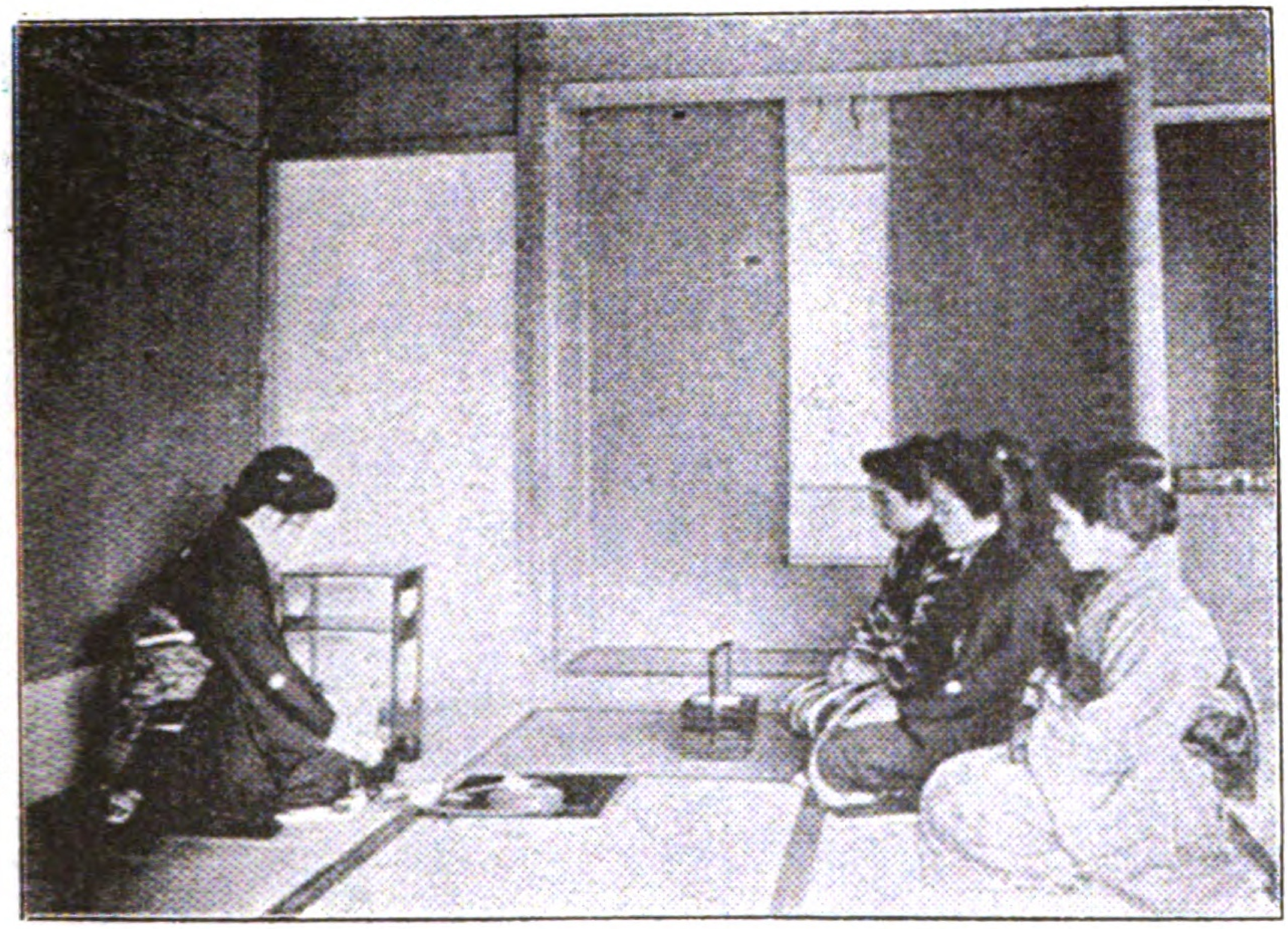
女子音樂學校樂娛會春季演奏會の光景にして坪川辰雄氏の撮影に成る



上野高等女學校の弓術練習の實景にして後ろに立てるは弓術師範酒井氏なり、下谷細谷鏡子女の寄贈

女學校の弓術

茶の湯



（寫眞研究會坪川辰雄氏撮影）



（常陸　久保谷君寄贈）

土浦常陽學校の造花練習

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

聲惡しき人又は聲出ぬ方の新福音

◉美き聲の出る新藥

（藥名ウエーヌス）
藥價 小包送料共
壹劑 壹圓拾五錢
特製 參圓廿五錢

人の美は聲にあり……人の愛は聲にあり

▲聲美しくして―淑女は嫋嫋たり―▲聲麗しくして―男子は威厳あり
▲聲は人格を高尚ならしむる要素なり―謠曲家、演說家、音樂家、藝人は聲音即ち其人の生命なり

發聲藥は古來世に甚だ多し然れども其確効あるは恐らくは疑はし。獨り此「ウエーヌス」の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり。「ウエーヌス」は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑なり。何程音聲惡しき方又は聲出ぬ人にても本劑特別製分を服すれば直に全治し充分なる美聲を發するを確證す

「ウエーヌス」有効感謝狀 近着の分二三を左に拔載す

私儀此度當市興行の際非常に音聲を痛め候處貴舖より「ウエーヌス」と申す藥頂戴仕り服藥候處早速全快に至り實に其効神の如きに驚入申候依て玆に御禮及證明仕候也

明治四十一年二月五日　竹本大島太夫㊞

拜啓妾儀時々音聲をいため色々の藥を用ひ居り候處更に効能もなく拾貳時中苦勞致居り候際はからずも當市出勤中貴舖の「ウエーヌス」をいただき候に忽ち音聲も本復仕り難有存じ候眞に其効驗の大なること驚入申候乍失敬以紙上御禮申上候也

明治四十年壹月　大阪女義太夫　長廣㊞

拜啓小生儀過般咽喉に異狀を生じ從來の美音(?!)は再び小生自身さへも聞く事能はずと存じ營業上頗る困却罷在候處貴製の「ウエーヌス」を服用する僅に二回にして全く本復仕候段偏に貴館の賜に有之候間玆に以書面謝辭申述べ併せて音聲を以て世に立つの大方諸君が必携の良劑たる事を證明致候也

明治四十年三月廿四日　新派俳優　菊池武成㊞

專賣元　東京市神田五軒町拾九番地　**日新館藥房**

◉有効保險 前代未發 秘傳奇術

全壹册正價郵税共參拾五錢△郵劵代用は四拾五錢封送の事

（目錄大要）神經衰弱の新療法◎陰萎病を必治する新法◎陰○の爛れを治する法◎消渇を必治する法◎頑癬の必治法◎人造麝香の製法◎上等香水製法◎香袋製法◎美顔クリーム製造法◎音聲を清良にする法◎齒痛即治藥製法◎髮の脱落するを止むる法◎化粧石鹸製法◎西洋白粉製法◎毛髮必生法◎臭汗治法◎白髮を染る法◎毛髮の光澤を美にする新藥◎齒磨粉製法◎西洋梳油製造新法◎にきび即治法◎ほくろを落す法◎ビツトル酒製法◎夏日室内を爽涼にする法◎羅紗類を汚せるインキ斑痕を除く法◎白瓜を一年新鮮に貯ふ法◎蚤を驅除する良法◎氷を即時製造する法◎百年長壽の奇法◎生涯病に罹らざる奇法◎人の生死を豫知する法◎船中より海の底を見る法◎百日眠らず體衰へざる法◎拔毛劑新法◎寢入たる者に答へしむる法◎禿頭病必治法◎寢入りたる男女の心中を知る法◎白なまず即治法◎五十の鬚婆を二八の娘に變ずる法◎脚氣病必治法◎妖怪變化を見顯はす神術◎人體不死の奇法◎千里一足飛行の神術◎盗入を見顯はす神術◎女に○れらるゝ藥法◎硬き毛髮を柔軟にする法◎思ふ女を○○かす藥法◎堅き女の氣を○○す藥法◎陰○を長大にする藥法◎そばかす必治法◎女を○○にて泣す神藥◎夢に戀人と語る秘術◎見染し女を手に○れる神法◎待人來る神術◎一生戀中變らぬ秘術◎悋氣深き女を治する藥法◎園中の秘藥◎即座に男精を増す法◎毒蟲に螫れたる時醒ぬ特効藥◎避食の仙術◎神速に精力を強む法◎即座陰身術◎人を眠らす秘法即ち催眠術◎顔赤く吹出物生ずるを治する法◎過房を治する妙法◎多情を抑制する秘法◎色慾なき女に情を○せしむる法◎記臆力を増進する法◎女孕みの仙術◎男女梅毒の有無を知る法◎淫婦識破の奇術◎黑字夜光の奇術◎老人終身鬚取りの奇術◎腋臭を治する法◎色を白くする內服劑新法◎寶丹の藥法◎腹痛速治法◎疥癬病の藥法◎生たる鯉を遠國へ送る法◎脹滿を治する法◎黄疸を治する法◎鮫肌を直す秘法◎味噌の損じたるを直す法◎痳病の治法◎月經の不順を治する法◎疝氣の妙劑◎歯痛を治する法◎陰部の臭きを治する法◎陰部の虱を去る法◎にきびを去る最新法◎頭髮を長くする法◎毛生藥の最新法◎梅毒必治の新法◎便毒必治の新法◎下疳を治する奇法◎胃病の新劑◎百日咳の妙法◎肺病必治の新藥◎中風除防の新法◎凍瘡の妙法◎衣服に酒のしみたるを洗はずして落す法◎火傷即治の秘法◎シヤクリ即治法◎聲を能くする新術◎白髮豫防新法◎土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法◎寢小便を治する秘法◎頭瘡を治する法◎耳だれを治する法◎いぼを取る法◎おざを拔く新法◎乳の出る妙藥◎陰部の諸瘡治する法◎虎列拉病療治簡易法◎梅毒豫防の奇法◎思ふ時目を覺す法◎年齢により事房の度數◎病氣前知の奇術◎男女全身の色を白くし且つ艶美ならしむる法◎苺酒を製造する法◎窖を造るの秘法◎一時に數拾匹の鼠を捕獲する秘法◎夏帽子洗濯新法◎氈の汚染を落す新法◎新しき鍋釜の鐵氣を止る法◎簡易美顔術新法◎衣服に油の付たるを落す良法△以下數拾法略す（合計壹百四十法あり）着金即刻送本す

專賣元　東京神田區五軒町拾九番地　**日新館商店**

大讀者號

努力之結晶

『大讀者號』の齎らすべき使命は吾人多く云ふの必要なきも、其最も著大なる二三を擧ぐれば、

一、年若き無名の文人が如何の程度に於て我文壇に新なる地歩を占むべきか。

二、現下の青年文士は如何に最近の思潮、傾向等を受け入れつゝありや。

三、文藝に對する一般青年の態度、是也。『藝術の爲めの藝術』の聲を聞くや久し。眞に藝術の爲めの藝術をなし得るもの今の青年諸君より適當なるはなし、爾らば『大讀者號』は藝術の爲めの藝術として編まれたる尊むびき努力の滴也結晶也。

秀才文壇春季定期增刊

○短篇小說　德田秋聲選
△散文　小川未明選
△論文　中島孤島選
▲寫生文　寒川鼠骨選
△會話　矢部白雨選
○冒險小說　矢部白雨選
▲消息短文　前田夕暮選
△創作批評　前田夕暮選
△俳句　岡本松濱選
○喜劇脚本　中內蝶二選
▲新躰詩　人見東明選
△口語詩　小川未明選
▲評釋文　河井醉茗選
△小品文　西村醉夢選
▲漢詩　小笠原盧舟選
▲和歌　尾上柴舟選
△スケッチ　服部恩夫選

四月二十日發行
一冊金二十錢　郵稅二錢
口繪數葉入り

文光堂發行
東京神田區旅籠町一丁目二十三番地
（振替口座一九五五番）

清新



（新潟縣）熊谷つれ子

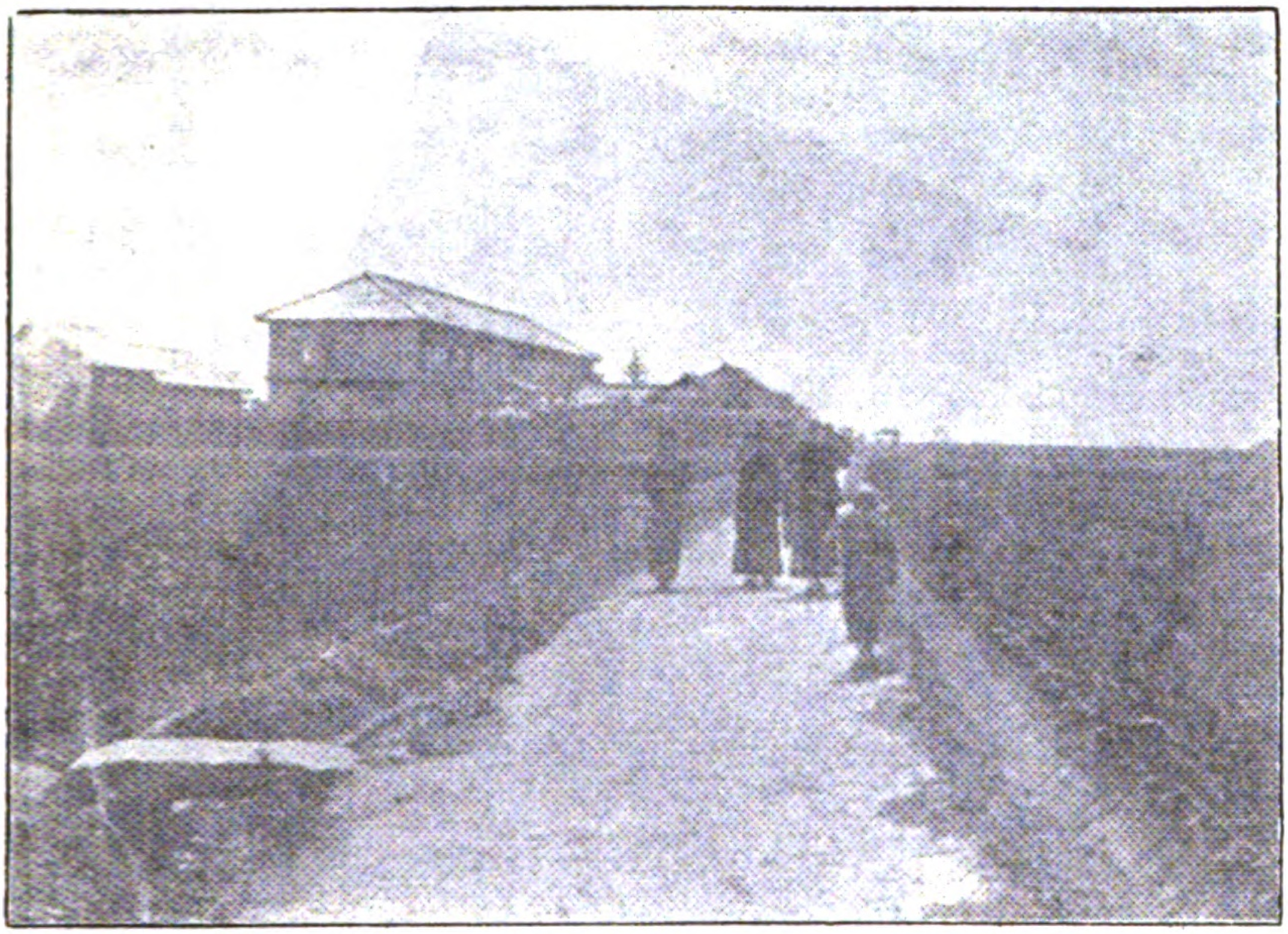


（大坂市）今西はるゑ子



（廣島市）内海敏江子

今治高等女學校遠景



同校割烹室



（伊豫 村上櫻村君寄贈）



女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

美容劑 やせる藥ヨヂピン

醫術開業試驗委員
陸軍三等軍醫正
從三位勳四等
醫學士 田村化三郎

本劑は余が多年の間苦心と研究の上發見したる最新の靈藥にして有病と無病とに拘はらずすべて身體の肥り過ぎた人には其風彩容貌の醜惡を美容艷麗なる姿に變化ならしめ且つ身體を完全に健康となすの特長を有し卒中其他肥滿なる病に伴ふ惡しき諸病を未發に防ぐの特効ある靈藥なり

藥價	
十日分	金壹圓
卅日分	金貳圓七拾錢
送料	八錢

(ほノ四)

東京市日本橋區檜物町十八番地

龜田藥局發賣

【振替東京一八六九五番】

歌へ唱歌





（仙臺　泉田香子寄贈）

仙臺躑躅ケ岡の櫻花

わが寫眞帖



（新潟縣）須貝紀巳子、眞柄操子、井上貞子



（埼玉縣）茂木多賀代子、同荻江子、同花代子





（千葉縣）伊橋福子、大木梅枝子、同富江子



（茨城縣）岩上増子、石濱光子、飯田芳子

（岡山縣）萬戸民子、鈴木皆子　鶴見千代子

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



田村江東君著

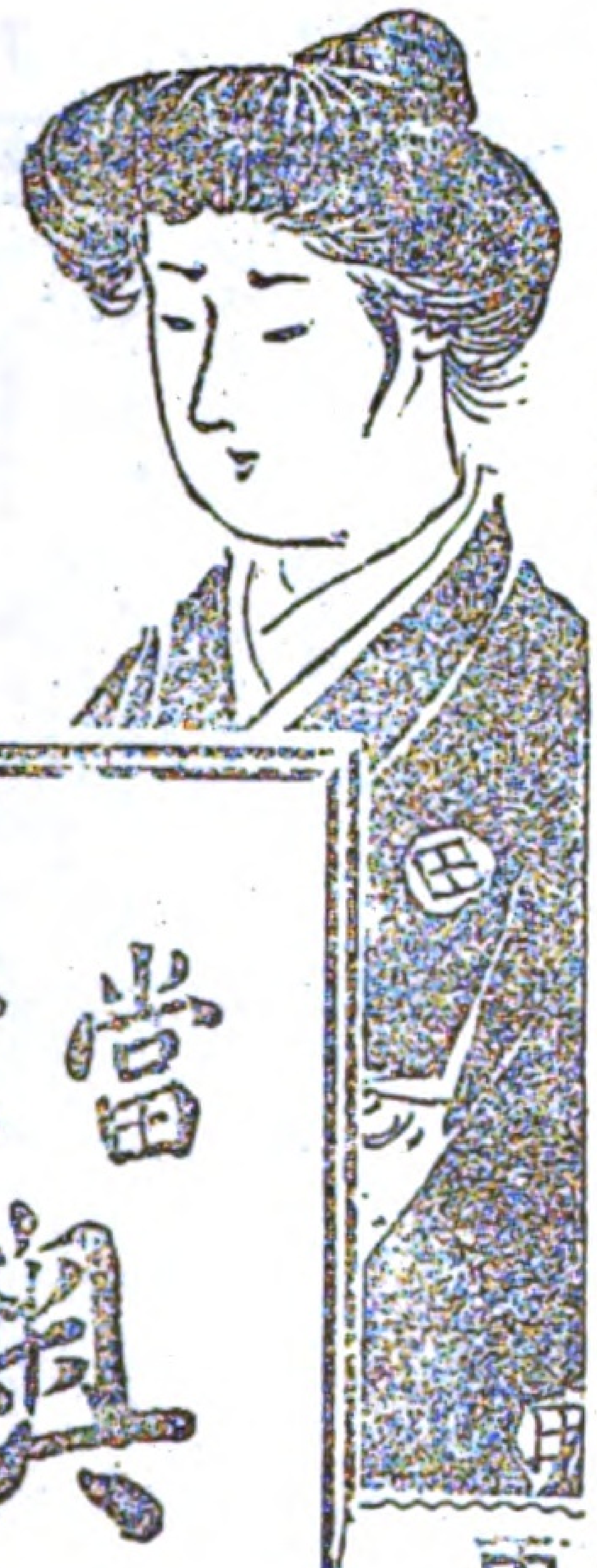
活動せる實業界の婦人

正價卅八錢　郵稅八錢

全一册
洋裝菊判紙數二百四十頁
卷頭實業家婦人寫眞版數葉入

内容

△勤勉力行の化身…三枝かね子△文明の美花…菅川英子△發明家の妻…仁科絃子△内願の□なき婦人…山崎ため子△獨立自尊の標本…篠原よれ子△隱れたる偉勳…川合こう子△黑リボン…伊藤なかト△時計の針の撓みなき妻…服部まん子△夫婦共勵の醫師…篠田せい子△白牡丹の姉妹…松田八十子大西琴子△寧ろ襯衣を縫はん…秦利舞子△準備教育を受けし嫁…佐藤歌子△才德兼備の良妻…龜井まき子△商業教育の産物…宮成梓子△福德圓滿の内儀…横田鍬子△商賣繁昌の秘訣…内田とめ子△夜店の女書肆…片桐なか子△實踐躬行の才女…山崎きみ子△白芙蓉…丸茂宗子△此母にして此嫁あり…大橋きよ子△妙齡の女書記…秋山德子△中洲の西大后…佐々木賴子△光榮ある襯衣の元祖…淺野蝶子△實業家の理想的婦人…雨宮信子、同てる子



福田琴月君著

當世奥樣氣質

再版出來

全一册洋裝四六判美本紙數二百頁

正價金參拾錢　郵稅四錢

本書目次

◎奥樣十種　◎奥樣となる事は易く奥樣たる事は難し　◎箱夜
◎人の噂　◎奥樣の失望
◎結婚前の某孃に答ふ　◎あはれな誇り　△餘興
◎大みそか　◎會社員の奥樣
◎土産日記　◎母より　◎滑稽鰻の蒲燒

振替貯金口座東京二四〇番　東京本町　博文館　費用電話本局二六二〇番

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

原稿用紙

●投稿家に必要なるもの!!!

●此原稿用紙は秀才文壇、女子文壇編輯局の認可を受け專賣して居ります他に類のない完全な原稿用紙です。

●此用紙の最も特色とする所は紙質が純白滑澤で筆の走りが能いのとペンでも毛筆でも自由に綺麗に書けます。

●此の原稿用紙を御用いに成れば投稿規定に背く事なく安心して募集に應じられます。

▲定價　二百枚に付小包料共金四十五錢
　　　　四百枚に付仝　金八十三錢

▲二百枚以下は御斷り申上ます。▲御送金は必ず爲替に願ます(神田局)宛の事。

東京神田區東松下町四十七　愛文堂

秘訣 リウマチス全治

妾儀多年リウマチス病に罹り百方手を盡すも更に効なく困難の處不思議の神薬の奇効に依り忽ち根治全快し喜悅に堪へず依つて人助のため同病者に事實を告げ救治せんとす御希望の方は郵券貳錢封入申込次第詳細に御通知申上可く候間御遠慮なく申込あれ

東京府下大森停車場東太畑　河奈とめ女

新美文

女子文壇第二月增刊　殘部僅少に付急御注文を乞ふ

口繪　入選作家十二人肖像　寫眞挿入

▲樂譜……三隅氏密書

大懸賞女子傑作

▲美文　▲小説…▲新體詩　▲和歌…▲書簡文　▲論文…　▲俳句…　▲スケッチ　▲短文

(二百餘頁充實)

附錄名家新作

◎小寒日記……薄田泣菫
◎裏の家……吉江孤雁
◎憧憬……小川未明
◎一轉機……高須梅溪
◎女床屋……兒玉花外
◎拾て犬……岡田八千代
◎火葉……澤村胡夷

定價二拾錢＝郵税一錢五厘

發兌元　東京京橋大鋸町　女子文壇社（振替口座壹七二九番）

賣捌所　全國到る處の雜誌書店

▲特賣廣告▼

懸賞文集 文壇の花

大判二百五十頁
特賣價金拾錢
郵稅一錢五厘

女子懸賞文集 第二

中判五百頁
特賣價金貳拾錢
郵稅六錢

懸賞文集 文壇の光

大判二百四十頁
特賣價金拾錢
郵稅一錢五厘

最寄書店になくば出版元へ申込を乞

世に作文書多しと雖も、妙齡花の如き少女の手に成りし生きたる作文作歌の良書は此等を推して其俊なるものとす、女子平生の心掛として優しき文章を學ばんと欲する者は來りて本書に親しめ、新時代の新文藝に接觸せんと欲するものも亦本書を繙け、此の如く廉價に此の如く容易に、作文作歌の道に入るの法は殆んど他になし、敢て之を提供す

東京京橋區大鋸町 女子文壇社出版 （振替口座第一七二九番）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

五月十五日増刊

わが『新作家』は全國の才秀でたる女子が、其**心血**を注いで成る小說、美文、日記、新躰詩、脚本、和歌、俳句等一切の文學的作品を**滿載**して、今や旬日の後に發刊せられんとす。豫て發表せし如く、選拔の方法も、編輯の方法も、從來の慣習を打破して、全然**面目**を**一新**せり。讀者一度本誌を手に取らば其の**興味**多きに**驚**きたまはむ、全誌の文字、一語一句と雖も、皆新しき意味、美しき感情に充つ、**未見**の女子の**姿**は如何に**清**かるべき、**未聞**の女子の**聲**は如何に**朗**かなるべき、**妙齡**の人は妙齡の人を懷ふ、居ながらにして**現代**の若き女子の**思想**を窺ひ、其胸奧に**接觸**せんと思はゞ、直ちに本誌を繙け、何ぞ其方法の簡單なるや。編者は之を**統一**し、之を選評するに**全力**を傾けたり、個人に對する**同情**の念と、文藝に對する**尊重**の念とは遺憾なく本誌に**實現**せられたるを信ず。卷末には各寄稿家の日課表を添へたれば、作物と對照して其人の平生を知るも亦一興なるべし。



女子文壇

第二增刊

新作家

全紙數大判
二百廿餘頁
入賞新作家
寫眞數葉入

附錄

新進閨秀作家短篇小說

定價金貳拾錢
郵稅一錢五厘

發行所 東京市京橋區大鋸町十二番 女子文壇社 （實捌全國雜誌書店）



第五年第六號

明治四十二年五月一日發行

靜かな宵だ。若葉の香が薫物でもするやうに近傍に漂うて來る。木といはず、草といはず、ささやかな一葉一葉のつく吐息が燻ゆり合つて、美酒のやうに人の魂までも引き入れるかと思ふと、今更に初夏の漲らす生命の烈しさに驚かざるを得ぬ。戀によろしい宵かな。在五中將が二條の后を盜み出したのも、或はこのやうな夜であつたかも知れぬ。大和には歷史の潮は一度寄せた許り、而もそれで充分であつた。退潮は遠くの彼方へ落ちて了つたが、後に殘した『時代』の移り香は、あたりの物に染み入つて、いつの世までも薄らがうとはせぬ、春日野の空氣は承和仁壽の往時も今も聊か異なつて居らうとは思はれぬ。事によると、中將は今だに武藏野の若草に籠つてゐるかも知れぬ。

薄田泣菫氏『春日野』より

祇園精舍の檐朽ちて
葷酒の香のみ高くとも
セント、ソヒヤの塔荒れて
福音俗に媚ぶるとも
聞けや夕の鐘のうち
靈鷲橄欖いにしへの
高き尊き法の聲。
天地有情の夕まぐれ
わが驂鸞の夢さめて
鳳樓いつか跡もなく
花もにほひも夕月も
うつゝは脆き春の世や
岩上の霞たちきりて
縫へる仙女の綾ごろも
袖にあらしはつらくとも
「自然」の胸をゆるがして
響く微妙の樂の聲
その一音はこゝにあり。

土井晩翠氏『暮鐘』より



若き婦人の根本修養

羽仁もと子

第五　よき頭腦は如何にしてつくらるゝ乎(上)

昔の樣に世の中の寸法が一々きまつて居つて、習慣と仕來りに從つて居りさへすれば、大概無事に過された時とは違ひ、世の中の複雜になつて來た今日は、己が身のまはりに起り來る問題を充分に解釋し、適當に所置してゆく丈の頭腦と勇氣のない人は、妻としても母としても、又獨立の婦人としても到底世に立つ事の出來ない人て、かゝる人々の側より見れば、今は誠に六ヶ敷、骨の折れる世の中でせうけれども、よき頭腦を持つて世渡をする人の爲には、實に望の多い生甲斐のある世の中であるといふことを、前に詳しく記しました。さうしてそれゆゑに私共に何よりも最も大切なるものとして、よき頭腦を持たねばならぬといふことをお話し致しました。順序として此號に於ては、どうしたならばよき頭腦をつくるて

とが出來るものかといふ事を記さねばなりません。
しかし此の說明は甚だ困難で御座いますが、出來るだけ平易に御話しゝたいと思ひます。

精神の食物と精神の運動

私は分りやすきために、私共の精神の健全に成長してゆく有樣を、私共の肉體の健康とさうして發育の有樣に擬へてお話しゝたいと思ひます。私共の肉體は常に充分なる營養と、適當の運動とによりて、最も健全にたもたれ、又發達してゆく樣に、私共の精神もその營養となるべきものでこそちがへ、やはり充分なる精神の食物と、精神自らの程よき運動とによつて、立派な頭腦が出來てゆくからで御座います。

活ける智識とは何ぞ

さて私共の精神の食物となるべきものは何でせうか。云ふまでもなく智識で御座います、さうして精神の運動とは、私共の心の事に當つて働くことをいふので御座います。

私共の筋肉は使へば使ふ程健かになるやうに、心もまた思ふことなしに暮してゐては、弱く愚かなものになつて仕舞ひます、勿論少女の時代はまだ充分に考へも定まらず、また經驗にも乏しいのですから長上の意見を重んじて、之に從ふべきものでありますけれども、唯ボンヤリと器械的に從つて居るだけでは、後に獨りだちの人間であるべき年齡に達した時にも、自分一人で充分考へて事をするといふことの出來ない人―即ち頭腦のない人になつて仕舞ひます。

兩親や先生の斯うでなければならぬ、アゝでなければならないといふことに就て、常にそれはどういふ譯であらうかと考へて見ても分らぬ處は尋ねもし、これは兩親の意見であるからといふ外に、出來るだけこれこれの譯だからするのだと合點もして行くやうにしたいと思ひます、平生交る友達の中にも樣々の性質樣々境遇がありますゆゑ、他人の長所を見てはそのよき事はいかにして出來上つてゐるのか、また好ましからぬ

癖を見ては、その人は如何なる不注意のために、その惡しき習慣に陷つてゐるのであるかなど考へて見る折もありませう、學校で先生のお話を聞いても、また本を讀んでも、ウッカリ聞き流し讀み流しては、何の事もありませぬけれど、心を用ゐて聞きもし讀みもして見ると、必ず何か心に殘ることがありませう、その一寸心にとまつた事柄を、また其儘に置きますと、矢張あとかたもなく消えてなくなつて仕舞ひますけれど、一度心にとまつた事は、物によつて或は自身の平生に引くらべ、或は己が持つてゐる樣々の智識に訴へて、出來るだけ詳しく考へ深く味つて見ますから、すべての事が多くの興味を以て、私共の心の奥に浸入し、生きてわが頭脳の中に殘ります、これが即ち本當の活ける智識で御座います。

智識は智識を生む

見るもの聞くものが一々私共の心に觸れても、唯その樣々の事柄が、心の外側を掠めて通り過ぎるだけでは、何の役にも立ちませぬが、見たり聞いたりするものが、己が心の外側に觸るゝ毎に、内なる心が動いて、その中から或ものを捉へ、前のやうに考へ味ひて、心自身の養ひとなし、日に増し健全に日に増し強大に限りなき發達を遂げ得るもので御座います、云ひ換へれば、己が心の活動によつて、心に映り來る樣々の事物を吸收し消化して活ける智識とし而してその活ける智識が、己れらの心の糧となりて、己が心を養ひ育て、更によき活動をすることの出來るものにするのであります。

俗に鼠算といふことが御座います、初めに親鼠がいくつかの子鼠を生み、そのいくつかの子鼠がまたいくつゞゝかの子を設け、またその澤山の子鼠が更にめいめいに多くの子を生むといふことから、もとは一つでありながら、それからそれと各自に限りなくふえて行くとを申します、私共の頭脳の發達して行く有樣もまたこの鼠算と同じやうなものであります、最初の心の活動が一つまたは二つの智識をつくり、その智識が、

更に心を養つて、前よりもよりよき活動をなして、また數々の智識をつくり、その智識がまた心を養つて、更に――前よりもよりよき活動をなして、多くの智識を吸收するからてあります。

若しも始終ボンヤリしてゐて、見るもの聞くものに對し、己が心を働かせることが少いならば、うけ入れる智識、つくり出す智識の乏しいために、恰も私共の肉體の食物に不足したやうに、實に可弱き――いひ換へれば前にも申しますやうに、甚だ暗き甚だ愚かなるものになる譯て御座います。

心を働かせる習慣を養へ

心自らが働いて、己れ自身を立派なるものにすることはよくお分りになつたてありませう、それてありますゆゑ、よき頭腦つくらうとするのには、まづ第一に私共の心自身に働く習慣をつけなければなりません、働く習慣をつくるのには、常にまづ氣をつけて物事を見もし聞きもすることが大切てあります、注意して人の話を聞き、またすべての物を見ますならば、必ず餘計に心にとまることが出て來る筈です。心にとまる事が餘計になると、自らそれに就いて考へることも多くなり、かくして心の糧となる活ける智識が段々に澤山になるのです。さうして又物事に氣をつけ始めますと、それが段々の習慣になり、遂には氣をつけやうと思はずに居ても、自然にすべての事をウッカリと看過すといふことがなくなります。

深く物事を考へぬ娘の實例

私共に極く人のよい若い女中が居りました。人のよいもの丶中には、時々深く物を考へぬ性質の人がよくあるものてす。この娘も矢張りさういふ風てありました。子供を幼稚園につれてゆくのが重な役目てありました。或日のこと幼稚園で粘土細工をするために、前掛が入用だから持つて來るやうにとのことてあつたと申しますゆゑ、それてはあの古い前掛を持つてゆくやうにと云ひつけて置きました。私は前掛の問題はそれ

て落着したことゝ思つて居りますと、その後二週間ばかりもたつてから、大きい女中に前掛を持つてゆかないのは、モー家ばかりになつたと萎れて話したといふことでありましたから、よく聞いて見ると、皆新しい前掛を持つてゆくのに、何だか古い前掛では恥かしいといふので、まだ持つてゆかずにゐるといふことで御座いました。

それで私はこの若い女中に「外の方が新しい前掛を持つて來られるからといふので、古いものでは持つてゆきにくいと思ふさうだが、恥かしいと思ふのはお前の考へ方が違つてゐるからではないかとおもふ。考へ方が違つてゐるといふよりは、ウッカリして氣をつくべき所に氣がつかずにゐるからだらうとおもふ。前掛を何のために持つてゆくか考へて御覧なさい。粘土で着物をよごさないためではないか、土でよごれるものならば一體どんな前掛を持つてゆくのが本當だらう。私は新しい前掛を持つておよこしになつたお家では、多分よい程の古いものがなかつたからであらうとおもふ。若しも古いものがあるのに態々前掛を新調して持つて來た方があるなら、それは却つておかしい位のものではないか。少し氣をつけて考へると、破れもしない古い前掛を持つてゆく方が當りまへだといふ事になりはしまいか。お前はどう考へる。」と申しました所、よく合點がいつたと見えて、正直な性質では御座いますから、「恥かしく御座いません。」と心から申しました。この娘は小學校を卒業して、地方から上京して間もないのでありましたから、丁度よい序とおもふて「その事でお前はウッカリ人まねをしてはならないといふよい教訓を覺えたらう。田舍とは違つて東京は廣いだけに種々の境遇の人、又種々の流派の人が多いから、ウッカリ人まねをしやうものなら、身を誤るもとになる。また今一つの事柄は、ウッカリして物を細かに考へずにゐると、到底チャンとした事の出來ないものだといふ事もよう分つたらうと思ふ。いつでもこの前掛の例を忘れてはならない。」といひ聞せましたのでよく／＼心に入つたと見えて、段々氣をつけて物を考

へる様になりました。さうしてまたそれが慣ひとなつて、段々に獨りて餘程よく氣がつく樣になつたのでありました。物に注意する習慣をつくることはまづ第一に大切だと思ひます。

若き婦人の根本修養

第一 最初の目標は何か（一月號）

○動かぬ目標○一人前の女の資格○危い許りが人生でない○こんな例がございます○安心して生涯を送る法

第二 少女時代に爲さねばならぬ事（二月號）

○手近な一人前の人○人格の土臺となる事○まづ單純の家事を習ふべし○まめやかに働く習慣を養へ

第三 學校に通ひつゝ家事を學ぶ工夫（三月號）

○手順を定めて働くべし○身のまわりの事を自らすべし○如何にして家事を練習すべきか○一、裁縫の稽古○二、張物、火熨斗かけの稽古○三、料理の稽古○四、掃除その他の細かき事

第四 よき頭腦をつくる事（四月號）

○次にはなにを爲すべきか○昔の世の中ゝ今の世の中○今の多くの婦人は如何○習慣と世間並み○人間一生の大事業

▲注意 本號のみを見て未だ前號を見ざる諸孃は、右各號の分を併せ讀まるべし

作中に現れたる女性

巣林子の靈筆

伊原青々園

これが最も愛好するといふ人物は無之候、名作に出てたるは其れぐ誰れも好きに候。女性描寫の妙所とはむつかしき問題に候が、紙治の女房が、小春の肩を持ちて内へ入れるといひ、さうしてお前の身はどうすると良人に聞かれて「ハッと行止まり」など巣林子の靈筆と存候、取留もなき御返事ながら如斯候。

若菜姫

泉鏡花

白縫譚の若菜姫
かゞやくばかりゆふげしやう
はだへもゆきのふりそでの
しろうすものにいろはゆる
からくれなゐのしごきおび
やなぎのこしにやいばもおびず
なにようじんのそいさへみえねど
そなはるゐふうのりんぜんたる

得られぬ物までも欲しがる女の心

農學博士
法學博士　新渡戸稲造

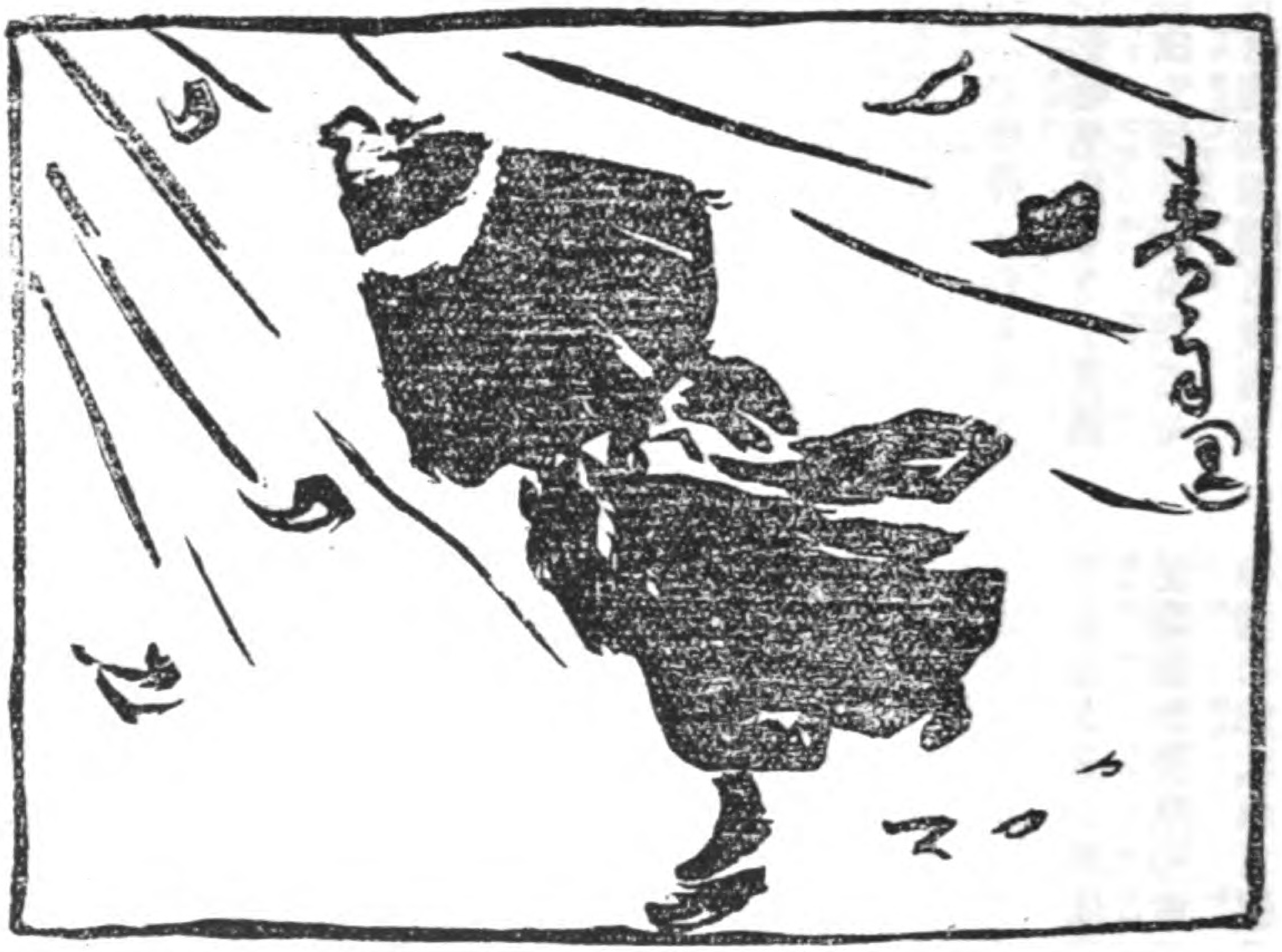
婦人の虚榮心は、即ち限りの無い問題で、限り無いと云ふのは、つまり限り無いものを求めるからである。冗談半分ではあらうが西洋の諺に「男は出來る丈けの物を欲しがる、女はとても得られぬ物までも欲しがる」と云ふ事を云つて居るが、虚榮心とは即ち此處だらう。

一般近頃の經濟的發展などの爲めに生活の度が高くなる、其れを理由として一方に女の奢侈と云ふものがますます激しくなつて來るのは疑ふべからざる事實である。經濟學者は總べての物件を四つの種類に分つて居る。第一が必要品即ち衣食住に屬するものである。第二は禮義上に用ゆるもので、同じ衣服でも紋服袴などの場合がある、紋付や袴で無くば凍えるわけでは無いが是れは社交上の必要品に分類されて居る。第三は安樂の物件で、例へば柔かい蒲團の如きものである。第四が此上の贅澤品に屬するもので、是れは勿論社會も要求せず、健康に害ありとも利の無きものであるのみならず、又道德上にも有害なもので、其害は贅を盡して居る當人が蒙るばかりでなく又他に及ぼすのである。即ち當人には之を見せびらかさうと言ふ傲慢の心が生じる、見るものは羨ましいと言ふ嫉み妬みの心が起きる、斯の如く双方に不快の念が湧きて、心に惡影響を及ぼすに止まらない、此欲望を充さうとする爲めに兩親を苦しめたり、又有益なものを捨てゝ無益なものを求めたり、救ふべき人を救はずして有害なものを買つたり、甚しきに至ては節操まで賣るが如き、其弊害は何處まで及ぶかも知れぬ。

自分は近々ゲーテの「ファースト」を簡易の物語風

に譯して出版する筈てあるが、是れなぞを再三讀み返して見るに、其中なる女性の一人マガレットがだん〳〵墮落して遂に刑に觸れ獄中の人となつたと云ふ事も、遡て其理由を究むれば即ち虛榮心てあつたと、當今我々に深い敎訓を與へるものだと云ふ事を一層感じたのである。

以上に云つたのは物質的のとてあるが、近頃は其れのみては無く、文學的趣味がどう、美術的趣味がどうと人に褒められる事のみに氣をかけて居る、人に褒められたら即ち成功だと心得るが如き、成功の意味を間違へてはならぬ、如何なる方法を以てしても金儲けをすれば宜い事と思つたり、友人を傷つ



け競爭者を陰から讒誣したりしてまて成功と心得るは淺ましい、求めずして來る富貴名譽は受けて差支ないと思ふが、自ら求めると云ふのは如何かと思ふ、求めるにしても至當なる方法を以てしなければならぬ。至當なる方法とは詩人ポープが言つた樣に、

名譽と恥辱は人々の常態から起るものては無い、各々其職を全うすれば其中に名譽が存する。

是れてす、其心を養ふと云ふ事を努めるのが何よりの名譽てあらうと思ふ、故に人から誹りを受けても自分の心に恥かしくなければ怨む必要も無く、辯解する必要も無い、唯少し待て居たならば自から明らかになるので

ある。
　要するに人生——近頃方々で云ふ事だが——は人と人との關係ばかりでは無い、己れと天との關係だと云ふ信念が無くてはならぬ。虚榮心を矯正することの出來ないのは、今日の教育に、今日の家庭に宗教が無いからである。唯人間ばかり見て其前に大きな顏をして其れて能事了れりとして居るからである。（談話）

天才の結婚は必ずしも不幸でない

文學博士　三宅雄次郎

　藝術家の家庭難とか云つて、天才が結婚するのは不幸だなぞと、よくそんな話しを聞くが、一概にそう云ふ事は出來ない、まだよく新聞も見ないから分らぬが、今回の藤井環女史の事にしても、天才だから何う、藝術家だから何うと云ふのでは無いと思はれる、是れは藝術よりも何よりも、當人同士生來の性分そのものが先づ根本で、次では四圍の事情の影響もあらう、其他種々理由はあらうと思ふ、その理由も何と云ふ程でも無い瑣細な事が、却て事を破るに有力なものとならしむるので、此機微なる點を見ずして、直ちに藝術家の夫婦難を云ふのは間違ひである。
　カーライル夫人が天才の妻なんぞになるものぢや無いとか云つたそうだが、この言葉なぞも、どうも喧嘩の時か何かにわざと云つたらしい氣味があつて、實はなか〳〵好い夫婦中だつたとか云ふ樣な話しもある、人が心平らかである時は、趣味が違ふとか意見を異にするとか云ふ事は決して和合に缺くるものでは無い。音樂家が公衆の會で唱歌を歌ふにしても、講釋師同然の樣に思はれて惡るければ、其時は出るのを見合せる、洋行して勉強するならば、又お互ひに協議をして其處

はどうにでもなる、是れが普通で、何にも障りなく出來る筈であるのに、心に隙があると圓滿に話しが出來ぬ、其れは天才であるからでは無く、性分が合はないからだ、又他に事情があるからだ、一體天才〳〵と云つても誰れが何の位の天才だか其んな程度も分るものぢや無い。一方を見れば現に瓜生海軍中將夫人の樣なのもある、彼人も矢張り音樂をやる、洋行もして來た、夫は矢張り軍人だ、それでも何の事も無いぢやないか。

今の世間に離婚沙汰の有るのは一寸も珍らしい事ぢや無い、其中にたま〳〵かう云ふ種類の人があつたと云ふまでだ、どうせ一方に秀でた天才だから又他に短所もあらう、勿論誰れだつて完全なものは無い。性分は如何ともしがたいにしても、名々心の持ち方に氣をつける、其れもつまらないと思ふ事が、積り〳〵て知らぬ間に累を成すから、其れらを尤も氣を付けて行くが肝要である。（談話）

學校を出る人への餞別

法學博士　和田垣謙三

年々歲々同じき情を以て、新らしき卒業生を送るのであるが、自分が今日其の餞別の辭として贈りたいのは自重と云ふ事である、自重は自尊では無い、況んや自負では無い。諸子は先づ以て婦人であつて、さうしてわが日本に類の少ない商業學校卒業と云ふ特別の經歷を得た、從て技能もあり修養もあれば、過去の歷史に對し、はた將來の希望に對つて、他の持たない人に比べて、一層も二層も責任が重い、此處を自重せられたいのである。

自分が學校を卒業した經驗は一度ならず有して居る、其時の事は永く銘記して忘れない、此時此處、此機會に於いて聽いた事は永く腦髓に殘る、腦裡に殘つ

て居れば、それが道念となり性格となつて、あらゆる方面に向つて堅固な穩健な、思想となり行爲となるのである。

特に婦人は、男子から申せば、いろ〳〵の點に於いて、實に氣の毒なことがあつて、世界に於ける多數の人が憐むべき境遇にある、これらの中から脱したものは少い、人間は得手勝手なもので、弱肉强食の狀態は、動物と相距る事遠くないと云つてもよいので、或は社會に或は家庭に、弱い者はます〳〵いぢけ、强い者は益々はびこると云つた風になる。弱い者のいぢける事は決して宜い事では無い、どうしても是れを强めねばならぬ。就中東洋に於ける女子の地位は一層低いから、是れを高めなければならぬ、それは實に社會全躰の責である、故に婦人自身に於いても、進むるに努力せねばならぬと共に、男子も亦弱い者いぢめをして婦人の自重を傷つけてはならぬ。

西洋の方でも、歴史的比較的の上では兎も角、猶ほ根本から婦人に敬意を拂つて居るとは云へない。彼の俚諺と云ふもの程、國民の感情だの意見だのを示すに最も適切なものはない、萬事無言の中の事が觸發して言語となるので、婦人に關する俚諺などを見ると、婦人を見るとの低さ、或る意味から云はゞ、西洋の方が甚しい樣にも思はれる。今其の二三を擧げて云ふと。

藁の男子は黄金の婦人に値する。

これなぞは婦人に對して實に失敬な事なんて、男子が勝手に發明した事が、永き壽命を保つて歐洲に行はれて居る。

男子は行爲、女子は言語なり。

即ち男子は實行する、婦人は口先丈けて、爲す事が嘘だと云ふのである。

第一に男子、第二に女子、第三に惡魔。

宜い、より宜い、最も宜いと云つた三段の漸層法を用ひたが、女子は惡魔に近いもので、男子と伍す事の出來ないものとされて居る。まだあります。

鰻を尻尾から捉へると婦女の言語を信ずるは危險なり。

是れなぞは皮肉の甚しいもので、婦人の方は定めて不愉快でありませう。猶ほ『婦人と犬と胡桃の木とは打つ程よくなる』など亂暴なのがある。是れ等は何も男子が恨みあつて發した言てないが、其れが格言となり諺となつて、人口に膾炙され傳はつたのてある。

若し男子が弱い者をいぢめる爲めに、婦人が萎縮し、遂に自暴自棄する様な事になれば、其の婦人の不幸は男子の不幸である、否天下萬民の不幸である、どうしても互に相俟つて、男子が一歩を進むれば、女子も亦進む、三歩も四歩も後れて居れば婦人も急ぎ、男子も共に助けねばならぬ。時は進んで止まない、時勢は活きた教育を要求して來た、或る時代或る場所その範圍と程度に於いて、活きた考へをもて活きた判斷をせねばならぬ。



社會を見れば、わが國は戰勝國の光榮と共にその負擔した廿億の負債がある、其半分は外國から借りて居る、五千萬同胞の負擔にすると、利子丈けても輕さも

のではない。これらは日露戰爭前には無かつた負擔である。又昨年の秋には戊申詔書と云ふものが下つた、なか〳〵ボンヤリしては居られない。

此點から云つても諸子は自重せねばならぬ、自家の爲めに自重する、自分の母校の爲めに自重する、自分の郷里の爲めに、自分の日本國と云ふものに對しても深く自重せねばならぬ。さうして男子が長らく恥しめた其行爲を、男子自らが改めねばならぬ樣に、此不公平を公平にする努力を爲さねばならぬ、是れ諸子の特權に對する責務であります。種々なる點から此自重の二字を、學校に於ける最後の餞として呈する次第であります。(日本女子商業學校卒業式訓辭の大要敍記)

婦人界の問題

新學期の不振

此の新學期に於て、都鄙一般の女學校に新入學者が減少したと云ふことだ、之が原因を種々の方面から論じてゐる新聞などもあるやうだが、直ちに婦人界の歩調が誤つてゐるかの如く論ずるのは迂だ。大勢は婦人が啓發することに努めてゐる、女子入學者の減少は偶々一時の現象であつて、爾く根本の問題ではなからうと思ふ。

女子の摸倣性

或る心中が行はれると、直ちに傳染して一ヶ月の間に幾組も心中がある、女學生の家出があると、又家出を眞似るものが現れる、善いことにせよ、不善いことにせよ、直ぐ摸倣たがるのは女子通有の弊であらう、之を救ふべき方法を講ずるのも一問題であらうと思ふ。

教育家難

安井哲子、學習院女學部を去る、之が原因に就ては傳ふる處一ならず、然れど學習院を去つたのは事實である、去つた以上は一學校の先生ではない、寧ろ一學校の先生たるより、一般婦人社會の教育家として、女子の自信ある處を披瀝された方が、得る處が多いかも知れぬ、多少自由なる思想を抱いて居る者が、一學校に據ることは或る場合に障害があらう、巳むを得ないことだ。

解放と警戒

解放すべきは解放し、警戒すべきは警戒して宜い何う云ふ點を解放し、何う云ふ點を警戒すべきか之を正當に判斷し指導するのが女子教育家の大いなる責任だ、多くは自家の狹き立脚地から見て、論議するから逹觀したる女子教育論が出ない女子教育界にも亦一偉人を要するのである。

虚榮の食傷

近頃或る女が斯う云ふことを言つた「此頃は方々でヤレ虚榮、ソレ虚榮と、虚榮づくめに言はれるので、虚榮と云ふ辭で耳がたこになつて、それ程深く感じなくなりました」と、或はそんなこともあるか知れぬ、婦人と虚榮と云ふことは、もう大勢に於て定義を下されたやうなものだ、彼等に對つて虚榮に誤られて、は不可いと言た處で、さう深くは感動すまい、又、違う方面から女性の缺陷を補ふやうにせねばならぬ。——(一記者)——



虱とるひと

（ランボオ）

上田敏

ひづかゆき額を赤めをさな兒は
それとなき夢の白き巣立をねがふ時、
爪しろがねに指細きふたりの姉は
たをやかに寢臺近く歩みよる。

青天の光、咲き亂れたる花に注ぐ
明け放ちたる窓のそばに幼兒を抱き行きて
露ふりかゝるその髪の毛のなかに
美くしく、恐ろしく又心迷はする指は動きぬ。

ふたりの息のこわごわにているをきけば
花の如く、草木の如きかをりして、
又折節は喘く聲。口に出づるを
嚥み込みし片唾の音か、接吻の熱き願か。

香よき寂寞のなか、二人の黑き睫は繁叩き
えれきの通ふ細指はうつらうつらと、
貴なる爪の下にこそぷつと虱をつぶしけれ。

時しもあれや、徒然の醉は稚き心に浮び、
狂ほしきハルモニカの吐息の如く
姉が靜かになづさはる其愛撫に小休なく
湧き出てゝまた消えはつるせつなき思。

傀儡子

横瀬夜雨

大雪小雪。

朝からふりやまぬ雪だ。

一寸二寸つゝ、跳ね跳ね趾の跡と尾の型とを雪につけて雀の兒が歩いてゐるきり、庭は靜だ。白いのがはらりと頭へ戯ると雀は頸を縮めてふり落とす。

『村童を倩うて溪芹を摘まんと欲すれば、滿藍の香泥半は是雪』芹はまだ莠きぬが雪は溪を埋めたらう。

上見りやごみのよう。下見りやわたのよう。

頭へ前掛を被つた女の兒が二人ほど内の前で乾き切つた聲で唄うてゐる、が雀はまだ逃げぬ。

おう寒む小寒む、筑波の猨めが啼いて來たと囃しながら、往來から竹足に乘つた一群のわんぱくが押込んで來て女の兒を追う、手袋もはめず、襟卷もせぬ、唇は葡萄色にかはつてゐる。雀の足つ子は、先棒の一人に蹴いて踏み荒す竹足に消されて無くなつた。

雪こんこん霰こんこん、常陸は空寒き三月の一日である。

文庫藏の片づけに今日も朝から籠つてゐた母が、髪の上に雪片をかぶりながら、鳥臺の尉と媼とを持つて來た。母が嫁入つて來た時使うた切り秘藏して出さなかつた品だといふ。出すと、きつと私が男だてらに弄にしてだいなしにしちまつたかも知れない。なぜなら揃うてゐたお雛さますら散々に疵をつけて、緋の袴をはいた官女の首と太鼓を叩いてゐる糸びん奴の首とを篏げかへたり、金卷繪の乘物に内裡さんを無理におつぺし込んだりするので、たうとう姉に持つてかれてしまつた。鳥臺をかくして見せなんだのも最もである。けれど、母も尉と媼が虫に蝕れることは拒げなかつた……

尉が髻虫蝕きて
落かかりたる婆娑ら髮

肩に小蜘の這ひ揩るを
はらふ熊手も折れぬれば

十二一重は綉びし
表の錦に映ゆれども
姥が大事のはながしら
嵐ははなを過にけり

菱に刻りたる雛すら
桃咲く春は籠に召す
誰ぞ、二人をおく庫の
隠所のおくに囚へたる

検非違使は母だつた。

菜の花がぼんやりと路に匂うてゐた晩だといふ。七五三の杯に満々と酌がして長い髯を揺りながら『君は千代ませ』を唄うたおぢいさんは、母が私と一しよに大學病院に入つたあとて



亡くなられた。が奥の燭火の下にめいめい盛装して、新人に侍した伯母や叔母やどんなに花やかてあつたらう。二十一と十七と、十八と。

大雪小雪。

今わが心は雪の如く靜かに地に落ちうとしてゐる。

すべての人は我を辱しめたれど母にはかあいがられたし萬人は皆背いたが母はかはらなかつた。葬られたる希望をくらやみのあなたに顧みてみづからいたむときなほ母在るをおもうては、いしくも生きたる命ゝと嘆かれる。おもへば最初の上京はわが數奇なる運命の門出てあつた。

絶えゞの命を母の纎手に護られて、降りしきる大

雨の中に千住の大橋まで來て、水に映る千の火萬の火、紅き靑き都のともしびを俥の母衣の中から望み見て、小さな魂はどんなに躍つたらう。倉のような——瓦ぶきの家ばかり有るところと覺えたのもはかなき印象の一つ。

病院はもとの和泉橋の上に在つた、抱かれたまま窓に立つては橋の上を通る人を見見、幼きかなしみを忘れさせられたが、一しよに湯に入つて水でぬらしては臂をこくのが好きだつた。おぢいさんが居ない。二歲違ひの儕に結付帶で負つてくれる姉さんもゐぬ。凧を上げてはよく逃す長三郎や、炬燵の前で太皷を叩くとしかたなしにひよつとこ踊を踊る淸作や、知つた顏が一人もゐぬので、考へ出しては泣く。泣くと母が抱いて窓に立つて瞞したのだといふ。金魚屋が橋の下へ來て鐵杓子で川から錦魚を撈つてゐた。唐もろこしの毛を冠つた女を乘せてぱかぱかと行く白馬があつた。

ゴムの尺で胸をくゝられた。瓶の臭い油をべつとりと背へ塗られた。板でぐるぐると胴を纒かれて寢臺の上にころがして置かれることもあつた。

長い脚で布團の上へ乘つたり、齒を光らしては背を噛む兎がゐて、夜、ふとすると來る。痛い、痛い、ゐしやらして與れ〱と泣いてねむつてゐる母に縋り〱した。私は母の腕を枕にしなければ寢なかつた。骨髓に徹れる疼みは五歲の兒どもに幻の白い兎を見さしたのである。

白い兎が來なくなると、足だけ起つようになつた。一たん足駄を穿いて驅けて歩いたあげ句の病氣だつたから、母に兩手を引張られて歩けるようになつて見ると、二人切りの室の中ばかりでは歩き足りなくなつた。蜜柑の皮を剝いて一房一房糸でくくつて『猿』だといひ〱した、生きた猿を買うてくれる筈だから買ひに行くと駄々くつてたうとう淺草へ連れて行つて貰つた。

猿は鈴生に生つてゐた。馬屋に嵌めるせんのような鐵棒の上下に、段になつて大きいのも小さいのもごつちやに繫がれて居た。にんじんの千六本に刻んだのが小さな杓子の中に入れてある、猿に與れるとお辭儀を

して喰べる。

赤いつらのもゐた、しら茶けた顔のもゐた、小さいのに遣つた人參を横から長々と足を出してぬすみにかかるのもゐた。しまひに上のと下のと掻ッ裂きころ喰ッつきころを始めて、遠くに居るのまで歯をむいて母に飛びつきさうにしたからいやになつて。

赤い大きな門の中に赤い大きな提灯の吊てある所へ來た。鳩が提灯の下から出たり入つたりしてゐる、卵があのだらうと思うた。門の柱と柱との間には金網を張つて、中に牛が居る、それから白い斑馬もゐた。牛は怖かつた。

青い砂紅い砂白い砂で地べたへ繪を描く婆さんが片肌脱きてしなびた乳をぶらん／＼させながら、砂を掴んで指の股からすッすッとおとして行つて、義經らしい甲を被つたいくさ人を描いて見せた。

母に帯を押へて貰うて、欄干につかまつて下を見おろすと、低いところにからくり人形の荷を下して休んでる男があつた、赤いいかつげなやつてひげ――白い長い毛のうちかけのおひめさま――。

今おもへば、それは觀音堂の廻廊に立つて見たのらしい、病める兒を護りて人ごみの中を切り拔けるまでに母はどんなに苦しんだらう、わがはじめての觀音詣の裝は長い袖の貫入丈のきぬて、あたまはぼんの窪を圓く剃つて殘りを垂らしてゐた。金絲てかゞつた巾着はまだ母の白木の簞笥に保存してある。寅年の男子、當年五歳と書いた迷子札も入つてゐる。

傀儡師は草色の袴をまち高に穿いて、頭は耳だけ出したつのかくし、わきには三味線ひく若い女もゐる。まつ赭面のどてらの奴を臺から外して、左の手にはもの／＼しくも槍一本。

これは肥前の唐津より
船に帆かけたくわいらいし
おまんが出るか源五べが出るか
酔狂人の業くれは

お笑ひやるな一人の我ぢやに
そもそも人形は、京ではそろまと申せども
お江戸で野呂ま、何故痴鈍とおしやるやら
振れ振れ、渡邊半三は鑓半三
鑓が降らうが矢が流れうがやつてらさ
奴が尻を風の吹くまで

「徳川様はよい人持ちよ服部半三は鬼半三渡邊半三は鑓半三渥美源五は首取源五」ふれふれ奴が毛んぬく槍は空の稲妻水の月と女が歌ふ。

寛々と温袍の衿を明けて半三が鑓を使ひ出した。眉が柳の虫の蠢くように動く。髪の毛が草の如く逆に立つ。天を睨む。口を曲げる。不思議のつらつきをするので、お堂の上に見てゐる子はべそをかき初める。奴さんはそんな事を知る筈がないから、盛んに槍をふる。

女亦角鍔を指した尻からげの人形を取下し、するりと拔いたる竹光で鑓の奴と渡り合うちやんちやんばら〱手も無く刀を跳ね飛ばされ、そり下げ頭を發止！と槍で喰はされると、ぱかんと顎かけて二つに割られて、血みどろの顔のまん中に穴になつた目玉がぎろぎろと廻轉して突き立つ！……

と見た兒は聲をあげて吸はるるように母親の腰にからみついた。

おびやかされてからおびえ易きわが魂は久しく熱に病んだが、觀音堂下の傀儡師よ、來て霏々として降る雪の中にふたゝび槍をふらずや、三度起たずなりし蛭の子は骨凍る楚痛をいだいてまだながらへて居る……

……（つゞく）

純粋なる日本音曲

佐々醒雪

〇私は歌曲に就いて、未來には何の考へも無い、たゞ過去に有つた丈けの事を研究するに止まつて居る、其

改良とか云ふとなぞに就いては、それは創作家のやる仕事で、今日の處まだ問題にも莅むで居ないのである。

○山登檢校此方歌曲の改良に就ては、大分促されては居るのである。長唄の昔し物は廓文句ばかりだが、近來は謠曲の文句を其儘取つて用ひて居る、殊に著るしきは橋辨慶の如き其儘用ひられてある。山田流の品のよいのなぞ、組唄はだん／＼叙情的より敍事的に移り、從つて艶麗な唄が少くなつた傾きもある樣である。

○一體唄は其の文句の拙いのに譜の面白いのが多い、意味の滅茶／＼な樣なのに、曲として面白く、いろ／＼の心持が表はされて居る樣です、私は近頃謠曲をやつて居ますが、謠曲の方でも亦左樣で、筋道の通つて居る「安宅」だの「橋辨慶」だのは譜が面白くない、却つて「井筒」だの「かきつばた」なぞの、内容から云ふと何の事だか分らない寢言の樣なのに、譜が自由自在に付いて居る傾きがある、其れで唄が惡いからと云つて、其曲が早く亡びるものぢや無いのです。

○わが邦には、極く昔から音曲が無かつた、と、云ふのは萬葉あたりの長歌には分段が無く、唯だら／＼と何處までも行く、阿呆陀羅經のやうにやつたもの丶如く見える、この長歌が平安朝の初めに於いて止むだ、其頃支那から舞樂と云ふものが渡つて來て、當時其點を分つと云ふ事をしたが、素より外國のものではあるし、だん／＼わけのわからぬものになつて。唯舞樂と云ふものだけになつた、この舞樂は今も猶ほ宮中に殘つて傳へられて居る。つまりこの音樂が發達して、歌に勝つたもの丶如く思はれる。

○音樂となると、意味は無くなつても宜い、色そのものを見せたり、形を藉りたり、或は形の中の歷史的意味なぞを見せると云ふのは、畫だの詩だのが爲すべき行き方である、よく修辭學者が云ふ事ですが、まだ瞭乎としない心持丈けをあらはすと云ふのは音樂になる、言語を藉りて行くと云ふのは觀念を傳へるのだ、心持を傳へるのはどうしても音樂でなければならぬ、又歌曲は其處まで下つて行かねばならぬ。爾う云ふ約束を吾邦の歌曲も取つたものと見える。

〇平安朝の末から、短い今樣が出來て、それを二十反或は三十反と歌つた、お念佛でも參籠にもこれを用ひた、他に手腕は無いものだから、幾つとなく短いものをくつゝけた、恐らく吾邦位甚しい短い歌を、ぶつ續けに並べて置くと云ふのはあるまいと思ふ、それがまた縁も關係も無いものを集めた組唄と云ふものになつて來たんだから、唄全體の意味は丸で無くなつた、今でも左樣で、卑いところを云ふと、甘茶でカッポレと云つて居るかと思ふと、其間に豐年ぢや〳〵と云ふ樣な事になる、潮來なぞもお酌の歌つて居る間に追ひ〳〵と變つて行く、これが少し取集め上手になると。謠曲の狂女の樣な行き方になる、あの道成寺なぞは是れらの好標本とでも云ふべきものでせう、坪内さんの「初夢」の如きも左樣で、いろ〳〵の所作の間に局面が變つて行く、これらは全く無關係なものが組んであるので、全體に何の統一も無いのです。

〇譜の方は前にも云つた通り、根底が出來て居て、今新しく作つても昔しのに比べて迚も及ばない、しかし歌の方は不統一なるが上に、不埒な文句が入て居る、若し唄の改良をすると云ふ事にならば、作曲と作歌と相俟つてやらねばならぬ、坪内さんなぞは其研究に努めて居らるゝのでせう。しかし其處まで行き得ないにしても、差し當てやり得られやうと思はれるのは、止むなくんば替へ唄を作る事でせう、尤も替唄にしても、音樂に通じて居る人で無ければならぬわけて、言語の質にもよるが、先づ量さへ合つて居れば出來得るものゝ如く思へる、即ち極く大體から具體的に云へば、切れ字にさへ氣をつければ出來る、例へば七五の調が四三、五て切れて居るか、三四、五て切れて居るか、はた二三二、五か氣をつけて行れば、大體は唄ひこなせるやうに思はれる。其れ以上の事は音樂家に聞いて見なければ分らない、しかし譜にはチャンと統一がある、まづ大體に於てしつとりとして起て、次に上づゝた調子になり、又しつとりと復る樣てある、其れて一段々々或は艶麗な心持、或はチミな心持が譜て表示されて居る、其れ以上の意味は譜の上にない、故によし文句を

替へたところが譜が毀れるものでは無い。

○踊になると文句一つ〳〵が表徴されて居る、漕ぐと云へば櫓を漕ぐ形をする、山と云へば山の形を描くなぞは其一例です、坪内さんが踊りの手の研究をして居られた、なか〳〵複雑なものを、極く断れ〳〵に文句一つ〳〵に表はすのだが、全體聯絡した心持を出す事が無い様です。

○三味線を家庭に入れると云ふ事は、どうも悪い聯想を惹いて不可なかつたのですが、若し假う云ふ事が或る程度まで出來るとすれば、日本の音樂として家庭に入れるも宜い、唱歌としても西洋のとは聲の出し方が違ふ、聞き馴れないものが、突然西洋の聲の出し方なぞ聞かされると噴き出したくなる、何でも西洋のは頭から出る、日本のは腹から出る、日本のが喉を押しつけて平たくするのに反し、西洋のは喉を圓くして出す極めて自然の發音ださうですが、兎に角根本が違ふ、唱歌と琴唄とは全く種類が違ふやうです、西洋のが自然で日本のが間違つて居るとならば致し方も無いが、是れが特殊のものならば遺して行きたい氣もする。



○都々逸の調子は元祿に起つたものと思はれるので、弄齋以前には無いやうですが、あの三、四、四、三、三、四、二、三と云ふひときが、どうも踊り出したい様な調子だ、兎に角浮かれて

來るに宜い、尤も同じ七七七五でも變化があつて、隆達の調子の樣なのもある、隆達に、

思へば君をしほ干るまにも必らず浪のよるとなく

四三ばかりて七五とは聞えない、これ等は今の都々逸ては唄へないだらうと思ふ、大體七五て置いても、變つた工夫をすれば何か出來るかも知れない、七五調ても、二五五又は五二五とすると輕快には聞えない、「淡路の瀬戸ゆ大和島見ゆ」と云ふのが萬葉にある重い調てすが、これを「淡路の瀬戸ゆ島ぞ見ゆなる」と云へば輕くなる、これらは數の上から云へば不思議な樣てす。

○投節の唄ひ方に就いては、初めの句は說明出來ないが、中央のは二度くりかへしたものてす、例へば「文は遣りたしわが身は書かず」と云つて今度は、「書かずわが身は」で合の手が入つて、「ものを云へかし白紙が、云へかしものを白紙が」と唄つたものらしい、繰りかへしを附けないて唄ふ事もありますが、先づ定型が斯の如く動かすべからざるもの丶如くなつて居る樣てす。

○元祿此方發踏〱て來たのてすから、考へればもつと男々しい、シツトリとした歌が出來るのてせう。

（談話）

虎御前

蒲原有明

日本の小說中の愛好する女性と云つて、サア誰れてすか、恁う考へ込む樣ぢや印象の何のて覺束無いわけてすが、——私は第一に曾我物語の虎を愛好します。何にしろあの時代の事てもありますから、情の動き方なぞも極めて單純て、素朴て、容貌とか態度の細描は無く、花の顏位て濟ましてあるのて、色も彩も大したものては無いが、其心意氣が實に面白い、其一本筋の熱烈なところが、十郎ならずとも動かし得る點なんて、つまり人を動かす力、純粹の發愛の力に打たれるのてあります。殊に其晩年、十郎も殺されてから、寺に入て尼生活をして居たが、三月の末櫻の咲く頃、忧

惚と庭を眺めて、昔しの甘き戀を思ひかへして居ると、櫻の花が十郎の俤に見えたので、突如庭に飛び下り樣、其樹を抱いた儘死んだ、今日云へばセンチメンタル、それが實に面白い、幻の中で醉ふが如くに死んだと云ふ、其濃むなるセンチメンタルのところに私は動かされて居るんです。

特に曾我物語大躰の傾向を云へば、何と云はうか、極く粗雜で剛健であつて、同時にそれを貫ぬくセンチメンタルなものが燃えて居る。曾我の里に十郎が蟄伏して居る先へ、ある時虎が尋ねて行つて、一晩泊りか二晩泊りか知らぬが、又大磯へ歸らうとする時、十郎が虎をかゝへて馬に載せて遣る邊の描寫が、他の荒くれ男が相撲を取るなぞの一面に對して實に面白い、其センチメンタルが虎に於いて極まつた、其處を自分が愛好する。

一躰あの頃の遊君と云ふのが好きで、義經の淨瑠璃姫の如き、其白拍子なぞも皆懷かしい樣な、逢つて見たい樣にも思はれる、それが多少の氣品を備へ、客を扱ふに就いても情の自由がある、それらから考へて多分面白いのだらうと思ふ。

私の好きなのはセンチメンタルに止まるので、其れ以上ロマンチックになると不可ない、――尤もロマンチックのお姫さんなぞにも好いのはありますが――まづ愛好となつては實際有り得る、どこかに居る人で無いと困まる。

源氏に種々な女が出て居る、紫の上の淸く上品なのもいゝが描寫から云ふと、野分の卷が好きです、何でも野分の朝、源氏の君が風見舞に局〱を尋ねる邊、短い筆に生き〱したところが出て居たと思ひました。

明治の小說では、サア、紅葉の三人妻なぞお能く描いてあるが、あのおぼろ舟に何とか云つた、うぶな藝妓がありました‥‥ 惡う忘れたのを引き出す樣ぢや駄目です、まづ是れ位にしておきませう。(談話)

明日

尾上柴舟

今日のこの煩はしさに馴れ〳〵て住まむ明日こそ悲しかるらめ

數しらず汚きものにまじらひて豚の如くに生きぬべきかな

煩はし苦しといへどなほ足らぬ心の慾を悲しとぞ思ふ

向ひゐてつく〳〵みれば春の木々われにそむけるものとしもなし

歌といふちひさきものによみかへるわれにしあればすてられぬかな

くもりたるみ空のもとにいつまでか生きてあるらむ今のさびしさ

かなめ垣うすくれなゐに芽ぶく日をいてゝこそみれたゞにあられず

杯盤の狼藉たるを前にしてものをぞ思ふ酒のまぬ子は

花さきぬ散りぬといふを星の世のことのやうにも聞きてあるかな

春草もたゞ青白う生ひ出づる庭の石間に似たるわが生

ひたぶるにかへれといひし昨日をも忘れしごときけふの心か

くさ〳〵の花咲く中にひとりゐてさびしむばかり悲しきはなし

柳林

三津木春影

春のすゑ、四五月の頃になると、山と山とに挾まれた私共の里でも、村といはず、川といはず、野といはず、さすがに冷たい、濕々した冬の衣をぬぎすてゝ、鮮かな、いき〳〵とした自然の色彩につゝまれて來る。溪間々々に白つぽく慘げに咲く山櫻、その下を音立てて流れる雪解の溪水、赤い毛氈と、黃金色の絨毯とを織りまぜたやうな條目草の花、菜種の花、林から林、花から花を傳つて美しい音を啼く鶯、水澤や丘の麓に歌を唄ひながら、根芹を摘む里のうなゐ子。……さういふ取りあつめた景色を、睡むさうな日光のもとに、霞が一樣に引つくるめて、漂渺と夢の國に化らせてしまふ。……その霞の海の上に、殘雪を頂いた四周の山脈が、腰をぼかされて、ポカリと白く泛んだところは、潔く聖なる神仙の境を仰ぐやうにも思はれる！

そんな眺めも決して惡くはない。……惡いんではないが、まあ、それよりも、試みに丘にでも登つて、二つの大きな川の合さる河原、それを一面に覆つた柳の林を瞰下してみたまへ！　私でなくとも……私は特別の理由があるんだが——誰しも驚嘆の聲を放つだらうと思ふ。

河原の廣さは一里餘りもある。——綺麗な、白い、細い花崗石ばかりだ。その上にぎッしり柳の樹が生えてゐる。其が今、綠の烟を噴いてゐるやうに見えるのだ。ほんとに然うだ！……香ばしい若草を焚いた、その烟が霞に混つて、靉靆とたなびいたのではあるまいかと思はれるくらゐ、仄かに、柔く見える。それも其筈か。——誰でも若し親ら林の中に踏みこんでみるならば、嫋やかな一々の柳の枝には、自然の生の力が溢れてゐるのを感ずるだらう。細く、薄紅の一葉々々には、初夏の氣が、人を醉はせるばかり籠もつてゐるのを知るだらう。そして、微風の吹くたびに、さや〳〵と縺れ擦れあふ葉の戰ぎ、何處ともなく音樂を運んで來る川瀨の音、そう〳〵と彼方こちで姿は見せずに呼びかはす小鳥の聲——さういふものが、人の心を迷はせて、限りもなく廣い、出口も知られぬこの柳の林を、全く一個の妖迷路となして了ふのである。

さて私は、この林をおもふ毎に、忘られず胸に刻りつけられた一つの記憶を喚び起さずには居られない。

懷しい林――美しい一人の女性――夢のやうな一日の出來事――あゝ！……憶ひだすと、荒みはてたこの胸も震へるやうだ。だが、一人でそんな事ばかり言つてゐても仕方がないか！……

私がまだ十二三の時分、私の家と月々紅の咲いた墻根を境として、一軒の家があつた。古い二階家で、庇も朽ちれば、黄ばんだ荒壁にも罅が入り、あまり見好げの住居ではなかつたが、二人の美しい姉妹は、この暗い家を、晴れやかに、溫かく見せてゐた。姉妹といふのは、某町といふ城下から移つて來た落魄れた士族の娘である。――この父なる人は、働きのない、氣の好いこと無類といふ性質で、とても劇しい生活の波を乘切る事のできない……また乘切らうともしない人であつた。で、いつも慘目な服裝をして、郡役所の腰辨をつとめてゐた。

妻に先立たれてゐたけれども、後妻を貰はうといふ風もない。二人の娘を對手として、淋しきながらも慰められた、貧しきながらも平和なる暮らしをしてゐるやうであつた。この人の唯一の道樂は、蝶を捕へては標本を製ることである。日曜日には乾度、カンレイシャの網を携へ、野原を驅けめぐつて、澤山の蝶を捕へては歸つて來た。……歸つて來ては、手製の桐の箱の中に一々留針で刺止める。底に厚い西洋紙を敷き、虫よけの香の高い樟腦を撒いた然ういふ箱は幾つも積重ねてあつた。私はツイぞ一所に捕りに行つたことはない。たゞ、箱の中に列べられた種々の蝶を、美しいと眺めるばかりであつた。――實際また、限りもない色彩の中に、限りもない斑紋を畫いた翅を、水平に息めて、冷たく睡つてゐる蝶の姿は、小供の眼には、たゞ安らかな夢に入つてゐるとしか思はれなかつたのである。

私は蝶を觀に、毎日墻根を潜つて行つた。……蝶にあこがれたのか、優しい姉妹に憧れたのか、どつちだか判らぬ。とも角も、月々紅の墻根に等身大の通ひ穴が明くほど行つた。犬猫が潜るからと、一度下男に塞がれてしまつたけれども、間もなく復た明けてやつた。學校の退け時分になると、その穴から可愛らしいお下げの、眼の圓い妹の顏が現はれて、手招きする。……と、私は池を繞つて兎のやうに、隣家へ飛んでゆく！

妹の八重ちやんは、墻根のうち側に隱れて、私を待つてゐてくれた。そして二人で手をとり連れて、幼い、

無邪氣な遊びに耽るのだ。年は私より二歳下てあつたが、亂暴な、腕白仲間を恐れた私は、この愛くるしい少女を、この上もない溫かい遊び仲間と思ひこんでしまつたのてある。二人はよく學校の口性ない友だちどもから、嫉妬と嘲笑と惡戯とを蒙つた。こんな事もある。――毎年秋になると、山麓の原にある御嶽敎會の祭禮が行はれる。其日には晝夜花火が上つて、近郷近在の老若男女が原を埋め、日頃は雜木林と芝生との外何ものもない淋しい原が、人波と、燈火の波との打合ふ處となる。私と八重ちやんとは、それを觀に行つたが、毎時の通り惡い仲間に發見かつて、囃し立てられ、追ひ立てられた。二人は逃げた。……蒼澄んだ夜の空に、花火がポン／＼上つて、萬朶の火花を散らしてゐる間に、小い手を緊かりと握り合つて、人氣疎らな雜木林の方へ走つた。そして或る籔陰に蹲踞んで、花火を眺めてゐた。



「誰も來なくて好いわ！」と彼女が囁いた。

「さうね！」と私も言つて、眼を見合はせて意味もなく笑つた。蒼空の光は二人の顏を時々照した。……が、遠くの人波のどよみの際に、耳を濟ますと、ツイ手近の暗い藪の中で、蟋蟀が悲しい秋の音を喞いてゐる。二人は沁みりとして、暫く聽いてゐたが、彼女はやがて嘆息をして……脹れぼつたい眼を袖て擦つた。私の眼にも涙が滲んで來た。後て話しあつてみたら、二人とも母を憶ひ出して悲しくなつたのてあつた。

姉さん――照枝といふ名があつたが、私は姉さんとばかり呼んでゐた。そして其姉さん！　と呼ぶ言葉の中には、どの位甘える心と、懷しさとが籠つてゐた

らう!——は、私よりも四つ五つ年上で、もう乙女の豊艶の姿を名殘なく現はしてゐた。もとより豐かならぬ生活であるから、質素のものを身に着けてゐたが、立ち優さつた氣高い姿は、そんな物のために曇り隱さ れるのではなかつた。烏羽色の毛髮と、白い端正の頰と、妹と同じく圓い鈴のやうな涼しい眼とは、私にも素晴らしく美しい人と見えた。姉さんは裁縫をして父を扶けてゐた。……燃立つやうな紅絹の中に埋まつて、俯向いて針の手を運ばしてゐるところは、錦繪のやうであつた。

　滴るやうな愛嬌がありながら、口數は寧そ寡く、何方かと言へば絕えず物思ひに沈んでゐる側の人であつた。あゝ……併し、姉さんが私に盡してくれた愛情の數々は、どうして一々述べることが出來やう!雪の中の學校通ひを憫んで、編んでくれた頸巻、靴下、さういふものは夙に使ひ切つて了つたが、貰つた澤山の繪本は、古び乍らもまだ殘つてゐる。折々、美事の手蹟で書いてくれた和歌の反古紙も殘つてゐる。……今にして其等の意味を忖度したり、或は薄闇の葡萄棚の下の、熱いあの唇接けを憶ひ出したりすると、私は赫と顏も心も熱るやうな氣がする。……

　姉さんは、假りに私といふ幼い者を相手として、若い、空想がちの押へきれない戀の心を味つてゐたんではあるまいか!

　けれども私と八重ちやんとが、睦じく遊んで居るのを見ると、姉さんはよく戲弄ひ顏て、こんなことを言つた。——

「某さんは八重ちやんとばかり仲好くして、私は邪魔者にするんでせう……え?……さうなんでせう?」

　私は其が一番悲しかつた。……て、急いで妹を振切つて姉さんの方へ縋ると、八重ちやんはワッと泣出すのだ。すると姉さんは遽てゝ二人を兩脇に抱きこんで、戲談だからと言つて、笑ひ乍ら宥めてくれた。……

……が、どうも姉さんにさう思はれるのが辛かつた。……

　柳林の追憶。——それは或年の初夏の事である。隣家の叔父さんは初めて私を蝶捕りに誘つてくれた。町から河原迄は一里半もある。私共は其を越して、なほ遠い丘の裾に展けた野へ向つた。初めて見た留針の磔刑、劇藥の死刑——は私には慘らしく見えてならなかつた。が、若草を踏み、綠の林を潛つて輕げの蝶を追ふ面白さに、黃昏の迫り來るのも知らずにゐた。驚い

て原を出たのは、新月の蒼白い影が西の山の端にかゝつてゐた頃である。
妖迷路の柳林に入ると、二人はとう〳〵路に迷つて了つた。加之ならず、私は如何しか叔父さんに逸れて了つた。私の高く呼ぶ涙聲は、徒らに波の音のやうに林に反響するばかり。……其上を新月の光は仄白く淋しく照してゐる。砂に敲かれた私の小さな影法師の上に、柳の葉はチラ〳〵と明暗の影を闘はせる。行けども〳〵林は盡きない。疲勞、空腹、不安、恐怖。―私の體は綿の如く困憊して、もう一歩も歩かれない。私は兎ある柳の根本の砂にぐつたりと倒れて、枯れた、切れ〳〵の聲で
「八重ちやーん!」と呼んだ。
「姉さーん!」と呼んだ。
二人の懐しさが沁々と胸に湧上る。……そして私は、睡眠に落ちゆく間際のやうに、昏々として夢現の境を辿りつゝ、幾時間か幹に凭れてゐた。耳も鳴れば、眼も眩く。……殊に眼前には、種々の不可思議の幻影が綾を織る。―怨みを含んだ數多の蝶の精靈は、よく夢に見る妖怪のやうに、利かぬ手足を悶かせた。
遥かに遠方から、馬の鈴の音がリン〳〵、リン〳〵と響いて來た。……幾度びか水音に掻消されて、だん〳〵に近寄つて來る。人聲も聞えるやうな氣がする。……
「おーい!」と私は最後の、我ながら微れた哀れの聲を擧げた。……それ限り失神した容になつて、昏倒してしまつたのである。
またもや大きな蝶が現れた! ひらりと物の上から舞下りた氣勢。……綺麗な翅をひろげてつゝと進んで來る。先刻のやうな恐しい形相のてはない、白い、美しい、優しき笑みと慈愛とを湛えた顔だ!……と、見るうちに私の體はフワリと、温い熱の通つた、綿のやうな柔かな翅に覆はれて!
「某さん、〳〵……確乎して! 確乎して! 私よ……私が來たんだから、もう確乎して。……」
搖起されて私は眼を開いた。ほんとに夢のやうだ! ……私は思ひがけない、なつかしい人の膝に抱かれてゐるんだもの!
「姉さん!」と言つたきりて、私は感謝の涙は口もきかれなかつた。
茫然と立つた叔父さんも、我家の銀といふ下男も、見慣れた近所の権といふ馬方も皆な周圍を取巻いてゐ

た。後て聞くと、姉さんは私たちの歸りの遲いのを氣遣つて、男々しくも權の馬に跨り、皆なと一所に捜索に出かけたのださうだ。

夜更けて無事に家に還ると。八重ちやんは眼を泣腫らして、私の家に家内のものと待つてゐた。一騒ぎ鎮まると、姉さんは淋しく微笑みながら

「一體なら、八重ちやんの旦那樣だから、打ちやつて置いても可いんだけれど……可いんだけれど……」

と言つた。――私は未だに其謎を解く事が出來ない。

姉妹の家は其後、私の僅かの不在のまに沒落してしまつた。二人とも東京にゐるといふけれども、行衛は知れない。……儚ない運命の波に卷きこまれて、今頃は何處に居るのだらう。

あゝ、懷しい姉妹よ！　私はあの年々の緑に烟る柳の林を見る毎に、追懷、哀恨のおもひに撲たれるのだ。

運命と謂ふ語

一色醒川

諸嬢の投書を調べて居る中に、「何事も運命だと諦めて……」と云つた樣な意味の語が、何處かに使つてあるのを屹度五つ六つ見出すのであります。是れは果して自分で泌み〲と、爾う感じて書いたものか、其れ共又通り一偏の月並文句――「お庇を以て」とか「他事ながら御休神被下度」とか、別に深くも考へないで云ふ事がよくありませう――那麽風な鑄型的、紋切形として用ひられて居るのだらうか、私は尠からず心がゝりに堪へないのでした。惟ふに其多分は後者であらう、少くとも深い意味で云つたのではありますまい、果して然らば左樣な無意味な事は云はないとです、どうも日本には未だに事を誇大に云ふ習慣があつて、啻に是れのみては無い「近頃忙殺されて居る」なぞと平氣で云ふ「忙殺」果して文字通りならば、友人の一大事だ、何を擲て置いても助けに行かねばならぬ、しかし實際其樣な心算て急いて起きでもして御覽なさい、却て物笑を招くとになる、或は又「詳細は次便に讓る」とある、本統かと思ふと是れも亦噓だ、噓ぢや無い其れが御挨拶なんだ。恁う云つた事は舊慣を踏襲して、一向怪まれないのですが、追ひ〲に文字の權威が薄くなる今日、又一面に於いては總べての事繁忙になつて、手つ取り早く云はねば間に會はない今日、最早斯

樣な迂遠な事は云つて居られない筈です、況んや言語に責任を負ふと云ふ事にならば、迂濶に物は言へないわけなんです、故に若し何氣なく唯文勢の都合上用ゆるとても云ふ事ならば、那麼無意味なとは斷じて言ふべきては無い、責任も何も感じない無意味なとは、彼の『お氣の毒樣――お待ち遠樣』とか洒唖〳〵として云ひ放つ蕎麥屋の女中か何かとやる事であります。

しかし又決して無意味に云ふのでは無いと云はる、運命論者の樣な方もありませう、少くとも斯かる言語が鑄型として固定し、爾うして其型が大抵の人の踏襲し易き樣出來て居るとは爭へない事實らしい、て、私は序でに此意味に就いてお話しして見たいと思ふ、素より運命問題など容易に云爲すべきものぢや無い、まづ困るのは意味がボンヤリして居る、それで此語を容易くお用ひになる方に、一躰どう云ふつもりで或は運命と云ひ諦らめと仰しやるのですかと反問したくなる、全く其意義を說く丈けても大したとてある、が兎も角不可抗の勢力の樣に考へられる、是れは恁うと豫じめ定められて居る事は、怎麽に焦せつても踠いても成る樣にしか成らぬのだから、むしろ綺麗に諦め、潔く服從するが宜い、と恁う大抵云ふのであらうと思はれます、併かし果して其通りに人が出來るものか如何か、出來るとせばどんな結果になるかと云ふ事も亦考へて見る必要がありますまいか。

私も所謂運命の、預定的原子であると、不可抗的勢力であるとに就いては疑ひを容れないが、又人間は此運命の前に、一も二も無く服從し、諦らめて、囚人が使役せられる樣に、厭々ながら餘義なく生活すべきものぢや無からうと思ひます、若し全然運命と云ふ牢獄に捕虜となつて、自由意志を束縛されて暮らすと云ふ日には、其不幸たると、はた幸福たるとを問はず、是れ程つまらない生涯はありますまい、此處は何うしても其生存を完うする爲めには、反抗し健鬪し、爾うして克服驅使して自己の運命を開拓せねばならぬ、人間は弱い者だが生きんとする念は恐ろしく强いものて、其深甚なる要求の前には其れを行る力が出るものてす。しかし其健鬪と云ひ反抗と云ふのは何かと云ふに、伸びんと欲せば屈する樣に、克服の前にはまづ深く自己の運命を省察して、少くとも其の一部分に服從せねばならぬ、これは服從すべき理由があるから服從するので、唯理由もなく參つて仕舞ふのでは無い、宗敎から云へば自分を見性するとだ、我と云ふものを根

本から自覺する事だ、たとへば日本人が同時に英國人たる事の出來ない樣なと、諸孃がどんなに氣張つても男子となるわけに行かない樣なと、何故這麽親に產むて貰つたかと恨むても血緣は切る事の出來ない樣なと、斯樣な運命の前には潔く服從もし、諦らめもしなければならぬ。しかし他の部分に於ては、否此運命を基礎として開拓しなければならぬ餘地があるので、是れ以上は決して運命の所爲では無く一つに自己の努力の致す處です、人は此努力を爲すべく自由意志と云ふものを賦與せられて居る、是れ決して單純に一切を運命視して諦らめるべからざる證據である、又實際さう容易く人は諦らめ得るものでは無いので、其境遇の順逆も人格の高下も、知識の厚薄も、皆各自の努力に待たねばならぬ、是れ他人の知つたとぢや無いわが上の事である、空手運命に任せて居ては自滅しなければならぬのである。

どうも倦怠、疲勞、自暴自棄などの不健全な思想が流行する現代の常として、半一の事すら修養努力に待たうと爲ずに罪を運命に嫁して居る、甚だしきに至ては都合の宜い程度まで自由意志を働かせて置きながら、悪くなると之に運命と云ふ形式を帶ばしめて居る、これは隨分女にも多い『是れまでの御緣とお互に諦らめて』などと薄情人にお別れの辭を呈して、ニコ〳〵もので他に嫁いだりする、これらは有りふれた例ですこんな事では其人の生涯何處に適歸せんやで、か樣な人が幾ら悶えても、安心の時があり得らるゝ筈が無い、至誠の情なくして安心を得やうしてもそれは無理な話してす、運命とは直ちに逆境を云ふのぢや無い、又一時の雲行の樣なものでも無い、運命そのもの即個人〳〵に附帶して居るものです、運命は色も何も無いかも知れない、が、其個人の風采に依て十人十色に見えるのであります。

猶ほ運命と努力に就いて、女の方に相應しく無い例かも知れないが、多分諸孃も御存じでせう、あのベースボールと云ふ遊びは、よくも運命と努力の關係を表示して居ます。打手が投手より送る熱球を擊つ爲めに長棍を揮てボックスに立つと云ふと、是れ即ち遁るゝ能はざる運命でせう、此塲合逃げ隱れは出來ぬ、唯擊て前進又前進して、遂に本壘に歸還するより外に途は無い、さうするにはどうしても自己の努力の限りを盡さねばならないのである。やがて一壘を陷れたとする、しかしまだ二壘三壘が橫はつて居る、此二壘三

壘を奪ふには、自己の努力も必要だが、後に續いたものが又うまくやつて呉れねばならぬ。て無ければ空しく立往生に了て仕舞ふ、まづ恁う云つた鹽梅て或は刺され、或は歸り勝負がつく、自分ては努力の限りを盡したが、他の撰手の過失或はチーム全體の不調て負ける事がある、是れは如何共しがたい運命てある、と云つて是れに諦らめて仕舞ふわけには行かない、矢張り努力の上にも努力する事になる。人生の事亦是れに似た處がある、自己の努力が一向益に立たない事がある、自由意志が沒して目に見えない事がある、時には全く人間が止めたい事がある、しかし勝つか負けるかの追分は、絶望と希望とて定まるのて、自暴自棄すればやがて自滅てす、断じて人生に處する道てはありませぬ、故に此塲合には運命だからと云はず、むしろ努力が足らない事に心掛けて一層勵うつことが肝要てす、至誠から出た努力は必らず何時かは成功するものてある。されば『運命と諦らめて』と云つて慰める事も、決して眞に人を慰め且つ勵ます途てはありません。たま〳〵氣着いた儘云ひかけたとが思はず長くなりましたが、よしや弱い女ても自分にも自由意志がある、此意志の是と信ずる事は何處までもやる、いざ腕づくてゞも來いと云つた抑壓するとの出來ない彈力を十分養つて欲しいものてあります。



自己を欺いて戀に囚はれんとしたる當時の心持

旅の女

七才にして鹽原多助一代記を讀む　情にのみ動いてゆく……父母の愛薄し……寂寥と不平が胸一ぱい……いらだつ心……宗教に入る……聖書を習ふ……若き牧師……花簪の紅薔薇を乞はれた……弱き心……自らを欺く……一歩深い意味……文學の賜物……「生」の自覺

御たづねに應じまして、お恥しい身の上話をいたします。今はもう思ひ出すのもいやでなりませんが、自分が一度ふんできたあの頃の心もちを、ありのまゝにお話して、もしも、自分と同じ樣な境遇のお方があつて、私と同じ樣な機會にお遇ひなさつた日、必ず自己を欺いてはいけないと云ふ御いましめに、ふたゝびいやな過去をくり返して、皆樣の御反省を促したいと思ひます。

一体私は生れつきが種々ものに動かされやすい、情にもろい性質でして、まだ小學校へ入學しない前、「平かな」だけは讀めたので、あの鹽原多助一代記と云ふ、六百三十ページばかりの本を七つの年に讀みまして、多助が「青」と云ふ馬に別れるあたり、聲を出して泣たものでした。世の中にこれほどあはれな本があろうかと、しみ〳〵思つては泣きました、こう云ふ風で幼い時から讀書は好でありましたので、字がよめる樣になりますると、さあ此本も此本もと云ふ樣で、幼いわりには「ませ」た本ばかり讀みました、尋常科の時代に、いろは文庫や俊寛島物語、西遊記など一通りは讀みました。そして其あはれな所に泣かされ、おそろしいところにおどされて成長しました。ですから私は文章は譯がわかつたりわからなかつたりでしたが、只もう其話の切なる情に一も二もなく動かされてしまつたので、私はどうしても情の女でした。て高等科に進んだ頃からそろ〳〵小說（明治の）に興味をおぼえて、卒業するまでには數へ切れないほど讀みました。それで私の情にもろい性質は、ます〳〵物に感じ易く、合せて私は或る一家の事情から、幼い時から田舍の方へ里子にやられてあつて、父母の愛は思ふ樣にうけられなかつたので、何とも云はれぬ寂寥を感じて居つたので、誠にもう、淚多き、情に動かされ易い女と成つてしまつたのです。てものを、むやみに憎んだり、きらつたり出來ない樣になつてしまつたのです。たとへば私の紅薔薇のかんざしを、「くれ」と云はれゝば、日頃「にくい」ときらつて居つた人でも、にべなく、斷る事はどうしても出來ない樣な、そう云ふ性質に成つてしまいました。

丁度私の十六の時、私は其頃小學校を卒業したばかりて、進んで高等の

教育をうけたいと切に望つたのでしたが、父母がゆるさぬ爲、まだ田舍の家に里子のまゝて居りましたので、私の胸には寂寥と不平とが一パイに成つて、それに自まんの様でお恥しいが、小學校卒業としては、割合に智慧がのびすぎて居て、學校も一番で卒業したと云ふ誇もあるし、友達から、あなたこそ學校の名をあげる人だなどゝ持あげられるのを眞にうけて、どうしてもエラクならなければいけないと思つて、手あたり次第本をよんだあげくが、何をよんでも自分のいら立つ心を靜めるだけの事が書てないので、いらだつていらだつて、何かの方面で此心に安きを得させ様と、つい宗教に足をふみ入れたのです。が此度は宗教です、現實界の事すら不解な十六ばかりの生若いものが、どうして千古の疑問とも云へれば云はれる宗教がわかりませう。私の悶えは一層はげしいものに成つてしまいました、無智の人の様に盲目的には信じられず、きわめんとすればあまりに深く。それでも必ず私にきわめられると思つて、聖書の講義を致る傳導師について學ぶ事に成りましたが、其學んで居る年の事、私は其人に「かんざしの紅薔薇一」を乞はれてしまつたのです。私は聖書を習ひ乍らも、常に男子としては華車な、弱々しい、其人の風采を内々慕つて居つたのでしたが、今目の前に首をたれて、花を乞はれて見れば私の生れつきの、殊に其頃もろく成つて居つた情は、にべなく斷る事がどうしても出來ず、まだ十六の無分別に、只斷るすべを知らずして、向ふの人の愛を許したのです。(と云つて、決して操をけがしたのではありません)けれど其日は家へ歸つてゝも不愉快で、此次逢つたら思ひ切つて斷つて了はうと、かたく／＼決心して見ましたが、やつぱり逢つて其人が熱烈に私を愛してくれるのを見ると、氣の毒ですまない様な氣がして、とう／＼斷りはぐしてしまひました。やつぱり意志が弱かつたのですね。其人の言葉に動かされて泣た事もありました、感謝した事も有りましたが、泣たり感謝したりして居る心の底をたゝけば、やつぱり其人が嫌で有りました。心の底から愛の湧た事は一度もありませんかつた。がしかし其人の情に動かされたのは事實です、泣きもし感謝もしましたから、はたから見る人は私にも眞實の愛があると思へるでせうが、私自身ではどうしてもそうでなかつたのでて、其うちに一方で私の讀書熱はます／＼盛んに成つて來ましたが、十七の春頃から私の目に付く文字が出來て來ました、何でせう、曰く「自らを欺く」これです、あゝそれまで聖書でも、雜誌でも、欺く勿れとは學校でも、よく／＼習ひおぼへた事で、私はもう十分其わけを了解して居る又自分もその道をふんで居るゝ堅く／＼自信じて居つたのですが、思ひ至つて見れば私は「欺く」の意味は誤解して居つたので、欺くとは極端に、うそを眞らしく人に語る事、すなはち自分にありもしない本なら本を友達にあげますと約束してやらない事、人の持つて居るものを何か口實をもうけてとる事など欺くだらはは知つて居ましたが、其は皆物質的であつたのですが、十七の春、始めて「自らを欺く」の文字によつて、「物質以外の欺き」と云ふ事を深く感じて私はどんなに驚たでせう。讀んだ始めの時は、わけがわかりませんかつた、人の物こそあざむけるが、自分で自分のものを欺くと云

ふ事があるだらうかと、――けれど今迄の歎くの解釋は、たゞ物質的に考へて居つたからで、自分のきらつて居る人を、向ふの人の言葉にそむかれて、心にもない、底から生命がけで湧て來るでもない愛に日を送つて居るのは、まぎれもなく自らを欺いて居るのだ!!と始めて悟つた時の私は、どうぞ皆樣御察し遊ばして……私は之から後の二人の關係がどう云ふ風に成つて今日まで來たかを語りたくありません。たゞ、今はもう其人とは何の關係ももちません、私は心安く自らを守つて居ます。が之によつて私の心に或る悟りをあたへられたのは事實です。私はもう、心にもないことに自らを欺く事はどうしても出來なく成りましたので、私は眞底、生命をかけて燃え出るべき眞の愛がわかぬ以上は、もう〳〵決して戀愛になど指をそめまいと、道德に强いられたのじやなく我心から、こうと心が定まつたのです。一寸聞けば、文學を味つた爲意志が弱く成つてむやみに小說の熱にかぶれてこう成つたのだから、やつぱり小說など讀む事じやない、文學など人を脆弱なものにしてしまうとおつしやる方も御座いませうが、それは大へんなまちがいて、私は文學のおかげで眞人間に成れたので、もし文學を味はなかつたなら「自らを欺く」と云ふ言葉は一代私の耳にひゞかず、否ひゞいたとしても、それは味はう力がなく、心の淺い、只人に示された道を夢の樣にふんで行つたにきまつて居るので、自分と云ふものは一代知らずに死んだので、こう思ふと、私は、文學はどこゝまでも人樣におすゝめ申したいので、たとへ一度はそれの上べにだけ、かぶれて居る事もありますが、そう云ふ危い境をこして來た人間は、自己のねうちもわかり、眞からもの〻眞僞の意義を知り、自ら「生」を渡つてゆける樣になります。只もう文學をしりぞけ、堅くるしい道德に强ひられて世を渡つてゆく方は、善も惡も人に云はれてたゞ古來の習慣をそのまゝ信じてふんでゆくだけですが、こうした危い境を通りぬけて、自己の實驗上から善惡眞僞を知る事が出來れば、これはどうしても此方が一步進んだ「生」をふんで居ると云ふ事に成るので、私はどうしても、皆樣に、深く文學をおすゝめいたすので御座います。

歌

川路柳虹

夕暮れよく街を歩いてみると、すべて際立つ物音のうちに車を曳いて歸る男の何ともなき鼻歌が私の耳には際立つて聞える。また同じ薄暮、靜かな森のかたへの家に細やかな顫はすやうな聲に少女が唱歌を唱つてゐる。私はそれにも常に心をひかされる。これらの聲はすべて夕暮の感じとぴつたり合つてゐる――

然う、私でも人もなき林をこの夕暮れにそゞろ歩くとき、私の種々の幻想のうちからこの自然の力に引かされてゆく或るものを感ずるのだ。私は私の夢を常に

追ふてゐる――そう云ふ夕べには私は心からの言葉を胸に發し、心からの聲を外に出して歌ふ。しづかな戀人を偲ぶ調べも、華やかな戀のす枯れゆく悲みの節も、みんな靈の底までも慄はすやうにこの夕暮れの靡やかな氣と伴つてたゞ無意味な調べに口誦さむ――勿論なかには誰々の詩の一句、何某の歌の一節と云ふのも口に浮んでくる、然し自分はこの名高い歌、名高い句の一行もときに纏つて出ぬことがある。一たい私はひとの詩はよく忘れつぽい、こんな句があつたと云ふ感じ丈けはしても、それが始めの句がどうて終りが何うと云ふほど明らかに頭に殘つてゐない、私の口誦さむのはいつも無茶だ、前の一句が人ので後のが私の句といつたやうな事がよくある……しかし私がこのときに口誦さむ調べ位、私にとつて氣もちのいゝものはない。私の瞳はすでに沈思の郷を出て、仄やかに潤ひ、私の脣はこの歌聲に輝き、そして私の全靈はこの大自然のうちにゆくやうに思はれる――その歌ふときには私の心は微笑んでゐる――その聲――私はこのくらい私にとつて眞面目な眞のものはないと思ふ、ときとしてその歌は高尚な詩の範圍を脫してゐるかも知れぬ、囈語のやうなものかもしれぬ、しかし私はそのとき微笑んでゐる。私は歌つてゐる。――……唱歌を唱つてる少女も丁度これなのであらう――私はよく

　思へば遠し故郷の空
　あゝわが父母いかにおはすらむ

と云ふあの唱歌を聽くが、あの旋律がまた奇體に私を引きつける。私はこの歌を少女の聲から人知れず洩れ聞くとき、――それは森の靜かな家でもまた下宿屋の二階にゐてゞも――私はいつもその歌に聞き惚れてその少女の顏を想像する――少女の顏は靜かてある（凡そ靜かなときくらゐ美しいものはあるまい）瞳は晴れて靜かである、顏は白い……脣は華やかであらう、洩れ透く齒並は象牙のやうてあらう……そして火も點らぬ窓に凭つてこの夕空を眺めて唱ふ……

　ときとして私はこの歌に戰慄する、そして音樂の自然の魔力と云ふことに逢着する、私は「何ものよりも前に音樂」と唱へた象徵派の言葉に驚く「何ものよりも前に音樂!――然うだ矣――そして詩も其れに外ならぬてはないか……と私は斷案を下すのだ……私が斯く歌ふときも眞てある、それは私自身で私の聲に微笑んでゐるんだもの……私の詩もこれてありたい――少女はそのとき、その歌を唱ふ以外に自分を觀、

自分を味ふことは出來ないであらう、聲は汝の象徴だ、汝だ……

車を曳いてかへる人夫の鼻歌、それも彼れの滿足である、彼れの發する眞の聲である、そしてこの夕暮れに調和する其の叫びではないか。自然の暮色は人をここに誘ふて止まない、私の靈の或るものはこの夕暮れの自然に齎つてゐる、そして自然の或るものは私の靈を伴なはんとしてこの夕暮れの中にきてゐる……それよ、私はこゝに強く感じる、韻律それではないか。

戀の辭典

福光東衣譯

「我が心、我が胸、總て君のまゝなり」といふのは「私の財布を貴孃に差し上げます」といふのを一層詩的に表現した言葉である。但し詩的であるだけに「財布進呈」よりか誠實を缺いて居る。

「未來永刧、誓つて貴孃を愛します」といふことは「私の愛情は、續く間だけ續く」といふ意味だ。

「隨分永かつたわねえ、ほんとに百年も經たやうよ」は「二日間お目にかゝらなかつた」と云ふことである。

「ほんとに貴孃は不人情ですねえ」は、「どうして貴孃は私を信じて下さらないんだらう？貴孃を愛して居るといふ證據になることは悉く爲て見せたんぢやありませんか……口にも出して云ふし、太息も吐くし、話つていふ話は皆して了ふし……全く私の役目になつて居ることは何もかも爲盡したんだのに」の代りに用ひられる。而してこの「不人情ですねえ」と云ふ稍や破壞的の怨嗟は極めて有効で、女は此言葉が、表はすしどろもどろの感情は眞に自身に起因したものと思ふ。

「いつそ私が死んでしまつた方が貴孃には良いでしよう！」といふのは、「私は、何時迄も恁うして意味も無い言を云つて過すのに厭が來た。詮ずる所、世界には貴孃より外にまだ澤山女が居る。だから、若しも貴孃が早く降伏して了はないと、私は圖を解かなければならない」と飜譯せらるべき言葉の暗喩的形式である。

「私は決して變心しない」は、「私は面白く日を送り度い――但し、面白がらせて與れる合手は何人でも構はないが。で、この主義は至極都合の好い主義だといふことを私は自覺して居るから、多分それを變へるやう

なことはなからう」を意味する。

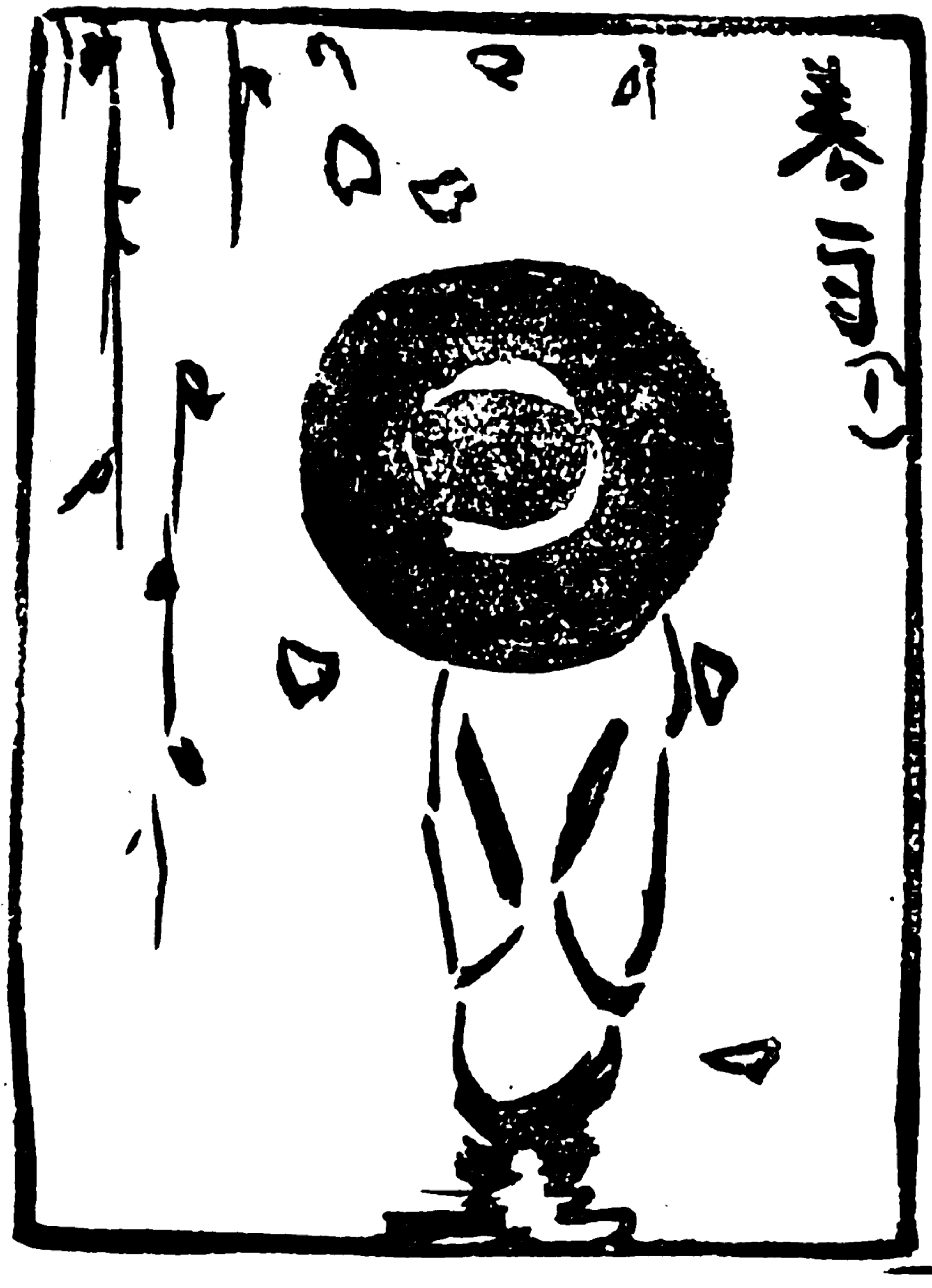
「貴方を愛することが出來れば良いに」といふ言葉が婦人の口から洩れた場合には、夫れは「私は實際貴方を慕つて居る」といふ意味を表はす。「貴方を憎み度い」といふ言葉も同じく現在の愛慕を代表する。

女が「貴方氣が狂つてゐらつしやいますの？」と男に云ふ時位、男の氣の確な時は無い。

「離縁て下さい、……さあ、どうか離縁て下さい」と女が云ふ時は、既に早や、婦德寺の鐘樓で吊の鐘が鳴り出して居る。

「もう恁うなつては、手に手を取つて落ち行くより外に方法がありません」といふのは、男が屢用ひる言葉であるが、女は常に之を次の如く解釋すべきである。

「吾々は、今迄は只だ通常の戀の戯をやつて居たに



過ぎない、が、今度は一つ大規模に亘つて見やうぢやありませんか。愛撫の厚い御兩親を後に捨てゝ行く、といふことは、勿論貴孃には痛いことであらう。けれども、私の貴孃に濺ぐ愛情は其悲みを償つて餘あるものではありませんか。私は、きつと、永遠に——さうです、厭きるまでは——貴孃を愛します。而して若しか、貴孃を愛するのに疲憊たら、其の時には貴孃を振り捨てゝ、私は私だけで休息しましよう。然うすれば、貴孃は泣くかも知れない、怨むかも知れない、憤るかも知れない、或は又暴れ出すかも知れない。が駄目です。悶けば悶くほど惡くなるばかりだ。それよりか、其際には貴孃は御兩親のお膝下に歸つて行つた方が良い。御兩親のお憤怒が解けないで、お歸りになることが出來なければ：

それが出來なければ、なあに、世間は廣い。何處へても貴孃のお好な所を彷徨いたら良いてしよう」「貴孃は、私が眞に愛するたゞ一人のお方だ」「私に貴孃より他の女を愛せよ、といふのは夫れは無理です。貴孃は私の生命の生命だ、私の骨の骨だ、私の貴孃の貴孃だ」といふやうな文句は、男の口から何の苦もなくすら〳〵と出る文句だ。夫れを女は、何の誇張もない、強烈な熱情から迸る眞實の告白だと思ひ込むものであるから、其後て男が、「奈何して〳〵、然ういふことがあるものか。然ういふ言は、云ふのは云ふけれど、悉皆嘘だ」と囁くのが耳に這入らない。

以上列擧した類の、恰も版に捺したやうな戀愛慣用語は、戀愛を弄ぶ不心得者が使用するばかりでは無く、怜悧聰慧な人々の間にも同様に用ひられる。これに就いて云つて見度いことは澤山あるけれども、「字典」といふ題に反いてはならないから後日に譲らう。

（マックスオーレル）

美文の作法（三）

西村醉夢

六　換喩と引喩

●●換喩と云ふのは英語の Metonymy のことて、相異相關せる種類を主とした比喩てあります。即はち本名に換ふるに隨伴物を以てし、本來比喩とは異なつてゐる事物をとりて比べたり、擬へたりするものてあります。學者はこれを四色に分けて（一）記號と實物（二）持主と持物（三）原因と結果（四）材料と作品との關係に基づいたものなどに區別してゐます。第一の例は、日本の國旗が日章だから日本の昌んなことを「旭日が昇つた」と云ひ、戀することを「菫の花束を投げた」と云ふ類。第二の例は　天皇陛下が吉野に行幸せられたと云ふべきところを「鳳輦吉野に幸す」といふ類。第三の例は、彼等は交際したと書くべきに、「彼等は握手した」といふ類。第四の例は、あの女は絹布の着物ばかり着てゐると云ふことを、「あの女はお蠶ぐるみてゐる」と云ふ類てあります。

又引喩と申しますのは、英語のAllusionのことで古人の成語、または古の故事を文中に挿みて文の裝飾とするものでありますが、この中には(一)明らかに成語、故事を引いたと公言するものと(二)あらはには成語や故事を引いたと言はずして、事實上それ等を引くものとの二色あります。前者はこれを引喩と申す、後者はこれを引用と申します。例せば「百戰百勝は必らずしも、軍事上の大なる名譽とすることは出來ぬ、「戰はずして勝つ城に入らねば、眞の善兵ではない」と云ふのは、引喩でありますが、これに引いたことを明言して、「孫子曰く、戰はずして人を屈するの兵は、善の善なるものである、故に百戰百勝は必らずしも軍事上の大名譽ではない」と云はゞ引用に成るのであります、即はち引喩には「曰く」だとか「と云ひける」などの斷りの言葉がなく、引用にはそれが御座います。それが兩者の差點です。

七　張喩

張喩とは英語のHyperboleのことで、事物を實際よりも大きく云ふ修辭法です、所謂「誇張」だの「誇大」だのと云ふは、取りも直さず此の事であります。それは餘り屢々用ゐたり、時も處も構はずに、矢鱈に用ゐると大變な弊害がありますから、使用の際には十分注意しなければ成りません、即はち極念と云つて、感情が興奮して、居ても起つてもゐられないやうな時の外は、これを用ゐぬやうにする方が可う御座います。一例せば丈の低い人のことを「一寸法師」と云つたり、白髮の長いことを「白髮三千丈」と云つたり、元氣の可いことを「意氣天を衝く」と云ふ類で、壯大な事の比喩には、極めて適當ですが、優美なことなどには少しく不適當です一例せば今云つた白髮三千丈でも、老來益益盛んなる老爺の形容には、面白う御座いますけれども、よぼ〳〵として死にかゝつてゐる老人の形容には不適當です。ヘヴンも申したやうに、張喩はたとへば香料のやうなもので、利き過ぎると、厭氣がさします。

されば山果、隙に落て朝々の食、秋風に飽き、螢火爐に宿りて夜寒の衣、寒氣を防ぐ、仄歩山嶮けれども麋を首陽に折るの恐なく、岩窓に蔭遲けれども、嫁で胡語を學ぶの恐なし。昔はおん年二十に滿たず、容顏固より玉を欺く、巫山の神女が雲となりし、夢の面影を留め、小野小町が花に比し、歌の風情を殘せり。金屋の内、錦帳の下に養はれ給ひし日は更にもいはず、今山居久しうなりて、衣裳は垢つき破れたれども、肌膚は鮮んの雪より皓く、鬢髮梳るに由なけれども、綠鬢春の花より芳し、細腰いよ〳〵痩て、風に堪ざる柳の如く、玉指ます〳〵細りて、管に觸める野に似たり。（風雲の入大傳より）

花言葉

水野葉舟編

くぐ

クロヴァー　吉報を見よ。

胡桃樹―眠れた胡桃樹―　堅牢、娯樂。

桑の樹―黑―　私はあなたより長生しますまい。

桑の樹―白　智惠。

グローリー、フラワー―　輝くやうな美しさ。

グースベリー　豫想。(いちごの一種)。

ゴールヅン、ロッド　用心。

九輪草　彩色。繪をかく。

九輪草―緋の―　貪慾。

クラウン、イムペリヤル　至上の尊嚴。權勢。

クラウスピル　嫉妬。

栗の樹　私を判じて御覽なさい。贊澤。

クゼランセベム　不幸の中の樂しみ。

蜘蛛草(スパイター、ウォルト)　戀を有難がるな。

蓬蘽　思ひかけぬ快樂。

白屈菜　來る可き喜び。

胡栗　智惠。權謀。

けげ

ケンチディヤ、　精神の美しさ。

鷄冠花　虚飾。假粉。

鷄冠花―長く垂れた花―　七面鳥のやうだ。

雁來紅　はの部にあり。

罌子粟―赤―　慰籍。

罌子粟―深紅色―　妄想的の放縱。惡夢。

罌子粟―白―　眠。自分の零落して行く姿。
わが心の消毒劑。

罌子粟―八重―　香のついた脣。

罌子粟―花の落ちた跡―　夢が醒めた。意外。

花言葉

水野葉舟編

罌子栗の蕾—青い萼で包まれたる—　神秘（凶運、凶事が含まれて居る神秘）

罌子栗の葉　陰謀。毒殺。

爽竹桃　注意。

こ。ご

越橘　謀反。

牛蒡　面倒な事。さはらないて下さい。

胡蝶蘭、　らの部、蘭の條を見よ。

コレオプシス　何時も面白さうだ。

コレオプシス、アルカンサ　一目見て見染めた蝶。

胡荽　隠れたる富。

コーン、ポットル　優雅。

コーン、コックル、　清秀。（コーン、コックルは普通麦畑に生えて紫色の花の咲く、丈の高い美しい葵の一種）。

コロチラ。　あなたが願つてゐる月桂冠。

小判草　感激。

コペーア　空談。

側柏　不變の友情。私の爲めに生きて居て下さい。

苔　母の愛。

苔—多く集めたる時—　憂鬱。

苔—アイルランドの—　健康。

黒檀　暗黒。殘忍。



ambitious for her husband and three children, two boys and one daughter. It is said that had it not been for her, Mr. Taft would never have entered the Presidential race. She is his constant companion and invaluable helpmate. She followed him to the Philippine Islands and held her position most successfully as wife of the Governor-General of the place. And now her education, experiences. and above all, her personality equip her well to occupy the position of the mistress of the White House.

She is talented in art and music and is known as an excellent pianist. But what surprises one most is that with all these accomplishments she is thoroughly domestic in her tastes, and her household management is excellent, for Mr. Taft is not a wealthy man. She does her own marketing and shopping when she is at leisure. She enjoys outdoor exercise. She is often seen walking in the parks and suburbs with her children who are most promising in every line of development. In fact every wife and mother should find much to learn from Mrs. Tafts good examples.

並に子供,(男子二人,女子一人)に對しては大望を懷かれて居りますから,若し此夫人あらざりせば,タフト氏は大統領選擧の競爭には預からざりしならんとさへの風說が御座います。かく夫人は大統領の永劫の伴侶て貴重なる內助者てあります。タフト氏が往時比律賓群島に就職されし時も,夫人は該地にて總督夫人として其價位を見事に充たし,今又彼女の敎育,經驗,格別に其人品は大統領官宅「白殿(ホワイトハオス)」の女主人として彼女を立派に其位置に適合させます。

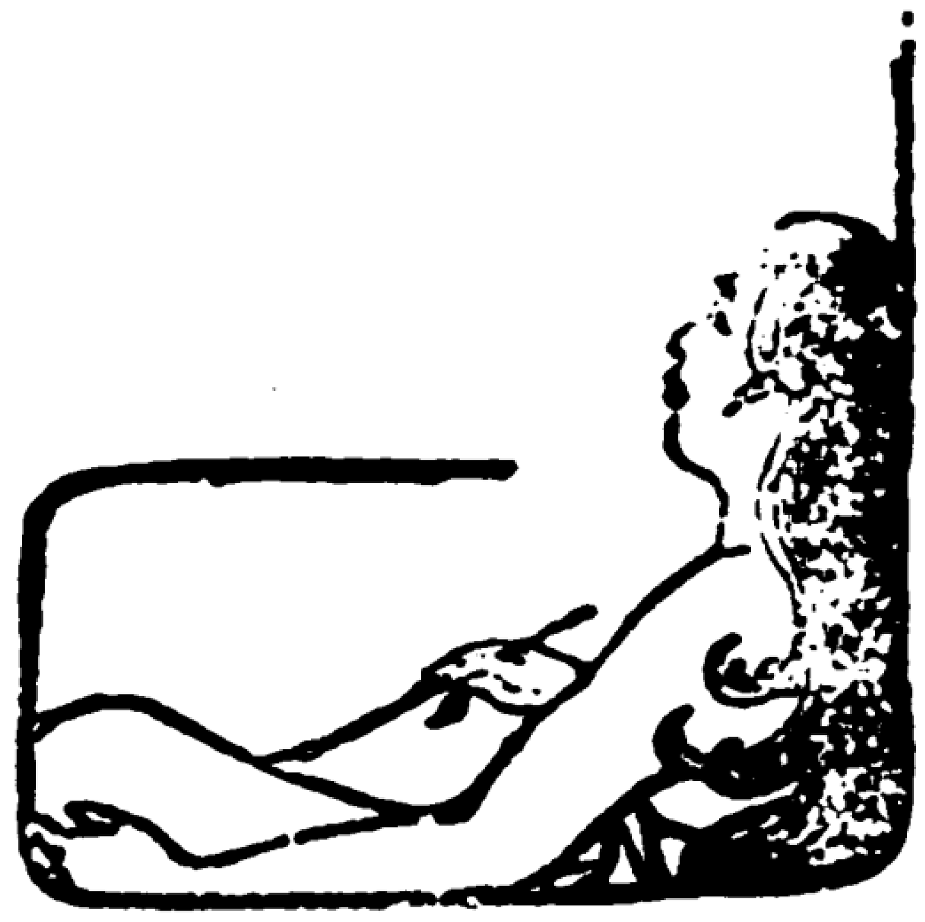
夫人は又美術,音樂に長せらるゝのて,ピヤノは格別に卓絕の由てすが,第一私共を驚かせます事は,夫人がかく諸藝に通達して居られましても,家庭的趣味の深と云ふ點てあります。

タフト氏は富貴な方てありませんから,夫人は經濟的に上手に家政を取らるゝとかて御座います,餘時のある節は自分て買物をなさいます。夫人は又戶外運動を好まれて,時々子供方を伴れて,公園や郊外に散步さるゝを人々が度々御見受します。此御子樣方は,凡てに於て有望な方々てあります. 實に世の母たり妻たる人は此夫人に習ふべき點が澤山御座います。

英　文

（第五年第五回）

女子英學塾講師 河井道子



Be Glad of Rain.

Is it rainy, little flower?
Be glad of rain;
Too much sun would wither thee,
'Twill shine again;
The clouds are very thick, 'tis true;
But just behind them smiles the blue.

Are thou weary, tender heart?
Be glad of pain;
In sorrow sweetest things will grow
As flowers in rain;
God watches, and thou wilt have seen,
When clouds their perfect work have done.

M. F. Butts.

雨を喜べ

小き花よ，雨なりや，
雨をな厭ひそ，
炎光汝を枯死せむのみ，
やがて太陽輝り出でん.
黒雲今は累々たるも
天宇湛碧其裏にあり。

稚き心よ　疲れしや，
苦痛をば喜べよ.
悲憂に優しき芽のいづは
雨にて花の咲に異ならず.
神の保護あり，汝凡てを悟らん
黒雲の妙なる業の終へし時。

The Wife of the President of the United States.

Mrs. William Howard Taft is a sweet, intelligent person full of bright spirit. With her attractive face, she appears much younger for 46 years. She is most

米國合衆國大統領の夫人

ウヰリヤム ハワード タフト夫人は佳麗にして聰明な，然も快活な人物であります。夫人の愛嬌ある容貌では四十六歳より遙に若年に見えます．夫人は良人

美顔術

兒玉花外

雪の齒磨と、産科醫と、そして美顔術の看板の出してある、恰度、此の三軒が近隣に行はれてゐる所を私は知つてをる。

美顔術の處で黒塗の俥が停留つてるのを見かけた。何ても貴婦人か、良家の令孃でもあつたのだらう？

頭髪に百金の寶珠が晃つてをつても、此家へ來る迄の車上での胸中は奈何なてあつたらう！　其の顔は技術の成否が心配で屹度曇つて居たらう。偶々道路を歩く容貌の綺麗な、貧乏人の娘にても出會ふたら高價い絹布の膝上に涙が零れやう。……女は天性顔さへ良かつたら衣服抔は何うでもよい。

私は、小學校に行く時代に、色は徹る程白いが可惜右頰に、銅貨大の黒痣のある小娘を知つてゐた。着物は普通を越してたが、此の娘は始終嘲ぎ氣に運動塲ても友達から離れ勝てあつた。

或る日口の惡い男の學生が「三ツ目娘！」と目の側の黒痣を嘲笑つた折、娘は直ぐと顔を眞赤にして、其上涙を一パイに注いで家へ駈けて還つた。其娘は立派に嫁入して、今は人の母と成ッてるて在らうか？　私は時々忘れずに憶出す。

最う一人、面全部に濃い雀斑のある婦人を識ッて居たが、此婦人は歩行くのに平常も下に俯向く癖て、之れが一層に細纎な身體を弓狀に陰欝に見せた。

私は、別けて弱い女の不具者には人一倍同情を有つ。途中て跛や、また痣の女にても出會ふと、氣の毒で正面には視ないて往く。

一度、電車の中て、鼻を護謨か何んかて製造へて喰着けた婦人を見た時、可笑しさを奥齒て咬殺すのに大に閉口した。

兎に角、効果が十分に現はれるものとすれば、美顔術は女には特に有難いものだ。これは文明の世の賜物だ。

美顔術の施行處！　女性肉體を救濟保護するの天國極樂てある。

此家には美神ビーナスの肖像額が壁に掛けてなからうか？

短篇小説

小栗風葉選



○規定　題材凡て自由なり一人一篇に限り半紙又は罫紙に擬假名をつけて明瞭なる楷書にて認むべし長さは二十四字詰八十行以内とす賞は甲種に據りて送呈す▲本欄以下本誌の投稿は凡て女子に限るものとす

○明暗（天賞）

麹町　秋萩

教會の青年等が民子の家に始終出入する、中には前途有望な學生もあり、社會に一歩踏み出した若手連もある、こんな人たちと親しく一室に會して信仰上の談話をしたり、其他學問の事、世間話、樂しい時を持つ事は敢て異數しい事では無かつた――勿論民子の母の折枝と同席であつたが――之等訪問する人等も民子の學問と信仰には寡なからず敬服して居たので、民子から受ける教訓も大なるものとして喜んで民子と語つたものだ、民子の父、――牧師なる――の話を聽くよりも却つて面白く柔かに、そして信仰上稗益になる樣なこと許り多くきかれたから。

多くの若い男子と語る事になれた民子は情熱燃える樣な激しい言葉をきいても別に頬をほてらすても無かつた、信仰といふ根城の固いかめしい民子の胸には若い血潮は通つて居ないかの樣だつた。

此頃民子は何となく寂寞を感じる樣になつた、民子の家に出入する會員達も絶えず新陳代謝してゆく、こんな事はめづらしずきの民子はむしろ喜んで居た事なのだけれど、それも果敢ない或意味がこもつて居るかの樣にも覺え、兎に角寂しい樣な氣に成る、流れて、流れてゆく時、絶えずうつり過ぎる人生、民子は今變化なき彼女の過去廿七年の生涯に漸く倦んできたのである。

彼女は朝に夕に讃美し感謝して過した過去を追想ふた、平坦な半生だつたと思ふ、ふと今までの感謝、讃美、それ〳〵自己を虚僞つて居たのでは無からうかと疑つた、心の或部分に塲所取つた不滿、それを感謝とい

ふ美しい錦でかぶせておいたのだとすれば‥‥　彼女は身を戰かせた。

「如何でも佐久間さんは戀しいわ」或日書齋といつても三疊の粗末な一室で——机に肘ついて眼をつぶつてぢつと瞑想へて居た民子はこんな事を胸中に思つた、佐久間といふのは今年法科を卒業る筈の青年である、民子とはよく話が合ふので談に實が入つてはお互に口から泡を飛ばさん許りに論じる事もある、佐久間は他から去年轉じて敎會員に加はつたので、まだ交つて日も淺いに拘らず民子は誰よりも信用し、誰にも勝る敵手として居たのである。

「多勢交際して來たのに、何故、佐久間さんに限つてこん



な事を思ふ樣になつたのだらう、すまない、すまない、此誘惑には是非打ち勝たなければならないと思ふけれど、絕間なく佐久間さんの事が頭に浮んで忘れる事が出來ない、罪かしら、」こう思つた彼女の面は煩悶へた樣に見えた「祈禱らう」と思つて眼を瞑つて手を組んだけれど、胸がたゞ浪打つて祈る事が出來なかつた「姉樣と思つて敎訓へて頂いて居るのです」凛とした昨夜の面影を思ひ出して幻に其聲を聽いた、

「佐久間さんは私の固な頭惱を和げて下さる方なのだらう從來の心の活動は皆受身の、左樣だ、實に消極的なものだつた、今の私、比較物には成らないのだもの」恍然とし

て獨りて醉つた樣な笑を洩らした。

夕の食卓に就いた時、父の輪島牧師は今日の求道會の模樣を話して、「嗚呼これ大きなバイバルぢや感謝の他はない」と獨りて滿足して居た、博い同胞の愛を重んじて多くの靈魂を救ふ父が、最接近い私の寂しい靈魂を何故に救はうとしないのだらうと白いものゝ目立て增えた老いゆく父の横顏をぢつと注視た、まだ廿歲にならない時分の數多くの緣談、それから四五年前までは意外けないほど可い緣談も隨分あつたのにいつも父は頭から相手にせずにしまつて、とつい種々の事がそれからそれと考へられる、

「廿七、と胸中に高く叫ばれる樣に覺えて、

「佐久間さんだつて三つ上の姉さんだ、位の御考に違いないわ、それ以上の愛があらうとは思へないもの、年を思へば耻かしい、少女らしい思想を抱つなんて……」

胸のヂリヾ油煎りにされる樣な苦笑を力なく洩らした、

そして母の不審るのもかまはず早く箸をおさめて部屋に閉ぢこもつたが、イラヾした樣な思が胸にわいて堪へられず筆とりあげて、

「昨夜は誠に失禮いたし候、御物語しつくし候はざりしうらみ今日はつくヾ覺えられてまたの御入待遠しさに一筆かきしるしあげ候、御都合よろしくおはしまさば明晩にても御入來かなふまじく候やまちあげ居り候」

と書き納めて封筒に入れやうとしたが、來て下さる御心があれば手紙を出さないだつても入來つしやる筈だ、と思ひなほして丸めて嚙んでしまつた、白百合を一輪畵いた繪に、自分て

「その身を神の意に適ふ聖き活ける祭物となして神に獻げよ是當然の祭なり（羅馬書十二ノ一）と書いたのが柱にかけてある、半年近く毎日見なれたものだけれど何だが目新らしい樣に思つて「その身を」から「祭なり」までづつと讀んでみた激烈しい苦痛を感えて無意識に聖書を手にしてしおりのはさまれたところを開いてみると

耐忍びて善を行ひ榮光と尊貴と不朽壞とを求る者には永生をもて報ん

とあつた、民子は急ひて聖書を伏せて恐怖の眼光をふせて祈らうとしたけれど、さて祈るでもなく、唇をかんだ、眼には一杯の淚を含つて。

（評）空しき學識、空しき讃美、青春漸く老んとして過去の宗敎的生活の空虚を思ひ、新に充實したる生活を憧る。其所に戀あり苦悶あり、加も多年修養されたる信仰心は、强き自省を促す。眞摯なる作。

○お美香さん（寫實）

土佐安藝 井ノ口村　梶原重子

お美香さん、それは一番仲のいゝ私のお友達です。人好のするお美香さんは、それは〳〵學校に在る時だつて、もてきつてました。可愛らしくて、きれいて、怜悧くて、交際家でした。けれどお美香さんは、云つてました。「自分から求めたのは、一つもない」と。

實際彼人には、誰でもすぐ、チャーㇺされてしまうんてすもの。第一無邪氣な人なのてすから、人好のする人てす。誰でも云ひますもの、初めて逢つた時から彼人は、すぐすきになるつて。

學校に在る時の事でした。吉永先生の姪になる、芳野さんが云つてたとがあります。「野崎さんはまことに、無邪氣な人好のする子だけれど、容易におかすべからざるところがある」と吉永先生が云つてたと。

それから寄宿舎の窓へ、銀杏の葉の散り込む日なのでした。散込む黄な葉を、丸めては捨て、捨てゝは丸めしてゐたお美香さんは、急に沈むだ調子になつて、「池田さん」と云つた時、丸めた銀杏を投げて。スッとびんの毛を指先きて、かき上げた時のお美香さんを今ても私は思ひ出します。「エ、」と私が云ひますと、私の手をソッととつて「私子」と妙にくびをかしげて、「私兄弟と云つては、幼さい弟と二人限りだから、妙にまさかの時に、力となつてくれる――相談あいてに――しつかりした人が、一人ほしいと思つてますけど」と、につてりして私をチロイと見たので。

「をやあなたのやうな方、誰でもありますわ」と云ふと、「でもちよいとないものよ」と、沈むでしまつた。

而して本年の春でした。勿論學校をすんでからも、私とお美香さんとは、月一度の文通はしてました。

「淋しうくらし居る私も、あなたの如く私を、愛しみ下さる、精神の慰安者を、異性より得申候間、お悦び下され度候、而し私よりわざ〳〵求めし、譯には之無く候、そは湖畔の詩人にて候」と云ふのが手紙の一節にありました。お美香さんは戀をするやうな、人てはありませんから、いくら異性より求めても、かまふまいと思ひました私は、又例の魅だな、と合點した。

湖畔詩人と云つたら、ア、彼根本かとすぐうなづかせ

る、青年文士てした。それから後私がいくら、根本の事を問ふてやつても、その返事は一度も書いてなかつたのてした。間もなく根本は、上京したとき、ましたが、其後も湖畔詩人と、お美香さんは、私と同じやうに文通してゐると、隣家から通つてゐる、郵便局の局員さんが云つてゐました。

四五日前、暮の夜市へ買物に行くと、おしやべりて名高い梅子さんに逢ふと、口頭第一お美香さんの事が出たが、おはりにかう云つた。「お美香さんは、彼の湖畔詩人の根本さんと、縁談があるつてね」と、私はあの人にかぎつてと、思つてたのにお美香さんと逐々と心に浮んだが、何も云はずに「そうそれはいゝ事、いゝてはありませんか」と、云つてさつさと歸りましたが、其晩はお美香さんの事を少時も考へずに、眠りました。

昨日お美香さんは、久し振りで宅へ來ました。寫眞を撮りに來たからと。きれいな人丈に一寸も、年をとつたやうには見えませぬ。いゝ以前より若い位です。美しさも少時見ぬ間に増したやうてす。

「根本さんとの、見合の寫眞なの。」と云ふと、いやと云ふ程眞面目になつて「まさかね、いやなこと」と云つたまゝ、だまりこんてしまいました。

「そして根本さんとの、縁談はよくなつて？」ときくと太い吐息をついて、苦笑をしてしまひました。私は彼人にない事と思つたので。

「え、疾う、いつなの」とうながすと、

「あなたそう思つて、あなた迄が、だから私かなしいの。」と早目に一ぱいの泪を溜めてますから、いよ〳〵わからなくなつて聞きました。

「お美香さん、何てすつて、疾うなの、わからないのね」と、ソッと肩に手をかけると、

肉色の絹巾で泪をぬぐつて、につこり、

「私根本さん嫌ひぢやないわ、結婚なんかしてしまつて、

「餘まり惜しいてすもの、」「なぜ」つてきくと

全く惜しいのてすもの、私根本さんがうらめしいわ、元來そう云ふ仲なんぢやないんてすもの、彼人は私の慰藉者なんですから、結婚して終つたら、全くつまらないんてすもの、私止してしまつてよ」と。

（評）具体的に好く描けてゐる。單純てはあるが、是も現代の女性の新しい感情だ。

○お榮（入賞）

神田佐柄木町四 新村方　基子

お榮は、懈さうに、格子を明けた。

すぐ、入口は、板の間の臺所で、三尺宛の土間に、流元其向ふが、三尺の壁て、しちりん、竈、桶小鉢が、亂雜に置かれてある。

本當に、九尺二間とは是だと、お榮は又沁み〴〵厭に成る。

大儀さうに、どしんと音をさせて上つた。

座敷にも居間にも、たつた一間の、四疊敷、而も中半疊は、戸棚にとられてゐる。

「只今」とよん所なさゝうに座る。

「あゝお歸りかえ」と母のお近は、頭を上げた。

唯さへ、白かつた色が、半年以來のいたつきに、凄い程蒼白く、自慢だつた、黑髮がばらりと、窪んだ眼のわきから、骨立つた其頬を蔽つてゐる。枕紙は茶色に、夜具の襟は、黑びかりがして動く度、ぽつ〳〵〳〵と立つ垢が、華やかな、春の日影に映じて、室中を舞ひ廻る「おとつつあんは」と、お榮は、顏を擦り寄せた。

蒼い〳〵と、云はれる顏も、母のと比べれば、若い丈に艶がある。

「仕事に行つた樣だよ」と又、枕へつける。

「飲んで來なけりやいゝがと思つてね」と、蒼黑い筋立た手で、額の邊を抑へ乍ら、沈んでゐる。

「あゝ厭だ〳〵、年百年中、」お榮は自暴に立ち上つた。

父も母も、實に可哀想だと、始終思つてはゐるが。

扨て、熱柿臭い父を見、其小言を聞き、くど〳〵しい母の愚痴を耳にしたりすると、何故か、恁う、妙に逆つて餘計に氣を揉ませたく成て來る。

友の幸福をひき合ひにして、母を泣かした事もあつた。

いつそ、死んだ方がなどとおどかして、父に怒鳴られた事もある。

而して、いつも〳〵、父母の前て、笑顏一つした例がない。

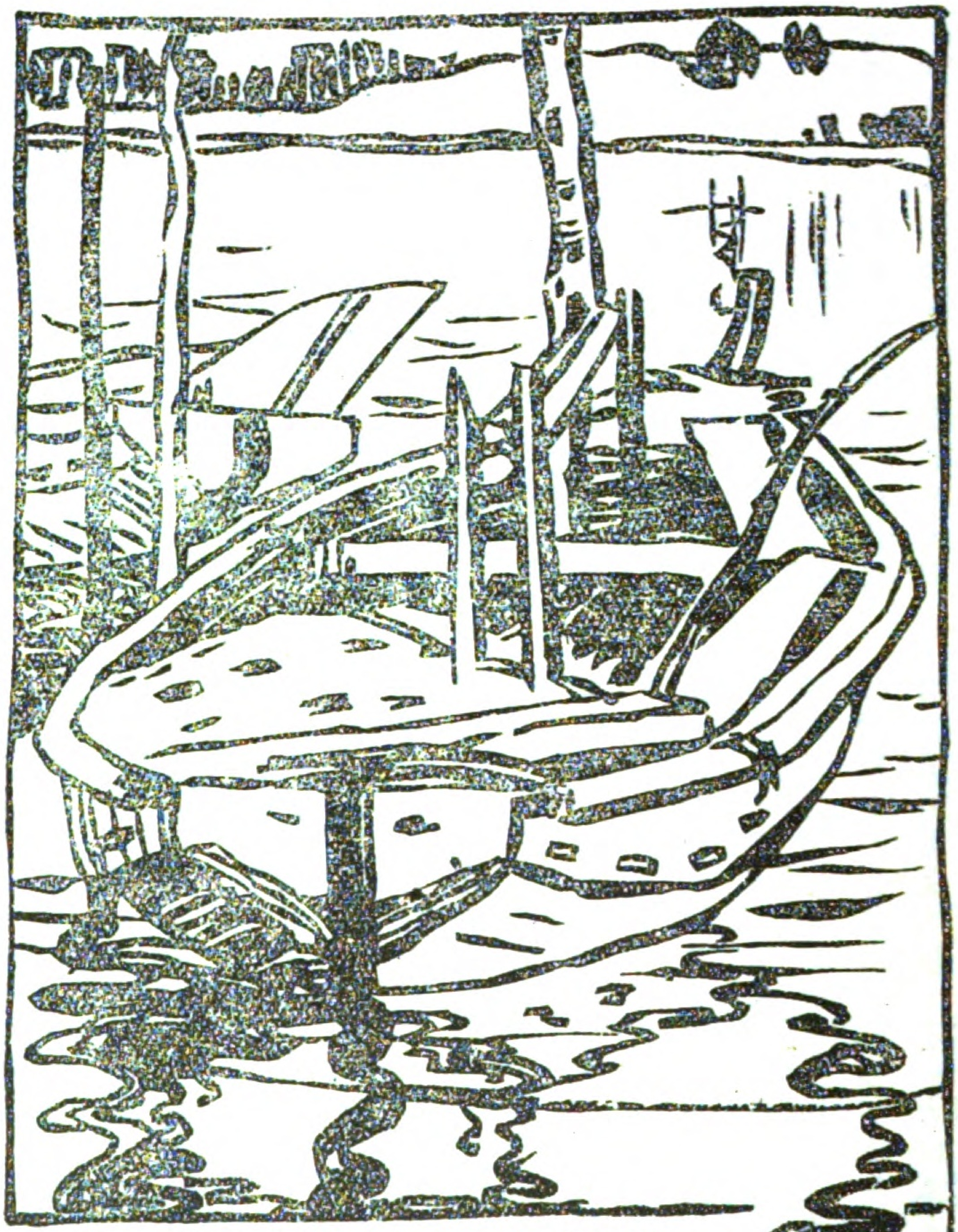
溜息と、入の字て持ちきつてゐる。

が、工場へ行つてる間、片時も父母の事が忘れられない。

我と我今迄の不心得を悔むのが、常である。

是からこそ、どんなにも、盡さう、夫こそ、天にも地に一人しかない子だもの、自分ても孝行しなかつたらと思ふと、白髮の增した、衰ろへ果てた父の姿、やつれた、憐な母の面わが、髣髴と浮んで來て、堪らなく成つちやはら〳〵落淚するのが、殆ど每日の樣てあり乍ら、家の格子に手が懸ると、又例の氣質に變つて了

ふ。
自分にさへ、何故か分らなくて、餘計にじり〳〵した
く成る。
て、手荒く窓を開いた。一間の往來を隔てた、向ふの長屋の家々がまるて見透してある。屋根から、屋根へ竿を渡して、汚い、むつきやら、下帯やら、所狭とばかり、干してある。お桀は、さも心地わるさうに、二三度、唾を吐いて、其儘、ぴしやつと立て切つた。
「晩のお桀はどうだえ」
病人の癖に、ふんいらぬお世話だと思ふ。無言つてゐたつてどうにかするわ。
「買つて來たら、いゝぢやないの」、愛らしい目に劍を持つ。お近は、何とも云はず、そつと眼を拭つた。
お桀は、小さい自分の金巾を、握んだ儘、足音荒くがたぴしと、飛び出した。
さしもに、長い春の日も、もう暮れて、水道端の混雜は、一ト通りでない。皆、仕事から歸たらしい。界隈は、一入騒しう成た。
お桀は、何やらの、小さい包を抱へて、我家の格子近



（天賞）舟　搖津とよ子

く來た時、父の濁聲、母の泣き聲を耳にして、又吐息と共に、立ち止つた。

（評）貧乏所帶に心れちけた女の感情は、一通り描かれてある。父母に對する厭惡の情が今一層深刻には出なかつたらうか。

【秀逸】

○里子

羽後　菊池りう子

君子を産落してから丁度廿日目の夜てある。婆やがランプを消すのを忘れて眠て、其がひつくりかへつて、よぎの袖に火がついて、大騷ぎをした時、お光も産後の衰弱した身體で其水よ、消火器よと氣をもんだので其翌日からぴつちり乳が止つた。勿論最初から左程餘計な方てはなかつたが、乳の質もよかつたし、赤坊一人を養ふには充分であつた。其て他の若い母親達の乳のないので苦勞する話を聞いても左程に感じなかつたのが、此頃ては始終其許り心配して自分迄疲せ細つて了つた。かゝり醫は勿論、町中て見せぬ醫者はなく、さては世間てよくいふ、味噌汁を吸ふといゝとか、其をきいては嫌なのも我慢して三度々々は味噌汁を吸ふて見るが一向効がない。やむなくミルクて育てゝは居るが、漸々廿一のお母樣の事てもあり、又家に居た時に一番の末子て、子供氣一つない所に育つた物だから、火のついた樣に泣かれると、どうしていゝやら解らず出もせぬ乳房を含ませて、すかしても／＼とめないので自分迄泣き出す、すると、隣の八百屋のおかみ樣がきゝ兼てやつてきて、上手に抱いてすかしてくれる、とはつたり君子は泣きやむ。其内にお光は手帳を出して學校て家事の時間に教はつたミルクの養育法、ミルク一、水一、杯、表になつてるのを、顏を赤らめ乍ら見て合せて飲ませる――其度にお光は實家て母から喧擾しく云はれたのをきかずに、只新體詩や歌許りよんて來たのと、姑の居ない所を撰つて嫁たのが、今更口惜しくつてならなかつた。實家の母は鯉のお汁だとか種々な物をもつて來ては食べさせる、けれど何をしても駄目だ。産扱ひにきてた婆やも一昨日から家へ歸つて、今は三度々々の仕度から、ふき掃除、何から何迄お光一人の手になつた、一寸寢かしてをくと、直ぐきやん／＼泣く。今此方ては手の離されぬ仕事をしてるのに夫は子供がいくら泣いても抱いてくれ樣ともしない、じつとして机に向つて本を讀んてる。餘り情ない方と遂「貴夫も餘りな」といふと益々抱くは抱くが其不器容さかげんはお光に負ず劣らずの手つきてある。と子供は益々きやん／＼泣き叫ぶ。夫婦二人て泣き

度様な事がまゝある。子供にかゝつてると終日何も他の事は出來ず、夫の歸宅に玄關迄出て只今さへせぬ事が多い、此頃では夫も、持餘して「何故此子はこんなに泣く子だらう、此頃は社の方の仕事もさつぱり出來ん」と眉を寄せられると、お光は無性に口惜しくなつて泣く子をぐつと抱いた儘、井戸端に立つて、娘時代に想像した家庭と現實との差異を比べては今更乍ら、自分の不幸を嘆いた、娘時代にはミルクも時間を計つて、ちやんと規律正しく飲ませ様抔と思つた物を——。

とこうする間にいつか君子は人わけをする樣になつた。幾人もの中に入つても若い母の顔を見出してはにこ〳〵笑ふので、お光は可愛くて堪らなくなつた、そして何が何でも此子は手一つで育てあげ樣、決して里子に抔やらぬと固く決心した、お光も漸々笑ひ出す頃から母が病氣で里子にやられた。歸つてからの母子の情、何につけても遠慮勝で兄妹皆よつて遊ぶ時にも獨り隅に凝つて居る悲しさ、物心つき初むるに從つて薄れゆく母子の情！お光は娘時代から自分が子を持つても里子にのみは！と深く腦裡にしみこんで居たのだ。で今迄も近所の人達によく、其なにして置くよりは里子におやりになつてはと進められたり、夫からもいはれたが、矢張我を張つて通して來た。が今夜こそは大丈夫と、ほつと一息ついてねた晩である。ふと子供の泣聲に目覺めて、枕元に置いたミルクを飲ませたけれど、なか〳〵泣きやまぬ。近頃は此樣事はないのに……。身躰に觸れて見たら火の樣に熱が出て居る驚いて傍の夫を呼び起して醫師に走つて貰ひ自分はねんねこの中に背つて、室中彷徨歩いて居た。醫師は三十分許り過てきて、診察して腸加答兒だからと、細々注意を與へて居つた。お光は何事もさて置いて夜も晝も其身もやせる位、看護した、其甲斐があつて君子は漸々回復してきたが、病後の衰弱を取返すにはとてもミルクでは駄目だから、乳母をおけと醫師に云はれた。お光の夫といつた所で去年專門學校を出た許りで元より餘裕のある家ではない、乳母と云はれてもはいはいと二つ返事でおく事は出來ぬ。是はどうしても里子にやるより他はない、君子の頬は日に〳〵やせる。實家の母はかういふ家があるからやつてはどうだと毎日の樣にくる。夫も一共になつて進める、お光は毎日芒然考へてた、漸々是迄育てた物を、母の顔も知つて笑ひ出す樣になつたのを手離する、堪らない！さらばとてみす〳〵子はやせ行く物を——。今日夫は社から

歸つてきて至極いゝ家があるからやらないかといつた
お光は思ひ惑つた末、如何しても手本て育て度といふと、夫は「左樣なら子供を殺してもいゝのか、勝手にしろ」といふ。此な事が三度も續いた。お光の心の今迄夫にのみ注がれてた愛は子供の方にのみ傾いてくる。娘時代に隨分文學熱に浮された丈、其な心裡の事はちやんと客觀出來る、其丈尚苦しいのだ、こうして居れば心第々々と夫と自分の愛がそがれて行く、子はやせてゆく――。里子にやつたら……？やつたら此樣に自分より他にない子供の心が他人に傾く。厭だ！厭だ！妬ましい。歸つてから！自分が母に於ける如き苦痛、其ても自分さへ隔なく可愛がつたら――けれど子供の方でどうしても僻む物――。此子をやれば來年にも次はてる、そしたら自分の手て育てたのと人の手て育つたのと――其を自然隔がつかう、特には情的の私だ物――嗚此子は何故病氣時死ねなかつたらう。私は此子と共に死度いと背の子を落して涙にぬれた頰をぴつしやり摺りつけると、赤兒の樣でもなく骨が際立つて肉はげつそりやせて――。お光はつと胸刺れる樣に「仕方がない！死なして居られない！」と叫んだ。そしてつくづくお母樣も此な苦思をなすつたらう、今迄只々恨んだのはすまなかつた――と悟つた。「此子も子を持て見るとわかるのかなあ！」吐息と共につぶやいた。

（評）若い母親の子に對する情愛が一溢り出てゐる。唯全篇說明的なるを憾む。

○土人形

上

大阪　西戸政江子

夫の秀一が起きたのは例の通り午前六時であつた、お俊がこゝへ嫁てから全三年、その間、夫の朝起る時間は毎朝午前六時、判を押したやうだ、病氣の外は、十分間と違つた事がない、言葉少なに否無言で朝飯を終つて會社へ出勤する、洋服つける間も無言である、今朝もそれだ、夫が洋服着るのを手傳いながら、「大分洋服も古くなりましたわね」と愛想に云つて見たけれど、夫は只「ウム」と云つただけて默つて出て行く、

お俊も無言て送りだして居室へと歸つたが今更ら淋しい思ひがヒシ／＼と胸に應えて泣きたくなつて來る、

「なぜあんなだらう」と情なくなつて來る、怒つて居るのかと思つても怒つても居ないのだ、會社に入つてから恰度二年、雨の日も風の日も乃至暑い日も寒い日

も日曜の外は欠かさず忠實に出勤する、時間は殆んど一定して居る、支配人の前のテーブルの上にある出勤簿に押印して自分の席に坐つてペンを手にしたら、もう帳簿と首ッ引、午後の四時までは一寸も席を離れない、笑談一つ言ふじやなし晝飯は小さなパン三片、を頬張るのみだ、

支配人の留守の間を他の同僚達がワイワイ笑談を云ひ合つて居る事なんかには耳もかさない、熱心に事務を執つて居る、恐らく、自分の悪口されてゝも默つて居るだらう、たまには同僚が、

「オイ田中君…………」と笑談言はれても怒りもしなければニコリともしない、

「あゝさうですか」とそれつ限り、よく誰々の新任だそれ誰れの送別會だと宴會の回章を給仕が持つて來る、贊成もしない代りに別に反對もしない、贊成者が多かつたら默つて印を押す、不贊成者の多い時は後回しと苦笑する、

午後もさうだ、時刻が來れば同僚の未だストーブ會議を開いて居やうがそんな事には頓着なして、通り一片の挨拶をして歸る、會社では彼れを呼んで土人形と呼んで居る、よくあんな人間が出來たものだな、あれでも人間の血が通ふて居るのか知ら、などゝいつも同僚仲間の話題に登るのである、

家に歸つても秀一は依然とした人である、夕飯も無言で淋しくすます、酒も呑まない、御馳走があつてもなくても默つて居る、

お俊はいつまでこんな不愉快な日を送らねばならぬのだらうかと思ふことが度々だ、友達の竹さんは羨ましい、芝居でも寄席へでも二人一緒



（地賞）　芝居スケツチ　青森　松尾千代子

に連れ立つて行く、妾等はあんな事は眞似にも出來ない、あゝ嫌やだ／＼と時には自暴氣味になつて言葉も自づと、

「ね貴郞、妾明日一寸歸つて來ます」

「なぜ歸るんだ」

「でも一寸歸りたくなりましたから」

と云ふたが夫はもう默つて煙草を吹かして居る、お俊も默つて仕舞ふた、

時計のセコンドばかりがチクタクときざんで居る。

下

「お母さん／＼姉さんが歸つて來たわ」と喜んで與れるのは妹の登喜ちやんだけ、

「なんだい入釜しい子だね、姉さんがそんなに目ずらしいのかい」奧で母の聲がする、裏口で兄が何かして居たが、之れも忙しさうに一寸見たゞけ苦い顏して、裏へ出て去つた、お俊は嫌な思ひがした、いつそ歸らうかとも思ふたが思ひ切つて家に入つた、

「まあ義姉さんよくお歸り下すつてね」と兄嫁ばかりは愛想よく言ふけれども、流し元て洗い物をしながら言ふばかりて、中々出て來ない、さらでも小姑のひがみお俊の耳には世間躰のお世辭としか聞えぬ、

「毎度お邪魔しますね」、とわざとらしく笑顏を見せて奧に入つた、

父は夕飯の最中で相も變らず、眞赤になつて酒を呑んで居る、母は傍で酌をして居た、

「お俊か何しに來た」突樫貪な言ひ方である、母親はさすがに「何しにつて自分の生れた家ですもの歸つて來るのは當り前じやありませんか」

「又土人形に自暴を起して歸つて來たのやな、アハ…………土人形か」と父は盃を離さずに、母親は傍から、

「どうしてあんなに物言はない人だらう、ほんとに人が土人形つて言ふが、あれてよく會社の方が勤まるね」

いつも言はれる事ながら、今更に腹が立つ、自分等親達二人が無理强ひに嫁けと云ひながら今日今更言ふ事はどうだらう、なぜそんなに笑ふやうな、呆れるやうな、土人形の處へ自分の娘をやつたのだ、お父さんもお母さんも餘りな言分じやないか、あゝ此んな事なら歸つて來ない方が增だつた、

「そんな事はありませんよ」と横を向ひて仕舞ふた、

――と赤坊がワーッともう火のついたやうに泣き出した、

「登喜ッ、何の爲めに守して居るんだッ」と兄の聲

兄嫁は「オーオーどうしたく\」としきりに赤兒をあやして居る樣子、登喜は兄に怒られて隣の室でシクシク泣いて居る、

「又登喜は泣いて居るな」と父が言ふたが母親は何にも言はなかつた、

もう時計は八時廻つて居るのに未だ父は酒を呑みながら管々と言ふて居る、

＊　＊　＊

「お父さんは酒をのむし嫁は意地が惡いし、今日も又喧嘩して來た」と母が來た、お俊は又かと嫌な顏したが母は知らぬ顏でそれなり晝飯もすんで三時頃になると「秀さんが歸つて來ると氣づつないから」と歸つて去つた。

（評）夫にも不滿と云つて生家へ歸つても慰められる所が無い、虚無的な女の生活が一寸人を動かす。が、書き方に一向味が無い。唯筋でも讀むやうだ。

○友の家

京都　鹽田登美子

菅野樣とは二人が好んで俳句や歌などを作くるところから、自然親しく成つた友である。母樣の無い所謂でもあらうが妙に沈んだいぢけた人でめつたに進んで口を開いた事も無い程な淋しい人である。教室の隅の方で獨り何か書いて居るのが常だつた。それで居てなかく\熱烈な文章や新體詩等を作つて居る。同級の千代樣なんか何時でも菅野樣許は分らない人だと評して居る位だ。

家内は父樣と姉樣との三人限りな小人數で何んでも父樣は大阪の或る會社とかに出て居て折々歸つて來らるゝのださうだが、未だ一度も見た事が無い。姉樣と云ふのが常から病身で何時も青い顏してぶらく\とし居らるゝ。髮等未だ一度も美しく上つて居たのを見た事も無い位。それは淋しい冷め度い家だつた。此處へ來るとは、これでは菅野樣も沈む筈だと泌みく\思ふのである。

此の頃は何故か一層沈んで可愛想な程青い顏して居る。つまら無ささうに教室の隅の方で何かしきりに考へ込んで居る事もある。業が終つて皆が歸つて行つても一人殘つて廣い運動場を夕方までぶらく\歩いて居るのだ。

「如何したのよう」心配なので後から顏をのぞき込むと菅野樣はさも驚いたと云ふ風をして「何故」つて兩手を頰に當てゝ見返るのだつた。

昨日は幸ひ日曜だつたので久し振りで菅野樣のお宅

を訪ふたのだ。

「お父様は」って私が聞いて見たら、

「此の頃はずつと、大坂の方ばつかり」

「そう淋しいわねえ」

「家へ歸つたつて一寸も面白い事など無いんですもの……それに此の頃は又……」急に口をばつたり結んでしまふ。

氣の早い私は

「えゝつ姉様又お悪いの」驚ろいてこう聞くと

「いゝえね體の方は餘程可いのよ」

不意に階梯を登る音が聞えて後の襖が明いた、姉様だ——私は一目見て驚いた。何時も亂れて居る髮は美しく上げられ見違る程顏色も可く華美な色の羽織を着て居らるゝ、三つ四つの若返つて見える珍らしくお茶やお菓子やアルバム等を持て來て下すつた「まあごゆつくりね」とやさしく笑つて立つて行かれた時菅野様は險しい目附をして後姿をぢつと見送つて居る。

足音が階梯の下に消える頃不意に大きな笑ひ聲がした一度も聞いた事の無い男の聲で——姉様の元氣な聲も変つて居た。

「誰人か見えて居らつしやるの」私はこう聞て見ると

「何に先月から家に下宿した人なの銀行員だとか何とかだつて……嫌な人達だ」

急に目を落したその顏には少なからぬ痛切な色が仄見へた様に思はれた。

（評）姉の墮落を傍觀して日に〳〵沈み行く娘の可憐な境遇、もう少し細かく描いたらばと思つた。文章は整つてゐる。

○綠園　牛込　松田廣子

庭石の隅に蜻蛉が棲つて居る。

俊ちアんはそれを捕へやうとして、奇麗な手がそつと出る、蜻蛉は逸早くつと逃げて、やがて俊ちアんのお下げ髮に棲らうとする。

「いやな蜻蛉よ」

とかむりを振る、蜻蛉は飛んでもう蓮の葉にとまり、俊ちアんは上の方から、圓い輪を描きながら兩手を伸べる、蜻蛉はまた逃げた。

「あんまりひどいわ」

俊ちアんの星のやうな眼は曇つて來て、終に聲を立て泣き出した、蜻蛉がチヨツト飛んで又とまる。

「やあア、俊ちアん泣いてらア、弱いなア、兄ちアんなんかア、昨日轉んで泣かなかつたぜ」

學校カバンを抱えた儘の三郎君は、池の小橋を渡つ

て一散に走つて來る。俊ちアんは非常なる加勢を得て、急に元氣づいた。

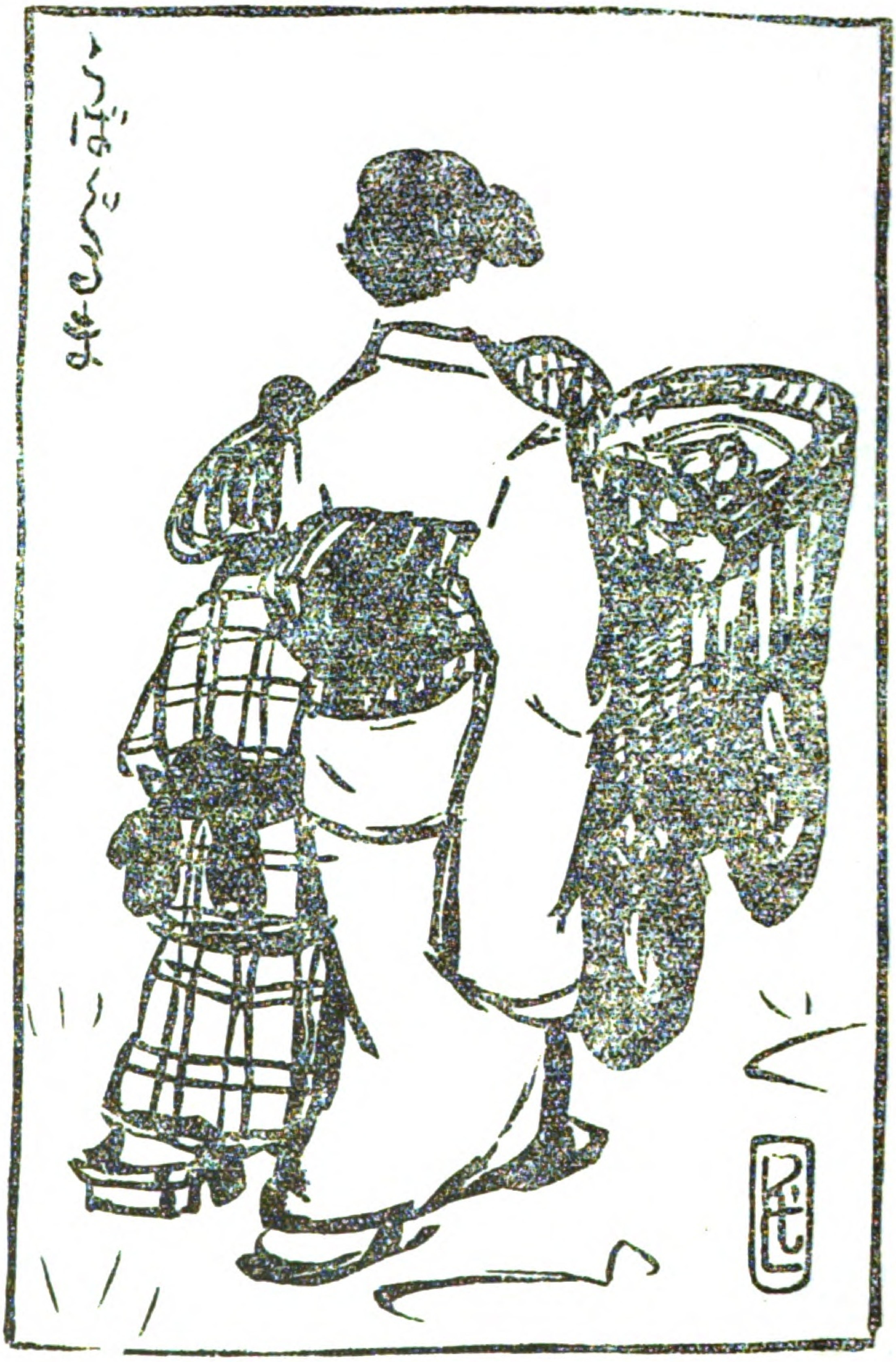
『だつてあたい、蜻蛉が欲しいのだもの兄さん捕つて頂戴な』

俊ちアんは石に——棲らうとする蜻蛉を羨ましげに瞶めて言ふ。

『蜻蛉などに泣かされるものがあるものか、どれ、僕が捕てやらう』

三郎君は箒を小脇にかいこんで、ソロ〱と足を運ぶ俊ちアんも静かについて行く。

『さア、俊ちアんメたぞッ。』



（入賞）乳母車　深川　龜岡たみ子

三郎君は見事蜻蛉を捕えた。俊ちアんは嬉しくて堪らない、箒の笹を掻きわけてつかまうとする、三郎君が危ぶみながら箒を上げる、蜻蛉は蕎地に紅葉の様な手から、逃げてしまつた。

やがてそれが晝顔の棚に、落る様にとまる、四つの眼には失望の色が、あり〱と現はれた。

三郎君はもうたまらない。

『この畜生ッ』

と叫んで、無暗矢鱈に箒を振り廻す、お父さんの丹

精の蕗畑は狼籍たり、俊ちアんは目をくる〳〵させて見て居る。

「また三郎ちアん、亂暴ね、どうしたの？」

不意にバイオレットの香が芬とおそつて來る。垣根の中から、姉の靜子の白い顏が現はれた。

「だつて憎い蜻蛉だもの、今俊ちアんを泣かせたのだよ、そら又飛て來た、やア姉さんの廂髮に……。」

「姉ちアん、あたい蜻蛉が欲しいわ、捕つて頂戴な、よう」

「そんなものは、捕らなくつても善いてせう、さア兩人とも一所に御出て、好いものをあげるから。」

「好いものて何に？」

「僕ア林檎なら好いなア」

兩人は無邪氣に、振の袂に戲れつゝ行く。

茄子畑の徑を辿る、暑い日の中に、おさんが一生懸命に、洗濯して居る。

池の渚を通り、鏡の如き面に、老松の翠が映つて居る淸水のそゝぐ南岸には、緋鯉が集つて、潑剌と躍り上る、白い波がゆら〳〵と動いて、松の蔭が千々に碎ける。

淸水を緣を遡る。若葉の綠りは滴んばかり、せゝらぎの音が涼しく聞える。

楓の枝にハンモックが懸けられて、その中に、林檎の紅と夏蜜柑の黃とが、際だつて美しく見える。今年生れた猫の『ぶち』も來て居る。三郎君にも俊ちアんにも望外の御馳走である。

三人はハンモックに乘つた、俊ちアんはもうぶちを抱いて、毛糸をひねつて居る、三郎君は右手に林檎、左手に蜜柑を捧げて、ダンスを初めた。

靜子は兩人を見較ながら、微笑んで居る、やがて藤村の『常盤木』を口吟み初めた、その聲は銀鈴のやう。

葉越の風が絶えず、綠りの香を送る、木の葉がゆらぐごとに、隙間洩る日の光が、稻妻のやうに閃くと、名殘が淸水に落ちて、波間の石が滑らかに輝く。

梢には蟬の聲か喧ましく。

（評）可憐な、而して美しい小品で、美文とも名付くべきものだらう。それ以外に怒ずる所は無い。

横瀬夜雨選



○規定　題意も材料も格律も凡て自由なり要するに眞情を歌へば可なり三十行を越ゆるべからず一行には一句以上を書くべからず凡て振假名をつけること字體は明瞭を要す乙種の賞を送呈す

○橋の爪（天賞）

阿波　長曾我部菊子

烏羽玉の闇夜の町の橋の爪灯一つ光れり。
冷々と川の水の氣立ち昇うす暗に、
男ならし肩聳かし、連立てる女また、
長うすもの丶裾翻る——紅おさへ、
行くがあり。
暗はあやなしからくくと下駄の音！
橋の半に立ちかかり又立ち留り
たゆたふやしばらくありて
ぱッと明みぬ。橋板見ゆ。
（燐寸を人のすりしなり——）
見ればば有髯の紳士——眞白き浴衣
——乳母車
きぬ柔げなる車には二歳ばかりの子の寢がほ!!!
圓くして白き顔容の！
淸なる神のおとし兒！
世を照らす光をふくみ、
寐し眉の思なげなる!!
かく思ひかく見る中に
はや火は消えつ
ころころと乳母車おす音いて丶暗かげを——
橋こえて西にとすぎぬ。
一つ灯の暗をてらせる橋の爪
寂しや心——ゆくりなき「人」を
わがみし
夜の橋の半のみこそ光ると見にけれ
……みかへりて……。

この君の作はめちやくちやに舊型を破壊しやうとしたものばかりだ、それは至極贊成する。マチを摺つた刹那の光に乳母車に乘せられた幼兒のね顔を見つけたのもてがらである。しかし一氣にやり通してちつとも鍛錬しないのはいけない。今回の投書の中に男なりと斷定し得る理由ある人の『小さき心』に「夜雨先生へ、妾いくら女でも空くらゐ仰げますわ、けれどやはり羞しくつて……十八の春」と書き添へてあつた、よいつらの皮だ。周防の谷天籟といふ男、早くから空野花子の名て來たが斥けて採らぬせいか下關郵便局へ移ると共に水野谷子と更めてまたやつて來た悲しむべきは、秀才彼の如くにして、覆面にして少女の群に交らんとする心てある、これをしも容すべくば百年河淸を待つも何のかひかある。刀いま手にあり、斬らざるべからず。

○迷子（地賞）

麹町　飯島みよ子

幼き妹よ　彼は迷子
聲の限りを　呼べど來らず

白臘燈して　森の小暗に
更たくるまで　待てど來らず
愛する妹よ　今はいづくぞ
東は白めど　遂に來らず
臘涙の　今は盡くれど
只答ふるは　秀樹の葉ずれ

森に立つて夜明けまでかへらぬ妹を待つたといふだけに過ぎないが。森の奥ふかく迷ひ入りて歸らぬ妹と、白燭をともして東の空の白むまで森に立ちつくした姉と、詩の中にある話のようぢやありませんか。

○夜火（入賞）

伊豫　紅露

まばゆしや映え照る光、
華やかに夜をば飾りぬ、
闇いづこ彼方にはせて、
微温き氣ぞ立ち迷ふ。
燦爛くはかざす金扇、
飜る五彩の裳、
常闇を明にかへすと、
優手して火の神女たてり。

袖洩れし緋絹撰ごりて、
なめ盡さんず長蛇の形、
土壌蔽ひ天をおほひて、
炎々と火焔の柱。
熱烈と萬物皆輝き、
聳え立つ白亞の高樓、
浮彫の紅蓮搖ぐか、
金色の渦にまかれて、
仰ぐめに映るは火のみ、
千萬の星亂れ、
凄まじき音響のおとに、
今まさに火の城墜落る。
めざましやと見る間こそあれ、
靈香吐き黒煙捲きて、
紫の雲に駕しつゝ、
昇りゆく黄龍の眞姿。

【秀逸】

洗錬まさに足る、ねがはくば百尺竿頭一歩をすゝめて意味有る詩を作れ。

○のちぞひ

はぎの花

たとふる碧瑠璃と　溶けあひて

美しむらさきに　榮えんには
なに惜しからむ　旭日にうつる
「紅」はこのまゝ　消えんとも。
赤のみあせて　紫の
うれひの鈍色の　いくとせを
むかしのいろに　そめなんと
あゝわが紅は　えらばれぬ。
夢にゑがきし　むらさきの
その初花を　ゆかしみて
ふるうる胸に　そとばかり
灰色の醜花　ゑがきみる。
青春をほこりの　くれなゐを
はえなきいろに　よそふべく
跫並あやふく　踰跟ひゆくを
むちうつ聲か　衆人の祝詞。

象徵詩のようでもあり、なぞともとれて感興をひかない、あなたは海潮音、邪宗門などごらんなさるればいゝと思ひます。

○紅ふで

早稲田　忘れな草

燃ゆる緋色に紫に
彩絲巻きし臙脂ふての
名に應はしき細き軸
簪さす子の唇に
塗れよと添へて京の紅
京は四條の伯母君より
母に賜びたる品なれば
紫は姉に分けられて
殘れる緋色は末子の
我にと母の賜りぬ
姉妹同じ花の香の
小筆を唇に臙脂させば
花を含むとまどふらん
二つを年上の姉君は
母の仰せに髙髷を
我はまだきと桃われを
今宵催す觀櫻の
花の宴に侍るべく
しめたる帶のあはひには
面直さん懐中鏡と
紅の小筆とをとり添へて
そと忍ばするわれは愛少女

華麗なり。たゞ華麗なり。「殿のお庭の櫻狩、一重は姉に、八重を妹にたぐへまし、空の霞も八重一重」



花ちやん　青楽　稲垣かほる

○冬木立

奈良　中富よしみ

黄なる光を投げし太陽も
罪に汚れし人の子を
へだつる山のやつさ
荒涼たりな冬木立
魔神の息が木枯に
どよめくまゝに見ゆる
梢に殘る柿の實の
赤きはあれよ秋姫が
人の世遠く平和の
み光みてる詩の領を
冬の男神にゆづりしも
惜しき名殘にたへて
逝き給ひける名殘なり
あゝ執着の秋姫よ。

「逝柿のしづかに秋を通しけり」古人すでに道破す。

○何方へ行かむ

明石　田中ますゑ

いつしか落ちて人も見ぬ
あら野のはての黄昏や
喘へぎ喘へぎて來し我は
あゝと思はず息吐きぬ
あゝその寂寞に——
甍競ふ家々の
華かなるを仰ぶぎ見て
行く手も知らず歩みしも
疲て今は物言はぬ
枯れし柳に術とひぬ
あゝされど家はなく
道とはむ人もなし
町はつきぬ道は枝れぬ
行くべきは右か左か——
轍ある方へかと空を見る
心細さよわが涙。

これ亦老眼瞑。

○雀の子

濱津　みなしご

野分すさべば夢のまに、
落ちては腰をあいたしこ、
ゆられゆらるゝ木の枝や、
くちなはねらふ空洞の中、
はては煤はく屋根裏に、
安き夢だに結びあへぬ、
父母や祖父母にくらべては、
はるかに樂な此住居、
高き工場の煙突に、
五百重かさぬる爛瓦。
若竹撓ふ冬の夜も、
自らなるあたゝかさ。
こぼれ米干る夏の日も、
屋根より上る黑煙の、
雲をしのげる勇ましさ。
不思議なるかな、
下界さはぎてほてりたつ。
まるき窓より見下して、
いぶかる我は空の鳥の子。

「今度もまた投書か知ら」はひどい、先日葉書でも申上た通り、「落ちては腰をあいたしこ」のようなつまらぬ洒落をおつしやらなけりやいつでも歡迎するのです。

○覺めよ鷗

丹波　鹽見喜代子

春の海紫にほふ、
其海に眠る鷗よ、
覺めよ〳〵今嵐來む、
黑の雲重げの大氣。
人々は異樣の眼差、
面曇り怖れなやみ、
やるせなき青き吐息。
漁夫は今網あげぬ。
滿つる汐ゆるぶくすし香、
さ來る浪の遠吼え。
白き浪、そをぬけ出てゝ、
嬉しげに尺を飛ぶ魚、
あはれ何事か起る前兆、
覺めよ鷗。

山雨將に來らんとして風樓に滿つ、さめよ鷗。

○夜ふけて

東京　遠藤竹乃

喧しき轍の響
行く人の下駄の音みな
しづまりて都の晝は
何處にか隱れたりけむ、
燈火は力なげなる
光をば室に投げつゝ
しん／＼と更けゆく樣は
内に外に覺えぬる哉、
衰顔を術へばうべも
奪れける面よ姿よ
頬にきざす紅潮も薄くて
少女とは名のみなるもの、
しかすがに人を慕ひて
いく度か春の廻り來
新光添はるを想ひ
眉を上げ時を待ちしか、
今はたゞしほれ行く身の
亂れたる黒髪の長きに
戀こそは潛めて逝かめ——
——堪へがたき涙し流る。

哀音切々として絃聲將に絶えんとす、その生ひ立ちを知りその平生を知るもの誰か君の病めるをいたまざらむ。されど君がかたちとこゝろとのへこゝろをつゝみてしづかに路を歩むを思へば、清涙しきりに墜ちておさへがたし、願はくば多幸なれ。

○日の蝕

山城　松田まさ子

君見るか
まひるの空に
黄なる絲曳きみだれ、輝き
飛びもつれ、もつるゝ陰に
黒き喪衣。
君見るか
光の條
衰へて、ふるへ、捲かれつ
冠を脱ぎて日も今
大殿ごもり。
君見るか
雲もひそまる
日の終焉、恐懼を抱きて鳥も
溫き翼を抱きかわし
されど微笑。
君見るか
五十里北に
石に倚り湖を見て獨り
たゞひとり慄ゆる吾の
眉の冷たさ

「名の爲にあくがれて里を顧みもせぬ君に」とあります、仔細はわかりません。

○妹

越後　ふみ

障子一重に毬うたの
優しき聲の洩れ出ぬ
可愛き首を傾むけて
桃の散るにやためらへる

姉にすぐれて身丈のび
胸も華やぎ淸らけう
花をかざしてはつ島田
ながむる時の待どほき
春の常陰に埋もれて
人を哭ける幼どき
まみるゝ涙包みつる
思は我につらかりき、
せめては
せめては妹の
衣に覆へる柔乳房
母と呼れていとしるに
手を觸れしめむ
時ぞ待たるる。

されど君が境遇は今は轉ぜりと聞く、親して曰く、信濃川浪湧きかへれ今渡る君がよめりの籠をめぐりて。

○野遊び　　横濱　いまる

今盛りなる菜の花に、
つがひの蝶の舞ふを見て、
捕へんとして追ひ行けば、
芦の枯葉の浮きたるに、
羽を休めつゝ流れ行く、
石を投ぐれば圓描いて、
ゆられて怪し蝶の舟。

仄にきく、この君亦白玉樓中に入ると、名玉くだけ易し、つゝしんで若き十八の君を弔す。

○春の夜半　　岐阜　篠田とみ子

心は弱き我身哉。
讎と呼ばれし六才の土筆萠出る花の頃
一人の母に拗れもして
我愛兒となせし京人形。
今人に嫁く年となりて
泣くは乳母のくせながら
七八年抱かれし頬の熱み覺ゆるのみ——
四季折ふしの花衣、盈み納めん秘箱に
わたりの人の許されば——いざ。
錠持つ我手そとゝむゝ乳母が涙のはてしなきかな。

○落ち人　　越後　佐藤浪子

さら／＼とまた蘆の葉の戰ぐ、
そのゝぎて足早めつ若き落人は、
血臭み風まぼろしの如近り來る、
見返りし其かんばせ可憐や、
青ざめて、「懐しや吾夫よ、」と
男みたつ其刹那あけに染みし、
丈の[illegible]一貫隔てゝよろ／＼と
たどり來る夢か幻か、
またとろとろと陣太鼓に響きよる。

○夕　陽　　長野　宮島千代子

むらさきのとばりの幕の打ちよする、
見よ夕陽の西のそら、
闇と光の別れ路に、
愛と恨みの箙れるを。
くれなゐの彩の色たなびける、
愛の御神の空高く、
射る幾條の矢の穗先、
あはれ夢かと遊れゆく、
歡樂の瀬に浮く塵の子よ、
悲哀の淵に沈む罪の子よ、
かへれしばしまのふところに。

○わが少女　　牛込　塚原けん子

み園生の櫻は散りぬ、春はゆく
散る花の陰にひそみて。
あゝわれは、世の快樂に染まりつゝ、
人の世のうきをもしらず、
たらちねのみ膝のもとに、
やすらけく——さふらひぬれど、
思ひ見れば、一年の逍遥る嗚、
あこがれの夢をかされて、
いつしかは、胸の楮に咲く花の
散る日もあらむ、春ゆきて
しかすれば、あゝわれは、
戀のいけにへ、いな人の
妻ともならむ、その時は、
海より送る潮もつ風に、

いた洗はれむ。かく思ふ
心の喘ぎ、頭腦のい
たみ、
黒髪の亂るゝ心地、
ひくゝなげきぬ。

○赤蜻蛉

三重　山崎初子

眞夏の朝まだき
忌の花蓮見んと
空虚の胸抱く我
野の路の逍遙に
小川の岸邊眞菰の葉
陰に
一つ見いでぬ赤き蜻
蛉。
戀てふ美し影の宿り
居て
湧き煮る熱き色
面にあらはれて身を
やくか――赤き蜻
蛉!?
さなれば我れは羨む
汝れの身な
ありし影寛の露にか
き消されし
血しほ枯れがての寂
しらの胸に――

○夜の海

和泉　金田香雲子

姿見へれど磯邊にて
「私や磯邊の姿舟」と
唄せり。



「だいて寢もせず眠も見れず
悲しき曲に歌ひ行く
女の聲ぞ聞へけ
る。
一人小舟に乘せら
れて
陸地や島の影見え
ぬ
かの眞暗なる沖合
に
流ろる如き寂寥
よ

夕暮　室園　大根なほ子

○墓場の燈火

東京　江森　美子

灯見ゆ、谷中の墓
に。
面白き秋の夕も、
晝うすき春の晨
も、
葉漏りの色のあか
〳〵と、
灯は森の目と見ゆ
れども、
遙かにてらす山の
はの、
月は暗きに落ち行
くを、
墓に捧ぐる灯火は
あはれ常夜の森な

○み星を想ひて

日本橋　宮本きみ子

靜かに更くる春の夜や
み空仰ぎて、
情け深き我親友の
またゝき語ふみ姿を戀ひけるに
まよはし世の深くして
我見ぬ里に行きにけり。
我は獨り子三年を
ひたぶる戀ひぬ母が許
「その魂は天上にこそ」といへる人言のなつかし
く、
探しぬ、一夜わが星を
「瓔珞に、我胸を飾らば如かに諸人の哭やまん」
と云ひしは昔、
今寂らしの我身には只嘆はしよ君が許。

○憔悴

筑波　山本はる子

君ないだけるわが胸は
くらきを出てかぎろひの
光漲る山のすそ
若草の上にさまよひ出てぬ、
雪解のあとと思はるる
路は泥の深くして
紅緒の下駄のゆきなづむ
卯月の末となりにけり
草にかぎれる野の末に
小舘かくると見ゆる頃
かれ葦の如くつかれて
うつまりすくむ涙かな、
霜にチャームされてしばらくは
夢に生きたし、命ありて
今日とはなりぬあさぼらけ
青葉の山の路をこそ行け。

○胸の火

長野　東條周子

あゝ吾の戀のほのほは燃え出てぬ
胸の扉を燒き破る……あゝうしや
反響す脉の音は恐ろしく
警報ときく恐しや
悶の嵐は吹き荒さび
赤き火の子は西に東に散亂す
あゝ胸の野に散ひの跡はあ
らざるか
いともくるしき　胸の火よ

○暮色

靜岡　富永朗子女

ぱつとさした夕陽のひかりに
飛んで行く鵜の羽が
黃金とかゞやく、
黃金の鵜は七羽して
枯れた荒野も見かへらず
たゞ〳〵西へと。
西はかゞやく夕日の御空
山と見ゆる灰色雲のかたまりに
うつくしの影あり。
あや雲の中にまします
天津日の神、　尊の神
さゝやくや。
野末をすさぶ風に
たわ〳〵と聲かなてつゝ
くれの日のひときを傳ふ。

○悔

伊豆　井上いち子

あゝわが心悔しかな。
得て寂しらを好まれど
暗き悲しき煩悶に
わが十六の彩の花
咲かしもえせて默忍すなり。
熱き情も燃えざれば
はやる血潮も湧かずして淋は愈々奥を辿らむ。

○春の曙

北海道　八萩津根子

箱の障子に彩りて
美し影は絵嶋の、
嬌顏艷なる麗人や。
紫淡き曙を、
優しき頰に春の香の、
露に活けたる金瓶の、
ひらく扇にはら〳〵と、
色こそ映ゆれ春の曙。
櫻と匂ふ曉の月、
瑠璃の枕に夢のせて、
まだ消え殘る雪洞の、
紅の寢衾に笑み抱きて
きらゝとうつる響かな
紅梅一枝香はゆらぎ、
綴を斷きし花文字の

○夕

石見　君子

夕月は、ほのぼのさしぬ、
大寺の、大き公孫樹の、
木の間より、裏町通り
河岸の灯は、白くかゞやき、
ひたひたと、築地にせまる、
濁り水、なまめく聲と
三味の音を、乘せて眠りぬ。
曲り角、餅屋が探の、
はたはたと、暖簾そよがし、
色硝子、菓子賣る店を
直角に、風は小路へ、
吹き行きぬ。疲れじものと、
夕闇は、太き息吐き、
囁ぎつゝ、閑ひ行けり。
大寺の、大公孫樹の、
木の間より、ほのぼのさしぬ、
白光を帶べる夕月。



○私の血（天賞）

釧路　黄瀬

後ろを見れば山又山、時節〳〵の花も紅葉も、何れ劣らず美しく、一目見ると身も靈も、活々とする樣だけれど、私はもう見倦てしまつた。野をチョロ〳〵と流れる細い小川も、半年は何處にか過して、暖い時にのみ現れて來る。木に止つた小鳥も、私の顏を一寸見て冷かに外方向てしまう、さては前に廣々とある海も船のゆきゝも、皆私が此世に生れた時始めて見たものとは何の變りもない。時は刻々と進んで行く中に、私の見るものは變らぬ故、目はどんよりと光りがない、古くなつた草ぶきの家に居るのがいやになつた。毎日々々朝となり夕となり、起きて、覺めて同じ事ばかり、居間の青疊も、私の膝でもまれて茶色になつた、唐紙に書いてある唐人の書も、幼き時は是れ何あれは何と祖母樣や母樣に聞いてしきりに喜んだものだが、今はそれさへ見倦た、見る事する事凡てが三百六十五日、十九年と云ふ永い年月を同じ事のみ繰り返し〳〵して來た、身體は機械に働く、心は何處にあるか、血は何處を回つて居るか分らぬ。世間に有り勝な事ても、一寸こみいつた問題になると、何時までも〳〵苦しんで判斷が出來ない、血は常に靜かに〳〵回つて一度だつて若い血をあらはした事がない。

あゝ變つた生活がして見たい、此の何處かにかくれて居る青春の血を呼び起して働いて見たい、私の血は是れきり永久に燃えず躍らず涸れてしまふのではなからうか、あゝ變つた生活がして見たい。

あゝ尊いかな人間の血、此血あつてこそ人生に價値あり、意義あり、活動あり、山又山を後ろに住む一少女の叫びにも此血の聲がある、若き人、此文を讀んで心躍らざる時は、共に人生を語るに足らず（評）

○規定　抒情、叙事、叙景等凡て他欄になき文章一切を含む字體は明瞭に認め必ず句讀を切るべし一人一章に限り半紙又は罫紙に認むること匿名を要する者は本名を別記せよ二十四字詰三十行限甲種の賞を送呈す

○今の想ひ（地賞）

名古屋　八重子

花壺に挿してあつたシネラリアの花片を、畫筆で色々に染めちやつた。聖書を讀んで見たが一頁めくると、干枯らびた押花が在つたので、厭になつて伏せてしまつた。

純潔を誇つたのは昨日、今は種々の想ひに亂れてどうすればよいのか。一番暗い隅つこの壁に凭つかゝつて端座した。キチンと膝の上に手を置いて目をつぶつた。山蔭の淵なんだもの。壁の前に恁う端坐つてゐるのは、山の蔭に淵がうつ居してゐるやうな。込み茂つた木の間からそつと覗いて視ると、薄く光る面、穏やかな色、何事もないやうだけど、深い底には強い鋭い或者が絶えず潜んで居る。意の力で抑へては居るけれど情の波は揺れて――揺れて――。隠しちや居られないわ、此の眉根の漣は。

通る通る、彩雲が。真紅に映えた色は心の一面に廣がつて、美しい。活々しい。それは何故恁う氣が晴れやかになるのか解らないけど、嬉しかつた。

突然きつい波紋のあとは灰色の面だつた。空逝く雲が暗いからか、夕靄がこめたのか。

厭、闇の國みたいな山蔭の淵は厭。

縁側に出た、葉がくれに小さな花が、綺に咲いて居るのがわづかに視える。いたましいこと、日の光にもあたらないで。

柱に肩もたせてスル〳〵と腰を折つて膝まづいた。其瞬間此態度が始めてゞないやうな氣がした。何時だつたか。

何時だらうと頻りに考へた。

灯の色に花の匂ひに、美しい彼の宵、教會の壇の前に花嫁として立つた葉さんの眉は輝いて居たつけ。

畫に天才ある君さんは、畫の話でも持ち出すと、目を圓くして嬉しさうだ。畫は私も大好き。女で名高くなる人もあるし……。

容貌が美くて金満家に貰はれたお向ふの娘さんは、何時も流行づくめで、道で會ふ女が、不思議にも知らん顔して行き過ぎると思うと、後姿をジロと看る目は大抵羨望の色である。

女といふ者は何故恁う智の力が弱いのだらう。

弱いと云へば私も女。若い女。花なら盛りだらうけど花に例へたら私はそれ――其處の葉隠れの花。

母様の絶間なく注いて下さる愛に咲いた花だもの、ただ深く薫りたいのが私の願ひ。

暗壁の前にうづくまつてゐるのを、山の淵の蔭だと想つたと云ふやうな冥想的な、深い考へが、此作者の長所です（評）

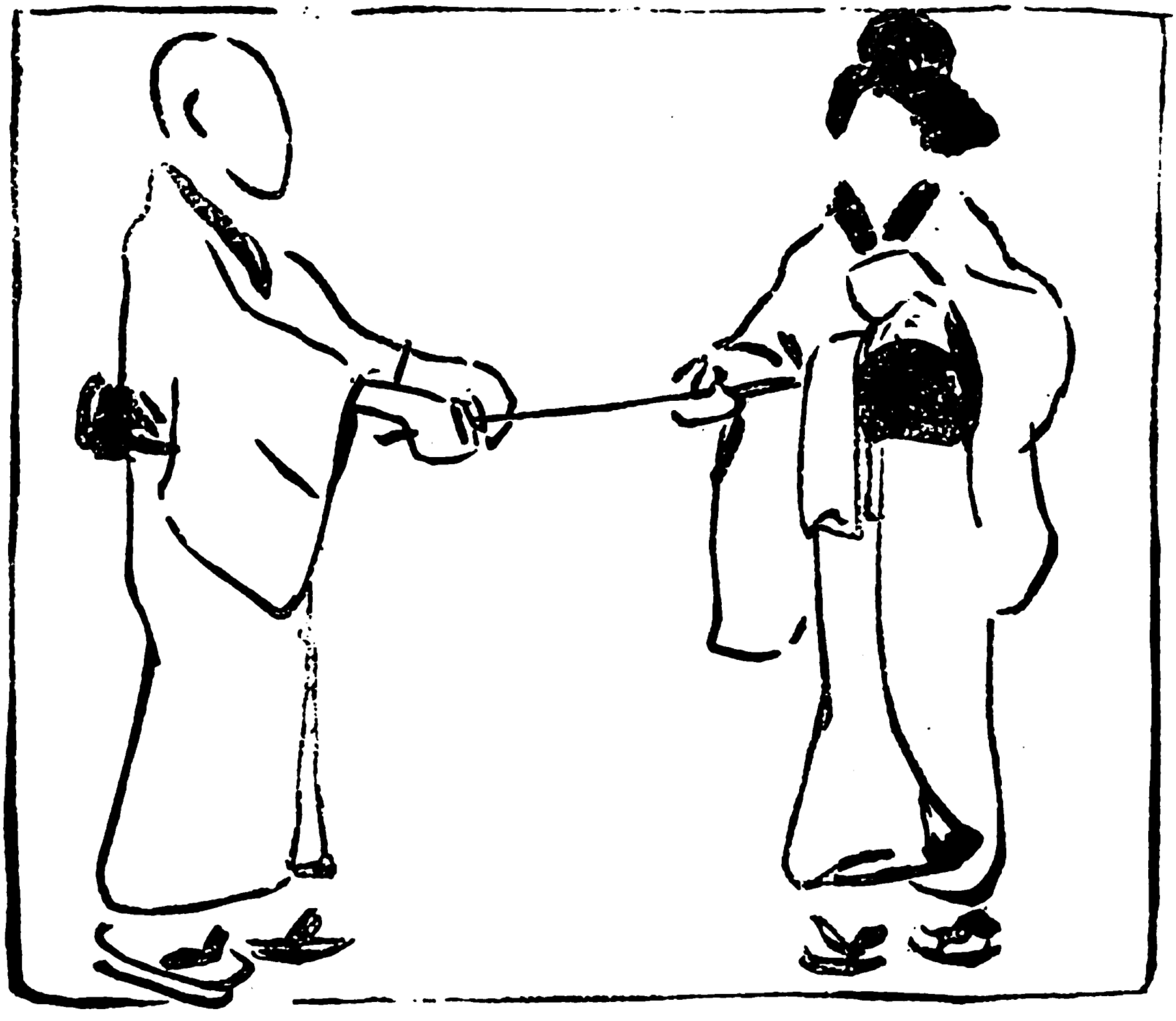
○あやしの火（入賞）

信濃　太田喜志子

眞暗な闇を透かして彼方のあやし火を瞳こらして見つめてゐらッしやる母樣、少し開けた雨戸に倚りて――。何とか仰有るだらう今に――。

どこらてせう。とうとう堪へられずに私は口走つた。

「エー？」一向に氣が無い。「何の火てせうね、今ごろ」そうさ、ちッとも分明らないけれど何でも新田塘の見當だよ、そして焚火らしいよ目のせいぢやない、ぢッとして居て大きくなつたり小さくなつたりするだもの。



スケッチ　牛込　笹野貞子

焚火！この深夜、しかもつゝみの土手、思はずぞッとした、記憶から起る連想、――そうぢやないか、何だか知らないけれど、すごいすごい感がぱッと擴がつてくる、幼さい時分あつたと、おゝそれそれ腦に覺えてゐる――矢張つゝみの土手、いくつかの提灯がちらちらして、妾は脊が立たんので姊樣に抱き上げてもらつてよう／＼の事塀越に見るとの出來た、赤い光――、お光姊さん――、姊さんの仲好の色の白い人だつた彼のつゝみにとび込んで死んだ、只一人で。それはどこであつたか

何でも暗い濕つぽい處だつたと思ふが、お光姉さんはしみ〳〵と姉さんに何か話して居たことがあつた、「どうしたつて嫌だ、あんな家にゐる位なら死んだ方がいゝと思ふ。」この言葉だけは「死んだ」と云ふことと共に覺えてゐる。
それからどの位經つてだかそれも知らない。
何しろ一本だけ繰り開けた雨戸に姉さんの手に抱かれ戸にすがつて見て居たが外の夜の氣が冷たくそして何とも云へぬ香があつた、姉さんは默つてたゞ矢鱈強く抱きしめるばかり。母さんの顔兄さんの頭、お松のムッとした髮の香ひ、戸がギシ〳〵と鳴つた。
「いやだよねーとう〳〵」と云つて何も云はなかつた姉さん、妾は膝がぶる〳〵ふるへて齒ががち〳〵云つて火事を見る時と同じ具合だつた。
あゝいやだ〳〵今時分、何の火だか知らないけれどまアいづれ燒つたことがあるにきまつてる、おゝ寒——と云つて母さんは戸を締められた。
燒死人てもあつたらう、と兄さんが云つた、なんだか其の時を二度くり返すような氣がした。
弟も見にくる、兄さんも見にゐらした、妾はどうしても見たくはない。
兄さんも母さんもあのころの事は忘れて居るだらう、そして燒死人があつたらうなんて事も、そんなに深くは氣に止めてゐらッしやらないだらう。
私は何となく若い人の蒼白い顔が仄かに見えて來てたまらなくなつた、翌朝になつたら誰れか乾度燒死人のあつたことを話してくれるだらうと思つた。
何だか朝がまちどうしいやうな氣もして….。
とう〳〵火は見得ずに床に入つた。（三月八日夜）

いつもの感情的のつきつめた一個の心持ちを書いたものでなく、少し描寫的態度に重きを置いた書きぶり、他日の大成を期さうとするには何うしても斯ふ云ふ方面に向って來ればなりません（評）

【秀逸】

○女心（小品三篇）

大阪　今西春江

○

火の消えた冷めたい火鉢を抱えて、靜平としてゐると表町のどよめきが、幽かに〳〵聞こゑてくる。遠いやうに近いやうに——。眼をつぶつてうつら〳〵と其れを聞いてゐると、私も其どよめきの中へ這入らなければならないやうな氣がする。幽かな〳〵其響は多勢の人が何處かへ行く足音て、此儘ゐると私は取り殘されて、一人ぼつちになるやうな氣がする——。私はフラ〳〵と立ち上つてかどへ出た。そうして歩き出した。足は自づと表町の方へ向ひてゐる。

『ちよいと貴女!!・何處へいらつしやるの？……・』と、もし途中で誰れかに聞かれたら何としやう――何と答へやう――。自分でも何處へ行くのか和解らないんだもの――。

私はたゞ行く――。表町の方へ――。幽かなるどよめきをひた慕うて――。

〇

春の灯を中に、向ふ側にはお母様が、此方側には私が座つて、せつせと縫ひ物の針を運ぶ。お母様は花見衣を、私は昨年嫁入られた秀子様が、近い内に『母』とならるゝと聞いたので、其時の御祝にもと、赤子の初着を縫ふてゐるのである。

私は不圖顔を上げた。ランプの灯に照らされたお母様の頬は燃ゆるやうに紅い。其れを見た刹那、私の頭の中へ電氣のやうに或物がひらめいた。靜平と眼をつぶると、まざ／＼と浮んでくる――。私を孕んではにかみ心の、若かつた頃の御母様のみ姿が――。

『これ、どうおしだえ？』優しく云はれて、私はハッと眼を開いた。

『ほゝ。ゐ眠つたり何かして……ほゝほゝほゝほゝ』

其御聲の若々しさ!!――。

『お母様!!。お母さま!!!………』

私は續けさまに叫んだ。

〇

月は仄のかに照つてゐる。戀ひしい人のみ膝に額を伏せて、心行くばかり泣いて見たいやうな宵である。

這麼夜に野をさまよつたら、小草と小草との精が、さゝやき合つてゐるのを聞くであらう――。

正しく散文詩の領に入るべきもの、此の子、流行兒たらんことを事一に目がけて居るのでないなら、大阪の寄稿家中では堀り出しものでせう、今のところでは何うなるか分らぬが、先づ本人の心懸は何うです（評）

〇僞りの笑

羽後　菊池りう子

雪どけの泥濘の多い町を、私はショールで襟を埋めて一歩々々脚下に氣を配り乍ら歩いた。三月の初め、六日月美しく、數へきれぬ星さへ瞬いて居る。萬象は宵く向ふの鎮守の森はぼうつと霞んで、人を醉はせる樣などことなく艶めいた夜である。「あゝ去年のある夜そつくりだ!」私の心は今最も放縱な自由な時である、泣かうと笑ふと勝手だ。囚はれて居ない。私の周圍には今私を繋ぐ何物もないのだ。想のゆく儘思つて見樣――。去年の春、松の大木に身を靠らして月に泣き、戀を戀してた時分――。何といふ美しく樂しく淡かつたらう。著しき變化! こう叫ばずには居られない。實際去年の今頃からの私の變化、是には何人も驚き呆れ

る。現在の自分は？かつては亂るゝにまかせし黑髮を今日此頃は每朝梳つて、さゝざりし紅をさし、美しき簪さへ我髮には飾られて居る。而して終日笑ひ興じて弱ひて過去も未來も思はず瞬間々々の快樂をとつてる――。人は美しくなつたとか晴やかになつたとか喜んでくれる。今の私は凡ての人に對して柔順に、且快活である。日每に浮べる微笑、人は美しと稱ふる。我僞りを――。此日頃の我擧動は一として眞なる物はないのに人は喜び迎へる。同じき僞りを犯し乍ら或人は囚はれて獄に繫がる‥‥僞りの人？罪惡を正直に現した人、私は可憐にいとしい手をとつて慰めてやりたい。慄然として立止つた私は電燈羞明き某家の前に來て居た。髮の解れをかいあげてつと嬌態やかに入つた。私の頰には又僞りの微笑が浮ぶのである――。

分つたやうで分らぬやうな、感情がたかぶるかと思へば冷靜になるあなたの現在は猶ほ動搖しつゝあり、深く見よ、深く讀め、而して深かれ(評)

○蓮華草

大阪　的場二葉

澄み切つた藍色の空は、それと同じ色の山に連つて、空には澤山の雲雀と、二つ三つのたこが上つて居る。私は石垣の上に彳んで、うつとりと街道を見つめた。西の方からゴットン〳〵と、荷車をひいた若い男が、草鞋の足を力一ぱいふみしめ〳〵、ホッホッと息吐いて來ると、白い砂埃が一面に立つ。ふいと立止つて、顏を上げた彼男は、直私を見つけて、何故かニッコリとした。妙にそこ光りのある細い目は、糸の樣になる。冠つた手拭を一寸なほして、又ゴットン〳〵と曳いて行つた。じつと其後を見送ると、ぼうと立つ埃が、後から後から車を追つて行く。靑い道端の草の上に、白い埃が一ぱいかゝつて居る。其間に、ふと赤い花の樣なものが見えるので、彼方から街道へ下りて行つて、何の邊だつたか知らと石垣の上を見上て、進んで行くと、ある愛らしい蓮華草が一つ。そと摘んで急いて上に走り上つて、さてじつと花を見た。刹那ふと胸に閃いたのは、自然に生れて自然に大きくなつて、美しく咲いた此蓮華草は、每日人の働く間は、其愛らしい身躰に、たへず汚れた埃がかゝつて居るのだ。それて世間が夜の幕に閉されて、月姬の守ります頃となると、慈もあつい露の爲めに、始めて淸い元の身にかへるが、それもしばらく、キラ〳〵とした華かな朝日が、露しつとりと置いた上に、心地よう光を投げかけると、段々と街道は活動して來て、身には又々人に汚れた、物にけがれた砂埃にくるまれるのだ。同じ花に生れて來ても、何たる哀れな身の上か。我手に持つ花は、何時

しか胸にさゝれて居た。ガタ〳〵ゴト〳〵と、向ふから又車が來た。私の眼は直ぐ道端の草の上にそゝがれた。が、其所には、蓮華草らしい花の影もなかつた。

新しい人の考へてす、文章も若い(評)

○交換手の苦痛

交換手の一人

噫々私は電話交換手てす、凡そ此の世の中に交換手程可憐な可愛想な者は少ないてせう、打ち見に骨は左程折れないけれど、氣骨の折れる事一通りではありません、馬鹿者の云ふ事と思へば左程腹も立ちませんが、袴なんかはいて袴が泣くぞと往き通ひには罵られ、臺に掛かれば加入者自身は十分も十五分も私等に呼ばしておいて少し私等の出様が遲いと、やれゐねむりしてゐるのだらう、何の爲めの交換手だ、しつかりしないか馬鹿めなんて、其れは〳〵惡口雜言、時によるとかつと一時に胸にせき上げて、熱い熱い涙の頬を傳ふ時がまゝあります。てすが、いくら私等でもそう〳〵だまつてばかりは居られません、堪忍袋の緒が切れて隨分反抗する時もあります、私等の惡い處もあるてせうが、加入者がたゞ長い間呼んだけど出ないと小言を多く云ふのてすがあれは無理です、機械が惡るい時があるのです、又加入者が多く呼んで來た時には何うしても遲れます、私等は神でも佛でもありません。同じ人間ですもの一度に三ッも四ッも出られはしません。其れに知らないとは云へ隨分無理云ふ人が多いのですもの涙も出ますわ、其れてもハイハイと頭こそ下げないけれど、濟みません何番てすかと下火に出なければ取締さんの受けがわるいし、加入者には犬猫あつかいにされ、これて



彈琴　　名古屋　袖野

も遞信省のお役人樣、袴を付けて通ふ姿は女學生より餘程氣が利いてゐる筈。スタイルばかりではない中々秀才もゐるわ、そう捨てた者でもないのになぜこう人は私等を卑んで、一筋に墮落してゐる樣に云ふのでせう、私等より事務員や女學生の方がこう云つたら品行方正な方は怒るかも知れないけれど、まあ多いと思ふわ、噫々世の多くの少女方、一生宇達の上らない私等の樣な者にはゆめ〳〵なるものではありません、願ふは遞信省のお父さん、娘を憐んで元のむすこさんにしてはどうです、皆樣なんて交換手は薄命なものでせう、凡そ交換手と云ふ名のもとに身をおく者は、東西南北務める里は異なつても皆同感でせう?。

全く、むきになつて憤慨しましたが、然う一圖に激昂せずに服務なさい、何れ仕事には苦痛の伴ふべきものです、併し此れ丈け言て了へば大分氣が晴れたでせう(評)

○左樣なら

麴町　秋萩女

佐山先生に御年始にいつて歸りに大木さんにお寄りした、丁度淸子さんは御留守で浩さんが下の妹の千鶴ちやんと遊んでらつしやる、は入れはいれつてとう〳〵すゝめられてお座敷に上る、寫眞や、絵葉書の新らしいのを澤山出して下さる、お母樣が出ていらしつた、きまりのわるい事つたらない、だつて浩さんが私の手紙をすつかり御目にかけておしまひなすつたのだもの、おまけに淸子さんを御訪ねしてきたのに御留守なんてすもの、私その時眞赤になつてしまつたわ、そしたらおたすけ、淸子さんが歸つていらつしやつたの、「あら千子さん」つてびつくりした樣な顔して入口にたつていらつしやると浩さんが「何だ何だそんなにお千さんの島田に見とれて許り居ないでもいゝぢやないか」だつて、私きまりが惡くて仕樣が無かつたら、淸子さんが「兄樣は御自分が見とれてらつしやるもんだからあんな事おいひ遊ばすのよ」つておつしやるからなほ何だか變だつた。

隨分ながく遊んだからもうお暇します、つて申上げると千鶴ちやんが「よう、もつといらつしやいよ、泊つてらつしやいよ」つて止めてきかないの、「今日はね、御うちに用事がありますからまたこんど御泊りに上つてよ」つていつてもきかないから「こんどは一年も二年も御泊りするから今日は歸して頂戴」と云つて居ると丁度御母樣が御通りになつて「オヤ〳〵こんなきたない家にお泊り遊ばしては大變でございますね」と笑つて御通りすぎになる、ほんとにても遊ばしたのかしら、となほ〳〵早く歸りたくなつてふりもぎる樣にしてお暇すると浩さんと淸子さんが電車まで送つてきて下さつた「ぢやあ左樣なら」「どうも有り難うございました御母樣によろしく」「左樣なら、失敬、といひながら浩さんは電車のチリン〳〵と動く拍子に車掌臺にの

りこんでおしまひなすつた「あら兄様！」うらめしさうな顔して清子さんがたつてあつけにとられてらつしやる、二つ違ひても兄様兄様つてそれやあ、たのみにしきつてらつしやるのに、此日暮れて置いてきぼりはほんとに酷いわ門まで浩さんに送つて頂いてうちに入るとすぐ大木さんに電話かけた「清子さん御無事におかへりになつてと」と心配だから伺つたら「あなたとひきかへて、こわい思してやうやくまあ無事に歸つてよ」とそれからさんく油をとられた、だけどほんとに今日は面白い日だつた歸つてもひとりにこくして君ちやんになあにくつてきかれて仕樣がないのよ、

これも都會生活の花やかなる一面てす、文字に生彩あるのももつともてせう、若き日の花やぎてすもの（評）

○絹手巾を燒く記　わすれ無草

燃ゆる紅の絹手巾に一封の封書を添えし從兄の許から屆けられた、過日伯母樣の所へ往て忘れて來た自分の品、しかも義兄樣から頂だいした大好な品だもの片時も忘れぬ人に會つたやふ懐しさに、口え寄せると得ならぬローズの濃い香りがしめやかにほのめくのである左の頰え當てたなり、うつとりと其香を心行く迄嗅ゐだ。

机上の從兄からの洋封筒を開けば美しいパンゼーのカード、書かれた文字は何？

これを讀んだ私の胸は見る見る真黑い雲に捲はれて仕舞た。そして心に叫んだ、狂してはいけない、驕いてはいけない、たゞ冷靜なれと。自分の平和な胸を波立たせた厭はしの文字と思ふと何の氣なくカードの端を摘んで火にかざした。

ぱつと燃えつく紅蓮の焔、火舌はさゝやかなカードを呑んでましろの灰として仕舞た、三色の彩美しひパンゼーも束の間に影はなくなつた。

此文、原作は之れ以上複雜てした、併し考ふる處あつて、此れだけにしました、讀者が想像の餘地はいくらもあるてせう（評）

○人知れず　兵庫縣　辻井浪子

人知れずこそ思ひそめしかて、妾には底深く秘めた美しい人があります。まだ小學校の四年てした。十五になつたばかりの妾は、ある親切な人を思ひそめて、ほゝ笑んだり、はにかんだり、人知れず思ひ焦れてゐました。もとは妾の先生てす、お年が二十とか承りました。まだ師範の三年にゐられます。妾の時候見舞が非常にその方の心の血を湧かしたとかいはれて、それはおそろしい長い手紙て、こまごまとのお返事を下さいました。にくからず思つてゐました人からのうれしい玉章、私の机の抽出には一番そこにかくしてあります。

なぜ世間はかう思ふまゝに行かぬのてせう。私が十六になつたからとて早お嫁にと親類から申されるので

す。別段、あの方とも約束もなければ、どうせうとも思つてはゐないのですが、心の奥では妙に人に嫁ぐなどが斥けられて、あの方あの方とのささやきがするのです。誰かの雜誌を借りよみした時でした。女が從來強いられて結婚して來たのは可愛想だ、婚姻は人生の大事、愛を基とせねばならぬとありました。その時は何だかもう、あの方と結婚が出來るやうで、まあ耻かしいですが妾は無上にうれしう存じました。それが親達の御意見ては、自分の婿えらびでもなさるやうに、來られた方にも「いやあれが何といつても、たゞ私だけが考へましたら。」なんて、私は一寸襖越に立聞きしてなさけなく存じました。

妾の心は西洋とかへ向いてゐます。古い女大學はたゞよんでもらつたまでです。もし、機關車が西に向つてゐる列車に東に走れといへばどうでせう。西に流れる私の心はこのごろ堪へがたいくるしみにせまられてゐます。涙にくるるも屢てす。女は弱い者でせうか。

文章は甚だ眞面目です、眞面目なる戀とは思はれますが、戀の前には凡てが盲目です、あなたは果して眼が開いてゐるでせうか(評)

○亡き父に　　備後　百合子

父樣戀しう御座います！母樣懷かしう御座います！何故に——何故に——か弱い姉妹を殘して死なれました！同じ兄弟でありながら兄樣にばかりを春と暮せと仰有つたので御座いますか、花姉樣と百合とは毎日泣き暮してゐます。

他家のお友達は母樣〳〵と仰有るに私は母樣に早く死なれて父樣をまたと無い母樣の樣に思つて慕つてゐたのに父樣、父樣に死なれた後は隨分世の中がつらうなりました、父樣があんなに親切にして上げた嫂樣は父樣情無いので御座いますよ、仰有らねば善い事に先日も花姉樣が餘り私が可哀想なと云つて兄樣は嫂樣の御仕打ちは少しも御分りにならないのだからとせめての兄樣と思つて仰有つたのが原因で勝氣の嫂樣は一つ一つ皆恩に着せて、よくまあ花樣は仰有いましたね、と恐ろしい權幕、氣に入らねば御勝手になさい私は歸ります、と父樣私は恁う爲樣かと思ひました、其後は兄樣も嫂樣も打つて變つて一家に居ながら言葉も懸けて下さいません、嫂樣に憎まれゝば兄樣にも憎まれるのは當然で御座いませうが…………父樣懷かしう御座います。親在ては鬼千匹の小姑かは存じませんが親無しの小姑は面前で笑て働らき、兄樣には嫂樣は善くして下さいますと云つて陰では床の中で泣きます。嫂樣が如何程美しい御召物拵へられても奈麼甘い物を召上らうと更ら〳〵羨やみません、口惜みも致しません、兄樣が嫁入してゐると思へと仰有いました——でも父樣此地でも五本の指と數へられる此財産は誰人が御遣

しになつたのでせう——父樣私は誰人も恨みません。たゞ父樣が懷かしう御座います!!!

昨夜から花姉樣は甚い熱で御座います、父樣が御病中御寢つて被入つた佛間で二人は泣きに泣き泣き暮してゐます。でも父樣が御存命中から居た婆やは本當に親切にしてくれます用事が有れば何でも致しますといつてくれます、大旦那が被入ればと申しては泣いてゐます。隣の間では今兄樣と嫂樣はお燗酒最中睦まじそうに賑やかに騷いて被入います父樣たゞ懷かしう御座います!!! 慈愛の味を知らない母樣戀しう御座います愚痴や泣言を誰人が聞きたがりませう、でも父樣は聞いて下さいませ。



殘りし花　神田　白井祢奈子

生きた人に云ふ如くとは全く斯んな言葉を謂ふのでせう、哀切(評)

○紋織の袷

福井縣　やまさと

小包が來ましたと小使が持つて來たので、受け取るより早く二階へ上がつて、封を切つて見ると、紋織の袷であつた、そして袂のところがかたく縫つてあるので、といて見ると、金が三圓!

妾は思はず涙をはらくとこぼした。

すると見て居らつしやつた絹子さんが「田舍の人は、やつぱり田舍に居るやうな心でゐらつしやるかられ」と私が木綿のだつたのでそれを不足に思つて、泣いたやうに思はれたのか、慰めるやうに云つてくださつた、——人樣にはみな絹物が來たのだ——

何も妾そんな事で泣いたのではありませんよ、妾の家はこんなにして、妾を女學校へ出して置ける身分ぢやないのですが、高等だけでよすのは、あまり辛ふございまして、無理に願んで入れてもらつたのです、それが爲家ではどれだけ儉約してゐらつしやるでせう。其で妾も袷時になりましたけれども、去年のがありますて、あれを仕立なほして着やうと思ひまして、昨日といて洗つたのです。

そうですのに家では、もう袷が欲しいだらうと思つたらしく、いままで澤山ですに、少してもよいやうにと、こうやつて、絞織にしてくださつたのですが、是を織りますのはどんなに手間がいるでしよう、カザリも四丁踏むのです、アヤも取らればならず、梭もこれで三丁つかつてあります、一日に七尺か八尺しか織れませんよ。そしてこのお金にしても、僅か三圓ですけれども、父から毎月送つてもらうだけでは、不自由だらうと思ひまして、母がどれだけ自分の身をつめて、これだけためて送られたのだらうと、思つて見ますとね……有難涙が出るのですよ……

綾子さんも袂をあてゝ泣いてくださつた。

○木の精　　北海道　泉翠子

――嗚、如何云ふ譯と、云ふ事もなく、私は白楊の木の前に、立つて居ります。にぶい春の西日が射して、私の着物や、顏には若芽を出した木の枝が影を寫して居ります、ホーと、力の無い樣な、氣笛が鳴つて後はシーンとして寂しい程になりました。あゝあすこには二番の姉さんが居るのだ、今頃は御飯の支度でもして、居らつしやるだらうか、と考へつくと一番上の姉樣が思出されて來た、お母樣のくせに、其暢氣らしい仕事振りを次の姉さんと、對照して見たら人は何と云ふだらう。さて私は……私は少しも、似て居ないとか、其答よ川流れになつて石狩川へ流れ着いたのをお祖母樣が拾て來て下すつたんだてお嫁娑して嚴だり、けんかして泣たりすると皆にさう云はれたけ、其して少し許り……其は自分て少しと思つて……惡さすると「川流れ子」と云はれる。其を賊と思つてお祖母樣に泣着た事は、數へられない程あつた。或時惡戯につかれて座敷の眞ン中に何時とも知れず、眠つて仕舞つた。フト目を覺すと家中一人も人は居ず、自分にはソーッと白毛布が知らぬ間に、懸けてあつてシーンと、して居る、お祖母樣！お母樣！と呼んでも答が無い、此時フト思出した「川流子」……如何云ふ譯だらうかと疑て見たが分らなくてシク／＼泣た事もあつた、其が何時の間に解けたとはなしに忘られたのが無性にうれしくつてほゝ笑まずには居られなかつた。

嬉しまぎれに、葉も何も無い芽の小さい白楊樹の丈高くま白な頂を見上げました、まるで死んだ樣な木だ葉さへ有りや松よりも杉よりも上品なんだけど……恰ど亡くなつた父樣の樣な氣がする、如何してと仰るか知らないけど、其譯は私にだて、分りやしません唯さう思ふのです……唯。樂の皮はガンピて云てよく燃えると思ひ出して一寸爪を入れてピリ／＼へぎ始めました。五六年前から取つて來て、燃した事があつた、「スルメ」の樣に丸くなつてジリ／＼と燃えた其時私は髮をひどく亂して居たので、父が「序にお前の頭もたきつけにしては」と仰た事を思出してそゝぐられる樣な氣がして心付くと、大變！あゝ私は如何しよう。父と思つた其白楊の皮を、大變にむいてしまつたのでした、其瞬間木の精か父の面か分らぬ物が私の眼にチラと見えた。さも／＼怒た樣に。

○朝の仕事　　横濱　臼井冷花

屛風が浦の工場のボウに、今日は私は彈かれた樣に起された。ピカ／＼光るニッケルの金盥に、山から呼てある清水を溢れる程に汲て、勢よく全身を摩擦する、それがすむと眞紅な紐を、紫天鵞絨の羽織の上へ十文字竈の前へうづくまる。お釜の水は昨夜入れといた、枯れた竹を組て枯草を一攫み入れて、マッチをチュウとすると、火は草に移る、もう一攫の枯草て、火の口を塞ぐと見る／＼、中は眞紅な焔の世界、松毬を一つポーンと投りこんでおいて干しといた寢床を疊むで仕舞ふ。丁度お湯が煮立つた時分、お鐵に一杯取てお米をザアーッとあける、シャモジを立てゝ六分位の水加減にして、ある丈の火を七厘に取て、お味噌汁を掛けて

置く。おゝきう／＼思ひ出して、先刻の琵琶を挾み出すと、眞紅な色、それで居て形はちつとも變らない奇麗とも何とも、緑葉の岡に見た時の兩窓の交はどつかへ行て……大根を線に切て、グラ／＼煮立てるお味噌汁の中へ入れる、御飯が出來る、火を引く、其火を奥の火鉢に移して、鐵瓶を掛けて置く。つま先きのしびれる足に庭下駄をつゝかけて、裏へ出る、葉の無い紅葉と、花のない桃の枝から枝へ、物干竿の青竹が渡てる下で、學校で習た靜養法を百回やる、脚は京菜やほうれん草の、葉毎に霜の白い畑である、其處を隔てゝ半農半漁の村の男女が學校へ行く通ひ道時には紫の袖が飜つて、白い腕の上下するのが見えるのだらう、立ち止て呼いて居る。其れがすむと此時はもうおともしの上てるみ佛の前に、合掌する、出來る丈け頭を冷靜にして居ると、御靈のどなた共分らぬ御聲が私の胸へ呼かれる、希望滿足行くべき道！供華筒に白梅薫る大神宮に無言の御祈を捧げるゝ、もう身も魂も全然清い冷い水て洗はれた樣にいゝ氣持になる。其處へ食べるんですもの朝の御飯の甘味い事つたら八疊の火鉢を圍んて車座になつて――此時八時。

○七卿落

下谷　細谷鏡子

「世は刈菰と亂れつゝ――西さす日もいと暗く」おゝ「七卿落」、と私は夢中て床の上に起返り耳をすました。

譯の……小川にきり立ちて……隣の壁となりにけり……あら痛しや……あゝ文様と再び私は叫んて、夜着の衿にしかと顔をあてた、胸の動機は高まつてからだはわな／＼と顫える、熱い涙は留度なく頬を流れて胸はもう掻きむしられる様う、奈何して私は此う泪が出るのだらうおゝもう／＼聞くまい決して／＼琵琶歌は一生聞くまい好きだから聞けば此様に泪が出るのだ物……あゝ琵琶歌は私の胸を八つ裂にする惡魔だ!!!あゝ嫌やだ……堪え切れないて私は泣けるだけ泣て見た、「妙法院の鐘の音もさえて今宵は哀れなり……」風の加減てかハタと聲が切れるやがて「都の月おし愛て……」今終りにならうとする時あゝも少し聞きない、なぜ私は中頃泣いて居て聞かなかつたらう、今更口惜しくてならないけれど聲はもうやんで後はしと／＼とふる五月雨の音と、折々けたゝましくなく雨蛙の聲ばかり、あたりは全に寂として終た、あゝ文様の「是より海山あさぢ原……露蹈わけてあしの散る」あゝ此のお聲は未だに耳にしみ込て居る、けれど／＼もう眞のお聲は此世て伺ふ事は出來ないのだ、あゝ今頃は彼の暗の世て何をして被居るだらうか、私が此樣に泣いてる事をごぞんじないかしら。

○桃割

日本橋　吉田さく

昨日は、髮をぐる／＼櫛卷にして、用する時にきる羽織を一日きて居ましたので父にしかられましたから、今日は早速髮結いに出かけました「どうぞ此方へ」と云はれて、靜に鏡の前に座はりました、まだ一度しか結はないのに、ふけが澤山ありまして大へんきたなうございます、春の日は、のどかに、障子一面暖かにあかるく、ふけをとつて、いたゞく時の心地よさ、三越呉服店の美しい廣告の元祿美人の繪姿を、あかずながめて居りましたら、くせなほしになりましたので、頭がゆれて見へなくなつてしまいました、ほんに、思ひ出せば、おかしなもの、學校に居た頃は束髮より結はないといばつて、居りましたが、裁縫に行くようになりまして、叔母樣に、初めて小さい前髮とつて結ていたゞいてからは、いつも此のあたま、そう／＼小さい時、母に唐人髷のつけ髮していたゞいて、大切にして居りますと、父が「其んなあたまして居ると何處へもつれていつてあげないと云はれた事や、姉とどちらが輪が大きいか、と爭つた事など考へ出して思はずほゝ笑む、「このくらいでよう御座いますかえと、答へて此度は熱心に見つめる、たぼも、前髮もきれい、油をつけたので眞黑につやのでた桃割に、白のたけながをとけ、根かけ／＼も程よく出來ました、「まあ大そふふつくりとよく出來て、私も、このような髮もう一度結ひたいものですれと、一人の方がおつしやる「あとへ年をとればよいてすれと髮結ひさんも笑ふ、此んな晴やかな日に、美しい花を見て日あたりのよいゑんがはに鶯の聲ても聞きながら、いつまでも／＼この髮に結て居たいと思ふ、私の顔は紅く、鏡の面には喜びの色があふ

れて寫つりました。

○雛

本郷　千代子

「母樣けふは日曜だからお雛を飾りませうよ」

「れ母樣早く飾らないと遲れちまふわ」

「芳ちやんのうちなんかもうきのふ飾つてよ」

と三人して攻め立てるので母樣もとう〳〵かなはなくなつてお仕事の手を止めてお立ちなさる、皆もう大喜びで母樣より先に鍵を持つて倉へ飛んで行く、竹も手傳つてやうやく六つの箱を持出した。

母樣が雛段を組合してゐらつしやる間に、箱の目張りを切つて蓋を取ると樟腦の香がプンと鼻を打つ、一つ一つ包んである綿をそつとはぐと、いつも乍ら美はしいお雛樣の顔があらはれる「オヽ怖い」と光子がお雛樣を放り出したので見ると、五條の橋の辨慶が恐ろしい顔をして睨んで居る、少さい箱を開けると母樣のお雛樣がは入つて居た、もう古いので錦の色もさめて暴くなつて居る「まあ汚ないお雛樣ね」と笑ふと「それでも昔は奇麗だつたんですよ」と緋毛氈を掛け乍ら母樣が仰る、突然「ホヽヽヽ」と艶子が笑ひ出したから「どうしたの？と覗くと「だつて姉さん御覧なさいよ、光ちやんが冠を後前にかぶせて」と云ひ乍ら笑ひこける「さあ早く持つて來て頂戴」と母樣にせき立てられる、姿の次ぎが艶子、其の次ぎが光子のと、三對の美くしい内裏樣が金屏風の前へ座る、隨臣、官女、五人囃、其他いろ〳〵なお雛樣が順々に飾られる「母樣のはこつちの方へ飾りませう」と隅の方へ持つて行くと「古くなると何でも粗末にされますれ」と笑つてゐらつしやる、少さい簞笥や長持や、其外可愛らしいお膳もお茶道具もスッカリ並べられた、妹逹はもう氣違ひの樣に喜んでキヤツ〳〵と騷いで居る「そんなに騷ぐとお雛樣が塵になりますよ」と一寸こちらをお向きになつた母樣のお顔も嬉しそうにニコ〳〵としてゐらしつた。

○結婚のしらせ

京都　くちなし

美津ちやんのは神戸から湊川神社の繪はがきて、私こんどウエヂングしましたのよ、そして今ホニーヽムーンて此所へ來てますの。

なんぼ私英語をしらないからつてホニーヽムーンなど云はれちや解るわ、

私もとう〳〵津田家の人となりました。

これは照子樣の。

相變らず呑氣に暮してます、御安心を、

なんて書きながら住所は佐々木方にてはると相變つたのは川端春枝さん苗字の變らぬを幸ひに赤兒さんの出來るまでまつていらつしたのは君塚

最も奇抜なのは文さんの。黑わくの中へ男文子、

御親交を給はりし愚妹小田文子義一昨夜死去仕候、生前の御厚誼あつく御禮申上候、

先は右御報知まて匆々

小田　政雄

わくの外に又違ふ男子の手て、

右の如く小田文子君死去いたされ候へどそれと同時に我が家に谷本文子は生れいて申候、小生の心中悲喜交も至り申候、我が文子をば亡文子君とも見て今後御親交下されたく御願ひ申上候頓首　谷本　二郎

お兄樣と御頁人とぐるになつて文さんのしらないまによこしたのだ悲意交もないもんだ。

さて此度私の番となつた、何と云ふてやつたものだらう。

○雨あがりの野道

兵庫　嘉代子

メリ〳〵と雨垂の音がする屋並をずつと通り越して野に出た。黑塀は雨に晒されて一層黑く白壁に目立つて見える。建ちかけの會社の材木が雨ににじゆんでかざる、妾はぢつと眼を瞑つて雨上りの野道を行く、何考へるともなくうつら〳〵としてゐると頭がだん〳〵重くなつて來た――鉛の樣に――ハイツ〳〵とうしろに聲がするので驚いて目をひらくと荷馬車てあつた。石粉を山の如く積んでギシリ〳〵と音をさせていつてしまつた。時々石粉の主は汗を拭ふて居る。

日はまだ見えない。どんよりと曇つて居る、灰色の雲が低く飛ぶ、と向ふに赤い花がみえる、何の花だかわからないが赤い花、あゝ赤い花、血潮高鳴る青春の胸の――血は泉のやうに湧き出てんとして居る。其刹那赤い花は妾の手にあつた。そつと接吻して頭にかざそうと思つたがそれも出來なくつてぢつと抱きしめた、そして又とぼ〳〵と口づけしながら行く。と一寸すれ合つて若き男女が行く。妾はハツと思つて横にすさつた。あらお末さんぢやないかしらんと思つてぢつと後姿を見ろとやはりお末さんだつた。私は聲をかけようと思つたが何だか氣落ちがしていはれなかつた。あゝ友、三年ぶりに逢つた友、私は何ぜ聲をかけなかつたらう、今更後悔してもつまらないと思つて默した。男の方はなんでも紺のペッチを穿いて黑い布呂敷包みを持つて居られた。兄さんだらうか、それとも……お末さん時々赤い裾よけを見せて後れ勝ちに行くお里歸りだらうか。此んな事を考へながら當もなくとぼ〳〵行くとチヤブンと水溜りの中へ足を浸した。慌てゝ退いて顔を上げるともうお末さん二人の姿は見えなかつた。



お掃除　　張津とよ子

○引越

牛込　緑涯

丁度一年程も、一處に居つた、おたかさんが、今日から家内の三疊を借りて、自炊する事に成つた。朝から御飯を炊くやら、お味噌を摺るやら忙しそうだ妾は急に變つたのが、おかしいのに、おたかさんは初めてなのがうれしいのかいそいそと働て居る。

午後から買ひものに行つた。母が何んでも入用なものは家内にあるから是非入るもの丈けに、と、いつて置いたので、一茶椀大小二ッ、一小皿二枚、一小鍋一ッ、一杉ばし一袋、一たわし一ッ、ちりれんげ一ッ、差當り入用もの計り買つて來た。

夕方妹とお湯から歸つて、裏口の處で、そばやと入れ違つた。這入つて、母に聞くと、おたかさんから、引越の……まアおたかさんは若いわれ？と三人で笑つた。

○彌生集

和歌山　谷田峰子

彌生

眞綿のやうなる、雲も見えて、ほか〳〵と暖き小村。春は色濃き、緋桃、白桃、よべの小雨に、ひとしほの艶そへし、南の小窓、ながめよきまゝ、障子半ばにおしあけたる。紫の布かけし、文机にもたれつ、小女手習ふさまの、いと幼ふて。

ひる下り靜かなればか、歌も妙なる若鶯の、高く囀れる、よき墨の香を、木蔭づたひに、窓近う、漂ひもよるよ。

眉を流るゝ、洗髮、いく尺
さら〳〵と、習う細筆、走りがきのいとも優しう、
今年とめしは何の思ひ?
歌の心の、解けがたうてか。

鶯の聲。
又も、長閑に、春を歌ふ。

堂の畫

庭のさま、彌生の春、さすが偲ばるゝ、葉櫻若きみ堂の畫よ。
青葉の風、涼しう薫れば、行く春の名殘かも、藤の花房、いと長きが、ふら〳〵とそよぎて、藻の花、ほの白う、匂ふ池の面、赤き鯉の背、そが根にふるゝに、丸き波紋の、辨天の小島に、ゆるゝよ
そこ藤棚の下。
ま白き小鳩の、我に近う居て、胸の和毛、そよ風に吹かれつ。
豆を投げて、そを呼べば、くゝと鳴きて、赤き小足に、小さうためらふ様の、いと愛らしうて。
野守の鐘。
ひる近う、青葉をもるゝ。

春の宵

咲きみだるゝ八重櫻、長う垂れし玉簾漏りて庭の光、室に入る端居や。
ゆかしやな、紅粧の京の舞姫、
紅絹の裏あけて、ほゝ笑むによき、春の宵。
絹行燈に、訪ひよる小鹿もなうて、西の窓、繪絹のべつ、痩せたる腕に興やえたる。
あるじ、廿の春を、京ぶりの舞姫と、ながし目に見かはしつ、ほゝ笑めば、簾の外、八重櫻、一しきり。寂びたる繪堂。
紅の花びら散うみだれて。

○城蹟

臺北　稗貫美津子

何と響へませう、此の景色を、身がぞく〳〵する程靜ける淋しさがずつと心の奥へ浸み込むのですよ、斯うして此の城蹟蓬々とした雜草の中に立ちますと――

風のすう〳〵と小草を渡る音ばさり〳〵と木の葉の落ちる音の他、何も聞えるものがございません、天地間只寂として、丁度深い深い山の奥に寢として居る樣です、

鬱蒼と茂つた松杉の間には荒廢を極めた城が隱見して居ります、朽ちかゝつた櫓門は蔦や葛のために半ば見えませず塀端は壞れ迯かに聳えたつて居た、高閣も實に實に悲慘な形身となつて殘つて居ります、城の傍の石碑は誰が靈の眠て居る所でせう、今は幾多の雨や霜にうたれ風に晒されて、苔さへむして居ります、けれど今から幾十年かの昔には此の荒野も美麗な花に充ち、あのくづれ初めた城も碧瓦朱欄金光燦然とした宮殿であつたでせう、今は人跡絶えた此處も常に綺羅やかな數多の女官が胡蝶の舞ふ樣に花のはら〳〵と散る樣に、往きつ來りつした所でせう、此のとろ〳〵した薄ら黑みを帶びた凄いやうな池の水も、其以前は澄みきつた滑らかな水で美しく着飾つた貴人ののつた舟を浮べた所でせう、今は何の物音もしない此の所にも絶えず淸い松吹く風に合して調べ床しい小琴の音がもれたのでしたらう。

家庭日記



○規定　家庭を主として書いた日記文を云ふ實際的の日日の出來ごと又は心得となるべき事若き奥樣の新しい經驗談も宜し二十四字詰三十行限り半紙又は罫紙に認めること乙種の賞を送呈す

○宮殿下お給仕の日（地賞）

信濃　蝶子

十月六日。明七日蠶絲大會に御臨席遊ばさるゝ伏見宮殿下、五時何分御着の筈なれば四時頃、御旅館なる犀北館へ參る。殿下御間なる御次の間へ案内されて行きしに、はや澄子樣、仙子樣はおつくりも美しう行儀正して座り居ますを見る。廣き帶のいと苦しう、待ち率る事一時餘り。停車場へ御着！と傳へられし故、お出迎なす。間もなく御車は玄關へ――。恐れ多き心地して、顏も上げ得ず、御茶御菓子捧ぐる間に燭臺は燈されて、何と無う奥床し。――御間は檜の天井いと高く、高麗縁の青疊敷きつらねたる十二疊、床には薫りも淸き白菊の、枝振り面白く、御掛物はしかと覺へず。日本料理の御膳部は妾等の手によりて、殿下の御前にはこばれぬ、御食事中は種々御優しき御下問ありて、勿體無き樣なる心地しぬ。

外には絶間なく烟火轟きぬ。御間はいと靜かに、奥床しき氣の滿ちて、燭臺の光赤う、お襖の緋の房を照し居ぬ。秋の長き夜を殿下には、御附武官、御家從の方々と御雜談長きに渡らせられぬ。

七日。お目ざめ前にと六時頃御旅館へ參る。御食事濟み遊ばされし頃より、時雨降り初めぬ。九時半頃協進會場なる蠶絲大會場へ向はせらる。小雨のそぼ降るも厭はず、拜顏者は町の兩側に垣の樣なり。妾等はすぐ貴賓館へ參る。

殿下には大會に臨ませられ、協進會を御從覽遊ばされて、貴賓館に於て御中飯を召さる、暫し御休息の後紀念會公園の園遊會に臨ませらる、下々の睦ましげに集ふ樣を御覽ありて、いと御滿足の御樣子なりき。蠶絲大會總裁伏見宮殿下萬歲の聲の中に殿下は御退場遊ばされ、信濃敎育品展覽會へ臨ませらる。妾等は園遊會場

よりすぐに旅館に歸りて殿下の御歸館を待ち設けぬ。御晩餐も昨夕に變らず、いと御機嫌よう召し給ひぬ。明朝二番にて御歸京の筈、雨は宵に入りても小休みなく降りつゞく。

文章、事柄の莊嚴なるに伴ふ（評）

○老婆に仕ふ（入賞）

伯耆　君子

妾は、九十才になる老母と二人り暮して御座います。朝は暗い内に起きて、お掃除終へ御飯の支度をして、お祖母樣のお目覺を待ちます。起きられると便器の掃除やら、何かと身のまわりを片付けて、食事がすむと裁縫にかゝります晝間は縫物に忙しくて、ろくに、お相手も致しませんので、一日つまらなさそうに炬燵へ肱突いて居なさるに、先きの短かいお婆樣を伺うかして慰めてあげたいと思ふ、夕方にお婆樣のお供をして、風呂に行き心よくお湯をすまして、夕景色を、眺めながら、歸ります。そして夕飯には心許りの、御馳走も、君や今夜のお汁は加減が好い、美味よと嬉しげに食べて呉れます。夕食後はコタツて、夜具の暖まる迄色々な世間話を、きかせて上ますと、細い目に私を見詰てほく〱お悦びなさるのが、何より私は嬉しい、やれ〱、ぬくいなと、小供のやうに、臥床へ這入り、往生安樂と眼を閉ぢなさる、お婆樣お寐みなさいよと、云へば「ハイハイ」往生安樂、ほゝゝ、思はず吹き出した、何時の間にやら、微かに鼾の聲。私は此の罪ないお婆樣の笑顔を見るのが、樂しみに復一生懸命に十二時迄針を運びます。斯うして毎日、敢果ない月日を送つて居ますが、時折私と同じ年頃の娘樣方が。美くして、着飾り、親子揃うて、お通りなさる、御姿見れば、何となく、身に泌むやうな、寂しい心地が致します、けれど、決して羨やましいとは思ひませぬ、唯私も年老ゆる迄には、幸福な身になりたいと、働いて居ます。

九十歳の老婆と花の處女との二人暮し、其對照既に平和を意味してゐる、而かも此處女の心掛の美くしさ、如何な山里の奥でも此處女の身の上には幸福の光がきらめくてあらう（評）

【秀逸】

○田打日記

秋田縣　貞子

四月廿七日。生れて始めて田打をしたら、十二の豆を

つかんだ、何んだお前の手は豆腐かと調戯はれても今日許りは口のこたへ樣はない、あゝ兄樣や姉樣の手の樣にがん／＼固まるまでは最う幾日の辛苦を積まなければならないでせう。

同廿八日。今日も田打、晝上りして見ると、文壇が來て居る、母樣の外には最う止にしたと云つて置いたのだから早速懷に入れて、食後納戶に隱れてそつと開いた、先づ第一誌友の面影を見て、それから小說の一つもと少し讀みかけると、貞と呼れた、腹が立つが、仕方がない、三度目にやつと立つて、今眠りからでも醒めたといふ風に目をごし／＼擦りながら出て行くと母樣がクス／＼お笑ひなさる、然し二人には別に怪みも受けなかつたのでほつと一息、午後は父樣の命令で三人別れて競爭したら、兄樣は一等早く出來た次は姉樣で、私はやつぱりおしまいでした、今日は豆は大小合せて九つ。

同廿九日。お母樣のお情で、田打は晝までゝ休む、そのかはりどつさり裁縫してあげる、夕方友達の許に遊びに行つたら、日に燒けたとて大變笑はれた。

此の如くして農家の娘は身も心も健全なり（評）



芝居スケツチ　青森　松尾千代子

○春の一日

本鄕　千代子

三月八日。垣根の梅がもう半分程開いてお隣の庭から鶯の鳴く聲が頻に聞えて來る、何となく春らしい心地がした、夫の出勤後、髮を結つてお湯へ行くとお向ふの京ちやんも母樣と一所に行つて居た「叔母ちやんおぶ汲んで上げませう」といふから「え、どうぞ」と待つて居たが、いつ迄たつても來ないからどうしたのかと思つて見ると、十六七位の下女風の人が赤黑い顏へ白粉をベタ／＼と眉から唇迄もぬりつけて居るのを、空桶を下げた儘突立つて穴の開く程見つめて居る、妾は氣の毒になつて「京ちやん」と

呼ぶと始めて氣がついたと見えて慌てゝお湯を少し計り汲んで來た「人の顔なんか見てるもんぢやありませんよ」といふと「だつて叔母ちやんおかしいんだもの」とまた振返つて見る「ホントニ子供は遠慮なしだから困りますよ」と奥様と二人で大笑ひだつた。

お晝から此間買つた銘仙の袷を縫つて居ると本間様から廻文が來た、喜久子様のお姑のお話やら、近子様の料理の失敗談やら、また小學敎師の吉田様が生徒の無邪氣なお話を遊ばすやらでなか〳〵賑やかだ、殊に面白いのは酒田の山岡様が酒田言葉を遣つて、滑稽な事を云つていらつしやるのには笑はずには居られなかつた、皆様それ〴〵境遇によつて別々の事を云つていらつしやるけれど、只一ッどなたも同じなのは學生時代が戀しいといふ事だ、矢張り妾計りではないと見える何にしても、卒業後もう九三年になるけれどいつ迄たつても友達といふものはいゝものだとしみ〴〵思つた直ぐ筆を取つて書き始めたがそれからそれへと書く事があつて、とう〳〵夕方迄かゝつてしまつた、目方が重いので六錢はつて横濱の美津子様の許へ送る。

けふ夫は宿直なので、いつもの五時になつても待つ人もなく只一人淋しく夕食を濟す、夜はまた縫物をし乍ら豊の手習ひを見てやる、熱心に習ふのでどうやら此頃は字の形になつて來た「お陰様でこんなに書ける様になりました」と喜ぶ顔を見ると妾迄も嬉しい。

好い奥様（評）

○ある日

麹町　萩子

くもり。きいちやんが引出の掃除しかけて、時間が迫つたものだから、あはてゝ學校に行つてしまつたので跡始末は私がしなければならない、序に私のかんざしやリボンの整理をしたり、化粧箱の掃除をしてしまつたら十時、寒い事、今日は朝から、火の側によつた、事なした、新聞をよむ、此頃臺灣の事は伯父様から隨分伺つて興味も出てきたし、阿里山とかの景色や何かも手にどる様に話して下さつたので新聞に阿里山問題などと出て居ると成程と思つてすぐ讀む氣が出る、妙なもの〇〇の叔父様が代議士に御なりなすつてから、今年は議會の議事迄つまらないとも思はずに讀んでしまふ

いつの間にかもうお晝御飯をすましてから一寸裁縫にかゝる、きいちやんの被布の堅衿兩方つけて袖片方つけたらもう二時すぎ「御隱居所にいつてお餅をやいて御一所にたべた、さう〳〵今夜は私が海老の揚物をするつもりにして居たつけ暫く三越タイムスをみてお祖母様といろ〳〵御話して、それから御料理にかゝる、

此前よりは上手に出來たけれども玉子のお汁はからかつた、夜お琴を三つさらへてそれから久し振に「岳陽樓記」を習つてみた、すんだら丁度九時少し前、ねむ〳〵肌襦袢の襟一つかけかへる兄樣はさぞひまて〳〵困つてるだらう、なんていつもお手紙に書いておよこしになるけれどなか〳〵私だつてこれで一日ポカンとしてる暇はありはしないわ。

上流の家庭（評）

○草餅　淺草　竹内とみ子

朝例の通り庭を一廻りすると、池に近い雪見燈籠の陰に名も知らぬ小さな花が咲いて居た。其樣に美しくはなかつたけれども、たつた一輪日陰に花を持つたのが餘りしほらしいので、そつと根元から土と諸共に堀り取つて、日當りの好い花壇の菫の中へ交ぜる。菫は紫、小さな花の色は白。　晝後は四疊半で袷の衿をくける。傍へ武と鈴子が來て遊ぶ。「是なァに。」小抽出しの中からはみ出して居る太白の絲を鈴子が引張る。默つて笑つて見せると、此方を見い〳〵少しづゝ引いて見る、抽出しをすうと明けると、七つのくゝり猿が轉がり出す。鈴子は目を細くして「頂戴。」と一言、もうバタ〳〵と可愛いゝ足音が母樣のお部屋の方へ。「僕は之が好いんだ。」と武は物指しを取つて、腹這ひになつた儘「べたん〳〵」と濡椽を敲く、衿先をきゆつと止めてぷつんと紅の絲を斷ち、さつと廣げた藤色御召の振りの邊りを紅絹裏の匂ひがぱつと散る、と花曇りの空が漸々亂れて、硝子障子を通して雨の絲が白く光つたさや〳〵と衣摺れの音がして、「おや、何時も御勉强で。」と笑ひながら入つて來たのは、つひ此間濱町へ嫁かれた姉樣に附添ふて行つた乳母や、「マア珍らしい事さあお入り。」縫物を片寄せると「いゝえ何卒其の儘に遊ばして……之は乳母やの里からついて遣はしましたので、お慰みにと存じて少々持つて上りました。」一寸蓋を取つて見せた若狹塗りのお重の中には、青いのと白いのと、靑海波の摸樣を其の儘、草の餅が春の色香を見せて居る。奥では「母樣、私姉樣に好いオニマメ（土產）を頂いたのよ。」と云ふ鈴子につゞいて姉樣の花やかな笑ひ聲。武は物指しを捨てゝ起き上つた。

氣取つたやうな、幼いやうな、一寸えたいの分らぬ書きぶり、上手は上手に相違ない（評）

○初めの日　山城　八田文子

二月一日、今日は復業として、米と柴とを賣出すべき初めの日である、一寸ばかり、開業の内祝にご馳走をする、本業は製油である、いつも油を買ひにきて

くれる人にその旨を二三日前からいつて置た、他の人にもしらしておくれと頼むて置た、のて澤山買ひにきてくれる、少しばかり、他の商家とは安くしてある、桝もいゝ、「わし一升八合お呉、」「わし二升九合‥‥など と端桝ばかり買ふ、一寸にはうるさい、けれどこれが商賣てある、柴もそのとほり、わし一束おくれ三束おくれ、などいつて、二束とか三束としか買はない、それに日の暮が一番多い、それは村の若い者が、電鐵工事にいつて居るから、日暮歸るのを待つて、一日の賃錢を持つて買ひにくるのてある、一人や二人は、買ひにてない、三人とか四人とか連れ達つてくる、子供もついてくるから暮の町は喧ましい。

米五石ばかり機械て搗かして置たから、五日も六日もあるだらう、一斗や二斗は見てゐる間に賣れる、柴の十東十五東位は直ぐ賣れる、こんな勢て毎月賣れたならよいがさうはゆくまいと思ふ、他の商家は反抗を起すことは見えてゐる、一升十五錢といふ、安價てあるから、きつと起すてあらう、松柴一束五錢五厘と云ふから、これも同業者は起すだらう、と兄樣が父樣に話す、そんな勢の弱いこととては、商賣にならないといふ、成程と私も思つた、夜計算したら、八圓九十三錢五厘あつた。

父樣は桝がお上手だから、米をおはかりになる、兄樣は柴の賣役である、こうして初の一日は終つた。

商賣なる田舍の賣出し、儲らない處であらう（評）

○あられを煎る　大阪　鐵　篤

お母樣は火鉢の前て切りに叩頭して危い程からだを動搖させて好い心地て白河夜舟を漕いでなさる。私は机に向て女子文壇を讀んてゐる。お倉から暫くは寂として、ほんとに靜かだ。ガラッと格子戸をあけて末ちやんが學校から歸て來た。「只今、お母さん何ぞ」、お包をおくと直ぐ口から一番に出る。目をさましてお母さんが「次ちやんもお露ちやんも未だ歸らないぢやないか」と云はれると默て了ふ。暫くしてお露ちやんも次ちやんも歸て來て同じ樣な事を云ふ。淋しかつたお倉も急に賑かになり出す、お母樣はお仕事し乍ら私に「あの此間頂いたあられを煎ておやりと仰るので七輪に火を入れてあられを出して來ました。皆がよつて來て、やれ五色で奇麗だとか旨さうなとかつてガヤ〳〵とかきまぜる、ほんとに美しいあられだ色まぜて一分四方長さ三分位に一樣に細く切てある。ほうろくに入れていつてゐると始めは端の方から膨れて來て亞鈴が澤山出來る、まぜて居る中に繭に似て來た、面白い〳〵此度は何になるだらうと云て居ると早繭の凹みが出張

てきた。皆が今度は何になつた小芋だ〳〵と末ちんが云ふ。イヤ薩摩芋だ、と楯を突くのは次ちやん。僕の方が可、否僕の方が當つてるとか云合て果は喧嘩だ、突く叩くわめく、眞に煩い温和しく編物をしてゐたお露ちやんが口を出して「そんなに喧嘩するなら頂けないことよねえ、姉さん」と私の方へ目を向けた、お露ちやんは年長なだけに喧嘩の仲間入はせない、仲裁の勞を取る。私もさうよ温和しいものだけに上げるわと云ふ、と「御免〳〵、もうしない」と漸う二人は落付た、あられはいれたので豆を煎てそれから矢張火の上で鍋に黒砂糖と鹽と水少し入れて、其處へ豆とあられを入れてかきまぜる、漸う出來たので分配した。折角手間暇入れて拵へても大勢だから、分けると鼻糞程にしかあたらない。少ないので尚更旨しかつた。

○月の終と始

土佐　宮内ゆき子



花かげ　大分　佐藤二枝

二月二十七日。お母樣が忙しいので、日向で申子の守をする、テウチテウチアババ高い高い、幾度してもあかない。おむつを除くと、嬉しげにピンピン足を上げて笑う。起きかへつて頭を布團へうづめたまま、五寸位向ふへゆく、丁度生後百六十五日目だ。夜、この話ばかりでもてる。頭で這ふたとて大笑ひ。

二月二十八日。寒い事、炬燵の掛布團へ女子文壇を載せて見る、夏葉女史が好きだと、母樣がおつしやる私もだ。孃に被布をしようと思つて」とて、東の奥樣が、美津子のをぬがすと、物尺をあてゝ、巾がせまひの、糸がきまらなひの、柄が澁いのと例もだ、「筒は寒むさうだ、袂だとふところ手が出來ますよ」、幾度も筒袖をなぶる、御氣に召さぬさうな。荒絲のはてなたき縞に紫の裾まはし……ふと自分の衣服を氣がつくと、後の御言葉が、恐しくて、小さくなつてうつむひた。

三月一日、久ぶりで脊戸へ出た。色のあせてしまつた烏瓜が枯づるへ未練さうにからまつて居る、よくぬか

へまぜて、御湯をつかつた、去年を思ひ出してひとりほゝえんだ。横田樣から御風呂の歸途、竹さんの嫁入りを見る、簞笥一つに二三人の行列、何だかあつけない、けれども、幾年の奉公よりかちえた品と思ふとかつて母樣より貰ひた、自分の五荷六荷の調度より、はるかに尊く感じた。夕の御料理が不思議とよく出來た嬉しい日。

三月二日。新居の先生がなくなられたとか、母樣が御見舞にゆかれる。「電話がかゝりましたネ」と上向ひて笑つて居らしやるので、くもの糸と心づいて、又赤になつたのはつひ此の間のゆめ……夢……夢全く夢だ。

○買物　　播磨　内藤松園

お金を送つてから一週間目の朝「もう明日あたり小包が來るだらうね！」と母樣は仰有つた、其れから毎朝郵便が來る度に二人はかけて出るけれど小包はちつとも來ない、そうして居る中に又一週間經つた。

「今日も亦來なかつたね！、途中で何うかなつたんじやなからうか」母樣は不安らしく仰有る、私は自分の不調法をせめられる樣な心地がした、まさか、と云つたが「振替貯金て七日、先方てとゝのへるのが三日、此方へ來るのが三日、もう本當に來さうな物ですね！」私は日を繰つて見て眉をひそめた、そして慰安の爲めに、商店へ直接に注文したのではなくつて、女子文壇社の用達部へ御願ひしたんだから四五日は遅れるかも知れないと云つた、すると「そんな廻違い事をするから」と一言の下にお小言を頂戴した、其れつきりお母樣は小包の小の字も仰有らない、もう來ない物と諦めてゐらつしやる、私も到底も駄目だと思つたから郵便が來ても走つて出なくなつた。

すると丁度送金の日から二十日目郵便やがドシリと重相な音をさした、二人は言ひ合した樣に又飛むで出た小包である、母樣は捻つて見て懷爐じやないと私に渡された、私は包を解き乍らお伽だんろが這入つて居て呉れと心から祈つたが中には私の注文の原稿用紙許り。來たならば直ぐにも筆を取らうと思つてゐたけれど母樣のだんろが來ない中は、何だか濟まない氣がして筆とる勇氣も出ない。

それから三日目待ちに待つただんろは着いた、母樣の嬉ひは一通りでない、私は初めて不安の眉を開いた、そして何となし一種無形の手柄をした樣なうれしさを感じた。其の夜私は女子文壇社へあてゝ心にあまる感謝の情を唯數言に替へて出した。

○文壇日記　　甲府　土屋勢運

二月十七日、火、晴、富士颪が甚く寒い、お山の雪を

吹付けはしまいかと思はれる、「新美文」の發行は一昨日、最早屹度來て居る筈と思つて、學校の歸りにと妹に頼む、久し振りて髪を結ぶ、お產でめつきり拔けたが、漸々と二寸許り伸びて嬉しい、兄樣が前髪の立つたのを見て「鶺鴒の樣だ」と冷さる。今日も坊のおぼんしんにかゝる。午後三時頃妹歸る、案の如く新美文抱えて來て呉れた、胸もわく／＼開いて見る、「沒書」と兄樣の憎まれ口、知らん顏して撥つて行くと六號活字で…だめとは思ひながらも如何だか／＼と待ち佗びてたので嬉しかつた、兄樣が「見せな」と仰つしやる「厭ですよ」つて言ふと「よし？」と引奪る、「非道いは」言ふ間もなく「六號／＼？」と大きな聲「いゝは、今度は入賞よ」つて言ふと「次は沒書」つて、何處までお口が惡いのでせう。

夕方おぼんしんが仕上る。

二月十八日。水、晴、昨日に引換えて暖い、御釜の下に火を焚付ける、坊に乳を與りながら新美文讀んでると「郵便!!」見ると閑樣からの御手紙、披いて見ると「十日に邪魔者が」として（女の子）と括弧の中に入れてある、何時も呑氣な方だ、と思つたそれにしてもお二人共御丈夫とは御目出度、早速御祝の御返事を出す。午後姑樣來られた、――妾今里に食客、夫は靜岡に――坊を見て大嬉びて抱かれる、しつこした大騷ぎする、晩は夫の話やら六號活字で大笑する。

二月十九日、木、雨、姑樣早朝にお歸り、いつもお忙しい方だ、夫からお手紙、取る手遲しと披く、先づは御丈夫の御樣子、安心した、終に「新美文拜見六號活字巾利かなく御座候大きに奮發して然るべく候」と、恥かしく思つた、早速御返事差上る。

○二月二日三日　靜岡縣　水野やす

朝、姉樣に髪を結んでもらつた、其の後で日當の良い所で、二人でふみ白をつきはじめた、まだなれんかげんか一度ついたら下へころげおちた、其の風を見て姉樣が大笑をした、口惜しいまぎれに「姉さんだつてそんなに始めからうまくつけやしなかつたわ」といつてからかつた、午後一時から宿題の圖畫を書き始めたがどうしてもかけない、只紙を十枚もつくしたばかり、もう今日はだめだと思つて、去日の裁縫のやりかけをすましてしまつた、夜になると三月のおひな樣の着物をこしらゑた姉さんに見せたら大そう笑われた（二月二日）

去日隣の爺さんにもらつた梅の花を文机の花瓶にさした、其の後て火ばちにあたつて、一時間半ばかり女子文壇お伽噺をひろい讀にした、午後二時より母樣と二人で町へ買ひ物に出かけた、小間物屋に良いリボンが

有つたからねだつて買つてもらつた、内へ歸つたらぜいたくだといつてしかられた、五時に母樣とお芝居へ行つた始めの中はおもしろかつたがお終にはお母樣のひざをまくらに寢てしまつた内へ歸つたらいねむりをしたからもうつれてはいかんと言つて大そうしかられました（二月三日）

○郵便　盛岡　米澤白桃

朝のしまひをして居ると玄關で郵便といふ聲がするのでぬれた手を其まゝ急いで出て見ると封書が二通と葉書が三通葉書は皆父樣に封書の一通は姉樣に一通は私に、おや誰からだらうと見れば野のひばりと斗りどうも見なれぬ筆跡なので暫く眺めて居たが更に解らないので思ひきつて開封するとホロリとこぼれた物があるオヤ？取りあげて見ると紫陽花の一輪「あゝわが身も同じ此の花の如變る心に色も香もあせはて候よ」と何となく筆が亂れてゐる。だん／＼讀んで行くと終に、宮津にて綠子、としてあるのでよう／＼解つた、綠子さんは女學校時代私の極親友であつたがふと心の迷から自由に家を拔け出して未だに家には歸らない又私にも何の便りもない別れてから三年になるけれども音信をして呉れたのが今日始めて、私よりもあげたいけれど宮津とある斗りて住所が知れぬので其まゝにしてをく友の噂によると綠子さんは藝者になつたといふ話。

午後豐島の叔母さんから母樣と姉樣と私と三人へ手紙がきた、明日曜を幸ひ別莊にて冬の芋汁會を開きますから何卒お揃ひにて十時頃からお出て下さい、但し三膳以下は罰金を五膳以上は賞を呈するの會則ですからそのおつもりにてたんとお腹をへらしておいてなさい。と皆て大笑ひをした。

夜女子文壇を讀んで皆に聞かせて居ると出し拔けに郵便!!と大きな聲取るものも取りあへず出て見るとマア嬉しい姉樣からだ、寫眞もそへてある、先づ第一に寫眞を開くと先日生れた赤チヤンを抱いて姉樣がニツコリ、オヤ可愛い事、思はず大きな聲で叫ぶとドレお見せよと姉樣に取られる。お母樣の開かれたお手紙には、近頃よく笑ふ樣になりましたと。

親も子も同じ蒲團や別れ霜　秋色
雛子の尾の優しくさはる童戯　秋色
幼子の目早き土筆影し　花讃
山吹にいしう射たりや雀弓　園女
袷着て何やら忘れけり　きせ
戀死なば我塚て啼け時鳥　奥州
油斷して碁盤はるゝ花芙　多代

和歌

与謝野晶子選



〇（天賞）　長門　輝子

如何なれば斯くも君のみ夢見ると知らぬ様にも思ふ心

〇（地賞）　日向　かう子

あさぼらけ五ヶ瀬の川の水上にほのかに見ゆる骨蓬の花

〇（人賞）　伊賀　岡　花子

春の雨草の若葉は七つ子の前髪ほどにたけのびてけり

【秀逸】

〇　讃岐　香川　育江

強きかの千人を置きていと弱き一人を好みたよりけるかな

〇　大阪　順子

心をば失ひし子はゆく秋のすゝきの様に髪も荒けぬ

〇　下總　小澤　檀子

み姿をおもへば悲しむしろ野に咲ける小百合をみるがうれしき

〇　淡路　加藤　菊子

若き身は京白粉に化粧へど人にしられぬ愁もありぬ

〇規定　別に新派舊派の名稱にかゝはらずと雖も成るべく清新の作を迎ふ一人一首限りにて必ず半紙又は罫紙に認むること一人にて二首以上ある時は没書とす丙種の賞を送呈す

〇　神田　藤掛　涼子

あふりかの椰子の樹陰に住む人も戀ふる心を美しといふ

〇　千葉　三濃輪　光子

よき香する夏の花をば喜べる君と舟しぬ山の湖

〇　三重　山崎　初子

友と二人一つの傘に笑ひつゝ牛のいねたる春の野をゆく

〇　小石川　近藤　その子

悲しみを人には告げづただわれを哀れとなして神に禱りぬ

〇　大阪　木村　花子

人來たり強き火賣ると思ふ間もあらなく買ひぬ哀なる我

〇　大阪　河盛　よしの

家鴨ゐる池に餌まくとそちむきて顔みせぬ子の懐かしきかな

〇　常盤　幸子

古寺に赤き椿のほろゝちる晝に經をきくかたふとき

〇　大阪　鈴木　房子

華やぎし笑まだ殘るたまゆらに胸の緒琴の淋しう音す

○本郷　小稗菊江子

四年ぶり昔の人に立ちかへり紙雛折れば君笑みにけり

○駿河　大瀧梅子

永き日をたゆまづ巡る水車たゆまづ散りぬ山櫻花

○筑後　梧桐知登子

小鳥等は今日も機織る窓に來て妙なる鈴をうち振りてゆく

○沼津　八代美代子

ただ一人靜にありて君思ふおもひにまさる樂しさはなし

○群馬　もと子

春の日や米つく音に海棠のゆれて落ちきぬ胡蝶の如く

○千葉　高栗みや子

水ほのに夜明けぬ違に栾の花の古さとの畑實につゞきけれ

○房陽　宮江子

春の日の木立洩れ照る紅の雲そがひに受けて巣つくる鳥よ

○鳴澤ゆり子

七色の虹のしたゝり筆にしめのべし繪絹に向はゞいかに

○山口縣　深山雲

云ひしらぬ淋しさ宿るわが胸を針さす如く木枯しの吹く

○熊本市　近野春子

ものみなは春來れりと打ち笑めどさびしき我はうたもうたはず

○長崎縣　中尾茲子

音づれば雪の下なる若草の春にあひけん心地こそすれ

○伊豫　井上いち子

春に積む雪の嵐は朝々にわれ立つ川に寒う吹き來る

○下谷　細谷鶴子

君を見て眞晝の日をば仰ぐごとめくらみなしてよろ〳〵としぬ

○京都市　日朱鷺

板屋根に深き雪深く北國の雪阻かたりて京にあるかな

○福井縣　やまざと

あこがれてぬけ出にける魂はもどり來にけり冷たき胸に

○德島　吉田紫花

最いたき罰をおもへとののしれど背向きては幸祈り泣く

○牛込　佐藤しづ子

端居して空を眺がむるこの君の頰にほのさしぬ春の夜の月

○芝區　田村波津子

まくらちる野路の夕暮一人行く少女てらせりゆみはりの月

○横濱　石井芳子

一群の雁のゆくゑぞなつかしき古郷想ふはらからの家

○沼津　渡邊とよな

たまはりし君がすさびの歌幾つかたみとなりし春のさびしさ

○三河　天野清子

わりなくもかたく閉ざせし我胸をうち開かれぬ血染の御文

○神田　諸星みち子

十本ほど中に花ちる杉の森緩まろらかに垣して暮れぬ

○岐阜　日野歌子

瓶鉢淑きしれるもとに米洗ふ君が御髮に山ざくらちる

○大阪市　山田淑子

赤硝子青き硝子に雨後の月なゝめに照りぬちひさき渦殿

○大阪市　植本八重子

日に龜の甲干す如くわれゝまた君が光りに涙な干さむ

○信濃　駒澤比呂子

春の雨愁に泣くなる少女子の涙のやうにさめ〴〵と降る

○信濃　小林美喜代

朝風や椰子の香たかき南洋の島にむれとぶ鳥もふかな

○美濃　岡ときは

夕日さす庭に櫻の花散りて母を偲み[illegible]林とわれ

千葉　三輪亮子
○
乳房をば吸ふとふくめば昔わがよりにし母の乳の香ぞ思ふ
茨城　中西うた子
○
おぞましや日々に迫ひゆく死のかげも知らで榮ある日にあこがるゝ
呉市　山本涙子
○
靜かにも春雨のふる音きゝてわが父君のおくつき思ふ
茨城　荒井柳子
○
春雨に小草若草うなだるる樣にも似たる心を知れな
駿河　しぐれ女
○
菜の花の中に日くれて道問へば籠負ふ小女笑みてこたへず
松代　大平直枝
○
あゝ二人離れて行けり人ごみをかくて手をとる寂しらの街
宮城　沼倉富球
○
櫻花林の松と杉の間のみ堂の上に見ゆる床しさ
東京　江森英子
○
わが胸の雲晴れやらぬあかつきにまたこそ見ゆれうき人の夢
府下　たつ子
○
鶯の初音に心うばはれて夕の家に入りもかねたる
茨城　中山けい子
○
花見んと櫻さく野に來て見れば先とりの音に心とられぬ
美濃　篠田欣子
○
朝まだき海原をゆく帆の船に起る舟歌ほのきこえつつ
茨城　さくら子
○
君か乘る小舟の影は見えずなりて川風寒ぅ岸は暮れゆく
陸奥　賀智子
○
朧夜に梅の林の小屋に寢て笛の遠音をきゝけり我は
大阪　田中とき
○
春の日は靜心なく散る花をあたら惜しくも召連れて逝く
陸奥　名久井文子
○
誰れやらに待たる心地に朝の戸を開けば薫る白梅の花
千葉　大入木玉子
○
春の風花びらさそひ京の子の靜養地の窓に輕く吹く音
福井　松邑靜枝
○
佐保姫の心盡して美はしき錦織るなる春の曙
信濃　赤澤よみ
○
昨日のごと今日も暮れけり明日もかく大地裂いずや火の山暴れて
岐阜市　山本滿佐子
○
櫻咲く春の野つらを眺むればすみれつむ子の髮と袖見ゆ
上毛　須藤あさ子
○
うらぶれの身にさへ夢は美しきうらぶれてさへ春はうれしき
三ヶ島秋子
○
鶯の巢とも思ひて路の墓ひとつ殘して橋を渡りぬ
岡山縣　佐原千鶴子
○
若草の萌ゆる野中に御手とりてさまよふ夢をわれ常にみる
大阪市　鹿島穗子
○
胸に利き刃を研ぎてよはきもの刺さんと思ふ人を呪ひぬ
大阪　稻垣よし子
○
河内野の芽摘む子が白珠の指を夢みぬ春のうたたね
岐阜縣　村井かれ
○
土橋の南詰より柳みちからかさつゞく春雨の日よ
豐後　吉眞靜子
○
人おらぬ山路なれどもこびむ子のあまた居むより安きこゝろよ
廣島　笑岡あさ子
○
絹の如西に居るなる雲を見て亡き人戀ひぬ須磨の浦邊に
福岡縣　福田靜月子
○
かぞふればまだ如月の空なれど山のけしきに花ぞ待たるゝ
仙臺　南もり子
○
くれなゐにうす紫に貝殼の濡れて美くし春雨の磯
横濱　村田千代香
○
いにしへの歌なつかしむ五月雨の窓にまひ來ぬ黃色の小蝶
秋田縣　眞子
○
唯一人さまよふ暮は菫咲く春野ながらも淋しかりけり

小雨はれわが家の庭の梅ヶ枝に鶯なくと日記かく日かな
○　府下　美知枝

荒濱を孤島に獨り見るがごと怖れ抱きて君と逢ひけり
○　奈良　中富よしみ

つまむりてたゆたひ渡るさゝ流れ素足にからむ春の水草
○　石見　八島きみ子

色あらぬ衣に恥らひ丈長き袖を組みて十五になりぬ
○　徳島縣　野　靈

堪へがたき愁ある子は青淵の水に臨むを何よりとする
○　島根縣　長崎春子

夢のごと靄の大野をわがたまは行く方しれず歩むと思はる
○　伯耆　竹本春江

星のみぞ高く光りて冷たかる十一月の夜のわかれよ
○　丹波　藤田靜枝

床に居て遠くの街のどよめきに涙ながしぬたゞ何と無く
○　大阪　今西春江

潤みては露もこぼれむ御瞳に此の力あり男子ひれ伏す
○　筑前　田中登興子

世の中のすべてを忘れたゞ君と手とりてゆかん天の御園に
○　福岡　角銅紫雲

昨夜の夢さめても嬉し朝がほの昨日にまさる色のめでたさ
○　千葉縣　岩田よし子

わが心風にながるゝ雲のごと行方さだめず今日もあるかな
○　兵庫　杉山春翠

河岸通り倉の白壁日は照りてちひさき鳥のちちと啼くかな
○　伊豆　木村綠野

淡雪のつれなく消えて朝日さす垣根の下に青き草見る
○　相模　渡邊八重子

霞はしき菫の花に口つけて戀しき君に送り參らす
○　茨城縣　初澤さく子

尾張　安藤かなえ

春の雨からかさとりて君が家の土橋越ゆれば蛙鳴きぬ
○　根室　白雲

云ひしらぬ煩悶いだきてものみればみな悲しくぞうつりぬ我に
○　盛岡　米澤繭子

人呪ふ惡魔の聲と思はれて音おそろしき冬の水車よ
○　牛込　平塚白百合

雨あがり柳けぶれる人の家傘干してゐぬ菜の花の中に
○　臺北　稗貫みつ子

緋桃散る夕月影のさびしさにふすまかづきて夢路に入りぬ
○　神田　神田せん子

傘捨てゝぬれなばいかに黒髮の色こそまさめ春雨の降る
○　廣島縣　し壽波

木の枯れてつたのみ青く絡むなる楠に吹くなり初夏の風
○　茨城　初子

うぐいすの聲も霞みて聞ゆなりさくらの白き春のあけぼの
○　岩代　波流子

君を見る目はよろこびにかゞやきぬ心は君を知りて泣けども
○　筑前　染尾錦

居ながらに岩木の山をながむれば綠の笠を頂くありき
○　京都　小蘭

卯の花や垣根のひまにほの匂ふ灯かげも淡き宵月夜かな
○　牛込　小林榮子

なつかしの君の姿はそこことなく消えて枕に鐘の音する
○　遠江　富永雅子

行く春の藤の花こそめでたけれ少女の髮といづれ長きぞ
○　茨城　石井ふく子

乙女子の黑髮かざるくれなゐのかざしの花に蝶のむつるる
○　茨城縣　喜悦子

春の日のつつみに立ちて二つ三つ舞ひ行くてふのゆくへなぞ見る
○　和歌山　橋本てい子

海に入るあまたの人は海底のまたもしたひて死ぬと思ひぬ

○　下總　相川みよ
夕なぎの海べに立てるわれは今波のあなたの君想ふ哉
○　美濃　古田俊子
いかにせば此の憂き心解けなむと問へどうす笑む君とあるかな
○　群馬　佐藤かつ子
何となく憂に沈む春の夜や燭も消ゆべく息つくわれは
○　大阪　四戸政江子
いくもとの桃の花咲く岡の上に君によく似し人を見しかな
○　日向　佐藤しな
子の戀しならぶ佛をかぞへつゝかきみだすむれいだきぬわが身
○　下總　三橋浜子
木かげ行く人のそでまで匂ふなり辛夷の花の夕月夜みち
○　豐前　石田百合子
君を見ぬ星の國へも行きましとかなはぬことを願ふ日もあり
○　若狭　蘭夢子
幸うせし我身に似たる星一つ流れて消えぬ寂しき夜かな
○　若狭　津田汐汀
手を打ちてもだえ泣く人笑ふ子よなが背にせまる死を何とする
○　大阪　田中れん子
はづかしくはたなつかしや君と我よびし幼名ふと思ひては
○　韓國　原登星子
灰色の雲一面に廣ごりて今や惡魔の來るとおそろし
○　松山市　ぎよう子
春雨はやまず垣根をむらさきのかさしてすぐる美しき人
○　岐阜　林庫子
梅が香をのせて吹きくる春の風にさそはれて啼く籠の鶯
○　千葉　北村花枝
彼の岸に着かで止むべき船ならじ波風いかに吹きすさぶとも
○　常陸　根本靜枝
少女子が遊ぶ芝生に日は落ちて夕風そよと櫻ちるなり
○　京橋　栗田千代子
春の闇笑ひさゞめく聲やみて夜ふくる窓に爪引をきく

○　大阪市　木村涙花子
たそがれや世をうらみつゝ友どちと草のしとれに手を取りて泣く
○　播磨　群子
なつかしき野邊のすみれをつみとりてわが黒髪にさしませし君
○　呉市　碓井奥竹
みにくきと美くしきとの其中に我もまじりて二十とせをへぬ
○　飛彈　世須子
花と見て立ち寄る袖に散りかふは小草はなるる蝴蝶なりけり
○　岩代　長谷川光子
消えやらぬ谷間の陰の雪踏みて柴刈る藪に鶯なきぬ
○　府下　野木はる子
はとのこゑ遠にきこゑぬ古ことを君とかたらふ葉櫻のみち
○　麹町　福島美代子
讀經する尼が庵にも春は來て櫻はゝ笑み夕月さしぬ
○　茨城　鈴木きよ子
長閑なる春來にけりと友どちの誘ふに任せもの忘れ居ぬ
○　山形　久しは子
今ははやなげかずといふこの友の眸に光る白露の珠
○　紀伊　室井白蓉子
十二本扇を持ちて「松づくし」舞ふや春夜の大臣の宴に
○　深川　津谷末子
灯火のうすれ行く夜を文字習ふ白紙にじみぬ人戀ふ涙
○　岩代　木下春花
七色のかみとりいてしおとどひのはさみもつはや春雨のふる
○　熊本縣　金子かたえ
ひたによるさびしきおもひけふもまた泣かせては去ぬ夕のわれを
○　土佐　宮内ゆき子
四季つきず木草咲くこととこしへに少女と呼ばん我がよなりせば
○　失名
みよそこに安き國あり我をよぶ心地して見ぬゆく春の池
○　長崎　小野文子

荒らけたる髪をか結はん春風の岸の柳のしとけな姿　三河　永田舞鶴子

○わが戀もてら〳〵燃ゆる焔のごとやがては灰と成るべきものか　鹿兒島　俊子

○水仙は重たきまげの根痛しと首うなだれぬ雨の夕を　近江　田川ゆう子

○田子の浦も富士の高根も紫に霞たなびく春のあけぼの　麻布　吉田かつ子

○世に聾くと君云ひわれも聾くと云ひ眼と眼と相見默して泣きぬ　遠江　鈴木操子

○ひな桃のその咲く頃と妹と姉を訪ひゆく湖ぞひの村　和泉　金田香[illegible]

○天女の下り給ふと夢見し日空に懸れり七色の橋　紀伊　勢以子

○うつくしき春日のはふり若草に鹿と遊べりやよひのこし日　麻布　花子

○紫にかすみて暮るる野に立ちて歌をおもひぬ君をおもひぬ　肥後　佐々木美智惠

○昔の子思ひ浮べてよりかゝる窓に降りくる春の雨かな　京都　井上澄子

○三日月をあやふくのせて春の野をいさゝ小川の流れゆくなり　富山縣　長瀬紫峯

○入り合の鐘の音響き軒近う梅の花ちる山の家かな　高岡市　篠原深雪

○春風に裳裾吹かれて芹洗ふ少女を見たり三月の旅　牛込　[illegible]散

○過ぎし日の母失なひし悲しみを思ひ起しぬさくらちるころ　岐阜　篠田とみ子

○何者か踊り狂ふよ我胸の床に生けたる牡丹くづして　蔦田千代子

○春雨にうたれて逃げし鶯の小さゝの中に初音する哉　紀伊　榎本千鳥

○ほのくらき燈火のかげよ獨身の胸の鼓動に手を抑へ見る　大阪市　草村君子

○文見れば怪しゆ心波うち病めるかこちて何となるべき　駿河　藤森きん子

○野邊に咲く花より花とあくがれて胡蝶に似たる我が心かな　安房　阿部けん子

○母に似て朝起すると父に似て働き者とよばるる少女　美濃　中村澤子

○薔薇の香の甘きに醉ふて身を寄せぬとげある知らぬ盲目の子らは　大阪　寺部君子

○わか心我さへ知らず昨日けふたゞ何んと無く物思ひする　和歌山　水野重子

○あたゝかく百合の香殘る朝枕ゆめ追ふ樣の瞳たゆけき　府下　鳳岡秀子

○絹糸をならべしごとく雨ふりぬ朱雀大路の春の夕ぐれ　靜岡　濱崎照子

○雨けぶる下京町の軒近く柳かすめてつばめとぶなり　伊賀　山村龍子

○春の日や廣野に立てばしづかにも胸にしみ入る日の光りかな　奈良　白ぎく

○我が胸の土に戀ののび根ひろごり薔咲きけり蝶よ來て[illegible]め　岐阜　長瀬しげ子

○まゝ母のおんことを云ひ吾母の山の御墓に涙ながしつ　廣島　末丸いつ子

○小さなる櫻の花に黄なる蝶ひら〳〵まひて一ひらちりぬ　神戸市　北村花友

○若き身の戀の闇をいかにせむ胸の血汐は火ともなりつつ　美濃　酒井とみ子

○かた頬照りかた頬かげする如くにも君と人とに相向ふ哉　千葉縣　吉田光子

○白々と水こそ見ゆれ秋くさにつゞく河原のありあけの路　新潟縣　戸田豐子

○くらき灯に莚などおろおん母の見えてかなしき秋の夜の風　三重縣　小宮あさの子

○墨き島は世の人呪ふ寃の神の旨になくとも我れは思ひぬ　信濃　小池天涯

○今われは見えぬ惡魔に誘はれて浮世の波に漂ふて行く　大阪　梅村愛子

○み手とりて君とゆく日はみちの邊の名なき小草もよしとおもひぬ　盛野　伊藤俊子

○つまごとのやさ音浮べて春の川桃咲く野邊をすべり行くかな　香川縣　山地榮利子

○おとめ子は袖を連られて今日も又花咲く野邊に遊びぬるかな　靜岡　おはろ

○遠かたは花の霧につゝまれて菜の花畑に鶏のなく　明石　田中露葉子

○花のごと灯はかゞやけど人みなはうなだれゆきぬ夕暮の街　牛込　塚原けん子

○薔薇の花煮ぜおとろへし我が胸に强ひて咲きねと君はいへども　大分縣　千識千代子

○蝶の飛ぶ影を追ひつゝ行く稚見のつみなきごときわれなりしかな　矢名

○雪とけて谷間の水もぬるうなりぬうれしき春にならむとすらむ　長野市　西條宇女子

○春の雨いとゞ淋しき此身をぞ慰めんとか海棠の咲く　和歌山　みどり

○くれなゐの梅さかりなり谷川にのぞむひと村日あたりのよき　熊本縣　入江しづ

○松立てる人げはるけき山中に神世のごとき鳥のこゑかな　神田　三好ふく

○かくはかり憂き事多き世の中に露の命をなになげきけむ

○ひら〳〵と舞ひ行く蝶のあとしたひ知らずしらずに春の野にきぬ　北見　酒田ひて子

○山の井に櫻こぼるる夕暮をことなし顔に鳴く蛙かな　下關　山本美子

○ありとあるうさもつらさも何れへか姿かくしぬ口つけし時　下關　安部しげ子

○口つけて血を吸ふ蛭を悪むわれわが心吸ふ君をにくまず　岩代　植村喜奈子

○あゝ刹那あゝたまゆらよ運命のつきむとするに驚きて泣く　下谷　山本榮子

○渡守よべど答へず川の瀨に千鳥しばなく聲ばかりして　茨城　高塚白鶴子

○垣こえてちりくるものは白梅か絹かとまがふ今朝の初雪　上總　森婦美子

○あまたある處女の中に我ひとり涙ながれて死をば怖れぬ　越後　横山文枝

○櫂とりて君と乘らむにふさはしき小舟もありぬおぼろ夜の磯　北海道　入萩津根

○しづかなる黑き夜中に寢ざめつゝ常世に死なぬ我をこそ思へ　松本　川上めぐむ

○雲のゆめをまもりて木の間よりおぼろにさしぬ春の夜の月　四谷　味方古宇子

○そことなく我名呼ばるゝ心地して立ち出て見れば鶯のなく　本郷　龍水女史

○亡き母のみ墓の前の花にきて胡蝶舞ふなり春の夕暮　秋田縣　東海林ゆき子

○石となり蛇となりきと聞けるより戀てふものは惑しと思ひぬ　佐賀　田中美枝子

○死の國に行くらん如き思ひしてさびしき心わき出づる日よ　備中　原こみれ

盛岡　四戸波江

蝶双つ水泡けぶる瀧壺に身なけむとすとおどろく少女　千葉　宇澤しげ子

○

桃の花咲ける家ごとに歌書て行手いそがぬ旅の尼かな　大阪　中野喜代子

○

夕立の晴れし後には月清く眺めよろしき須磨の松原　長野　條ふき子

○

春の月山のあなたの里の灯とおもふごとくにほのかにさしぬ　鳳仙花

○

笛の音の何處ともなく聞えきてみ空に月はさえ渡るなり　千葉縣　宇井花月子

○

しほるなと春野の菫そとつみて髪にかざして笑む少女子よ　秋田　すみれ

○

船頭のかき美しき人のせて芦間の小舟汀はなれぬ　岩代　栗村かつ子

○

我思ふ戀しき君の玉章を開くその日の心やいかに　丹後　吉田せき子

○

姫小松まばらに生ひて岡の道曲れば遠に君の家みゆ　紀伊　田中文子

○

花の香のとばりにうつる春の夜や緋の枕してはらからはれぬ　北海道　河合菊子

○

小女子の小さき胸の戀眞はいえ去らずして春ゆきにけり　千葉縣　平山喜美子

○

朧夜の月影ふみて彷徨へば髪にちりきぬ山ざくら花　はぎのはな

○

たゞひとりさびしき宵は歌もなく心の波にうた唱はせぬ　廣島　田坂芳護子

○

厳島潮満ちくれば夢に見し龍姫おはす城樓のごと

○

心憂く拂へど君が俤は日々に蘇ひて我肉を食ふ　靜岡縣　土屋黔迺

○

春の野邊香りに醉ひて少女子は歸るも忘れ遊び暮らしつ　矢名

○

黒き潮となりて我思ひ君が御胸に湧きいづるてふ　千葉縣　小出保花子

○

櫻散る朱塗欄干美はしき艶なる宵を袖ふりてきぬ　美濃　をとめ

○

絵日傘のうしろ影よき京の子の袂もふきぬ青葵のかぜ　青森　葛巻りさ子

○

若き日のかゞやく眸にふと見てしその曉のくちなし色よ　丹波　塩見喜代子

○

束の間にきゆるはかなき朝虹に似たる運命とある日思ひぬ　備前　大釜梅香

○

あへる日は君がやさしき言の葉に涙は袖の友となりける　大阪　中村ひでの

○

馬蹄に徒れし人の馬に似て先立つ人を追ひたき心　三重縣　小宮はま子

○

天地にたくみの神が春を彫るのみのひゞきか野のさゞれ水　信濃　梅月露

○

花見れば友のなつかし外國の布哇にあるも筑紫にあるも　木室せい子

○

草木皆花つけ笑める日となりて君は來ましぬ我世はたのし　土佐　岡村芝守

○

行雲よおゝ我のせてゆけよかし千里のかなた君居ます里　石狩　栗山秀子

○

おもひての網なたどりてゆけどなほ省の春にあふよしもがな　岩代　横山楠子

○

若き子の今はた似たる心地してなんとはなしに身ふるふ夕　埼玉　くれなゐ

○

大波のわが胸に打ちその波のしづまる時は君去りたまふ　丹波　韮川波江

○

花白き嵯峨野あたりの夕ぐれを廊してゆく春の舞姫　千葉　三輪花香子

○

水ぎはの土に咲くなる山吹をのべつ滴めつ映す山川　陸前　沼倉浮草子



○規定　論文と云へどむづかしきことにあらず諸孃が考へしこと思ひしこと文學上又は一般女子に就いての平易なる論談を歡迎す二十四字詰三十行以内一人一章に限る乙種の賞を送呈す

○在學中の方に（選賞）

京都　K・K女

今思へば馬鹿々々しい事ばかりでございますが、それでも其當時はそんな氣にもなれませんでした。上級になれば何ともありませんが、始めのうちは誰でも耻づかしいものです、月經のある事を人に告げるのは躰操遊戯の時など、私病氣と云つて休めばよい事を、恥づかしいとか云ひにくいとか、いらぬ虚榮から休まないでする、又躰操の折には休むが遊戯は面白いからすると云ふ方もあります、又躰操遊戯など休んで居る人でも大掃除の當番など當ると人に劣らず働かうとしますよく掃除しやう人一倍働からとするのは結構な事ですが其結果運動していけない時までも運動するに及びません、又衛生のお話の節先生から承つて萬々承知して居るもの丶遠足がある時なんか友達は皆ゆく一人行かないのはつまらぬ別に差し支へと云ふ程でなし、あるいたつて不調法するやうな事もない、行きたいくつい大膽になつて出掛けます、行つても別にたいした變りはありません、から云ふ事がよくあるものです、（中には何ともなかつたと誇る方もあります）しかしこんな無理をしますと其時はそれて何ともありませんがこれが將來恐るべく悲しむべき病氣の原因となりそう迄ゆかずとも、隨分人知れぬ苦痛をせねばならぬ樣になります、これが爲心ならずも獨身生活をしてる私の友もあります、婚姻後家庭不和をかもした、實例もあります、甚だしきは一命を亡ふに至つた人もあるとか聞いて居ます。でなくても婦人科醫の門をくぐり耻づかしい思をせねばならなくなり又この方の病は人にはちつともしれずに苦しく長びくものです、さあかうなつてからいくら悔いたとて仕方がありません。

もとはと云へばついした虚榮や不思慮の致すところからです、學校の方でも御注意なさるのですからなに恥づかしがる事はありませんそんな時の軆操遊戯遠足などずんずんお休みなすつて當番なら代つてお貰ひなさい健康な時にいくらでも取り返せるぢやありませんか、又遠足なんか氣遣ひ乍ら行くより常態に復した後愉快に出直せばよいじやありませんか。

在學中の方の内にはこんな方もあらうかと私の經驗から出た老婆心切つまらぬことで長くなりました。

全く經驗から出た老婆心てせう、文亦樸實これを傳へて憾無してす、これては男子に分らないことて成程婦人には然う云ふ虚榮と云ふものがあるのかと思ひました、有益な文（評）

○迷信と無頓着（入選）

滋賀縣　磨　志緒

世の中には、物事に迷の心を起して、一寸病でも永びくと、お稻荷樣に伺ふだとか、祈禱して貰ふなど、此樣な事はまだしも、何日にお金は出さぬもの、朝猿を見たから不可ないのと、隨分馬鹿げた事を言ひもし、又する人もあります、殊にそれが婦人―今は大分なくなりましたが―に多いやうに思ひますので此惡習は改めねばなるまいと存じます。

然し又何事にも一も二もなく、迷信だ迷信だと心に懸けないのも餘り善い習慣とは言はれぬだらうと考へます、私の方では、姙婦が火事を見て其時手でお腹をおさへると、生れる見にアザが出來ると申して少しも見ません、勿論其樣な事は無い筈ですが、之は姙娠中は成るべく心を靜にして、激しない、樣せねばならぬと云ふ處から、誰の目にも恐ろしく騷しい火事等は見る物てないと言ふ事を、誡めたので、まだ此樣な例は澤山ありませう。それで迷信は全然避けねばなりませぬが、又無頓着には流れぬ樣にしなければなりません。私は神樣に物を伺ふだとか祈禱等すると云ふ事は大嫌てすが、神を信ずるといふ事は確に安心立命が出來て宜いだらうと思ひます、私は毎朝何の神樣を拜するといふ事なく只心の中で拜がんで居ります其爲決して不道德な行は心がとがめて出來ませんから一は若い者の精神修養にもなります。

深くは無いが論理亂れず、穩健な考へてもあります（評）

【秀逸】

○美しい印象

京都市　春日朱實

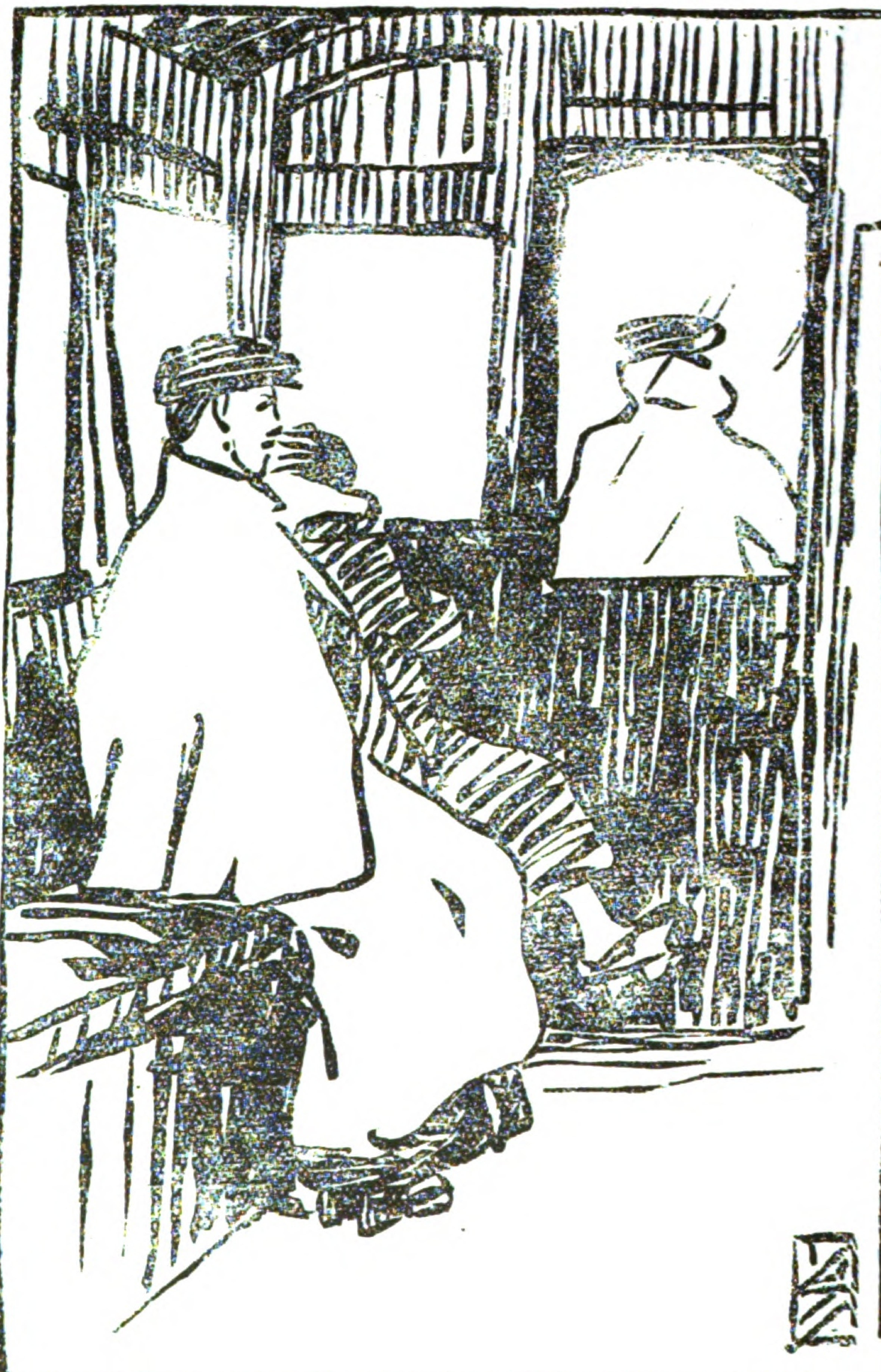
朝の雨淋しくなりぬ紫の傘さして七人去れば。晶子

朝から雨が降つて居る、しとしとと柔かい溫みを含む

だ、絹絲の様な春雨が静かに降つて居る、柳も芽を吹くてあらう、花も蕾を膨らすてあらう。斯うして窓に倚つて外を眺めて居る、妾の胸は今静かてある。

此叡の嶺は春雨に白く掻き消されて、裳を長曳いた三十六峰の紫も褪めて了つたしかし雨は未だ降つて居る。九重の宮居を籠めて木立を閉ぢて衛門を鎖ざして頓ては京の町を白い綾の帷に包むで了ふのてあらう春雨はしと〳〵と降つて柔かい土を潤らして居る。

廣い御苑内は常よりも一層寂として、太古の様に淋しい、木の葉を濡し枝に雫し芝生を濕らし、橋の擬寳珠を濡らし池に漣を立てゝ、春雨は降つて居る、甍は烟り壁は霞むで、木立は糢糊として苔を咽び、池の水は白く烟つて居る、鶯も啼かぬ静かな朝た、春雨の微かな響、葉に雫する音、芝生に注ぐ音、漣の



電車の内　　名古屋　袖乃

微妙な響それより外には何の聲も聞えぬ。餘り靜閑なので一人居ると淋しい徒然を窓の外に降り注ぐ白い一筋に瞳を注ぐ。

白く烟つた黑い堺町の御門から蛇の目の傘が現はれた。二つ三つ、六つ七つ靜かに紫の蛇の目が、白い春雨の中を指折り數へてゐる間に進むで來る、七つの傘の隙に閃めく白い顏、垂れた黑髮が搖れて、緣へるリボンの數も七つ、白黑赤靑黃紫茶藍、裳裾が搖れて爪掛の高下駄が奇麗に揃ふて前へ進む。小脇には紫や緋の包を抱へて、白い纎かな指は傘の柄を握り乍ら。

黑い涼しい瞳がフト此方向いた。確かに其中の紫が。

春雨は靜かに七人の少女の傘にも音を立てる、ホホホホホホ、溫かい肉聲が雨の中を響いて來て、緩かな笑ひ聲が可憐に聞える、動かなかつた、紫の傘が七つ共少し搖れた。

蛇の目の傘が七つ霞むだ白壁を横に曲つて、行つた後は又春雨が烟つて、紫の幻影が瞳の中に髣髴として浮ぶ。

未だ雨が降つて居る、妾は少し淋しくなつた、

妾は印象の美しい歌だと思ひます。

處は舊都、時は春、雨も靜かな雨の朝といふ出合ひもの揃て、美しい書き振りには圏點惜みの選者もつい朱點を多く打ちました、尤も此原歌の意は此解釋の樣なのでは無く、先年新詩社を某々七人が出た時の感を詠まれたのだと聞きましたが、勿論此解釋のやうにも取れる、其處が名歌の名歌たる所以（評）

○女子の書簡文

神田　伊原千代子

すべての文章が口語文となるのは遠い事ではありますまいが、私は女性が文殊に日用文などは「候文」よりも口語體の方がよい樣に思はれます。

此の口語文の興つたのは云ふまでもなく從來の文章があまり形式的で自分の云はんと思ふ事も文字に支配されて思ふ通りな事が書けないところから、適切に自己を現はそうとする以上自然に斯うなる事でありましよう、それは兎に角、女子の文章は比較的男子のそれよりも曲りくどい樣に思はれます、それは日本の女子が內氣である點が自然文章の上に現れたのであるかも知れませんが、又如何に思想よりも重きを文章に置いただかゞ證據立てられは致しますまいか、例えば昔からの書簡文を見ても女子のは長くばかりあつて要點はほんの少してある樣な事が少くありません。それにまた「候」とか「かしこ」などや「まいらせ候」などは語尾に用うる語でありながら痛切に響きません、殊

に「かしこ」「まいらせ候」などは形式一片、文章の形の上からは宜い樣ですが眞の要事には何の功もないてはありませんか。そこを「です」とか「ます」とかすれば要件に直接而も痛切に響きは致しますまいか其の外すべての點に於て女子の書簡文はもつとも口語體にする必要があるゝ思ひます。けれどもあの「何々だわ」「よくつてよ」などは非常に先方の感情を惡くする事がありまた下品でもあるからあまり使はない方がよからうと思ひます。

論じて未だ其根本に達しない嫌はありますが、まづ是れ丈けの不自由の點も勿論存して居りませう（評）

○服裝と言語について

三重縣　山崎初子

私考へますのに、人は男女に拘はらず服裝を其身分に應つた樣に爲なければ、他人の笑ひを招く基だと思ひます何故なれば、御互に識らぬ人同士でも、先づ服裝を見て大抵は其の人の心を讀みますからなのです。私の知つてる人の中でも、女學生でありながら毎日々々コテ〳〵に白粉を塗つて學校へ通つたり、官吏の娘でありながら空色縮緬の前垂をする人があります、兩方共實に見苦しいとも何とも譬へ樣がありません。それと反對に高島田に髮を結つて、餘り色の白くも無い方ですのに、素顏のまゝで平氣に歩いて居られる人がありますが、此れも見られた見樣じやありません、彼麼位なら一層はじめから島田なんぞ日本髮にお結ひにならんがいゝと私は思ひました、之は私ばかりじやない何方でも其う思はれた事と存じて居ます。それから又言葉です、言葉は自分の思想を人に傳へるべきものでありますから、明瞭に通じさへすれば宜い樣なものですが、左樣ばかりは參りませんから、隨分心得ねばならぬ事と思ひます、譬へば言葉が餘り嚴い爲に人の怒りを招いたり、又言葉の汚ない爲に、友達から忌み嫌はれる塲合が少なくはなからうかと思はれます．如何程立派な服裝をして居ても言葉づかいが惡いと其人が卑しく見えます、男は兎に角女は又格別です、それから田舍に居りながら、生かじりの東京辯を振り廻す人がありますが、これも誠に聞き苦しいものです。て、私は其の土地々々で使はれて居る中流以上の人の言葉を用ひたならば假令方言が交りましても聞きよく其上上品でよからうと思ひます。

以上の二事については私共が常々反省を怠つてはならないと存じまして見聞の感じを書きつけて見ました。

公當の見（評）

○草花の研究

福岡市　田中とよ子

理科の先生がよく、貴女方は如何な心で草花を見ます

か只美しいと計りでせう、何植物で花の構造は如何とかは研究しないでせう夫れだから困る是れからは研究なさいさうすると觀察力もつくし理科的智識敎訓も得らるゝと私は此の語は餘り酷かと思ひます、誰でも食事の時此の飯は澱粉が何うの蛋白が何うのと考へる方はありますまいあゝ有難い美味しいと御食りなさるでせう夫れと同事で特に或る目的を持つて見る人は別ですが誰でも草花を理科的に見る人はありますまい、夫れならば美しい優しいと感ずる外何も得る處はないと云ひますが、大にあります人が其の草花の美に醉うて居る時の心には草花より外にはありますまい實に花の樣に美しいのです其の美しい心にひゞく物は何ですかこゝです、昔から花は櫻に人は武士とか、梅は理想の女とかいろ〳〵、人を敎へた、諺語は理科的にわり出されだ者でせうか、私は否と信じます夫れで私は一寸草を見花を見て迄も葉が如何の、根が如何にと研究する必要はないと信じます、又研究の方々は別にいくらもあらうと思ひます。

あなたは研究の態度といふのを根本から誤まつて居はしませんか、「美に醉ふと云つた風な」觀照的態度は結構ですが同時に研究的態度を蔑如するとも出來ません、殊に若い修養中には其れが必要なんで、先生の仰しやつたとか云ふ語は聞ても無く極めて適切でせう、科學眼と審美眼は決して兩立しないものぢやなく藥の分拆する人でも飯は美味い、植物學者は花の美を認めないとは無いのです「諺語は理科的から割り出されたものでせうか」なぞと圖子理窟を捏れるとなくその美しい感情と共に折角理性をもお養ひなさい（評）

○交際　河内　倉とし子

近くの人の交際はたがひにかたらひ共に遊びなどして誠に樂しいよろこばしい事と思ひますが一度も顏も見ない言葉もかはさない人と永遠とかの交際して手紙なり葉書の取りやりを致しますかそれが何程利益があるでしよう、さう云ふ私も一月文壇で交際を願ひましたら澤山のお友達から手紙やハガキやらを戴き初めの內は地方の面白い話しなどで面白う御座いましたが四度が五度となりますと話もなくなりますと云ふて此まま捨てるにもなんだか心もとない思ひが致しますだからくだらない走り書きして出してなんのやくにも立ちませんそれよりか其切手代の內一錢でも貯金してまづしい人に上げたらどんなに喜ぶでしよう。

友誼は遠近と、面識の有無にかゝわるわけもありませんが、近來流行の所謂書簡交際の如き交誼の墮落だらうと思はれる、それは交る時の要求態度が旣に間違つて居るので、その結果お話しが無くなれば永遠の交りが永遠の左樣ならになるのです、親友の出來るのは果實の熟するのと同じです私は今日の樣なお互ひに、利益づくで交際するとの流行るのを嘆くのであります。（評）

新論文に就て

○諸孃の御勉强に依て投書になる作物にだん〳〵佳作が多くなつて來るとは每號の雜誌でゞも分りますが、猶ほ限りある紙面に掲載し切れないのも隨分ある位です。しかし又欄に依ては比較的進步の無いのがある樣なので、紙上で見る所に依るも新論文の如きは何の號もあまり振は無い、昨年中天賞に擬せられたのが二個丈けですこれは他の美文や詩や小說の欄の盛んなに比して尠からざる遺憾であります。尤も此不成蹟も考

へて見れば無理は無いので實は、作文としては美文よりも小說よりも短文よりも六つかしいかも知れぬ、又婦人としては男子の樣に眞正面から侃々愕々と遣るわけにも行か無いとは十分諒しては居るのでありま す、がしかし又寄稿を見ると何か考へ違ひは無からうかと思はれる點が無いてないかと一通り其邊の心得を申し上げたいと思ふ。

○投書の中には論文だか敍情文だか分らない樣なのがある、こんなのは大抵『感じた儘』とか『思ひのまゝ』とか題したのに多い、もとより爰に議案があつて其れをどうかうと言ふのでは無く、又殊更に理窟の爲めに理窟を捏れる必要はないので、『感じた儘』實に結構です。けれ共感想そのまゝでは論文と云ふのは如何でせう、中には幾回刻苦して投書をしてもいつも沒書になる併し自分は撓まずに勉强すると云つた樣なとが論文となつて來るこんなのは幾百回來たつて採用するとは出來るものぢや無いのです。で、皆樣が感想を捉へたとする、それを感興のまゝに書くと云ふのはこれは美文で論文では無い、論文と云ふのは最初感情に依て認めた事であらうとも、それを一度理性の前に出して八方から觀察し査覈して錬り上げた要領を得た結論を持て來なければならないので、夢の樣な美くしい文の中にも一筋眼りした理路の通つたもの、自分の告白であつてもそれに說明とか批判とかを加ふる態度が無くてはならないのであります。



五月雨　神田　白井津奈子

○又一つには題材の取り方に困難がありませう、これも重々お察し致しますが、又よく考へるとさうにも限りますまい、遠い處から目を戻して近く顧みて周圍を見たり居常を考へたりする時には人には何か感じることがあります、それが又決して夢の樣なとばかりでは無く、儼として存する現實の問題でそれぞれ意見もあるものです、さういふ時に理性を喚び醒して敎育して見るも好からうと思ひます、論客と云はるゝとはお互好みませぬがどうか理性の頭腦のある人ではありたい、その修養の爲めに多少論理の考へにも親まれたいのです爾うして論壇を賑はして欲しいものです。（選者）

散文詩



○規定　詩歌的情緒を口語を以て綴るべし形式は問はず凡て自由なり所謂口語詩の類にても可なり二十五行以内にて凡て振假名を要す賞は乙種

○星（天賞）

丹波　鹽見喜代子

春の夜、ぼつと曇つた空を、じつと、ながめてゐると、何かゞ雲の奧から覗いてゐる。星だ。しかもあるかなしかの赤い星だ。じつと見てゐなけりや――一瞬でも眼を離さうもんなら、再び捉へる事が出來ない小さい星だ。星はおく底の知れぬ深い深い雲の中から何か叫いてる。それは自分にだ。何を言つてるのか。おゝ、聞える。彼は不朽、不死と云ふ樣な事を叫いてる。小さい誇！そうだ、大空の瞳と地上の人に歌はれてゐる彼、小さい星はそれが唯一の誇なのだ。しかし我々には活動がある。自由がある。思うまゝに樂しみ喜び悲む事が出來る。けれども彼等は引力と遠心力と云ふ大きな鎖でつながれて、宇宙間を引つぱり廻されてゐるんだ。

おゝ、小さい星は、日中の猫の眸の樣な小さい瞳で闇から覗いてゐる。あゝ今少し雲が動いたら、消えて仕舞うだらう。

奇喩、意表に出づ、天に一の星あるよりも、丹波の奧、此小詩人の現出を欣ぶ（評）

○暗夜のおもひ（地賞）

信濃　イリス子

戀人から受取つた手紙の意味をシャボンで手を洗ひながら繰返し〳〵思つてゐた、北窓を開けて青葉をかへる日光に射られて白絹で作つた直垂樣の衣を着て居る。

自分はいづれ遠い未來には白色の像になる――その姿を目のあたりに見た、すき透る程美しい細長い水色の衣を裾長く着て宙を歩いて居る美人が水晶の細い線で作つたような薄すらした編物を曳いて來て其の像にさらりとかけてくれた。――あゝ何物も觸れないで下さい。どうぞどうぞ、この私の靈の白雲のように浮んでそして安逸な樂しみに耽つてゐるこのしばらく。あゝ私の眞の振舞はこれなのに――私の眞の價値をみとめる時は今なのに！――なぜなぜあゝけれどこの思ひのひまに其の姿はもう消えて仕まつた。

常に或る限りなき寂しさに伴れて來る光なき吾が生涯を思つては、さすらひゐる吾にはこの眞善眞美な瞬間

めめぐり逢には常に霧一重へだたツてゐるのだ、追へども、もとむれども頭ががん〳〵するだけ　もう永遠に逢ない。
にくらしい、時計は遠慮なく暗をまもつてひびいて　ゐる……。

暗夜の窓の一瞬間、眞に美なる、眞に善なる、わが姿の幻覺を見ると云ふ着想、寧ろロマンチツクのものであつて、自然主義、若しくは印象主義、象徴主義などの領域に入らないものであらうけれど、態度が如何にも現代的で、且内容的のものである（評）

○幻滅（入賞）

神田　伊原ちよ子

「幻滅」――と言ふ文字を見て、詩を作つて見ようと思つた、思つたが出來なかつた。今度は「幻滅」と言ふ事を考へた、深い坑を辿つてゐるやうな氣がする。
「窓」――暗い窓から巷人のとゞろき騒いてるのを眺めやつた時の感じ、深い意味がある。
「空木」――思出の幹、悔の枝。
「瓶」――瓶の中の水のいろが、時〳〵變る。――
「青」――誰かの、色を象徴した詩を見た、青が一番冷い、さうして鋭いことを失つた女の胸だ。

筆鋒が鋭い、男の作とも、女の作とも分らぬが、都會に居る文學好の若い人の作と云ふことは確かだ（評）

【秀逸】

○辻占

近江　小西あい子

皆、風呂へいつた。殘つたのが私一人。
靜に……淋しい……種々の事を考へる、ふと思ひついた。
未來の私を占なつて見ようと。
密柑の汁を絞つて書く。……辻占だ。
乾くと直消えてしまふ。
文學者、商人の妻、乞食、音樂家、等
七八枚。
神に祈つた、どうぞ私の眞實の運命を教へて下さいと。
さて焙らうかと、火の上に翳しかけたが
何か恐しい物を見る樣に躊躇つた。
遂に翳した、黄色な文字が出る。出たは何？。
と手から落した、直ボーッと燃え出した。
ぢつと見詰る、灰になつて了つた。
後のも、見ない内に投げ入れてしまつた。灰にした。
出たのは、――乞食――だつた。

此作者附記して曰く、「私は散文詩と云ふのは、これ迄作つた事が御座いませんけれど皆さんのを拜見して作つて見ました、散文詩とはこんなもので御座いませうか、」選者答へて曰く左樣こんなものです（評）

○駒鳥

攝津　寺部君子

お客樣の時などに、ひつきり無しに啼れると煩さい程やかましいが、又慰められる時も有る、駒鳥は什う仕

たのだらう、今朝からかたりとの音もさせぬ。誠に靜だ。見ると止り木に止て凝然と仕て居る。寒むいのかしらと火の傍へ持て來てやつた。するとすうと目を閉ぢてばたりと落た。アッと思うた刹那。大きな聲て啼き出した。

妾は心の目を閉て居たから、陰府て啼いて居るのかと思ふたら、矢張目の前。籠の中て啼いて居る。

だましたんだよ、惡らしくて可愛い此鳥。

詩歌的情緒と云ふやうなもの、流動はしてゐないが、兎に角可憐の作だ（評）

○夜の衢

下之關　水野谷子

衢を歩いて居た。

華やかな電燈の光に浴びて若い人、老人、美くしい、賤しい人や車は絕えず行き來する。

飾りつくした店の中――私の欲しいものも澤山あつた。

ふと空を仰ぐと、幾萬の星が輝煌と瞬いて居る。――遠い、空は如何にも靜かなやうて此の賑かな中に寂しい感がして何と言へぬ悲しさが心に湧く。

何故私は、此の賑やかさがうれしくないだらうか

大きい看板の前を俥が馳つた。

手に入つた處があるけれど、上手に過ぎて眞摯の氣を缺く（評）

○川のほとり

下谷　細谷鏡子

小川のほとりに立つてさつと耳をすますと、

些やかな流れの音に身も心もひきつけられさう、

あゝ此水はうね〳〵してどこまて流れてゆくのだらう、

もし此流れに添て行つたなら必と面白い所へ行かれる樣な氣がして

つと川下へ足をむけた、

白い洋傘をさして氣持のいゝ暮春の風をあびながら。

行けば行く程川はゝがだん〳〵せまくなる、

もしやこれて終に川がなくなつてしまふのかしら……と思ふと何だか心細い。

來た道をふり返て見ると川すじはまるて白布を引た樣だ、何處からともなくスーッと生暖い風が頰をなてる、はら〳〵と水の上に花が散つた……薄紅の櫻の花が、

そして水にうづまれながらおぼつかなく流れて行く。

此作、もとの題は「運命」としてあつた、そして櫻の花が流れてゆく處から以下、まだ數行の句があつて、運命を說いてゐた。けれども元來、運命と云ふやうな題をつけて、運命其ものを說明したり、比喩したりすると云ふのは拙いことて、最新式の散文詩などの題材としては甚だまづい、白い洋傘さして櫻のちる川べりを歩いたと云ふことだけを歌へば澤山だ（評）

○一人て淋しい　長崎　あい子

一人居ます。母と妹は湯屋に行つた、私を殘して、此六疊の室に、ランプの光は限りなく此せまい室を照して。柱の時計は今さき八時をうつた、机にまつる新佛今日て三十五日氣がちがつてくるいまはつてとう〳〵死んてしまつたあゝわが父私も父の後を追ふようだ。ふと天井を見つめた、いやな思ひ、母たちの待ち遠しさ、あゝ一人て淋しい淋しい。

○目白　平戸　伊知子

今日は近頃にない好天氣部屋の東窓を開ると太陽は十時頃の時刻の所に上つて入る、築山の椿の木に花の密を吸いに來た目白が五六羽居る。私は此の目白が一番好きだけれ共捕ふる事は好かない、て弟逹の捕つて來て居るのを見ると可愛くて〳〵堪らない、先日も私が敎へて漸く放させたら目白はさも嬉しい想に向ふの森やぶに飛んて行つた。

○線香の煙　銀波

淋しい、見て居ると猶淋しくなる。見るの止さうと思てゝ遂見たゝなつてしまふ。始めは太くてだん〳〵細く、薄く、なつて消えてしまふ。又下を見ると太く出る、そふして又消える線香の煙。

○いやな日　播磨　木村紫水

頭がふらつく——。目がくらむ——。如何して今日はこんなだらう。敎壇に立つて、言はふとすると、口がしぶる、書かうとすると手がふるふ日常なら、愛らしい、無邪氣な顏が、今日に限つて、憎氣味惡く、笑つて居る樣に見える。胸がいたくなつてきた、あせればあせるほど、ああいやな日——。もう駄目——。

○子守　紀伊　蒼生

「れんれしなはれ、れる子はふとるよう」「おきてなく子は、やせまするよう」と、節面白く、うたいながら、せななゐなく子た、ゆすぶつて行く乙女……、彼は子を守るなり無邪氣なること、日每……ふし面白く、うたひながら子を守るなり

○雲の足　岐阜市　篠田とみ子

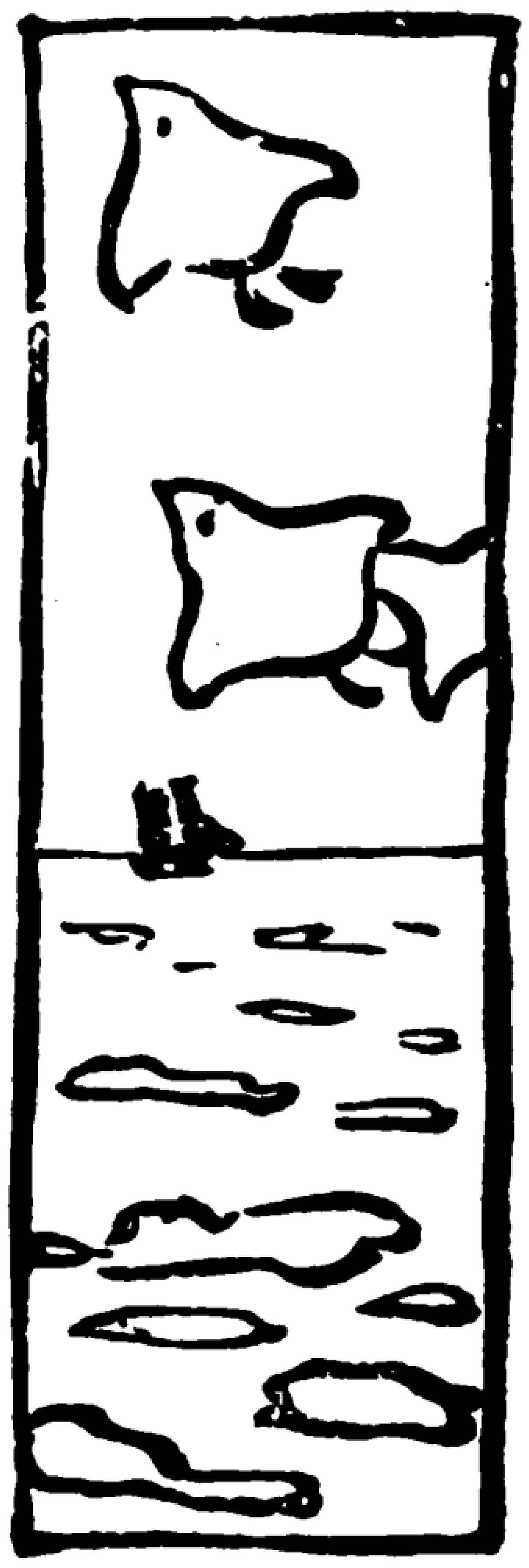
私が歩いてる道は白い、すうと風を切つて行き過ぎた自轉車の人は、早や五丁程背合せだ、あら白い道路が黑くなつて來た、私は彳んてしまつた、埃ぢやあ無い煙ぢやあ無し、黑いものは私の方へ近よつてくるらしい、と同時に私の影がうすいと氣がつく、ずつと見廻すと倉庫の屋根が半分光り、馬鹿なつ、よう見や白い雲が手の屆きそうな邊をふわふわしてるんだ、私は歩き出した薄黑影と別れる刹那、下むいた私の頭の影と、出した右足と右手の梅の花先半分の影とが、きつかり黑い、一步二步……遂に別れた……ふりかへりふり仰ぐと銅の電線のキラ〳〵がこつちへよつてくる、雲の足は遲い、私の步は早い。

○夢の顔　松山　ぎよう子

それは十二の頃だつた。宵々の短かい夢に、意味の分らん男の顏が——瞳の光つた鼻の高い三十位の男の顏が——私につきまとひ〳〵、兩手の指を胸のあたりてゆるく握つて、右左上下に早く〳〵振り乍ら、唯一心に私の顏を見つめて居た。位置はと云へば近よらず、遠のかず、突然と浮び出て又朧と消へる。そして其顏が私と向ひ合つて——口もかすかに振つて居た樣にも思ふが——手わなゝき始めると共に、私の身體は、身體はもう唯糊てもつけられた樣になつて終つて……しびれ振ふて、居ても立つても居られないのだもの。手も足も首も動かぬ。聲も出ぬ。唯不氣味いあゝ左樣だ。それよ外に云ひ現はし樣がないもの幼ない魂は晝日中にも此顏を幻に見て苦しんだものだつたが、あの顏は何處の誰やら、今頃は誰の枕上に現はれて居るだらう。オヽ顏！夢のかほ……。

短文

中村文學士選



○規定　短くして氣の利いた文章を募る　十二字詰七行以内凡て振假名つきハガキは許さず一人一事に限ること　賞は丙種を進呈す

○桃

神田元子

まあっと思ふ間に、もう孝ちやんが落して了つた。未だ眞靑な、あんな桃を今から落して、何にならう。踏みにじつてゝも、樂む心算か。あの儘十分枝て熟させたなら。……思へば、似てゐるよく似てゐる。女の運命に、妾は心細くてならぬ。

妙手

○春宵

鳴澤ゆり子

幻の樣な夕月は。向ふの屋並を越して。磨出しの亂格子を透し、淡々しい影を落す。靴ぬぎに東形の粋なのが一足、奥には話聲もない。しんめりと落付いた庭の。掛燈籠に折々花が誘はれて來る。何んと靜な宵！。横町を流す新内節の音が。霞を縫つて絶々に……。

春宵價千金

○魔

松山市　曉子

探りの手を止めて、櫛の沈んだ井を茫然と覗き込んで居ると、水が澄んで其底に私の顏が明瞭と寫る、何だか笑つて招いて居る樣だ、私はしらず〳〵次第と井をのぞき込む。今はもう井と云ふ感じも、影だと云ふ感じも消えて終つて……あゝ、魔がさすとはこんな事だらうか？私は我れに返つて、覺えず身ぶるひした。

かういふ場合はよくあります。

【秀逸】

○日の出

紀伊　室井白舞子

鷄が鳴て、雀が鳴て、鐘が鳴つて、末の赤ちやんが一しきり泣て、浦出る舟の勇しき掛聲が聞えて。お兄樣の冷水浴なさるはね木の音に、夜は全く明渡つた。私は例の深呼吸に一息強く吸込む時、其勢ひにお日樣が現れました。

佳品

○孤獨

靜枝

白梅が闇に高く薫る宵、微かに痛む胸のあたりをしつかり双の手におさへて緣の柱にもたれて居ました。じつと眼をつむると眼尻からほろ〳〵

涙がこぼれます。淋しくて淋しくて誰にか遇ひたいのです。誰でもよい、誰でもよい、私を惡む人でも、只遇いたいのです。

危險ですれ。

○春雨の夜　信濃　ふみ子

闇の中に目が啓いた、夢のように雨垂の音が聞える、春雨が降つて居るのだと思つて、煩さく寢がへりを打つと時計が一つ力なく鳴つた、眼を閉ぢ乍から胸に手をあてゝ、血の流れる微な脈の響を聞くと、それが丁度細い雨垂の音が闇の中から聞えるのと一致して、今にも斷えさうて僅に斷えない。

早く夜が明ければいゝ。

○落日　若狹　津田汐汀

秋の末、丘に立ちて落日を見た、丁度、一團の猛火が轉つて行く樣て黃葉して居る森を悲しさうに見せて居る、靜寂と悲哀との情が天地に漲ぎつて、今日の一日、今暮れて行くぞ、と言ふ樣な、その落日、

自然は詩なり。

○小間使　麻布　さく子

桔梗色に櫻草の江戸褄、孔雀羽刺繡の丸帶を、ピタリとお立矢字に結ばれ、姿見の前に立給ふ姫樣に、首掛の黃金鎖を參らす時、「お姉樣まだ？」と妹姫樣。燃立つ樣な眞紅の御洋裝。あゝ我れとても妹ある身よ。共にこの樣に寫眞撮る時は何時‥‥?!

姿のみを逐ひそ。

○煙　熊本　峽よし子

火葬場の煙突から立ち昇つた煙は、重い水蒸氣の爲めに壓せられて、鈍色の破衣を着た樣な各枯の木立をスーッと掠めて何處へか消えて仕舞つた、嗟其刹那私は思つた、人世はあの煙の樣なものだと——。

その意味は?、

○鶯　備中　阿部貞子

「おや啼いたわ」

「何がね?」

「鶯よ!」

「ほんと?、何處に?」

顏を出さうとする途端に窓の格子てしたゝか鼻を打つた。

額てはありませんてしたか。

○冬の夜　天鹽　山田一穗子

「オゝ豪いなあ——未だ灯が見えるぜ…」お義兄樣の角ばつたお聲ハッとして灯を袖て覆つて暗くする暫くして亦心を閉るふして書く、こうして皆樣のお寢みになつた後て原稿をかくのです書き終へた頃は爐にも火鉢にも火はなくッて手も足も冷へ切

りたのを耐へて音のせぬように臥床へ入るのです。

賽舟な酒がない樣になさい。

○他人

熊本　川崎道江

よく祖母が、他人の御飯には骨があるよ、と申されましたが、何の事かと思つて居りましたが先日從姉から他人と云ふものはこわい者よとしみじみ話されて初めて悟りました。今迄遇つた他人の方は、皆いゝ人でしたが此後眞のこわい他人の方に遇ふのでせうか。

きつと遇ひますとも。

○春の雨

大阪市　木村花子

天井からさげた花瓦斯の灯影に、紅紫樣々の鼻緒が、餞隠れの花の樣、薄暗く奥まつた下駄屋の帳場には白い顔がほんのりと浮んで居る、まだ世帯なれぬ新嫁の艶々した髷には赤い手柄が美くしい、暖かい春の宵、雨はしと／＼と降つて居る。

柳は青く煙る。

○あの邊り

奈良　中富よしみ

小さな低い山々が荒浪の樣に起伏するはるか彼方、少しく高いあの山の山腹、あゝあの邊りこそやがて我永久の住所かと思へば、樣々の空想が雲の樣に湧いて來る、さはれあの人は今頃あの邊りよりこちらを望んで、同じ樣な想ひに耽けつて居るかしら。

げに詩的境遇！

○たいくつ

山口縣　椰良美奈子

雨上り好く日のあたるゑん側て、お裁縫して居ますと、やわらかい／＼春陽にとろかされた樣、あまり焦つたさに鏡を、立てゝ顔をさしたら、長さが六寸三分巾が四寸八分、鼻の高さが七分、口が八分五厘、――之て色が白かつたら!!!!悔しいと、不思議物尺なげだした。

精々御みがきなさい。

○虹橋

秋田縣　園子

漸々夕立が止んだので、立籠めた雨戸を開け放すと、いつしか東の空に七彩の虹橋が掛つて居た、あまりの美さに暫見惚て居ると、折しも南方から宛然白衣を粧ふた女神の樣な大雲が飛んで來て、ずん／＼ずん／＼渡りだした。

壯大

○私の望

信濃　赤津じつ江

ポカ／＼と暖かい春の日。私こんな時には針を持つ事も本を見る事も、字を書く事も、御飯をたべる事も、寢て居る事も、起きて居る事も、何にも嫌、たゞあのお月樣になつて、

美しい花の國を一目に見たいと思ふのてあります。

御尤も。

○千曲河畔に立ちて　　信濃　蝶子

未だ此河へは春は來ません。河は一面に氷つて居ますもの。もう彌生てすのに春の夢を見樣とも仕ないのてせうか。若いさゝやきも聞えません冬の儘な枯葦がザワ〳〵云つて、何鳥か河の面をスーッと舞つて行きました。何時春が來るのてせう？。

首はおのづと垂れました。

○運命　　門司市　辻本愛子

寒い夕暮の町を首も手も縛られた瘠犬が、五六人の男の子に引張られて來た苦しそうにもがいては死狂ひて反抗して居たが、遂々敗けてしよぼしよぼと從いて行つた、いくら騷いても行く處迄はどうしても行かなければならぬのに、「馬鹿な犬だ」、と私は叫んだ。

○十坪の庭　　駿河　しぐれ女

夜の間に降つた春雨は、明け方静かに晴れた。わが十坪の庭の草や木は皆新らしい芽をふいて、その一つ一つに美くしい露の白玉を宿してゐる、アレ風もないのに、枝垂れ梅の枝にぬいた玉がホト〳〵と續け樣に土に落ちた。

と、どこやらで鶯が。



汽船スケッチ　本所　安藤エイ子

○零落　　美濃　篠田健子

俥の音がガラ〳〵として。隣家の綾子樣が、日曜てお歸に成つたのだ、鰕茶のお袴を召して流行の肩掛に、白い頸を埋めて莞爾々々して、門をお入りだつたのを、私は、破れた障子を細目にして見ました。世が世て在つたら私も・・・・

おもはず涙が・・・・

○愉快なりし日　　美濃　加藤芳子

妾は隣村なる叔母の家へ行く途中、村の小兒等が、龜をつかまへて、慘な弄りものにして居ましたのを見て急に浦島さんを氣どり、其を買受けて、村端れの三池へ逃がしてやりました、此の日は終日何となく、愉快でした。

薄暮の味！

○ゆふぐれ

大阪　今西春江

裏庭へパツパツと水を撒くと、入り殘つた太陽の輝が倉の白壁に照つて壁の輝が今打つた計りの水溜に反射して、處々にあるのを赤く染めた。染められた水溜はチラ〳〵と淡い輝を出して、離坐敷の新らしい障子へ小さい丸い玉を幾つも描いた。

精緻な觀察。

○沒書観

下總　石原くら女

沒書になると先生の惡口を云ふとか編輯局の惡口を能く云ふ人が有りますが我は反對で沒書になるとなる程一心になりまして人を怨む樣な事は少しも有りませんて其の力の足らぬのを怨んて居ります。

よい心がけ。

○姉の敎へ

佐藤しな

まだぬひはじめの時、もつれた糸をきらうとしますと、側の姉が、それは神樣がおためしなさるのだから、上手にならうと思へばおときなさいと申しました。其後私は上手にならうの一づにひまをかけていつもときました。姉去つて始めて、私は裁縫以外にこの敎の尊い事を悟りました。

この心掛けを萬事に應用おしなさい。

○機の糸

淡路　加藤菊子

機になしたる糸は幾條も有ますから切れない樣でも刃物を觸れるとすぐ切れた、人も矢張百人の味方を得るよりは一人でも敵ない境遇を歎ばねばならんと思つた。

又一見識。

○梅を植えて

和歌山　木澤てる子

梅をうえてその香を賞するか、いな、實を好むか、あらず、しからば何故？、やさしき人の名のこひしさに!!!!

風雅、

○草の匂

大阪　草村きみ子

秋落葉に淋しき我世を泣いた此野、今綠蔭の下で靜なおもひに耽つてゐる、秋枯れ春萌える大自然の下、あゝ人は野の草に及ばぬのだ。短きは人の世の春としみ〴〵おもつた、靜かな野の晝、鳥が啼く。名もなき草もほの匂ふよ——

自然の力。

○長閑

水戸市　北村花友

「花に埋もれた八百八丁江戸の廣さは四里四方」と美しい聲て馬子が馬をつれて菜の花道を唄つて行く、小蝶が二羽ひらひらとその後先を飛んで行く、春風がそよ〳〵と菜花の上をなでる、遠く農家の雞が一聲長閑に、

野邊。

○古驛の夕　　信濃　小池怡智子

横の小路から嗄れた豆腐屋の聲が洩れて來る。薄暗い軒下に「御休所」と書いた煤けた看板が下つて居る、湯屋ても湯がわいたと見えて旗を出した、役場も終へた相て野暮な村長さん禿頭を撫々蹣つて行く。

鎭守の森に鳥の聲。

○牧場　　盛岡市　四戸波江

うらゝかな春の日の牧場。陽炎は地上三尺。白い羊の毛が春風にぬけてふは〱と飛んだ。小犢は眠むたさうに草原に寢てゐるムウー、いと氣長がな牛の一聲が何處ともなく聞えた。

長閑。

○日課　　丹後　高田きんか

山から綴ひた岩と岩との間から清水が永久に絶らぬ響て迸り落ちるのをくみて御飯を炊しぐのです、山畑に行きまして耕して居ますと、私の横に鶯が唄ひますし、廣々した野や舞鶴の町や白い帆の見ゆる海までも見ゆるのです。

清爽。

○面白い體操　　徳島縣　吉田紫花

二階の窓から見て居ると、面白い體操が始まつた、蛹樣が教師て物干竿の前に立つと、續いてスツキリと垢の落ちた白襯衣を先頭に、三枚の襯衣が前へオイと進行した、止つたと思ふと腕を伸して程よく間隔をとつた儘身動もしない、胸に並んだ貝製の、鈕が朝日に光つて居る。

○秋の風　　京都市　春日朱鷺

鼠色に曇つた空から冷めたい風が吹くと、手盥に氷の様な水が鏡の様に光つて搖れる。妾は毎朝鹽て含漱する。楊子を洗ふと手盥の脚の邊に褐色柳の葉が動かぬのに氣が注いた。白い鹽がペラ〱落ちる、よく見ると黑胡麻の様な斑點がある。蛞蝓だ、蛞蝓だと口の中に繰返して見た。

○暖　　伊豫　井上いち子

ペツと障子に暖かい春の日が當つたので室中が明るくなつた、讀書に倦んだ私、縁へ出ると猫が蓙の上にぬく〱と寢て居る、傍の梅の花が一ひら散つた、もう他には何の音もない、余り靜まり返つて居るのに堪え兼れた様して鷄が鳴いた、又續いて隣からも啼くてあらうと耳をすましてる。

○旅の月琴彈　　静岡　根岸鏡子

梅の花のほろ〱散る夕方、旅の月琴彈らしい姉妹が來た、姉妹共赤い紐て結んだ編笠を被つてゐる。さうして、國なまりの多い聲て唄つて行く、紅い夕日を背に浴びて話しながら行く後姿を、私はじつと見詰めて、何とはなしに涙含まれた。

○鶯　　府下　照井みどり

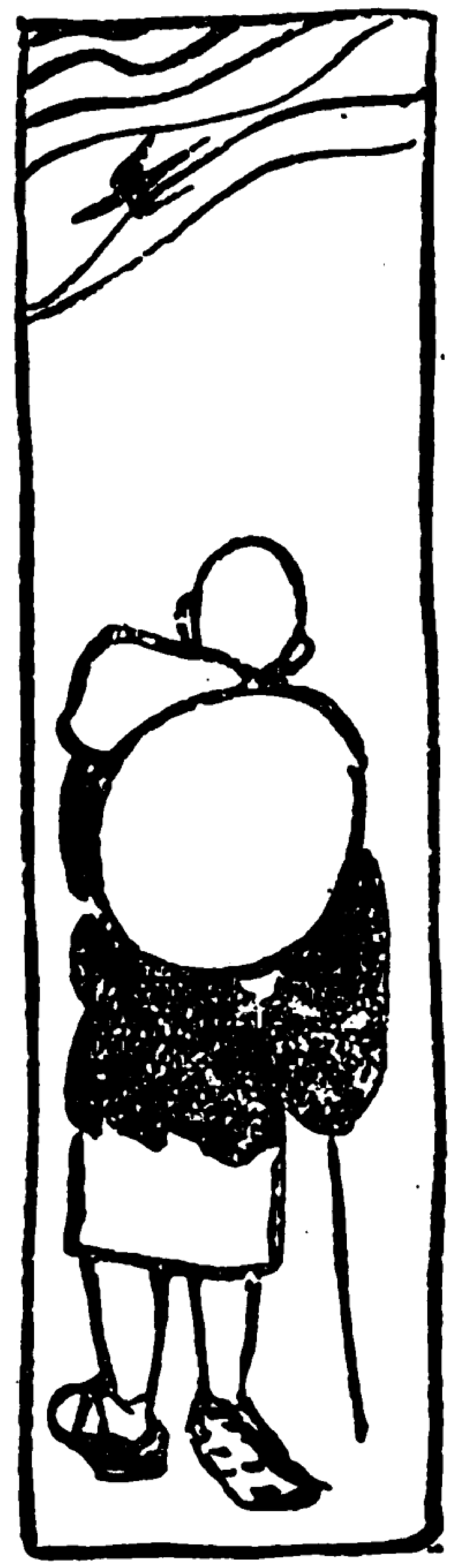
「おら姉様」ッていふ妹の聲にふと中拔の硝子越しに御椽を見ましたら瓶にさした梅が枝に鶯が……さも樂しそうに枝うつりして……きつと金絲雀の聲にさそはれて來ッたのでせう軒の籠には金絲雀が可愛い音を啼いてをりました。

○好き　　東京　美登里子

春は春風そよ〱と吹く日爛漫たる櫻花の下を歩く時が好き、夏は皎々たる明月の下に團扇片手のそゞろあるき秋は千草にすだく虫の聲を聞きながら書よむ時冬は萬字巴と降りしきる雪を硝子越しに眺めるのが一番好きてございます。

俳句

内藤鳴雪選



○規定　同じ材料で二度以上使へば陳腐になるとか剽竊になるとか言ふ人もあるが餘計な心配である前の人と異つて他に轉換して活用して居れば幾度同じ材料を使ても差支ない（鳴雪）一人一句限賞丙種

○（天賞）

鐘を鑄る炎の上や櫻散る　小石川 近藤國子

○（地賞）

伊勢が戀幾代か古りし雛かな　越後 藤原法子

○（人賞）

草笛の人なつかしき小雨かな　備中 馬越昌子

【秀逸】

春の月今宵を嫁ぐ人に照る　美濃 酒井とみ子
春の夜や裏返したる小夜衣　松本 川上めぐむ
朝風に榊花散る泉かな　水戸 島田徽潮子
茶を飲みて平家をきくや春の宵　常陸 秋山欣子
朧月港に舟の燈かな　能登 藤田清子
老僧が下りて庭掃く櫻かな　熊本 近野春子
菅笠あむ吉備の乙女の日永哉　岡山 高栗宮枝子
菫かや土筆つむ子の長き袖　下谷 細谷靜子

手をのべて舟より拾ふ椛哉　神田 林霞子
野中の道をいくつまがりて梅の花　淺草 肥田鳳子
朧夜や局が許の文使ひ　福井縣 やまざと
法眼の馬も拔け出てん春の草　神戸 足立ゑい子
寢過ごして叱られにけり春の朝　美濃 加藤芳子
夢の間の月の桂や花曇り　松代 大平直枝
ともり〳〵鶯なくや朝日和　駿河 しぐれ女
姉妹花見衣を語り合ふ　駿河 浮立
美しう朝寢の人や春すだれ　上越 美濃輪花香
根芹つむはたけ戻りの女かな　信濃 駒澤ひろ子
春の雲夕を雨となりにけり　信濃 小林美喜子
つまづきて簪落ちぬ花の下　伊勢 小野やす子
青柳のなびく大道砥の如し　仙臺 南もり子
卯の花の家より出たる日傘かな　廣島 靜荻會
春風や誰が手すさみの釋迦の像　廣島 柿の會
放れ馬坂かけ上る時雨哉　安藝 兒玉壽子
東風吹くや二十四欄を明放つ　大阪市 木村花子
長閑さに江の白鷺を數へけり　常陸 森越よし子
宵すだれまいて御池の鯉を見る　相模 山本文枝
繪日傘の涼しき家を出たりけり　安藝 笑岡辰江
据風呂の屋根は南瓜の茂りかな　本郷 佐藤むろ子
短夜に馴れし枕や時鳥　東京 さぎり女
植了へた門田に向ふ夕餉哉　下總 渡邊恒子

春雨や何處に行くとて蛇の目傘　大阪市　西戸政江子
とりの子の牛かくれて春の草　和歌山　水澤てる子
麥畑や鳥おふ役の姉妹　千葉　椎名八重子
椿ちる月の小路や琴の音　松山　曉子
松風に吹き散る星や夏に入る　横須賀　齋藤松代子
菜の花に長き長者の土塀かな　美濃　水谷萬代
春の夜を寢衣のまゝで月見かな　津村幸子
田雲雀や水に映りし雲の影　若狹　蝶夢子
人をまつ淋しき驛や古柳　札幌　竹中巴子
咲たきの想も直し春の朝　根本靜枝
山門に僧一人戀ふ時雨かな　廣島　し壽波
梅咲いて絹織る姉の小歌かな　攝津　坂上翠子
炭引いて黒き小庭や春の雨　兵庫　阪上かめ子
葉櫻に祇園の神の灯哉　下總　篠原はつ女
はら〱と連日の雨や軒の鶯　富山縣　長瀬紫峰
米搗いてをれば鶯くる春の家　高岡市　篠原深雪
猫の戀嫌好は歌をよみにけり　紀伊　勢以子
灯ともせば大空ひくし花の上　滋賀　田川としかず子
山寺に衣打つ夜や月明り　上總　長谷川文江子
月一つ隱れもあへぬ時雨かな　南總　北野よし子
武者ぶりもよしや吉野の若ざくら　越前　細井岩子
春の月渦柵の中にさして居る　三河　永田舞鶴子
箱庭の富士の裾野や草萌ゆる　韓國　富迫露萩子
わが影のやせてうつりぬ池の水　大阪　池田房子
草にれて雲見る朝や風かをる　土佐　宮内ゆき子
春の宵酒癖わるき女哉　紀伊　室井白萍子
虫なくや片袖くらき月の下　豆州　木村春枝
川縁の夢三すや小鮎とぶ　越中　石尾ふさ子
春風や庭に散らばる糸の屑　荏原　鳳間ひて子
あばらやの奥に琵琶彈く月夜かな　日向　かう子
春の夜を舞ふや美き子の扇の手　紀伊　畑中松枝

菖蒲太刀いざやと袴からげけり　京都　くちなし
提灯の赤き火影や春の宵　靜岡　池田よし子
短夜や声間の舟に灯の見ゆる　靜岡　波多野いち
初雪を口にうけ行く子供哉　佐賀縣　田中白梅女
紅梅に寺の小性の朝寢哉　千葉縣　小出保花子
呼べは聲届く小船の霞けり　相模　杉義はる子
桃咲くや崖の下なる一軒家　千葉　平山喜美子
春の水紅屋の前を流れけり　相模　杉義はる子
桃の流れ添うて下す筏かな　石狩　細見露花
花實や戀ならなくに袖の露　備中　阿部員子
橋立の月に詩人と歌人かな　和泉　原田男子
文使のこゝにさふらふ春の宵　紀伊　田中文子
春の川邸に入りて分れけり　神田　伊原千代子
琴の音や梅の月夜の前渡り　千葉　宇井花月
春月や垣無き庭の梅柳　佐賀　田中美枝子
春の月一鳥飛て影見えず　札幌　德光武子
御子良子の袖の長さよ春の風　岩代　植村喜奈子
張物の布吹き剝ぎぬ春の風　大阪　平尾とき
下京や杖つく老の若菜賣　土佐　三重子
雉子鳴くや時雨すぎし草の山　常陸　中内泉子
明月の木の間に光るしづくかな　茨城　小貫ふく子
ゆき暮れし草のやどりや蕨餅　靜岡　おぼろ
小松原霞みて遠き浪の音　箱根　下澤とし子
古宮をかこむ櫻の大木かな　茨城　日下部喜美江子
春雨や衣桁の衣の紅に　芝　あや子
春の宵我れを鏡に笑ひけり　相模　八重子
殘雪にすべりて足の跡あはれ　岩代　吉田きち子
花吹雪雛の瓔珞ゆらぎけり　肥後　豐永みどり
あり〱と夢に嵯峨野の花見かな　埼玉　並木ゆり子
夜櫻や雪洞照らす女房達　高崎　松村美津子
野男のひるねさめたり雉子の聲　群馬　もと子

教への庭



○規定　此欄の投稿は女教師の方に限る十六字詰十行賞は丙賞

○お算用（入賞）

徳島縣名東郡一宮尋常小學校　相原アサノ

此頃一年生は、二十の範圍て割ることをしてゐます。「サア皆さん十八を三て割ればいくら」暫らくして紅葉の手は此處にも彼所にも、中に一人は急いで足袋を脱ぎ、足を腰掛に上げ、脊を丸うして、何かしてゐましたが、やがてニッコリして手をあげました。後で「黑田さんどうしてお算用したの」と聞きますと、さも得意げに手と足とて。

○可愛き教へ子

越後　西脇恒子

或日頭痛がしたのを、强いて出勤したら、どうも苦しくて仕方がありませんでした。處がいつも賑やかな教室が妙に靜かで皆が心配さうな顔で私の顔を見守つてゐます、一時間過ぎて教員室へ這入りますと後の方で「先生は、きつと氣分が悪くゐなさるのでせうよ、だからお辨當を煖飯器の中に入れて置いてあげ樣ではありませんか。」とこそこそと話しながら私のお辨當を持つて行きました。其時私は一種言はれぬ感に打たれて益々一心に神聖なる教育事業に、盡くさうと思ひました。

○生徒の裁判

和泉　光子

私は、尋常一年生を受持つて居ります。或日のこと、一人の生徒が他の生徒の毬をとつたことが知れましたので、「あなたは毬をとつたのですか。」と聞きますと、「いーえ、とりません。」とはつきり答へます。「それでは、誰さんの袂の中に入れてあるのを默つて貰つたのですか。」と聞くと、「はい」と大きく答へました。

○濡鼠

島根　小松原德子

私の奉職した當時、餘り生徒の顔が汚ないので、諸子方は毎朝顔を洗つて、來ませうれと問ふと、默つて頭下るので今から顔を洗つて來ん者は、學校のバケツで洗はすと申しますと、翌朝東の方から登校する生徒が頭から顔までビショヌレでポタ〱滴が落ちるので何故？問ふと、他の子供が「アレハ下の（學校の下のこと）河デ洗ツタノデス」と私をかしくつて〱

○姉の話に

長野縣　うめ子

これは姉さんの話ですが、「私が衿止を8と云ふのをしてをれば、生徒が自分の名でもないのに皆私の眞似をして8と云ふのをして居るのだよ、それから私が生徒に裁つてやつて居ると裁つて居る處は見ないで袴裁のヒザをなほして裁板へ一生懸命でとつつけて居たり爪の垢を取つていたり、又自分の頭が硝子にうつるものだから髮をとかして居たり、それは〱もう私の身の邊りばかり見てなほしてゐるからそれは後でよいから裁つ方を見てゐらつしやいと云へば笑つて居るのだよ、だから先生となるものは身のまはりばかりでなくいつも心に快活にして生徒の模範となつて居なければいけないと思つたのだよ」

○級の花

播磨　木村紫水

尋常四年に町田花子といふ至つて愛くるしい子供がある。黑い房々とした髮を無雜作に後へとき下した。パッチリとした目元に、凛として侵すべからざるの品を備へて、人懐つこい愛嬌がある。學科は、最優等の成績で、極めて無口で、唯靜に他人の行動に目を注いてゐる。しかも、全級五十餘人の唯一の名望家である。缺席すると、全級兒童の顔に憂雲がかかる。彼女は、正しく級の花。

○偏愛

福岡　中尾豐子

「女子は偏愛に陷り易い」とは、主事先生等に度々伺つてをりましたので、卒業後は隨分氣をつけてをりましたのに、近頃になつて優等生許り、愛するといふ噂が、受持學級内に起りました。後暗い所はありませんけども、まだ生徒に信用されるだけの、德がないからだと自省して、注意しました爲か、今では平和になつて、私なんぞ、いそ〱して登校致します。

餘興



○規定　毎號課題を出して諸孃の餘興に供す十六字詰十行迄一人一章に限丙種の賞を送呈すべし新題は卷末にあり見落す勿れ

葉（課題）

○草の葉織（天賞）

四谷　櫻子

私の幼い時、おんばこの葉を澤山つんでは、青い和かい處をむしりとつて、其筋だけを殘しておいてそれで機を織つて遊びました。機はどうして織つたか今はもう忘れましたけれど、何でもお友達は旨くきれいに筋を殘してゐますのに、私は中々てきないので羨ましくつてたまらず、一心になつて稽古した事を覺えて居ります。て今も道ばたに生へてゐるおんばこをみますと、何だか懐かしくなつてつんでみたい樣な氣が致します。

賞にく女らしい感じ。

○葉の香（地賞）

京都堺町四條下ル　鹽田登美子

菖蒲の葉を煮出した湯の香と、蓬閭子の蓬の葉の香と、したし物にする菊菜の香と、笹の葉に包むちまきの香とは香の好きな葉。無花果の葉と生々しい葱の葉と、芹と人參葉は、私の嫌な香のする葉てす。

葉の題材に缺くべからざる文字。

○青葉が好き（人賞）

山城　八田文子

幼い時は、大葉子と擬寶珠とを眼らかしてもらつてならすのが好きてございました、豆の葉をふくらかすのも……私は青葉の煮たものは何より好きてございます。私が高等二年生になりましたときてございます。先生が、生徒を一人づゝお呼びになつて、食物の好きなものの名をいへと仰るので、私は「蕪の葉、水菜」などの野菜はすきだと申しましたあとで皆樣に聞きましたら、「鯛、鰤、鷄肉」などゝ美味な物ばかりお言ひになつたので、辱かしく思ひました、鳥の樣てございますが私は青葉が好きてくなりません。

トルストイの知己。

【秀逸】

○障子の引手

横濱市　村田千代香

私の家ては毎年障子を張かえるたびに引手へ色々の木の葉の摸樣をあらはしますのよ、この冬には私が、工夫をこらして父樣のお室の障子は

紅葉と松葉で立田川の眞景、又母様の裁縫なさる所には松葉つなぎ、勝手の障子は銀杏の葉で三つ巴、そして私の室の窓の引手は、松を水にして押花の野菊を合せて菊水に致しました。

○笹の葉　埼玉縣　岩田文窓子

地上に、ちよいと赤い頭を出して居た裏山一面の笹の子が、ほか〳〵暖かになると、ずん〳〵のびて初夏には、露のしたゝるやうな若葉が、五枚出ます。春秋冬の三季は、笹屋が取りに來て、俵に入れ都へ賣りだす、それが都名物のおすしやさしみの背景に用ひられるのです。

○緞の袴　紀伊　田中文子

昔々と云つても十年前のこと昔、未だ尋常の二年位であつた頃、校庭の楓の紅葉して散つたのを拾ふて、おひな様の袴の様に重れてよく遊んだものです、まだ青いのや紅や黄やうす赤やいろ〳〵で其はきれいでした今も毎年秋になると、木々の梢の色づくのや、紅葉した葉を窓から眺めては幼なかつた昔を思ひ出します。

○たらえふ　静岡　おぼろ

たらえふの葉の中央にお線香を點けると火は葉のろに移つて、曲々と道をつけて消える、其れが丁度虫喰葉の様になるのが面白くつて、よく神田の家に居た頃は裏庭のたらえふの木の下で座を敷ては、落ちた葉で友と遊んだ。十年を過ぎ去た、今、彼の木、彼の家は如何なつたらう。

○土用ぼし　伊豫　井上いち子

銀杏の葉を本の相間へ入れて置くとむしにいためられぬと云ふ話しを聞いて居りましたので、或る寺の庭に落ちてありましたのを澤山に拾ふて來て、本の中へ入れましたそれから土用干しの時に一つ一つの本の中から涼しい風をあびてパラリ〳〵と散りますのが何とも云へぬよい心地を感じました。

○八ッに別れし紅葉　熊本市　近野春子

妾達が小學校に通つてた時分には、「手の上る紅葉」と云つて楓の葉の八つに分れてゐるのを持つて居れば學問が上手になると云ひ傳へて書物の栞にしては大切にしてゐたものです。此頃古い本を出して見ました節、ヘラリと音して、一つ例の「手の上る紅葉」が落ちました。でも矢張り、妾は相變らず少しも手が、上つてゐませんわ。

○櫻の若葉　阿波　西野花びし

櫻の若葉が今年も窓に茂りました。十二三の時此櫻坊に、若葉を着物の様に衿美くしう、幾つも〳〵重れて着せお雛様よと箱の上にならべて遊んだ事がありました。私は此櫻が茂る度に思ひ出してほゝ笑むのでござゐます。

○芋の葉　都　久子

「何んだ擂鉢の底に居て生意氣な」と何につけ、言はれる程の山の中ですが、住めば都夏木立の青葉にうつろふ頃や秋の立田姫には、活動寫眞を見るやうに變り行く、自然の風景を味ふ事が出來ます、夫れ芋てと云ふと何だか興が醒める様ですが、其の葉にたまつた露の朝日を受けた處は、銀の玉がころ〳〵して居て美しいもの、其露を七夕の朝硯に受けて書きますと、字が上達するそうです。

○這麼に思ふ　土佐　高橋綾子

赤い頭を姉様かぶり黒衣の裾をちよいとからげて桑の葉を摘む度に私に這麼に思ふ、早く茂る（イチヘエ）はあらくれた節太い勞働者の手をひろげた様な葉で（ロツチ）の葉は肥へた下女の手に似て油じみてゐる、遅く茂る（ホツエ）は艶のある葉で山畑に肥料をせずとも茂つてゐる生花やお琴の稽古をなさる姫様の手の様に細くて（ナゲヲ）は恰度今年出生した幸ちやんの手の様に小さい葉である。

○葉形

石見　小松原德子

薔薇、満楓公孫樹の葉を取りて二三日間厚洋本の中に入れて置きたるを紙の上に置き、スミインクを小さく點々に吹きますと美しい葉形が取れますの、お友達に差し上げる御手紙に、四手欄の、葉形を寫して送りますと直ちに、楓の葉形に美しく拜見してよ、此の葉形を當てごらんと寢葉の分らんのが返しに來てよ、

○支那

近江　細野その

先月中頃の事餘り徒然なので、日露戰役當時出征地から、來た手紙を、出して見たら、其中に從兄から、來た手紙の中に「これは淸國法庫門にて取つた菊花植物の葉です、名は知れんが形が、よく整つて居て美しいから、送ります、阿片計吸つて遊んで居る、人々の所で育つてよく是だけ整つた葉が、出來た物とふしぎでなりません」、と書いてあつた。

○神秘の森

廣島縣　田坂芳溪子

妾の家の後には、鎭守社がありまして、其四邊は杉が幾千本と茂つて居ます、社の後には神の森といつて、夏の眞晝でも射した事の無いと云ふ、雜木林があります。無論鋸も斧も誰一人當てる事の無い自然の儘てす、妾は此森が一番好きてす詩を思ふ時は必ず此森に入つて、幾百年と積つた落葉を踏んて神秘の囁きを聞きます。



スケッチ　牛込　佐野貞子

○柿の葉

肥後　佐々木美智惠

柿の葉が赤くなつて落ちて、庭一面を埋めて了ひますと、其の下にムシロを敷いて姉樣は柿の葉て人形を作つて下さいました。私はいつも柿の葉を見ると思ひだしますそして涙を流します。柿の葉は、秋が來れば庭一面を埋めて、人形も容易く作れますけれど、亡くなられた姉樣は二度と逢ふことが出きませんもの。

○葉の味

和泉　金田香雲子

ホーレンサーはうでてしたし物しせば良くシンキクは牛肉鳥肉と煮て食さば味良し、子ギは吸物の香味に用ひて味を出しタマナは西洋料理に用ひて味を出す。

○磯邊の青葉

越後　佐藤浪子

都見物の途中一泊した上州の磯邊溫泉——起き出てると細い雨がシトシト降つて居た、ポーツと霞がかつた、大氣の裾に綠淺い若葉が一面に浮んて、溫泉宿の屋根は其中に見えつ、隱れつそして湯にたく煙はもう〳〵と搖れてもつれて霞と和して何處の極迄延ろつもりてせううつとり妾は見惚れました。

○大銀杏

伏見　山田幸子

冬に成つて向ひのお寺の大きな銀杏の葉が丁度黄に染つた時分。夜中に木枯ても吹こうものなら、それこそ近所は大迷惑。道、屋根のきらひな

くまるでゝきつめた樣、其代り實がなると葉の掛除實とてお寺からぎんなんを持つて來る。

○蕎麥と桑の葉

福井縣　やま　ざと

蕎麥の味は夏になるとずつと落ちますものですが、去年乳母の家へ行きまして、夏蕎麥をおよばれしましたがたいそう味が宜ろしうございましたのでどうするとこんなおいしうなるのですと尋ねましたら桑の葉をもんで其汁でこねるのですと教へてくれましたので、家へかへりて其とうりして見ましたが（桑の葉はもむと青い汁が澤山出ます）みなの者が冬たべたのよりおいしいと申ました、桑は大好きです諸嬢さんも一度試してごらんなさい。

○葉の面

三　河　永田舞鶴子

何誰でも少し辛い事が有ると、目の色や顔色をお變へなさるが、私の家の門の松の葉ばりかはいくら、頭の破れ相な夏の日中や、ちら〳〵雪の降る中に立たせられても、辛いと思はずぢつと辛棒して、葉の色さへ變へた事が有りません。青々として居ります。

○柏　餅

伊　豫　浮　草

五月雨がしと〳〵降つて何だか物悲しい日でした、仲夏の妹さんと二人が三階の障子を明けて靜な雨足を眺めて故鄕の戀しさを語つて居りますと下から急に私の名を呼びますので何事ぞと降りて見ますと母から小包を送つて來たのでした。はて何だらうと上から摘みながら妹さんの庭へいつて明けて見ますとまあ意外〳〵葉のお餅がころげ出ました、嬉しいやら有難いやら階下の方々を呼びますと退屈して居た、皆は誰先つたやうに飛び上つて來ました見るや否や中村さんがご馳走と一番目に物見せず三つ四つ平げた其中皆が競争で攻めたものだから直ぐ箱は空になつて膝の前に柏の葉が山のやうに出來ました後で中村さんは計算して自分一人で十平げたと言ふので皆大笑をした事があります、今でも中村さんと言ひますと直ぐ葉のお餅の事が出るのでございます。

○御輿草

奈良、白　ぎ　く

多くの人には、よく知られてゐない日陸の草で陸地に蔓はよく蔓延つてゐますけれど、それは不恰好な葉を持つてゐます、だけれど、此の醜い葉が下痢の妙藥だとか。人も同じ事容姿はどれ程醜くても、この草の葉のごと心だてさへよかつたならば衆人に敬愛せられるのです。

○芭蕉葉

臺　北　稗貫みつ子

芭蕉葉の雨にぬれてしつとりしたその色…その綠、眞に眞に晴々しい希望に充ちたやうな風情です。月影冴えて小萩亂るゝ淋しい夜に慰めを得まするも 桃散つて櫻花咲く艶麗な夜に歡笑しまするも亦 心の鬱悶やるせない時に囁いて悲しみを分ちますのもこれみないぶせき庭のこの芭蕉の 葉影で御座います唯私の唯一の友たる芭蕉の葉、若しこれに物言ふべき口があつたならば私に何と囁くでせう。

○枇杷の葉

兵庫縣　荒川　たま

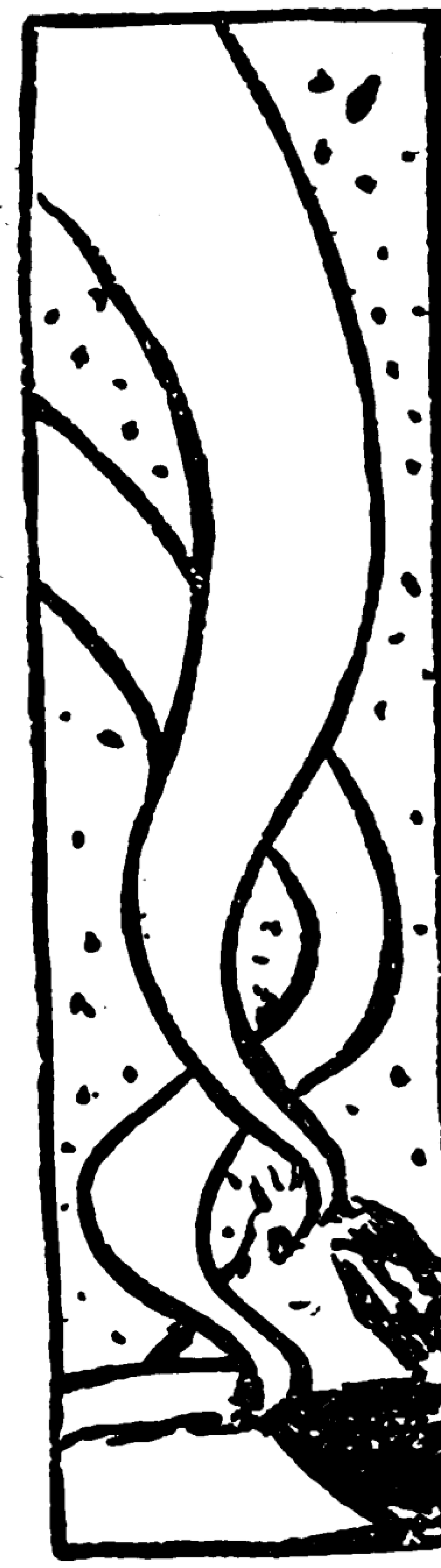
私の村の寺の和尚樣は今年十八私嬢樣大すき此のばらかで、ひぢつきかて皆嬢樣に數へていただいたもの其れに去年の夏から肺病つてゐられるのであまり行き來もしないのでさみしい。ふと正月或る書物で枇杷葉湯がよいといふ事を見たので幸ひ宅に不用の木がありますからといつておしらせした以來七十日餘り入湯なさつたので昨今では全く快くなられたとの事で今お母樣がおいてになつて私を命の親だと仰つてお召一反と千代田草履とを下さつた。そして明日は全快祝ひをするからとの御案内ア、嬉しい明日から色々數へていただける此のお祝に何をとつて行かうかしらん。

○青葉會

本　鄕　小稗菊江子

時は夏の初め瑞枝さて我家のお庭に木葉の懇親會青葉會と言ふが開かれました定めの時間迄には高鋭なハートやパラの葉を先に晴鉄の會員數知れず集り、綠の幕打張りし式場には大きい蓮葉の卓に花瓶を備きやがて雨蛙が得意の音樂にて開會となり會長老木松葉の開會の辭、山中紅葉創立の報告ありて餘興に小鳥の謠ひ蝶の舞、松野みどり子の琴松風の曲にて蟻の運ぶ茶菓を喫し閉會になりました。

新歌謡



○（地賞）　四谷雪子
裏の畑にもむら〳〵もえた可愛いわかなに雪がふる

賞品あり

○（人賞）　韓國　原登里子
聲も姿も見えないけれどそこら四邊に春が來た

韓山の風雲、春寒し

【秀逸】

○　下野　手塚妙子
すゞのやうなる妹のうたを天の女神よきこし召せ

○　秋田縣　千代子
木々の新芽の一雨毎にのびてだん〳〵夏となる

○　宮城縣　鈴木喜久子
君と別れてきさらぎ彌生夢の心地に花がちる

○　後志　千草子
幾度とも無く包んだ涙ふとした事から皆落ちた

○規定　古來の俗謡の形式を取りて專ら優美洒脱なる作を歡迎す野卑猥雜なるものは斷る一人一章限りにして半紙又は端書に認むること丙種の賞を送呈すべし

○　信濃　小池天浪
流れ行く水止めては見れど思い直して又流す

○　淡路　加藤菊子
丹波見たさに愛宕へのぼりや丹波隱しの霧が降る

○　若狹　汐汀春人
師走月夜を馬引き戻る馬は市場の賣れのこり

○　土佐　宮内ゆき子
潮路はるかに軍ぶねが殘す煙にさはぐ雲

○　藤澤常盤幸子
花の今宵を公使の館淑女三千舞踏會

○　信濃　市瀬いちゑ
箏と風琴妹と姉の清い琴音に花が散る

○　石見　君子
木の香ゆかしいこの新築の窓にさし入る春日影

○　兵庫　嘉代子
わたしの村ての評判娘いつも鼻て顔洗ふ

○花賣少女のすがれ小笠の紅い紐吹く春の風　紀伊　盗井白蓉子

○花の小枕小草の褥蝶は夢みる春の戀　神戸市　平田匯子

○薔薇のかんざし牡丹の顔に赤いリボンで若菜摘む　廣島　山崎數枝

○海へ散りこむあの花片が鱗になるのか櫻鯛　大坂　若宮八重子

○私生れて二月の空に雲を見るのが今日初め　和泉　金田香雲子

○花の都へ行たいなれどおやがゆるしてくれんから　福井縣　北　利子

○關東八州の櫻の香込めて富士を包んだ明けの霞　牛込　靜　枝

○下にみゆるのが休んだ岩よ登りや冷しい春の山　岐阜市　篠田とみ子

○妾しの住む里赤城のふもと春はわらびに秋は栗　上毛　須藤あさ子

○野邊は青むし木の芽は伸びる茶摘時節も近かくなる　靜岡縣　池田芳子

○わたしや丸帶二筋かつた富士を夢見たあくる日に　山口　酒向とし子

○霞の衣をそろ〱脱て里へ出て來る彼岸水　飛驒　世須子

○ふさぎ通した私の心今日の日和に目がさめた　岩代　長谷川光子

○使ひする蝶に聞たや女神の花に傳へるお言葉を　若狹　蝶夢子

○妾しや山家の賤の女なれど春は花咲く山に住む　美濃　堀ときわ

○うちの後ろは緋のかぶ畑裏て染めなすお城山　松山市　ぎよう子

○二枚重に大きな帶をたてに結んで宮詣り　德島縣　野　盈

○蝶は菜種に菜種は蝶に空に高舞ふ春の野邊　兵庫　杉山春翠

○野邊の寺からられむそにひゞく暮の鐘聞く春日和　尾張　廣瀨かなえ

○金と銀との蝶々を伴れて天に嫁つたと夢に見た　盛岡　桃　人

○妾や木綿の手織の着物春は落花が花模樣　岐阜縣　村井かれ

○沖に眞黑い流木一つ春の香を乘せて行く　下關　山本榮子

○桃が咲いたよ咲いたよ花が赤と白とのさきわけて　靜岡縣　飛奈久枝

○春が來た〱山にも野にも家の庭にも草が出た　三重縣　山崎初子

○姉が二十て妹が十九瀬戸の纜に花が咲く　石見　松　子

○青い麥野にお月樣が宿た宿つたお月樣はかずしれず　長岡市　秋月すゞ子

○山にや菜の花海には夕日庭にや山吹眞ッ盛り　四谷　味方こう子

○嫁に行けとは云はれたけれど年が十五てまだ早い　越州　澤ずみ子

○風にゆら〱柳がゆれて月が見へたり隱れたり　滋賀縣　齋志緒

○私や都は見たことないが夢で見たこと三度ある　秋田縣　東海林ゆき子

○花の頃にと約せし友よ花が散るのに何故に來ぬ　紀伊　田中文子

○朧ろ月夜の花ちる里にお嫁入りする村小町　下總　小澤まゆみ子

書簡文

○規定　手紙又はハガキの通常の音信文を云ふ候文口語體何れにても隨意なり成るべく意味の透徹したる作を採る二十四字詰二十行以内とす一人一章に限る原稿紙を用ゆべからず

乙種の賞を送呈す

○父の病狀を叔母へ（地賞）

阿波　長曾我部　菊子

をば様、其後の父の容態お知らせしやうと思ひながらも、今に至るまで時を得ませぬでした。萬々御ゆるし下さいませ。今日少しの閑を覗つて臺所で筆をとりまする。父さんが二度目に惡くなつた日でした、粉屋のお國さんに、もう思ひ返す事は何にもない。あゝして學校の敷地の地ならしをしてゐる中央に穴を拵へて、埋めてもらつて、こんなに充血してくる頭腦ごし、搗いて搗いてつき碎いて學校の爲、人柱となりたいなんぞ云つてわらはれましたが。三度目には、昏睡に陥つてしまひ。手足もけいれんして、この度はもう一縷の望もなくなりさうに感じまする。私は胸がはりさけるほど悲しくて筆とる手も鈍りますが、勇氣をだして昨日今日の有樣を書くので御座います。をば様。父は昨夜から、しやくりがつきましたので、充血した顔をしかめ、瘦せた手を胸において、ハア、ハアと切迫まつた呼吸をなさるのを見るとああどんなに苦しい事でせうと。――外目もいた〳〵しいので御坐います。お醫者さまも御心配らしく「嘔吐くのもおもしろうないが、どうも此しやくりするのが……」と眉をおひそめなされました。普通人でも嘔吐する以上ゲッソリするものをましてこの重患の身ですもの。

誰よりも御疲勞なすつたのは祖母樣ではらはらお泣きなさるのが、ほんとうに辛い逆事にあふ老人の心を思ふと私もそばで落涙します。あゝをば様、春は阿波にも來たやうですけれども私の家は寒い風が戸を鳴らし暗い悲哀の影が晝夜といはず立ちこめて、誰れの心も沈み勝ちで御坐います。

孔子の教に心をたんれんして、四十六歳の今日まで父の働いたは悉皆公事でございました。公事の爲に滿韓の地をさすらうて病を得、公事のために、疲を努めて重患となり、更に最後に學校新築の事業の爲めに身を

破つて危篤とまでも進んだのです。けれども。をば樣、お思ひ下さい。父樣は今死んで思ひ遺す事はないとおつしやいます。今萬一の事があるとすれば父樣は華やかな最後を御遂げなさいますのです。

母がくれ〴〵もよろしく申上げてと申しました。母も始終つきゝりですから御察し下さいまし、たゞ今在宅のお方。××の伯母樣と、××のお從兄樣、それにお醫者樣とてす。遠い〳〵韓國にゐらしてこんな郵便や、電報を手になさりながら御歸國遊ばす事もならぬをば樣はどんなにお辛うございませう。しかしどうなりませう此後の經過は。つく〴〵むごい世のなりゆきだと思つては。涙がこぼれて仕方がありませんの、もう筆とめます。左樣なら。

内容より奥行あるを採る（評）
此文一種の美文辭とも云ふべきものがあつた、あまり目立つのは改めたが、まだ其臭ひが殘つて居る樣に思はれる、書簡としては如何一考して欲しいものです（又曰）

○宇治短信（入賞）

大阪　今西春江

○

三番茶は昨日より摘みにかゝり申候。そぼ降る梅雨に濡れて「紅緒すげ笠桃色だすき、妾しやつみます三番茶」なぞ唄ひながら働らき居り候。茶畑のほとりを早苗運ぶ頬冠り姿の若者の行きかひて、私達をからかい行き候も、宇治の初夏の香と思はれ、そんなに惡るき思ひも致さず候——。

○

私の住み居り候叔母の別家は、宇治橋を遙か下に見る小高き丘の上の、丈高き樹木にかこまれたる中のさゝやかなる庵に御座候。

天も地も覆えさんばかりの大雷雨の來り候て、家も野も河も橋も、煙ぶる如く見え候時も、家のまはりの大木の梢には幽かに日の光輝の殘り居り候て、蟬の聲なぞいたしをり候。

○

今朝。叔母と共に裏の小川へ顔を洗ひにまゐり候處。水上より打ち續き打ち續き、何とも知れずちいさき黑きものゝ流れ來り候。

私は氣味惡るく思ひ河邊に立ちたる儘たちろぎ居り候内、叔母はさつさと洗ひ終り「さアお前も早くお洗らひ。今の内に洗へば色が白くなるよ」と申され候。

私は其流れ來る黑きものを指さして「だつてあんなものがあるんですもの」と申候へば、「あれ勿體ない何を云ふ」と、叔母は其一つをひろひ上げられ候て、「これアお蠶さまの御死體だよ。[illegible]（なりこ）さんと云つて此れが流れ

ている間に顔を洗へば色が白くなるんだよ」と申され候。

成る程さう申されて見ればさうらしくも見え候へど私は何と無く氣味わるくて、其日は他の川にて洗面いたし候。

尚お慰みにもと、蠶繭とやらを二つ三つ封入いたし置き候。

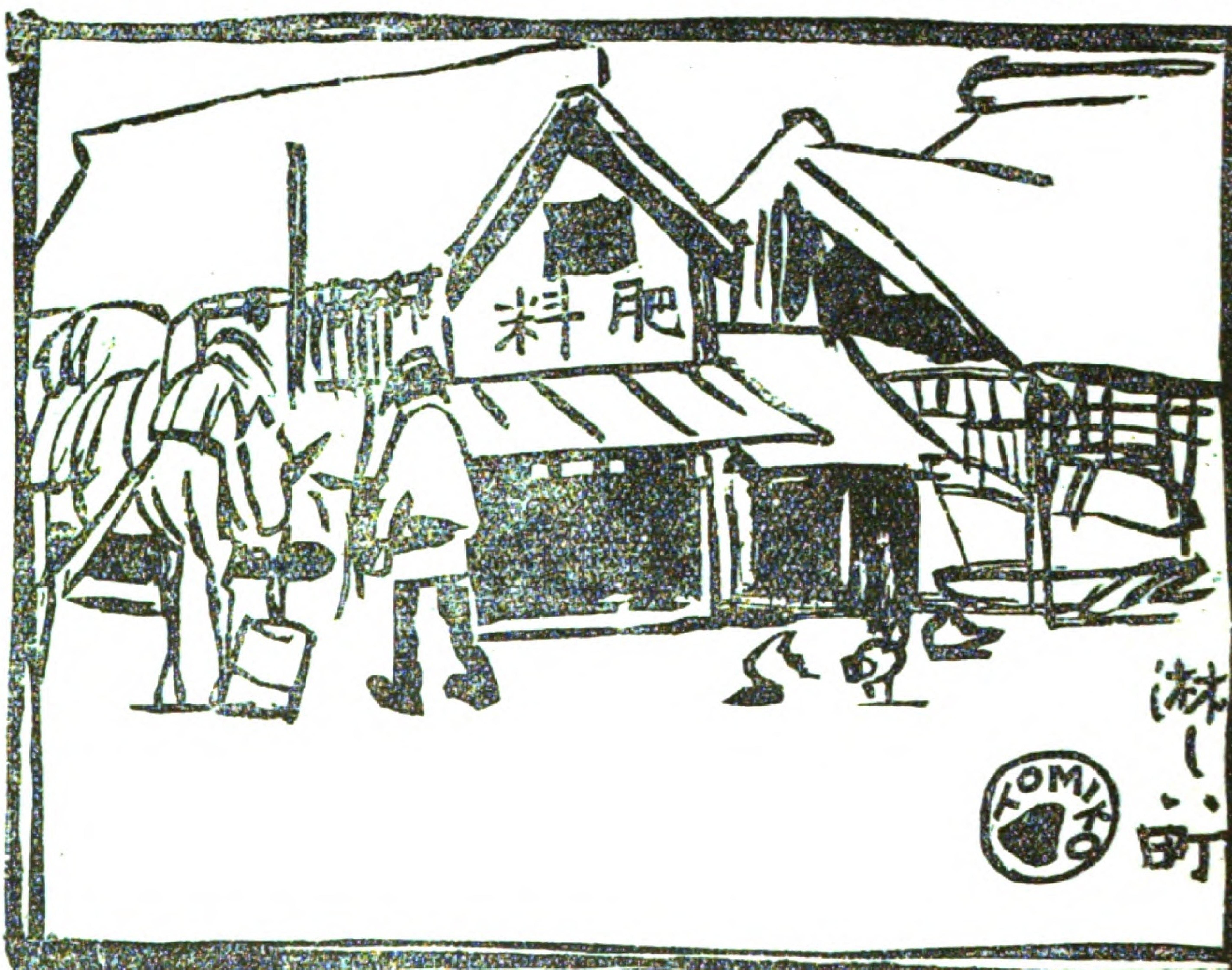
取材の珍を以て勝るもの（評）

【秀　逸】

○都の兄へ

美作　光元　近子

兄上樣には御卒業試驗前の御事とて、嘸ぞ御心痛の事と察し上候、御承知の通り妾も此の月中て小學校を卒業する事に成りましたから御安心下さいませ、兄樣妾ね昨夜お父上樣に伺つて見ましたの其れは斯うなの、



淋しい町　小樽　鈴木登美子

妾も本月中て卒業するので、お隣の美根子樣と御一緒に四月から岡山の女學校に入學さして下さいと願がつたの、そうしたらね父上樣は斯う仰つしやるの、お前を美根樣と共に女學校にやりたいのは一ぱいだけども、兄樣が此の三月て中學校を卒業するのだから此の上は高等學校に入れてやらねば成らぬ、そうすると今迄てとは違ひ一層學資も澤山入る事だから、お前のと二人は到底出來ぬ、お前も悲しいだらうけれども、兄樣の出世を思ふて氣の毒だが内に居てお母樣のお手傳をして傍らお針の稽古をして下さいと云はれるの、母樣も妾が哀れと思召されて、女學校だけなりともと願つて下さつたけれども其

れでは家計が保てないとてお聞き下されないの、妾しは其夜寢て能く考えて見ました、四月から美根子樣はお一人て女學校に妾は此の片田舍て、と思ひましたら涙が頰を流れて枕を濡しましたの、いやいやそうでないまつたく妾の心が狂つて居つたのだお父上樣のお心に成つて見ますれば二度と斯う云ふ事は言はれない、お心をお痛め申す樣のものと思ひ堅う思止りました、だけど兄樣妾しの心にも成つて見て下さい、悲しうて〱て成りません、是れも皆んな兄樣の御出世と思ふて諦めましたから兄樣よ、何卒〱猶ほ此の上も妾しを哀れと思召さば一心に勉强して一日も早う御出世遊ばして下さいませ、妾の一生涯のお頼みてすから、其れから兄樣、草深い片田舍に淋しい月日を送るのですから女子文壇だけは妾の悲しい胸の内を慰めて頂戴な乾度ですよ、妾しは文壇が唯一の友てすから毎月一度も缺げなく願ひ上げます、まだ申上たき事も澤山有りますけれども今度は是て終筆とします、呉れ〱もお風召さぬ樣祈上候あらあら。

眞摯の情緒表に溢れて居ます、是れを讀むものは兄君ならぬ人も動かされませう（評）

○紀念繪はがきに添へて

熊本市　近野春子

愈々三百年祭が始まりましたが、御母樣の御病氣て遂う〱御出てが出來ません相てすね。妾折角樂にしてお待ちしてたのに、落膽して了いましたわ。そりやもう大變な賑合てね。一昨日母と一緒に參詣に參りました節なんかは、愁から四五町も手前から、全然人の海て、ワーッー云つて非常な動搖めき樣、軈て妾達も、其の人波に漂つて、右に押され左に搖られ、何處となく踏まれたり突かれたりして、僅つと本堂迄漕ぎ付けましたけれど、遂う〱母に紛れて了いました、御寶物も拜觀したんてすが、此所も相不變の人込みて、充分拜觀する事は出來ませんてした。

歸りに、例の胸突石垣の下の茶屋に休みましたが、亭主が「今日は、一體から云ふと、人出が少い方てすよ。」と申すのてしたもの、此れ以上に賑合ふと云ふ事が出來るものだらうかと思ひました。

たゞに本妙寺近傍のみてはありません。全市内到る處晝夜ぶつ通しに、巷々て、賑やかな人の氣勢がして、見せ物等の騷がしい太鼓の響や、陽氣な樂隊の音などと、店と云ふ店の華かな飾りとて、古腐つた市街の、打つて替つて活氣は溢れんばかり、一時に、百万の大都にでもなつた如な塩梅てす。殊に夜間は、舊熊本城内一圓に、紅白のイルミチーションが點ぜられますので、それが、眞下に流れてゐる坪井川の水に映つて、

何とも云へぬ美観です。別封、紀念書はがき五枚差上げますから、どうか大祭の一班を、お察し下さいませ。其の中の第一は、御神殿です。寫眞ですから、丹く青く塗つてあるのやら、金銀をちりばめてあるのやらは分りません。其後に見えるのが有名な發星山です。第二は御廟。第三は音樂堂です、第四は御寶物で、右の端のが御存じの蛇の目の立烏帽子、其の左が虎狩の片鎌の鎗、左の端が御佩刀なんです。第五が例のイルミチーションの夜景で、左方に見ゆる橋が、御存じの行幸橋、其の下流が、一昨年御出の節、御一緒に舟を浮べた御馴染の場所です。

それから、も一つの紙袋は、當祭典の武運長久一家安全の御符と御饌米とて、母から、貴女の御母様に差上げます。

書き方が今一息、あまりに平面的で、ひゞきがしなかつたのが殘念でした（評）

○麓の人へ（車中にて）

羽後　菊池りう子

絢様！私と貴女との身體は今三里許りより離れて居ませぬ、三年前から憧憬れた月波は左に聳えて、十七日の月が冴えて居ます、今は十一時。噫、汽車は又動き出しました。かうして〳〵刻々に又貴女の身と私の身とは相離れるのです。どうしてゐらつしやいます、もう十一時ですものおよつて……いゝえいゝえ、決して、多感な絢様だもの、又思ひ悩んで詩卷に想をやつてゐらつしやいませう。柳がこゝを過ぎたのも夢にも御存じなく……。静です、月波の麓は尺八の音……否神鈴の響でもしそうでたまりません。車中皆眠つて鼾の音のみしん〳〵と聞えます、左が男月波で右が女月波と數へてくれた兄も今は私の肩に性もなく眠つて居ます。あ此人達、皆別々の思を懷いて―どんな夢をみてる事でございませう。一人一人の夢の中に入つて美しい雲の小女となつて醉はしてやりたい……。あゝこんな事を考えてる間にもう餘程はせてしまひました。起てるのは私一人です、だつて私が如何して人と同じに眠れませう……。私は今只一冊の詩集をもつてます。絢様がやるせない想をやつてなさる詩卷と同じかも知れませむ。霞ケ浦が月光に遠く開けてぼんやり……。あ私の胸には！頻りに美しき旅情が搖ぎ出しました、堪へ得ず信玄袋からエンピツを出して此手紙を。字の震は、それとお許し遊ばせ。私はかうして一時迄も二時迄も月波の姿の見えずなる迄起て居ませう。絢様を羨んだ月の沈むのも此宵は見ませう。懷しい月波の姿、深く〳〵惱裡に刻みつけて……絢様を思ひませう。あ、兄様がよりかゝつて來て重うございますよ。では之で、字が震へてゐわかり遊さないでせう。左様なら

才筆例の如し、此人のも書簡か美文か分らぬ様なものが多い、もつ

と實のあるものを見せて下さい（評）

○婆やの願ひを

滋賀縣　磨　志　緒

兄樣と呼び愛さんと言はるゝのも最早一月の間となりました、日頃口にして居た「兄樣」がなか〳〵止みませんので今日も母に「いつ迄」と笑はれました。先日櫻狩の歸途あの永樂橋の上で出逢た九臺の俥――私もあの中の一人になるのも近いうちと思ひあの時の兄樣のお言葉思ひ出してハッと顔を紅めて居ります。昨日も平山の婆やが參りまして母の居間で「奥樣私はもう嬉しうてなりません、お守り申した孃樣がちやんと立派に奥樣におなり遊ばす、いつもお手を引て花摘にいつた時の事等思ひ出しますとまあよく年とりませんものまだ若い氣で居ります」など話が聞えて居りました常ならば婆やと飛で出る私も書齋にじつとして筆持た手で何書となく卷紙を眞黑にして了ひました母が「愛こちらへお出て婆やが來て呉れました」私默まつて筆なげて熱う〳〵なつて傍に行きましたら涙出して婆やが喜んで呉れました、そして是非に式迄に兄樣に御目に懸りたいつて申して居りましたから、一度お出下さいまし此間の櫻狩で司田家の令孃とは遊びおさめだ、とおつしやいましたが最一度遊んで下さいね二人で出掛けませう母も「一緒に遊びにやりませう」つて返事してました定めて婆やは毎日首を長うしてあの徑の垣根を幾度となく出たり入つたりして待てゐるでせうから。

女の方はかう云ふ事を書くものが、尤も感興に充ち、嘘でない消息が傳はる樣に思はれます、此文なんかも光ありひゞきあり實に氣持お宜ろしかつた（評）

○雪の國より實家の母上に

ゆ　か　り　子

四十日餘り此方はもう毎日〳〵の吹雪續きで、此頃では丁度門口の雪が私の丈程御座いますの、ですからね室内はうす暗くて何もお仕事は出來はせず、ほんとに厭になつてしまひます、しかしねえ何をしなくては成らないと云ふでは有りませず、是位な事がまんせねば成りませんが只一つ御馳走の仕方の無いのにはほんとに〳〵困つてしまひます、雪の降る前に取り入れて洗つて置いた大根とお芋丈はどつさり有りますが、併しさう毎日今朝も晩もと云ふ譯にも行きませず、時々あしらふ干魚位では、どうもお老人がお氣の毒で御座いましてね、でも幸な事には鷄が毎日平均五ッ位づつは卵を生んで呉れますので、私しは大助かり、之に見離されては大變としよつ中餌をやるのにかゝつて居ります……て御座いますから勿躰無い事ながら早く月

日が立つて暖かく成るのばつかり待つて居ります、地面が見える樣に成つて青いものやらピン／＼したお魚やらをお姑樣や夫の食膳に上す事が出來出したらどんなに嬉しい事でございませう：：先はつまらぬ近況まで、又好いものが有つたら願上ますよさよなら

終始閑文字なくよく調つて居ます、家庭消息文の上乘てあります（評）

○林檎を送られし兄へ

山崎初子

お兄さん林檎有がたう、只今着きました處よ、御安心なすつて下さい、早速皆が集つて開けましたら、マア吃驚しましたわ、大きなのが幾つも／＼轉がり出るんですもの！お手紙も有がたう、斯麼のが澤山生つて幾本もつゞいて居る處を見せたいつて仰しやるのね、ほんとに見たい事、什麼にか奇麗てせう!!も少し近くてしたら私見物に行きますがね、ホ……リンゴの見物つて可笑しいのねリンゴ狩とても云つて置きませうか、マア何だか知りませんがこんな珍らしいリンゴつて初めてゞすわ、父樣も母樣も大きなものですね、とお手に取り上げなすつて、どうしてこんなのがとサモ／＼風に堪へないといつた樣に呆れて見て在らつしやるんですの、芳ちやんはね兩脇へ一つづゝ抱へて母樣がコレ／＼と云つてなさる間にお向うへ驅け



寫生　小櫻　鈴木とみ子

込んであのね、これね、青森のお兄さんからよつて自慢氣に見せて居るんですの、餘り嬉しそうなので叱りもなりませんてしたわ、ホ……人の事ばつかりも云へないのよ私も思はず頰ずりしたんですもの、お笑ひなすつちやいやですよ。今から御近所へも豊子樣とこへもお配りして家も頂きますわ、頰落さない樣にとのお書添へ有がたう、用心に頰冠りてもして食べませうよホ……。御返禮の御催促には恐入ましたわ、父樣がね甚い奴だつて仰しやつてよ、何れ後から御好物をねさよなら

いゝ御機嫌で居らつしやるのネオホヽヽヽと笑て云ふ人がありました、兎に角結構な事て……（評）

○伯母の里より

小石川　近藤愛江

桃花菜花入り線れて陽炎長閑にもゆる伯母の里より、一筆示しまゐらせ候。都を距ること二十里、ましら啼く秩父の山と聞くさへ恐ろしきに。まいて二十戶位の小村、峨々とし迫る深山の流れに、碎く水晶のかとやく水に沿うて三里、ばかりの山の宿、春遲き山櫻咲きたる谿々の鳥の聲さへ長閑やかに、病後の身を養ふのみに餘念なき身はさながら仙境の雲に逍遙ふ心地致して候。山々かこみて朝日は遲く昇り夕日は早くかげらふ里ながら、なほ都にまして見棄てがたなき春景色と思はれ候。髮荒らかに簗に束ねて男裝したる山の少女が、きり〱と立まふ姿甲斐々々しく、路なき峰梳無き谷を打越へて、薪背負ひ蕨手折り峠の花さへ家の土產に、牧の小牛の尻追ひ歸る雄々しさを、そゞろ優しき都の姬君に見せまほしう存じ申し候。暮れてはありし京の日を偲び、御許樣が妙なる玉琴の調べも、軒の松風に通ふかと、それのみ優しう懷かしく候。今日つきあげし草餅の、蓬も交る春の色香に、都の花の空親はしう、飛び交ふ蝶の羽に添へて、深山の花の幾片を御許樣が玉の御手に送り參らせ候かしこ。

惜むらくは文字に拘泥したあとがあります（評）

○旅だより

京都府　向井光子

第一信

見渡す限りはてしなき、大海原を前にのぞみ疲れし足を光る砂路に投げ出して、只今壺げをしたゝめ居り候、いづこを見るも山のみにてせまくるしき我故鄕と異なり、今此景に接しては、そゞろ身も心も大きくのびらやかになりし心地せられ候、かゝる事申すは田舍人にこそあれ、われらにはさまてよきものとも思はねそ、おかしき限りにこそ、とのお笑ひは何卒お許し下され度、常々のお口も存じ居り候へば。

巧みてすきうして又巧みに過ぎます（評）

お伽噺

巖谷小波選



○規定　新しきお伽噺を作ること土地の口碑傳說を採用して材料とするは宜しけれど既に在るお伽噺の燒き直しは許さず二十四字入十行以内凡て振假名つき罫紙又は半紙に認めること賞は乙種を送呈す

○驢馬の先祖（天賞）

小石川戸崎町五　三宅恒子

昔々、廣い牧場に馬がどつさり、白馬やら赤馬やら黒いのやら、うらゝかな春の日光をあびて勢よく嘶いたり、とんだりはねたりして居りましたが其中の、一疋は青々した草の上に腹ばひに成りながら、——此馬もやつぱり外のゝ樣に、立派な鬣を有てゐれば耳も短いし尾も房々して、脚胭は細く強くつてよく走りました——「あんまり此牧場の草は固すぎる、私の欲しいと思ふのはこんな物ぢやない。もつと〳〵上等て、馬仲間では一度も食べた事の無い、綺麗な柔い花だがなあ」と獨語して居りましたがとう〳〵、堪へられ無く成つたと見え、牧場を出て當度もなく歩いて參りました、其花を尋ねて。

大分歩いてから、野原に出ましたけれど、牧場に生へてたのより猶いやな固さうな草ばかりてした。馬は怒つて蹄で、可哀そうに、草をふみねじつて通り越してしまひました。次に行つたのは沼のそば。此所には慈姑が青々と繁つて、さかさに其影を水にうつして居りましたが、異ふ〳〵と馬は之をも見捨てゝどん〳〵、前に々々と進んで參りますと、こは如何に、木は元より苔さへ無い乾燥き切た國に入てしまひました。

馬は長途に疲勞し切て、お腹はすいて堪らないので、がつかりしてをちこちを見廻すと、少し窪んだ處に薊の花が美しく咲いて居りました。これだ〳〵と嬉しがつて夢中に食べました。おかしかつたんですよ。必と、すると不思議や耳がだん〳〵長くなつて、——體はちゞまり、しつぽは一握りばかりに成て了ひました、馬は驚いてヒヽンと嘶うとすると、うら悲しい驢馬の泣

聲に變つて居りましたとさ。

この馬が驢馬の先祖です。

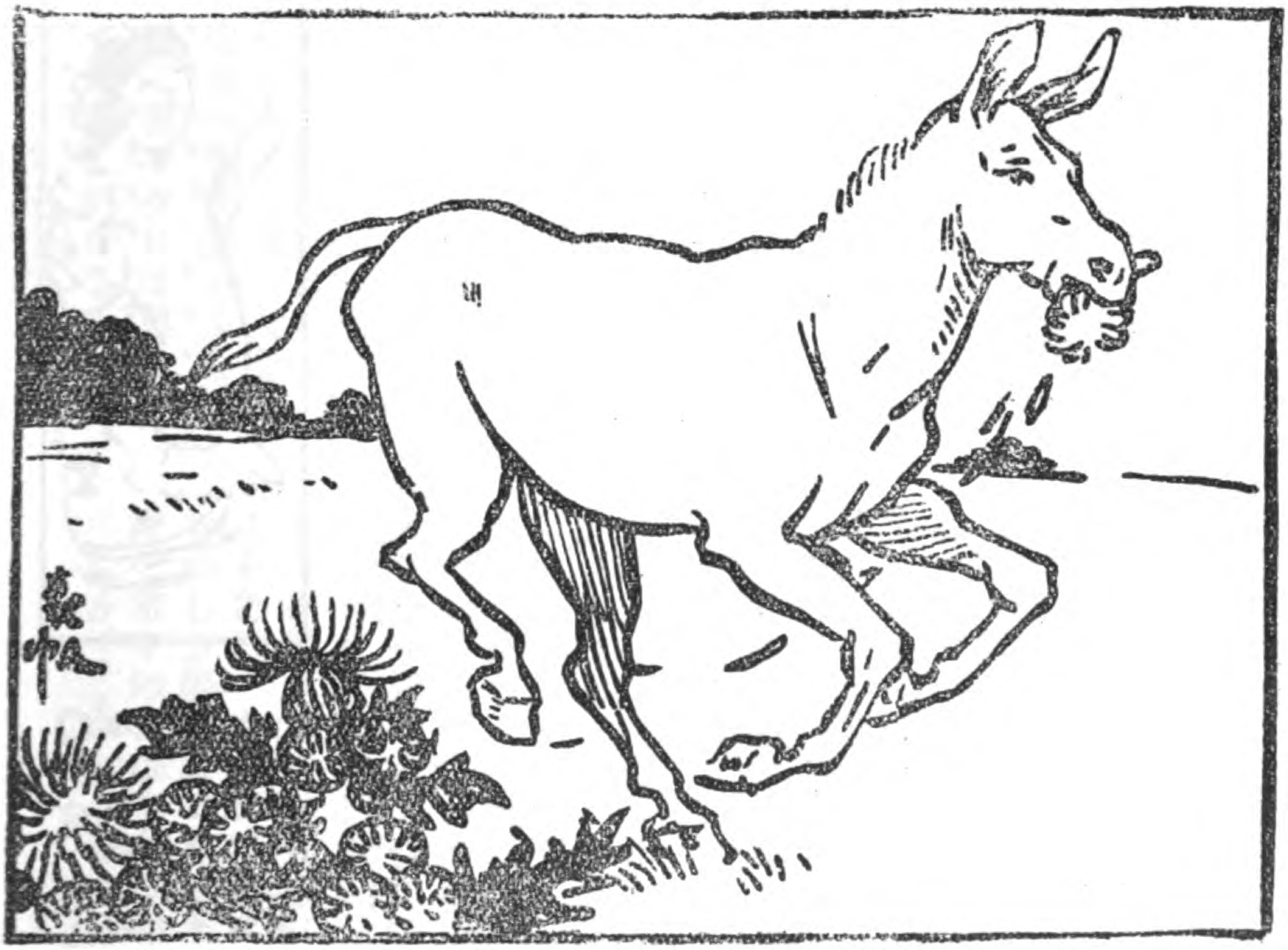
（評）少女の自作お伽噺としては寧ろ之等がおもしろからうと思ふ。

○闇の國（地賞）

栃木縣鹽谷郡北高根澤村大字花岡

細井秀子

奥の〳〵際の際に、闇の國と云ふ只一つの國が有りました。此の國は年中眞暗で、星一つも見えない、氣味の惡い處で有りましたが、土民は又不思議に、梟の樣に些いな火でも、點すものなら、其れこそ闇だ〻〻と大騷ぎをすると云ふ、悉皆で私等とは反對な國で有りました。恁麼國にも矢張り王樣が御座いまして、其の王



樣には三人の皇子が御座いました。此の三人の皇子は、大層御魚が御好で、毎日〳〵御自分で魚を御釣りに成つて三度三度に御魚を御召上られます、常日の通り三人とも釣竿を肩に擔いて御出に成りました、各々宜い場所を撰んで、釣を垂れて居りますと、突然大波が寄せて來ました處が、一番目の皇子は占めたと叫んで引上げ樣と爲ましたが、中々上りません、到頭漸つと引上ました處が、其れは〳〵大きな魚で有りました、其の内に後の二人も、同じ樣なのを釣つて、嬉び勇んで歸つて參りました、直樣三人の皇子は料理人の手を借りませんて、各々出刄と眞

魚板とを持つて料理に掛らうと致しました處が、不思議や何處からだか、「不可んー」と云ふ聲が聞えました。其れが一人ては有りません、能く聞くと驚いた魚て有りました、三人は呆氣に取られて居りましたが、一番目の皇子は憤然として、

「何！恁麼畜生不可んも何も有るもんか」と出刃を振上げてグザと刺しました。と不思議やボーと白い烟が昇つたと思ふと、魚の姿は消えて仕舞ひました。後の皇子は一層驚いて、多少恐氣差して、魚の言ふが儘にして見詰て居りますと、此度は二匹共小さな汚ない舟に變化つて仕舞ひました。サア二番目の皇子は忍耐りません、折角美旨しく食べ樣と思つて釣つて來ました魚が、此の仕末てすから赫と怒つて、

「何んだ恁んな汚ない舟」と言ふや否や叩き付けました。

何んぞ堪らん舟は、微碎に成つて仕舞ひました。三番目の皇子は、臆測の有る、利發な皇子てしたから、何んても之れは尋常ては有りません、必ず譯が有るに違ひないと、又默つて見詰て居りました處が、少し動いたと思ふと「海に放せ」と叫びました。其れて皇子は益々不思議極ると思つて、言ふが儘に海邊へ急いて持つて行つて浮べました處が、グアと地も裂けん許の音がして、立派な〳〵船に變化ましたので、一時は瞻を潰さん許りに驚きましたが、直ぐに乘つて見たく成りましたものですから、皇子はピョイと飛込みますと、其の船は或方向にヅン〳〵進行しました處が、忽焉に冥暗に成つて仕舞ひました、其れは其の筈てす光の國に來ましたからです、其の內に漸々と見え、遂には明瞭と見る樣に成つて、到底自分の國とは比較物に成りません、皇子は上陸して立派な〳〵御殿に導かれまして非常な御馳走に預りました。此の國の王樣は又大層皇子が御氣に入りに成りまして、皇子が自分の國へ歸ります時、美しい皇女をお嫁に下され、又甚麼闇ても眞光に照らされると云ふ奇妙な、貴重な玉を下さいまして、其の上澤山の人に送られまして歸國致しました。其れからと云ふものは、闇の國も晝の樣に明く成りましたものですから、土民は非常に嬉びました。

(評)世界お伽噺の類より脱化せしか筆意愛らしけれど文字に誤り多かつたのは注意を願ふておく。

○兎の智惠（入賞）

島根縣 き よ 子

或る森の中に一疋の獅子が、住んで居ました、小さい

時から至つて亂暴な性質で、自分から獸の王樣だと言つて他の獸を捕まへては喰ひ、取つては喰ひして居りました。

そこで一日森の中の獸どもが打ちよつて、相談を致しました。其の相談を恐る〵〵皆獸が獅子の所へ來て、あらまし申しますには「吾々共は毎日〵〵閣下の御氣にかなひ、御用にたちまして有難い仕合でありますが、一々閣下の、御詮議をかけますのも却つて恐れ入りますから、今後は吾々共の方から順番を定め毎日出まして、御用に立ちますから何卒左樣になし下さいませと。猶願ひました。獅子はこれを聞きましてうなづき、然らば毎日一疋づゝ參るようにせよ」と、おごそかに申しました。

一同は有難く承知して吾家に歸り其後は毎日〵〵病氣や不具で、到底生て居ても詮方ないものを差上げて居ました。其内だんだん御供の順番が廻つてある日、兎の番となりました。

兎は大變悲しみまして、何からまい考へはないものか。と、いろ〵〵考へて居る内早や定めの時刻は來ました。獅子はなぜ今日に限つてこんなに遲ひてあらうかと、髮を逆か立て首を長ふして待つて居ました。

いくらまつても獸は來ず、腹はへるし、短氣は起るし、いよ〵〵今日こんとすれば、明日は森の中を荒れてあれてあれ廻り、片端より食ひつくしてやらうと、腹をたてゝ居ます、所へ兎がしよぼ〵〵とやつて來まして丁寧におじぎをしました。獅子はいつも早足の兎がこんなに遲く來ましたのを見て、いよ〵〵怒を增し、大きな聲をして「此大馬鹿者め今迄何をして居つた、貴樣一疋のため明日はこの森の獸の命はないぞ」とさんざんに怒りました。

兎は大變恐れて、ます〵〵頭をさげながら「じつは今日かように遲くなりましたのは、私の爲でも他のものゝ爲でもありません、今來る途中で一疋の大きな獅子に出合ひました、ところが此の獅子が言ふことには、コリヤ〵〵兎、貴樣これから何處へ行くか、仔細かくさず話せ、と申しますたら、私はつゝみ隱さず、かやう〵〵のしだいて、これから死にゝゆくところてあります、と言ひましたら、其獅子は、大變怒り、ナニ此の森は己れの領分で決して他の獅子の自由になるところてはない、今貴樣の行く所の獅子は、大きな大僞者てあるから、貴樣はコレから其獅子の所へいつて、明日は互にしのぎをけづつて勝負をし、強きものがいよ

〳〵此の森の王樣になる事にしよう、と申傳てくれ、と申しました」と申しましたら、獅子はこれを聞いて少し聲をやはらげ、

「それならばよし〳〵、是れからおれがでかけて、其の獅子と勝負し、かれを退治してやらう、おまへ何處に居るか案内せい」と言ひました。

兎はピョン〳〵飛んて、森の奥のある恐ろしい、懸崖へつれて行きました。そこは深い〳〵淵て、一面鏡のやうで、波一つたゝぬ、まことにものすごい所でありました。

獅子は大變せきたて「さあ兎何處に獅子が居る早く案内せよ」とせまりますから、兎はあすこの洞穴に居ります」と。淵を指さしました。こちらの獅子は怒氣をかほ一面にあらはして、キッと下を見ると如何にも向ふに大きは獅子が面を赤くして、咆へて居りますから、此方も大きな聲て吽えれば、彼方も大きなこゑて吽えるので、いよ〳〵憎くさのあまり、向ふの獅子にとびつきました。

ざんぶりといふ水の音と共に、獅子は再び浮き上らず、そのまゝ見へなくなりました。

跡て兎は、しすましたりと飛びはねて、大喜び、そしてみんなの獸に通知せました。是れがため其の翌日から、森の中は無事て太平になりました。

世の中に智惠が一番おそろしくあります。



形　後志節子

（評）教訓的お伽噺として見るに

【秀逸】

○團子物語

下

陸奥　屋間田輝子

やがて日も暮れて次第に暗くなつて來ると御堂はガヤ〳〵と喧しくなつて來た。お爺さんは「はゝあ鬼が來たな」と思つて節穴からのぞいて見ると來たわ來たわ青鬼黑鬼赤鬼澤山集まつて賭博を始めました。そしてだん〳〵丑の刻頃になると金銀を御堂いつぱいまき散らして一生懸命やつてゐるのです。お爺はこゝぞと思つて、「コケコツコー」と三度鳴きますと案の定「そうら、夜が明けたー。」といつて吾先に錢も金もみんな置いて雲をかすみと逃げて行つてしまつた。

お爺さんは大變喜んで下に降りて來ますと地藏樣はニコ〳〵して「汝が日常正直であるから己は汝に福を授けてやるのだ。みんな持つて歸れ〳〵。」とおつしやいます。お爺さんは有難涙を流して何度も御禮をのべてお金を山程背負つて家へ歸りました。お婆さんは、お爺さんが一晩歸つてこないので心配してゐましたがこれをきいて非常に喜びました。それからと云ふものは大變金持になつて幸福に暮してゐました。すると隣りの婆さんは之を聞いて非常に羨しがり。私も一つ爺さんを行つて金持にならうと、米團子を澤山拵へて無理に爺さんを柴かりにやりました、爺さんも慾張りたから之を持つて前のお爺樣のように膝に載せましたが一向轉びません。仕方がないから自分で轉して地藏樣の所まで來ました、けれ共團子は手に上がりもしなければ食べもしません。爺は今度は無理に地藏さまに食べさせて、そして獨りで天井にかくれたのです。

成程晩が來ると鬼共は集まつて賭博を始めました。そして丑の刻を待つて、「コケコッコー」と鳴きました。「そうら夜が明けたあ」と逃げます。その時睾丸を垣に引かくものあればばら藪に引掛けるのもある。爺さんは散らばつてるお金の嬉しさとお可笑さで「アハハヽ、ヽ。」と大笑したのです。すると鬼共は「そら僞物だ」と云のでよつてたかつて天井から引ずり落して、みんなで食べてしまひましたとさ。そこで地藏樣は、「餘り慾張つたり人のまねをするからこんなになつたのだ其も汝達が惡いからだ、氣を付けろ」と後で、婆あが泣きながら尋ねて來た時申しましたとさ。

目出度し〳〵。

（評）話の筋は宇治拾遺か今昔物語でもよむ樣で甚だ面白いが文章洗錬を缺くは殘念である。

○夫婦狼

京都　春日朱鷺

犬は山犬の軟化した者で山犬は即ち狼に近い者です故に狼と犬とは仝種の獸類といへます。狼は腹の瘦せた骨の露はな、容貌の獰猛な眼光の陰險しい者で、犬より少し大きいがそれで能く牛や馬を倒します。それは鋭い齒牙があるからで、それは牛の大腿骨を優に嚙み碎く程の鋭利さを持つてゐます。狼は我國內地の山では先づ熊猪に次ぐ所の猛獸です。

狼を假名で書くとオホカミ即ち大神の意に通ひます大古人間が穴居してゐた野蠻な時でも、流石は狼には恐れをなした者と見えて、斯く名づけて敬ひ尊むだのでせう。

狼は深山に棲むで夜山を徘徊します。厭やな恐ろしい聲を出して一匹が連を呼ぶと、忽ちウォウ／＼と彼方からも此方からも大勢集まつて來ます。それが爲めに旅人が襲はれて這々の體で逃げ登つて、樹の枝でまんぢりともせず。一夜を明す事があります。若し其子を夫婦して育てゝ居る所を見られると、如何しても其人の生命を斷たねば置かぬさうです。俗に送り狼といふて夜山路を越す、旅人の後から狼が尾行して途中で倒れたりすると直ぐ喰ふさうで、無事に宿迄送り屆けた時は宿屋から握飯を遣つたさうです。

舊幕時代に京都から丹波へ毎日往復する飛脚がありました。其往復の途中の峠に主といはれる夫婦の狼が棲むで居たが、飛脚は歸掛には乾度京都で買求めた、菓子餅等の食物を夫婦狼に與へて、毎日缺かさずにそれが何時しか習慣になつて了つた。

或日少し用事に暇取つたので急いで歸つて來ると、峠へ差掛かつた頃は最早日がトップリ暮れて了つて路も分明らぬ樣になつて居た、例の通り峠の絕頂迄來ると土産を與へたが、少しも夫れを喰はず却つて鼻を鳴らし乍ら飛脚の側へ寄つて、到頭裾を咬へて倒して了つた。飛脚は溜息を吐いて、噫矢張畜生だ。幾何恩を施し情を掛けてもそれを有難い共思はぬ。情無い事だと思つて嘆いてると、不思議にも扨て喰はふともせぬ合點が行かぬ。其中に帶を咬へてグン／＼引張り乍ら橫徑に這入つて行く。飛脚は生きた心地もせぬ、夢中になつてると不圖氣が注いた。何時の間にか自分は狼の窟に引摺られて來たのであつた。

吃驚したので頭腦は茫然して、身體は大變痛い。骨はズキ／＼疼いて節々が痛む。愈々喰はれるのかとビック／＼してゐると今度は夫婦して土を掘り出した。掘れた穴へ飛脚を陷れて息の塞まらぬ樣土を冠せたそれでも陰氣で息苦しいのでウン／＼呻吟いてる。暫らくすると大きな燐火が飛むで來た。俗に謂ふ火の玉がグル／＼穴の周圍を目の廻る程速く飛び旋る。すると狼の夫婦は眼を剝き牙を鳴らして、ウオウ／＼と恐ろしい聲で哮える。

暫時は火の玉と狼と、グル／＼とウオウ／＼とが盛んに奮鬪ふたが、到頭火の玉が敗けた者と見えて何所へか逃げて行つた狼は又土を搔き分け出した。頓て又以前の如く帶を咬へて峠迄引摺つて行つたさうてある。

（評）民間の口碑にてもありさうな話、健筆感服々々。

少女文壇



○規定　本欄は十五歳以下の少女に限り投書するを得文章和歌俳句唱歌等を採用す年齢及び住所姓名學校等を明記すること用紙は半紙賞は丙種を呈す

○冬のえん側（地賞）

高知市尋常高等小學校　譽田ちえ子（十三歳）

しめ切つたしようじに、ぱつと朝日が、さしたので、私は、一番にえんがはに出ました、するとかまどの下から出たのでせう、小猫が白い毛をまつくろにして、私の、かたわらにざをしめました、そしてからだ中をぺろ、ぺろ、となめて居ます、しようじがからりと明いて、お母様や、お姉様が出て、てられました、つゞいて、妹　弟なども出てきて、いたづらをしはじめました、からだがやつと暖まつた頃、小猫が、せを高くして、ここをたちのきました、さあ、これからたれが立のくのでせう、おひる頃になつて見ますと、おばあさんばかりがをられるのです。

正直に書いてあつて、又面白さもあります（評）

○お父さんに（人賞）

播磨加古郡大中村北山内　高松しな（十歳）

お父さん、てるさんがしようじのさんをもつてたてるようになりましたいまに私のおとうさんはどこにいらつしやるのとたづねるようになるでしよう、およろこびくださいませ。

十才の子が假名ばかりて書く文句も、大きなからだした人の書いたものより要領を得て居る（評）

○兄と姉

長野縣　小池千浪（十二歳）

私の姉さんの名はいちと云ひます、十七才てす、來年嫁に行く事になりました、そして今年んは秋夫と云て廿六才てあります、日露戰爭に行つてきんしくん章をもらいました、鐵砲にぶたれた時は痛かつたと話しました。

○待つま

肥後　佐々木道江（十五歳）

今日は姉樣のお歸りなさる日。姉樣は十九の冬私宅に嫁いて行らつしやいましたが、故あつて兄樣と一しよに京都においてなさいました今年て二年になります。姉樣は、それは〱優しい方て、親に孝行な性てございましたから、父母樣や兄樣のお氣に入りました。私も嬉しくて〱、決して兄樣の嫁樣とは思はず、眞の姉樣と思つて慕つて居ましたが、お歸りなさる今日、もし私が達者であつたなら門までお迎ひに出てませう、けれども、病身の悲しさに何うする事もできませんそれて私は、優しい姉樣の姿を思ひ浮べて、お歸りなさつたら、一番に何と申上げやうなど丶考へてゐましたがもうたまらずなつて來て、姉樣〱と叫びました。

○和歌

下總　篠原文子（十二歳）

少女子が袖をつられて長き日をかすみの野べにあそび暮しぬ

笑話



○規定　面白い話なれば何でもよし實際の話でも一口話でも隨意なり賞丙種

○ハイカラ（地賞）

千葉縣印旛郡富里村中澤　安井秀子

妹「姉さんあの內はほんとに「ハイカラ」ですね。

姉「なぜ、

妹「それだつて「廂」があんなに出て居りますもの‥‥

○水道の水（人賞）

桃の人

甲「ほんとにあの方がお話上手ね。」

乙「どうしても水道の水をのんだ人はちがふわ。

丙「じや私今度お父樣が東京にいらつしやる時お賴みして送つて戴いてのんで見ませすわ。

○祖母の顏

埼玉縣　岩田文宏子

宅の祖母は天然痘の跡がある、或日弟「祖母ちやんはよく顏見られたんだれ」と云ふから「何故」と問くと「でも人の顏よく見ると穴のあく程見ると云ふから、祖母ちやんはどんなによく見られたんかと思つて問いたの」と云ふので、大笑。

○乞食の樂しみ

名古屋　秀蘭

ヂヤン〱火事だと云ふと、河原に居た乞食が周章て丶「近い近い」と云つて騷ぎ廻るので近所の乞食共「何も燒けるものもない癖にそう騷ぐ事は無からう」と云ふと「いやこう云ふ時に富人の眞似をして樂しむのだ。

○經驗

備後　百合子

新家庭を御作りになつた友人を或日訪問致しました處御二人の御談話に御主人「御前いくら年が若くてもそう何もかも經驗が無くては困るではないか」奧樣「アイ家持ちも一二度經驗して置けば宜敷う御座いましたのに何もかも始めて丶誠に相濟みません。

○ほたる

京都　とき子

七歲になる弟が螢を一疋とつてきまして、妾に何か入れ物をくれと、せがみますから、紙袋を出して、與へますと（姉さん、此の袋は紙だから螢を入れると燒けやしませんか）と云ふので妾も、お母さんも思はずふき出して、笑ひました。

○年始

白梅

去年尋常一年へはじめた妹に名刺を持たして先生のお宅へ、御年始にやりましたら、歸つて來ての話に「私は梅ちやんといつしよに行つて知らぬ家まであげたら、二つ程たらん樣になつたから、お友達にもらつたのをあげておきました。

○蚤

廣島縣　田坂芳溪子

今年六つになる武さん。妾が「蚤が居つた」と云つたら。外に跳り出て早速一塊の土を持つて來ましたから、武さん何うしたのと問いますと、平氣で「のみといへばつちです」と大得意。

○首と煙草

熊本市　原田澪子

意志の鍛錬に今日から、斷然止めゝ止めると云つては每日買つてお歸りなさるので、「もう欺されませんよ」と云つてやつたら、「それでは若し禁煙し得たら如何するの「その時は此の首を差上げましよう」と笑つたら、「それや大變澪さんを首なしにしては僕が迷惑するから、今後盛に吸はふ」。

○物覺え惡い人

茨城縣　さくら

甲女「妾は實に物覺えが惡くてこまるわどうしたらわすれない樣になるでせうれ」

乙女「そんなにわすれつぽいんなら手帳へでも書いておくといゝわわすれたら見る樣に」

甲女「其の書かうと思ふ時わすれてしまうんですもの」

衛生問答



産科婦人科專門
醫學士　北畠孝夫述

○規定　女子の身體に就て衛生生理疾病等各種の質問に應ず薬書差支なし、毎月一日〆切翌月發表す

第三十八問　イボ　衛生化粧品はなにが一等好いでせう、又私の弟は疣が出來て居りますがそれがだん／＼多くなります、脱落せしむる法はありませんか。（歎願女史）

答　化粧品に就ては婦人が經驗多いです却て私が御聞き申し度思ひます、疣の療法は醫士が最も能くに知て居ます皮膚科專門の醫士に就て治療を受けなされ、素人治療では却て瘢痕を殘したり又は焮衝を起す恐れが有ります。

第三十九問　姙娠なりや　私の姉は昨年の七月頃より大便の通じ悪く、お腹がふくれてだん／＼大きくなりますが、姙娠でせうか、最も身躰にはなんの變もありません月經も毎月日はきまらないてあります。醫師の診察を受ける必要がありますか。（御願子）

答　月經閉止は必ず姙娠を意味するものではありません、又月經閉止が無くても姙娠を否認する事は出來ませんが然し通常の場合に於て姙娠なれば月經を閉止するものです、貴女の姉君は月經ありて、腹部の膨脹すると申さるが或は後者の場合に適當するのかも知れませんが然し診察の上でなければ不明です他に何も疾患はありませんが、姙娠中にも拘らず出血のある事があります之を見て月經なりと誤る人も往々あります若し姙娠中不定性出血がありとすれば之には種々の危險が伴なはれます故ゑ頗る注意を要するのです兎に角醫士の診察が必要です、又姙娠で無くも腹膜炎若くは腹腔内に發生せる腫瘍或は腹水等の爲めに腹部の膨脹を來す事が有りますから是非醫士の診察を御受けなさい。

第四十問　鼻腔閉塞　私は昨年十月より鼻が塞がり、鼻腔と咽喉との間が臭くて困ります、又讀書を少し長くすると頭痛がします。（稙濵、鼻塞ぎ女）

答　鼻腔の閉塞及び咽喉鼻腔に臭氣を感ずるは鼻かたる又は咽喉カタル等に屢々見る所の症狀です又讀書の中に臨て頭痛を起す、以上の疾患に原因したる腦神經衰弱のためでしやう醫士の治療を御受けなされ。

第四十一問　月經とは如何なるものか　私は本當にお耻づかしい次第ですが、本年十九才になりますが未だ月經とはどんなものかわかりません、御面倒でせうが御敎へ下さい。（MK女）

答　月經は婦人の免かる可からざる生理的機能にして、生殖能力の成熟したる婦人には毎四週に來る可き子宮よりの出血を云ふ、而てその出血は數日に渉るを常とす出血そのものは生理的關係よりして體内の血液を外へ流出するなり。必ず病的に非ず、然ども月經前或は月經中に多少の自覺的訴への來ると多しとす、而してその訴へとして擧ぐれば一は局部における或種の感覺一は全身狀態に關せり、上者に屬する者は下腹部の重壓の感、薦骨痛、（時として大腿部に放散す）及び下腹の輕痛等なり、下者に屬するものは倦怠の感、疲勞の感、多少の不快神經過敏、食欲減退、頭痛、胃部の壓迫の感

熱惑等にして以上は殆んど通常起る可し。

月經は通常、平均十四歲乃至十五歲に開始すべし、然し往々十八九歲に始まる人無きに非ず而して生殖機能の繼續間は生理的に繰り返さる可て大凡そ四十五歲乃至五十歲迄て續く可し、月經の閉止は生理的には姙娠及び哺乳時に於てのみ來る、然らざれば凡べて病的なり、月經時に來る血液中には血液のみを含むに非ずして多量の粘液をも含有するなり。

月經は卵巢の機能停止せざる間は存在す卵巢を全部摘除する中は月經止む月經の起因に就ての說明は醫士間にも頗る重大なる問題にして數說に分るる之は專門科に屬するを以て玆には略す先づ月經と申す事の說明の槪略は以上にて盡したるものと考ふ尙ほ詳細に知らんとせば不審の點を御問ひなされ。

第四十二問　冷へ、熱り

私は手足が冷へ、常に顏か赤く、殊に食後には火の樣に熱ります、これは病的てせうか。（京都、紅顏子）

答　手足の冷却するのは種々の原因より來るものです、病的でなくとも寒氣强ければ之を免かれません若し病的とすれば生殖器の疾患或はヒステリー症抔にその樣なる訴へをする人が往々あります、食后顏に潮紅するのは一時身體に暖氣を感ずる故ふ自然多少の充血を全身に及ぼす結果として顏面にも潮紅するのです、以上病的て無き限りは別に介意する程の價値は無ひてす他に何か異狀はありませんか。

第四十三問　痣

あざは不治のものてせうか。（靜岡、松風）

答　アザと申しても種類多き故果して全治すべきや診察の上てなければわかりません、

第四十四問　淚

私は三四年前から始終淚が出て困ります、殊に朝風に當りますとほたノ\落ちます、如何したら治るてせうか。（羽前牧子）

答　淚の出るは種々の場合にあるものです貴女のは絕へず流淚すると申さるゝからは眼に疾患ある爲めと考へられます殊に普通多く見る所の眼疾として、結膜の慽衝ですが之が慢性となりて淚の絕へないのかも知れません素人療法は往々却て疾患を增惡する恐れありますから眼科醫の治療を御受けなさい。

第四十五問　血管病

血管病とは如何なる病氣にて候や、精しく御敎へ下され度候。（二十才の女）

答　血管病と申すは原因不明の疾患にしてその病的症狀としては身體の損傷（多少に拘はらずに）依りて出血を來せば普通健康の人なれば血液中に纖維素と申す固形分成が有つて之に依り血液を凝固せしめ止血するものである、然るに血管病に罹り居る人なれば此纖維素を欠き居るを以て僅少の出血に於ても血液には凝固の能力無き爲め出血は止ず遂に失血の爲に死するのであります、多く遺傳性のものてある。

第四十六問　皮膚の縮まったのは

私は少い時目の上に腫物が出來ましたのをつぶしましたらその痕の皮が縮まつて疣の樣になりました、誠に見惡くありますが治する法はありませんか、（郡下、篠田よしの）

答　腫物を壓潰したる後に皮膚の縮まりたるは瘢痕性收縮を來したのです俗に申す所の「ヒッツリ」てしよう、之は藥劑ては治癒しません、止むを得ざれば手術に依りて殖皮すれば多少醜容を恢復します醫士に診察を乞ひ意見を聞かれよ。

第四十七問　胃病、耳鳴

私は數年前より胃病に罹り、其後全快はしたれど、每年夏が來れば、百日位藥餌にしたしみます、何卒此の根治法を敎へて下さい。又夫れと同時に每夜左耳が鳴り、後には右耳共兩方鳴ることもあります如何なるわけてせうか。（愛讀者）

答　慢性胃疾患は醫藥のみては全治しませ

ん攝生法をも怠らず務める必要があります其他醫師の指示に隨い胃を洗滌する法もあります凡て胃腸科專門醫に就て治療法を詳細に理解なされ、單に胃病と申す丈けでは治療法を示す事は出來ません胃病には種類多くあります從て治療法も各差違あります、耳鳴も恐らく之に原因するのでしよう、然し耳鳴は耳の疾患にも來ますから之も醫士に就て能くその關係の有無、又は治療法を御聞きなさい。

第四十八問　白髮染　白髮染を始終塗つて居りましたら、それ程年をとらぬ中に早く拔けたり、折れたりします、なぜでせうか。(東京心配女)

答　白毛染めと申す藥劑の性質は不明てす(貴女の申さるゝ)毛髮の脫落及び毀損は或は其の藥劑の惡結果なるべし御止めなさい。

第四十九問　(1)乳房肥大　私は十七歲ですが、昨年暮よりにはかに乳房大きくなりましたが、着物を着て見惡からぬ樣には、どうすればなりますか。

(2)一日か一日牛　月經は十四歲の秋よりありましたが、未だ日は定まらず、殊に此頃は一日か一日牛にて閉止いたします、身體に故障があるせいてせうか。(以上、田舍娘)

答　(1)乳房の發育は春氣發動期に至りて殊に著しき者てす人々の體質に依りて大小あるは自然てす、敢て大きくなりたりとも更に介意する必要はありませんそれ故之を隱すに苦心する事は却て惡てす。

(2)月經の事は此號に詳述してありますが日程の定まらぬとて又少なき爲め心痛する必要はありません每月之を認め格段なる故障なき限りは自然に委されよ。

第五十問　色黑と肥滿　色の黑いのを白くするのと、肥え過ぎを適度に瘦せしむる法はありませんか。(岩手、靑木りつ子)

答　兩樣共に仕方ないてす肥へ方は之を止むる法は無いては無いてすが瘦せる必要も無いてしよう。

第五十一問　鼻の肥大なるを　鼻の肥大なるを治する法はありますか、鼻液といふ藥は效能ありますてせうか。(愛讀者)

答　鼻の肥大したる者に對して之を美的に縮小する法は藥劑のみにては素より不可能であります、又手術的に於ても頗る困難である、較鼻と申して俗に申すナグラ鼻に對しては近來治療法を往々施する人が有りますが之とても餘程經驗のある人に就て治療を受けねばなりません、凡べて技術的の仕事てすから專門家と唱へて居りても巧拙は免れません能く撰て信用と經驗ある人に治療をお受けなさい、

百合子——かめ女——五十一問を見られよ。

第五十二問　月經多量　私は十四歲より月經ありて廿五歲の今猶その時日定まらず、每月廿日も遲れ、其量ば多くて困ります、然るにこの一月と二月とは十五日程おくれ二三日の間ほんの少量の血を見たるのみてす、若し今後一時に多量下る事なきかと心配てす。身體は極達者てす。(心配女)

答　月經の月每に來潮するに當りて多少の遲速を來しても他に故障が無ければ格別婦人科的疾患あると認められません、然るに年齡の長じたる人に月經の過多なるは何か之を來さしむる原因あるものと考へられます殊に子宮筋腫と申して子宮に或種の腫瘍が發生して居る中の如き場合には年齡の多少に關せず月經が長期に涉り又多量にあるものであります、然しその際多くは他に故障が伴なふものです、尙ほ他に月經過多を來す疾患もありますが殊に子宮筋腫に如此場合が多いのです、貴孃は此一二月間月經が平常に比して少なかりしとて御心配なされますがその原因に就て唯だ紙上の御訴へのみては

確實なる御答へも出來兼ねます實際御診察の上でなくば確診し難いのであります、或は他に疾病が發生したる爲めか或は受胎作用の結果でありますか(姙娠しても月經が姙娠初二三ヶ月に渉り少量を以て來る事は往々あります)その邊は茲に述べ兼ねます專門の醫師に診察を御受けなされ

第五十三問 時候に關係ありや　月經は夏冬の時候に依つて量に相違がありませうか。又月經時には仰臥横臥、どちらが宜う御座いますか。ガーゼは藥店から買つて其儘使用して差支ありませんか。(一愛讀者)

答 月經は四期の氣候に左右せられてその量を増減する事は有りませぬ、月經時は臥位を何れになされても格別の差支へはありません、ガーゼを使用するに消毒を必要とする場合には必ず自家に於て一應定則の消毒法を施して御用ひなさい消毒法と申せば蒸氣消毒が最も確實であります。

第五十四問 月經多きは　月經の餘りに多きは病的ですか、少とも立ちあるきに差支へぬ程にする事は出來ませんか、多き者は姙娠し安くはありませんか、又子宮病は如何にして起るものですか。其原因を伺ひます。子宮カタルと内膜炎との相違も伺ひます。(田舍少女)

答 第五十二問に述べたる如く月經量は年齡の多少に關係するものであります(生理的に)少壯の婦人には多く年老ゆるに隨ひ月經量は減少し行くのが普通であります月經過多は疾患の爲めである故ゑ之を治するには根本の疾患より治癒せしめればその目的を達する事が出來兼ねます、月經の多少は姙娠機能には何等の關係は有りませぬ、又子宮疾患の起る理由に就て御尋ねが有りますが到底、短誌上では御答は詳細に出來ませぬその他子宮カタルと内膜炎の區別如何との御問がありますが子宮カタルと申す疾患はありません内膜炎と申しても單に内膜炎てゝ不明瞭です子宮内膜炎なれば子宮壁を覆ふて居る所の粘膜が焮衝を起したるものであります子宮頸管カタルは子宮の頸管部の内壁を被ふてある所の粘膜の焮衝であります

第五十五問 趾のたゞれ　私は夏になると趾の間が爛れて困ります、良き療法はありませんか。(黒川乙女)

答 趾(あしのゆび)間に糜爛の生ずるはその原因種々あります、貴孃のはその原因及びその狀態が不明瞭である故ゑ治療法も申し兼ねますが先づ姑息的療法として差し當り糜爛面を乾燥する方法を執らるゝが能いてしよふそれには亞鉛花澱粉の如きものを撒布しておきなさい實際根治的療法は醫士に就て御聞きなされ、

第五十六問 腹の蟲　私の母は年中腹に蟲が宿つて居て困ります、之を下す方法はありませんか。(親想女)

答 腸の寄生蟲には種々の種類があります、故にその各種類に對し治療法も異なる次第です、就中最も多きは十二腸蟲、蛔蟲、條蟲等である、各々驅除法が異なるてす、貴君の仰せらるゝは何れの種類に屬するか分明てないてすから、答へが出來ません、よし分りましても素人に驅蟲法を行はせしむるは危險てす、醫士に治療を御受けなさい。

第五十七問 咽喉のかれ　二三月前より咽喉かれ、聲かすれて困ります。(無名女)

答 或は咽喉、咽頭、喉頭、氣管等の疾患の爲めなる可し。その咽喉、咽頭、喉頭、氣管等の疾患も亦種々の病性によりて輕重があります。隨て全治すべきものと、全治せざるものが有ります。良醫の治療を受けられよ、素人治療ては治すべきものも全治しません。

誌友倶樂部



記者と讀者

○私の樣な者にも時々御交際などとか御文通などとか仰つて下さる方が御座いますが何故か永く續きません、もつと利口で文才があると思つてたら案外つまらない人だと思ひ遊ばすのかは存じませんが、それは初めにおことわり申上げておきますのに御返事は永久にとして御座います、なにも此方から御交際を願つた譯てはなしなんだかおもちやにされたやうな氣がして口惜しくつてたまりません、然し交際を願つておきながら手紙が來ても返事も出さないと云ふは禮に欠けはしないだらうかと思ひます、記者樣なんと思召します、永久いつも心を變ぜず一生心から交際して下さるといふ方はないものでせうか。（秀子）（記者曰、交際は心と心との接觸であつて、繪葉書の取りかへつこや、寫眞の見せつくらばかりて、眞の友情は成り立ち難いかと思ひます、永くつゞかぬと云ふのはつまり對手が平凡なからてせう、少しは非凡な俗流を拔いた女性なら、好い交際は出來るてせうが、世間には少いものと見えますれ、けれども少くも女子文壇の誌友である以上は、そんな平凡な浮氣者はない筈てす、誌友てない人のいたづらてせう、多勢の中から誠實な人を探し出して御交りの清く永からんことを祈ります）○長谷川時雨樣の海潮音といふお作は本になつて居るんてすか新聞に掲載されてるんてすか（大阪、生田房子）（記者曰、一向存じません、但し上田敏氏の譯詩集「海潮音」なら知つてゐます、長谷川さんのは何んな作てすか未だ氣がつきません）○一寸御尋ね中上ます私は田舍者て禮儀も何も知らぬ者て御座りますが來客のあつた時はお客樣の帽子外套などは釘にかけておくものてありませうか、又貴人にお茶やお菓子を出す時は出す度に一々おぢぎをするがよう御座りませうか何とぞ文壇誌上にて御教への程れがひ上ます（愛讀者）（記者曰、お客樣自身て掛けない時は、其家の者が注意して帽子なり外套なりを掛けて置くが宜しいのてす、又お茶やお菓子を出す時にも勿論一々お辭儀をしなければなりません）○私は投書の神に取りつかれた以來當文壇の每號に投書します。されど素養なき私てすから、猷なれ文举なれ一つとして氣のきいたものは作れないのてす。けれど神は瞬時も離れず投書を促がすので

○規定　本欄は誌友諸彦の機關として隨意に使用あれ各自に誠實を守られたし不確實の投稿は沒書とす住所本名は詳記すると字體の明瞭を要す

す。て、腦を絞つて色々な事を考へて見ます、世間やはり力のない私には好い着想が浮ばず、世間にありがちの柔の花に胡蝶ぐらゐの事より外には書けません。作つた後て讀んて見る、成程具體的には出來て居るけれど、思想が古るくて文體があまり感心しないので投書する氣にもなれない、されど神は頻りに投書を勸むるので、又胸を靜めて或は悲んて見、或は喜んて見、或は戀の煩悶をゑがき多くの幻影を捉らへて始めて、文にした結果は抽象的に書かれたもので一寸見ればうまさうだけれど、熟々見れば胸にゑがいた思想が文章の上に判然浮んて來ない。是れを具體的に書かうとして筆を取ると益々範圍が狹くなつて結末には殆ど思想が一變して仕舞ふ始末、是れては抽象的の方を投書しやうとまた見る、自作のものながらその思想がありありと胸に浮ばない、けれど何だか戀の精ても秘めてありさうな氣がして投書します。その發行期日に送られた本誌を繙いて見る果して沒書になつてゐる。一層具體的の方をと思ふけれど、是れはまた恥かしい程文が拙ないのが眼前に見えて出す氣にもなれないので、私は具體的抽象的何れがよきや今尙ほ疑問に迷うて居ります。記者樣どちらが好いてせうか？（牛込、塚原けん子）（記者曰、所謂眼高手低て、批評眼が高くなつて自分の力量の低いのが分ると云ふ嘆きてせうが實際の處此れは餘り分らない方が好いのて、何ても彼ても自分の作つたものは一番好いと信じて、盲目滅法に投書の神の前に捧げ出す勇氣がなくてはなりません、具體的だの抽象的だの云ふことは、作る人には無用の議論てす、そんな

ことを考へてゐるから作れなくなるのです、そんな事を考へる暇で、櫻の散つてゐる時の自分の心持そのまゝを書く工夫をするとか、人の言つた言葉に感じたら其まゝを書くやうにするとかした方が好いので、餘り大仕掛に力み返ると却つて、官員役にされます、つまり自分の考へ才能、感情、官能、心持などを他の人より深く、博くして、新しい方面に眼をつけ、心を注いで、其通りを書くやうにする外はないのです、此れお創作の一大秘傳です）〇宮城の女に、文學講義會は未だ通信教授を開きません、雜誌「常盤樹」は一部十錢の割で代價をお送りになれば、どなたにても送る筈です（記者）〇橫濱、河西いれ子さんに、紙上の變名は差支ありません（記者）〇橫濱、小池まさ子さんに、投稿の用紙は半紙でよろしい（記者）〇筑前、高木綠子さんに、十五日以後の分は翌月に廻すだけのことで、沒書にはいたしません（記者）〇大阪、安田芳子さんに、短文でも何でも作つたものを書いて本社へお送り下されば好いのです（記者）〇田舍女さんに、同封でもかまひません（記者）〇福岡縣、きん子さんに、添削して又出すと云ふことは別に差支ありません（記者）〇新村もと子。村雨。綾小路いく子。伊勢、渡邊文子。伊賀、野の花。常陸、靜枝。愛子。一少女。橋本いつ子。ゆき子。信濃、新子。長崎、白川八代子。埼玉縣、安齋みどり。新子。常陸のうた子。大阪、飯尾みさよ。櫻花、以上の諸孃からのおあいさつやら、おたづれやらおたのみやら皆拜見いたしました、一々お答する筈ですが、例に依り芳名だけを揭げて失敬いたします（記者）

讀者通信

〇平戸より　私は歷史で名高い平戸の者で御座います何故歷史で名高い所かと申ますと皆樣早や御存じてお在りでせうが彼の英國の和蘭國でありますす和蘭との交通を開いた一番早い地でありまして今より三百餘年前は此地で盛んに和英人が來て居まして貿易して居りましたさうですが、今は一人も居りません、が其の遺物は尙殘つてをります、和蘭壁、和蘭井などありまして遊覽人があります。此の四五年前には英國全權大使はわざ〳〵御渡平成されました位にあるのであります。まだ〳〵種々御座いますけれ共、何れ又紙上を汚しまして御話し致します。（長崎縣北松浦郡平戸村新屋敷伊知子）

〇舞鶴より　昨年の十一月から電話が開通しました、舞鶴は、又此頃電燈が出來ました、狹き町通りは大きな柱が數多並らんだので尙更狹くなりました、加佐郡立高等女學校は今や新築中で四月の新學期からは新教室で習ふ運となりました、舞鶴では三月中旬が梅の花盛で誠とに好天氣なので日曜日には散步の人が仲々に多いです、妾は農家ですから春の日和になると青麥の中耕、黃花の中に油菜の培土等で忙しいです、五月一日からは養蠶で之亦仲々の大多忙、御賢姉樣の御旅行の節は御休み下さい、停車場より、十三丁です、村ですけれど電話も通じて居ます。（京都府加佐郡高野村董花子（高田さくえ）

品物交換

〇同志の皆樣方御變りはありませんか私も相變して樂ることもありませんから御安神下さい、ついてにれ、私は全部揃つてる蛇腹早取寫眞器に脚は無論附いてますし手風琴だの洋琴だの持つて居ますから誰樣かヴァイオリンと交換して下さいませんか、ナーニ男子がたでもよろしいの私何もさしつかへはありませんから（岩城國刈田郡白川村芳賀勝子方紫花子）〇大阪の白舟子樣へ。私れヴァイオリンと寫眞器械どちらも持つて居ますからお望なら上等手風琴か月琴ハーモニカーどちらでも宜しうございますから至急お送り下さいませ私は必ず〳〵送ります（武藏國鶴見郵便局內旭村駒岡金子すみれ子）〇皆樣の中で上等手風琴か月琴お持ちの方はお知らせ下さいませ。お禮はヴァイオリンで致します又相當の代價でおゆづり下さい（武藏國鶴見郵便局旭村駒岡堂之前逗子稻葉佐太郎方金子うた子）〇妾の所に枝折なり妾の寫眞が澤山ありますから皆さん編物か姉上樣達の寫眞と交換して下さいませんか（石川縣石川郡鮑來町字東木戸醫院內谷口里美）〇皆樣私のごときものでも御交り下さいませリボン造花栞カードの御交換をねがひます御玉章られ（神奈川縣中郡大磯町二宮名操子）〇皆樣女學生風姿の御寫眞交換を願ひますよ（神奈川縣愛甲郡立女子實業補習學校內小林きく）〇水彩畫の手本御送り下さる御方はありませんか御禮には絹製編物栞リボン洋葉書雜誌等を必ず御送り致しま（近江伊香

郡片岡村田川ゆう子）○皆さん玉卒や寫眞の交換を願ひますよ、だが男子は絶對的にお斷り申しますそれに海外に居ます姉樣と永く御交り致し度う存じます（常陸土浦在大二五酒井花枝）○長野縣主催聯合共進會スタンプ附繪はがき及び山湍路繪はがき井に昨年拾月寫した寫眞二組ありますから繪はがき、寫眞、栞、リボンで申込んで下さい而し男子と見定めた方には送禮はせぬわ（長野縣北安曇郡廣津村山清路丸山清子）○何卒御交際下さいませ寫眞おみもの、リボン栞など珍らしき物何ても御交換願ます（靜岡縣引佐郡都田村新木區鈴木操子）○夏の夜涼みながら、或は月濟む秋の夕、ヴアイオリンを引いたなら、何んなに氣持が善いてしやう、何うか皆樣の中てヴアイオリンおもちの御方は、書籍と交換又はお讓り下さいまし、御問い合せは葉書て（横濱市三吉町一丁目田中方北原仙子）○サンデン電氣帶不用皆樣私の手元に上名の電氣帶及び美顏料器電氣ブラシが有ります御望みの御方は下記へ御申込み下さい直ちに說明書を御送り申します御相談の上お讓り申します（長野縣西筑摩郡楢川村々百瀬文水子）○諸姉兄樣方私は大の音樂好て御座いますから諸姉兄樣の内にもし不用のヴアイオリンが御座いましたら私に御ゆづり下さい又私の手許に算術數科書上下と詠歌辭典一册不用になつて居りますからヴアイオリン御送り下さつた御方で御望なら皆そへて差上げても宜敷う御座います（岩手縣九戸郡輕米鄕米いく子）○皆樣の内て御寫眞編物等御送り被下た御方には韓國名所、風俗、寫眞帖の中てどちらでも私の寫眞をそへて御返事致します（韓國釜山幸町二ノ六土肥方向井操）○皆樣妾早春に蒔いた美しい菫、撫子、アスターダーリヤ、金魚草、ペチユニヤ、フロツクス、梅草、カーネーシヨー、ゼラニユーム、萬重カレンヂラ、サイアンサス、等其他色々の和洋草花大分成長致しました故に此度も以前の種子の如く廣く皆樣にさし上げます尙東京以北の方には苗のかわりに種子を上げます尙又郵料はお忘れなくお入れ下さい（佐賀縣小城郡砥子町田尻貞子）○妾の許にハモニカ上等のと手製のシオリがあるの手風琴かキヌハンカチーフと交換したいの御持の方は送て下さい（佐渡郡兩津町內羅湍一二八田村貞子）○諸姉樣妾のもとにハーモニカ、ヴアイオリン、手風琴等の不用の品が有ます、妾は寫眞大好よ寫眞御賜り被下た先着九名の方に差上ますわ（三重縣伊勢國桑名郡古美村古野水谷仁平方西谷すみ子）○あゝ嬉はしき皆々樣よどうぞ御寫眞を交換して下さいなそして早く御送り下さいました御方には不束なる妾の寫眞と美人繪葉書紀念スタンプ付のを合せて五枚御禮として御送り致しますわ（東京市牛込市ヶ谷佐內坂町三八小山方佐藤しづ子）○妾は今回、婦人用小形寫眞器が、不用になりました故、皆樣の小說寬風戀風と交換して下さりませんか（東讀加茂郡黑川古田桂吉方令俊子）○御手紙有がとう妾のみにくき姿が二組程ありますから御寫眞御送り下さる方、先着五名に御禮致しますから（伊勢國桑名郡古美村字古野石川辰江）○誌友の皆樣私は此頃寫眞術を學びましたのよ、皆樣の内に私の樣なおたしなみの御方御自分のお手になつた種板などを交換して樂みましよう（長野縣上水內郡中鄕村神谷敏）○なつかしき御姉上樣美しいおうつしゑ御惠み下さいませ栞の交換もれ（神奈川縣足柄上郡松田町森千代子）○誌友皆さんから玉卒を澤山頂きましたが失禮して一々御返事もさしあげず此の誌上てお禮致しますわ、私寫眞の交換一ばんすきよ手許に名刺形が二十一枚あります御自分の寫眞とエハガキを添へて御送り下されし先着二十名のお方へ私の寫眞としなりをそへてお禮致します（京都府南桑田郡東別院村字東掛中川美枝）○お姉さま方どなたでもかまいませんがご自製の栞おもちの方お惠み下されませどうか願ひます（神田錦町三ノ五金井方博子）

圖書換讀

○英書　カスセルス、ナシヨナル、リブラリーの内てテールス、フロムセ、デカメロン（Tales from the Decameron, By Boccacoia)及ホーソルンス、テールス、（Nathaniel Hawthorne's Tales.及泡鳴氏の「神秘的牛獸主義」醉夢譯「メーテルリンク神秘論」御不用の方は、私の「プローニングス、ポエーム」「イノツク、アーデン」「女夫波の歌」「朝晴」「乙女のみさを」其他文學書と交換願ひます（滋賀縣甲賀郡柏木村字北脇川島直花）

○三四郞の切拔　誌友の皆樣の内に、大阪朝日新聞連載漱石先生の、三四郞三ノ二、四ノ七、六ノ十四、八ノ二、九ノ五、十二ノ八、九、十、十一、十二、及び、二宮尊德の四ノ九、七ノ九、御持の方は繪葉書と御交換下さい、又金色夜叉合本、大英遊記、世界的大競走等御持の方は左記の本

と御交換下さい、讀山王、航海譚、支那奇談集、海國美譚、不如歸、滑稽德川、明治史、武者氣質、肉彈、女の一心、病骨錄等てす、送本は確實てす(吳市二川町西本町通二丁目一〇二碓井吳竹)

○本誌初號より 皆様の御手許に本誌一卷、一號より十六號まで二卷一號と二號、三卷九號、四卷三號、十號十一號、十三號の中何册なりとも御不用の方は至急御送りくだされ度、御禮は婦人世界か、少女世界てちかつて致します(赤坂區青山高木町十四高木杜若子)

○お伽噺の本 お伽噺の書いてある本なら何程古くとも又汚れて居ても かまひませんから御不用の雜誌か單行本あらばお惠送下さい屹度御禮いたします(羽前國玉川局區內南小國小學校內朝尾加江子)

○新年號の本誌 皆様の內て女子文壇五ノ卷一號を御持ちてしたら御讓りを願ひ度う御座います(東京府下荏原郡南品川二日五日市、三〇四鳳聞ひて子)

○誌友の皆様、私の金色夜叉合本、夏子二册、寬風戀風三册、食道樂、不如歸、乳姉妹、女學生、不言不語、血の淚、其他安價な小說七八册と皆様御持ちの青春、伯爵夫人、自然主義、己が罪、小猫、戀夫戀、思出の記其他何なりとも新らしい小說と御換讓くださいまし。(岩代河沼郡飯谷村大字藤長谷川光子) ○皆様の中に、早稻田大學、中央公論、ハガキ文學、秀才文壇、中學世界、文章世界、趣味、新小說、冒險世界、探險世界、のうち、何なりと御不用のお方がありましたらどうかお送り遊ばして頂戴、そして繪はがき御玉章にて、どし〳〵と交際をして下さいませ。御寫眞繪物の交換もねがひます(美濃國大垣町室酒井とみ子)○皆様の中て、小說不如歸、か不如歸の歌、お持ちの方は、妾の化粧の栞、化粧品製法、萬物製法、婦人の心得、家庭知惡袋、か若しくは小說と、交換して下さいなー(美濃加茂郡黑川古田桂吉方令とし子) ○左の雜誌を、しなり、ひじつき、リボン、又はお寫眞にて申込のお方に上ますわ、先着十五名迄、妾の見惡い寫眞を添へて送ります、婦人世界、女子文壇、少女界、少年、少年世界、伴侶等(美濃加茂郡黑川古田桂吉方令俊子)

○誌友の諸姉様方の中に文學書の御不用なのが御座いましたら歌集、詩集、何ても類は撰びませんから何卒御送附下さいませ、御返禮はリボン、エハガキ、等相當の物を必ず差上げます、尙女學世界の古いのが御座いますから御望みによつて差上げても宜しう御座います(三重縣桑名町新榮山崎初子)○皆様の御手許に新曲浦島、言海、歌集常夏、舞姬、御不用なれば何卒私のベイブル(上製)、ふた昔、歌集靜夜、明星、小說紫帽子等と御交換下さいませな御願ひ申ます(橫濱花咲町七丁目八十二番地吉川香都子) ○皆様妾の手許に小說ては蛇苺。己が罪(上中下)。濟小袖。女之望。新不如歸。小天地。雜誌ては新小說。文藝倶樂部。女鑑。ムラサキ。婦人界等澤山ありますから、皆様御持ちの夏子乳姉妹。黑潮。人の兄その他寫眞畵報や面白い小說などと交換して下さいませんか(秋田縣平鹿郡里見村佐々木千代子) ○私の許に虛無黨貳册、新生涯、緣不緣、橫戀慕、愛の犧牲、女學生、血薔薇、新空氣、不如歸の歌、九面鍋造花、空前絕後之疑獄、後の不如歸、新金色夜叉、寬風戀風三册、巨人の自白、小說著作法、等が在ります故皆様の巖窟王卷一二三とかコブシ三册、食道樂合本、乳姉妹前後等と交換下さい又ヴァイオリン、御送り下されば右の小說を皆送り升又、繪はがきの交換も致し升但し上等物よ(岩代猪苗代町中村小濱) ○妾の手許に算術獨習書、郡紅、實用新撰算術三千題、算術問答、大日本中學講義錄九册、數育史二册、學校管理法、等多數御座ゐますから、理科學敎科書、英和新辭典と何卒お持ちの御方は御交換を願ひます(德島縣那賀郡今津浦村西澤チヨ) ○誌友の諸兄姉様、只今私の手許に、新小說、文藝倶樂部、ムラサキ、本誌(去年九月より)中京畵報、秀才文壇、中學文壇、ハがキ文學、中學世界、英語之日本、英語世界、探險世界、俳句誌(三册)探險世界增刊、歌、英文自在、殘花集、等凡そ五十册有り升から、小說又は鉛槧實、ヒワツキ等とお交換を希ひ升、尙私の寫眞も有りますから、お望みの方五名様に差上げ升(東京京橋區木挽町三丁目前澤玉水)○誌友の姉様方の內に、言海、肉彈、天地有情など御持ちてしたら何卒おゆづり下さい、定價に應じて相當の御禮を致します、住所は下の通りてす(イヨ越智郡日吉村倉數上野モト內瀨野由紀子)○諸姉様の中て「女子職業案內」「裁縫指南」「繪畫談話」等不用の方は私「文藝倶樂部」「女學世界」等と御交換下さい(久慈郡太田仲城町鈴木ふゆ方小澤とよ子) ○皆々様の御手許に言海寬風戀風陽炎等の本が御不用てあつたらば御讓り下さいな御玉章や寫眞繪物の御交換も御願ひします(牛込區市ケ谷佐內坂町三八小山方佐藤しづ子) ○妾の許に「女子文壇、婦人世界、佗

粧鏡、新世界、文藝倶樂部、女學世界等の雜誌があります、諸孃様の寫眞を添え郵税を入れて下されば直に何冊でも御送りします（常陸稻敷郡阿見村大字阿見淺野市右衛門方八重子）○皆さまのお手許に、木下尙江氏著の良人の自白全部、仝鐵鎚仝墓場、宮崎湖處子著、歸省、蘆花氏思出の記、金澤博士の辭林、大槻氏の言海以上お持合せの方は、私所持の文藝倶樂部（五年分）文章世界（拾册）白菊（白一號至十一號）上等美人エハカキ舶來エハカキ、各地名所エハカキ、等の内相當の品を以て御交換下さいませんか、先づ交換御希望の方は、御所持の書名とお望の品を御しらせ下さい（大阪南區谷町六丁目五番邸服部きよ子）○諸姉様、私の手許に（洋行奇談、赤毛布、戀の旅、薄命美人、モデル姫、奇人の航海、ヘーク奇怪塔、キューリアスアイランド、可憐孃、上下、家庭新詩乳姉妹の歌、其他、色々ありますが皆様の御中で、ハイネの詩、コブシ、肉彈、テニソンの詩、女殿下、多情多恨、御持ちの御方は、何卒御交換下さい、又少年界、少年世界、中學世界、女學世界、少女の友、少女世界、探險世界、等、不用のものも、多くありますから、シオリ御寫眞を以て、御申込みの方には御送り申します（新潟縣北蒲原郡乙村井上貞子）○誌友の姉上様の中に婦人世界及婦人畫報御不用でしたら御ゆづり下さい御禮はいたします（下總佐原町舟戸岩田方善子）○私の許にハイカラ令孃、角笛、母の紀念、相夫憐、新ナポレオン、新ホトヽギス紅葉全集三四卷、未亡　其他雜誌三十册右の書と交換したいのは魔風戀風三册、紅葉全集の六卷己が罪、夏子、露子、乳姉妹、上下思出の記等御持の方は交換を願ひ升小說は三種づゝ指名の上送て下さい（新潟縣佐渡郡兩津町福浦一二八田村貞子）○皆様の御手許に玉造朝はれ花守等の御不用で御座いましたら御送附下さいませんか（長崎縣東彼杵郡大村本町中尾結子）○諸孃の皆様、妾の手許に小說夏子前編後編二册、國木田獨歩の濤聲、新不如歸、新妹詩歌自在、英雄小說新日本島、新造軍艦、桂月文集雜木林、女子美文鑑の花、紀行文集、不用になつて居ますから極く安價で御ゆづり致しますから、御入用の御方は御一報下さいませ（和歌山縣那賀郡猿川村大字谷谷田峰子）○私の手許に伯爵夫人、町の仙女、金色夜叉、女學世界、婦人世界、女學生倶樂部文壇の光秀才文壇いろくあります。皆様のお手許に靑果集天うつ波か靑春と御交換下さいませんか外の本でもかまひません先着者五名に妾の寫眞をそえてお望のをお送りいたします（靜岡縣引佐郡都田村新木龜鈴木みさを子）○皆様私の手許に言海不要になつて居ますがどなたか紅葉全集第六卷と御交換下さる方はございませぬか尙又小形懷中手風琴、ハーモニカ、二人女王、箏曲妙文集等ありますからある方は一葉全集戀の繪葉書良人の自白等と又中學世界增刊もあります可成新らしい女學世界と御交換下さいな（和歌山市北新桶屋町長谷榮造方水野重子）○懷しい誌友の皆々様、妾の手元に女子文壇、新文林、文章世界、茶の湯獨稽古、愛山文集、言海、戀愛の文葉、日の出島、己が罪、小猫、兩美人、小說家、町醫者、朝日櫻、其の外いろくの雜誌がありますから、皆様御持の靑春、金色夜叉、魔風戀風、夏子、思出の記、虞美人草、乳姉妹、夫さだめ、肘突、又未使用の繪葉書、寫眞等にて御申込の御方には先着五名へ田舍の御多福の寫眞をそへて、御返事致します（水戶市富田公園內高橋丑松方あさ子）○博文館發行西洋魔術傳法、同秘術傳法、同相撲大覽（如何にして生活すべきか）文學士皆川正禧譯述（靑年成功策、附東都遊學心得）組水散史著、（慶應義塾學報、十册）中學文藝、十册（少年世界五拾册）兒童教育百册（實業の日本百册）商業界拾册（他にまだ五六種あります）寫眞及び書籍類と御交換を願ひます（長野縣西筑摩郡檜川村六番地百瀨文水子）○皆様の中で女子文壇、中學世界、文章世界、明治萬句集お持ちの方は私の小說類、雜誌とそれに美しいリボンと寫眞とを差上げますから、何册でもよろしいから送つて頂戴な（兵庫縣川邊郡長尾村口谷阪留方うめ子）○私の許にエムエス獨逸學講義錄。川中島雜誌。わすれ貝。絕食斷食實驗談。雨月物語。女學世界。少女世界。安藤よし子。信濃の唱歌集。消炭太郎。朝日櫻等がありますから御望みの方御申込下さいかいてあげます（長野縣更級郡靑木島村大塚宮島千代子）○手許に草迷宮、婦系圖上下天うつ浪上、村夫子、小夜しぐれ等がありますが皆様の中で浪六の八軒長屋又は傑作集其他の浪六物を御持ち合の方と交換下さいませ地方名所繪はがきて御返信します、至急れ（仙臺市鐵砲町堀越こう）○日本全國の雜誌を集めたいと思ひます何種にかゝはらず雜誌お持の方は御送り下さい御禮は必ずいたします（美濃加茂郡黑川村蛇溜長瀨しげ子）○觀音岩誌友の姉上様方の內で川上眉山先生の著觀音岩を

書お持ちの方は 當時の間お貸し被下いませんか私しの許に 獨歩集、文藝倶樂部、新小説、二葉亭等不用の 書が ありますから御交換して被下るなら 御交換なすつて被下いませ（常陸國久慈郡幸久村船屋内春野朝子）○皆様の内で御唱歌、配所の月章女白菊の歌御不用の 御方はどうぞ御譲り下さいまし、女學世界、少女界、少女世界、美容、などや其他の書籍をお禮として贈ります、詩集、和歌集各國の學校の紹介女學校のでも、小學校のでも 御送り下さい（久留米市櫛原町二丁目田中百惠子）○諸姉様私の許に少女界少女世界少女の友等數十册ありますから 小説と御かへ下さい 御ねがひ申ます（佐賀縣佐賀郡西與賀村大字相應津古賀松代）○手元に日本新辭林。言海。萬葉集。秋之家歌集。小詩國。佳人の涙、東西南北、文章世界。ヘガキ文學、文庫、新聲、詩人、日本人名辭典。國史の 研究。國文學歴代選、新文林。新公論、日本婦人史、貴婦人、詠歌辭典、ゆく雲。源氏物語等其他小説を除くの外文學書類殊に 和歌に 關するもの 澤山有之候間御望の御方は 其以外の 文學書を 送つて下されば御返禮に差上ます（熊本縣菊池郡 菊地村佐藤さよ）○皆様の御中に明治四十年五六月の大阪毎日新聞小説行く雲御持ちの御方は御送り下さいましな御好みの物にて 御禮を致します（鳥取市上町百〇五太田良子）○皆様去年の三月の東京神田錦町の女子音樂學校卒業式の寫眞が出てゐる婦人畫報御もちの 方はなるべくはつきりしたのを一册御送り下さい 先着一名様に御禮致します（麻布森元町二ノ二〇山下花子）○皆様の御内に何か小説にて面白き本 御座りましたら御貸し下さいませんかもし おかし下さいました御方にはそれ相當に小説本が御座いますからそれで以て御禮を致しますからぜひ御かし下さいませ（横須賀市諏訪町二渡邊佳枝）○皆々様御交際被下ませ又小説なども 御交換被下ませ御願ひします（岡山市西中山下一丁目内山方太田夏子）○皆様の内で歌集御不用のがございましたら 御送り下さいなそして御禮はそうれ何にしませう小説ヱヘガキ雑誌何てもいゝわ又御交際なれ（相州大磯町川崎孫三郎内よし子）○諸姉方の御手許に本年一月の新小説及び十一月一日發行の新文林御不用の方は私の文藝倶樂部新小説と交換を願ひます（和歌山市三木町南丁諏訪たま子）○皆様私の手元に少女界（六卷十一號六卷五號 六卷二號六卷の 八號六卷三號 六卷一號 七卷の 一二三號）其の他女子文壇は 御望次第何號なりとも差上ますから御望の方は新小説又は 何本にとも御交換を願ひます（青森縣北津輕郡 五所川原町林美惠）○諸友の皆様妾の手元に言海、女子之友、文章組立法、日本女子進化論、文藝倶樂部、小説暴風、不如歸、婦人の 戀愛、不如歸の歌、讀物など不用書がありますのよ、 皆様の内に 其他の面白き小説、雑誌や、 繪葉書御持ち 遊したら御交換遊してよ、（千葉縣東葛飾郡野田町新道門洋物類店大助丸スミレ子）○私は文藝クラブ、婦人世界、女學世界、少女界、少女世界、婦人クラブ、女かん、和洋料理法（二册）たんてい小説造花どく習、等もつて 居ますから、 早やく全書か本體のついた、さん美歌、ハーモニカか 美しいリボンて本の名前御指定の 上御申込下さい早速御禮のヱハガキな 本にそへて差上ます（麻布區森元町二ノ廿九山下花子）○草合、夏子、筆子、破戒、女夫波、五六錄作集、探野、多情多恨、月魂、怪光、運命、己が罪、我牧ハ猫デアル、笛吹川、伯爵夫人、獨歩集、露子夫人、響、思ひ出の記、不言不語、天打つ波、寸光錄、乞食、歌かざるら記、百合子、紅露、ふところ日記、琵琶歌、縁不縁、ス軒長屋、心の波、妙な男合本 晩歩人草、三人姉妹、紅露、獨稿、女殿下、洞落、みだれ髪、以上御持ちの 方は私所有の生、小説族、眞田幸村、本村重成、水戸光圀、五寮の皆、にせ紫、秋聲集、花袋集、少女の戀、二十八人集、戀、女心、春雨集、血ベラ、草迷宮、婦系圖、青年畫家、武士道、富と愛、アラビヤンナイト物語、走馬燈、愛火、榎木淵、青春怨、渦牛の家、泰西名著集、みほつくし、二人娘、五人娘、町醫者、深山の美人、新俳優、秘密世界、錨、女海賊、男一疋、凪の來目、うき世日記、卯の花おどし、忘れがたみ、奴島田、一夜畫工、村夫子、不誠魔物語、新夫婦、あだ浪、山櫻以上尚其他澤山 書籍雑誌を所持してゐますから御交換下さいまし（攝津國茨木町岸本ツチ）○誌友の皆様私は女學世界、中學世界本誌及び不用雑誌が有りますから 皆様の御寫眞か葉にて 御申し込下さい（大阪市北區信保町一、二三七奥田富識方花子）○誌友の諸姉様私の許に、運命恐、森の下露、文庫、むさしの、文藝倶樂部、女學世界、秀才文壇、新小説等あります故皆様の 舶來ヱハガキ五枚以上、クリスマスカード、寫眞かけ、珍らしい葉、又は、ムラサキと御交換を願ひます 但し二錢切手は必ずそへて下さいそして 女子の方に限ります（信濃國上原田町土橋瀬川愛子）○私に生、春、寛風艶

盛、新化粧法、女夫波、等其の他澤山あります から本邦紀念切手古切手、遞信省の觀兵式觀艦式大演習、滿州軍等の紀念葉書と御交換下さい 珍品にはアルバム寫眞帖を御添へいたします (廣島市國泰寺村森本別莊內海敏枝)○親愛なる姉樣よ、リボンを御送り下さつた御方には五名にかぎり『新不如歸の歌』『不如歸』『美少年』何れかおのぞみなのを御送り致します尙末長く〻御交際を願ひますわ(千葉東葛飾郡福田村下三ケ尾內藤桃花)○私の手許に、造花一人習、茶の湯と生花、女日用かゞみ、ふところ日記、家庭小說新不如歸、嫁と姑、戀戀悲歌、魔の池、キッス詩文、戰爭文學、新小說、創世記、女學生の氣質敎育的心理學、花吹雪等右の本不用になつて居りますから外の本と交換を願ひますよ(千葉縣山武郡白里村大字四天木字中里山內ふず子)○皆樣よ何卒御玉章の御交換を願ひます(京都市室町五條上杉山作次郎方今阪兵子拜)○諸姉樣の御許に、金色夜叉、不如歸、戀と戀、多情多恨、夏子、自然と人生、一葉全集、懸賞文集、俳句十萬集お持なさいますれば私の新文林、秀才文壇、女學世界、婦人世界、少女世界、少女界と小說數十册と御交換下さい倍價て返します(攝津川邊郡長尾村口谷二〇八番地阪上龜子)○私の許に塔中の怪、海龍窟、東洋武俠團、武俠の日本、武俠艦隊、海底軍艦、日の丸太郎上下、菊水正吉上下、幽靈學校、志士と佳人、其他冒險世界、數册、婦人世界二十册計りと女學世界十册計り有ますから、早稻田文學か、趣味か、文章世界か其他新らしい小說か詩集と御交換下さい、外國切手たくさん有ますから寫眞とでも御交換ねがひます(越後中魚沼郡十日町宮入豐子)○諸姉の中で言海御不用の方は私の昨年の少女世界全部と交換して頂戴な、私夏花少女、戀戀悲歌も持つてゐるのよ、中等唱歌集などととりかへて頂だい(福岡縣柳河町足利樣御宅にて、小笠原なみ)○私の許に演子、男女遊學案內、裁縫細工物全書、婦人くらぶ、文藝くらぶ、演藝畫報、婦人世界外に繪葉書たくさん不用になつて居ります皆樣の內にて敏子、青春、小猫、金色夜叉、月しろ等の小說御持の方は御交換下さい(埼玉縣大郡五所町神田たつ子)○皆樣の內に「故事熟語辭典」「熟語新辭典」「日本大辭林」「讀書作文辭典」「花袋小品」「小品文集」「寄宿舍生活」「小品文集」「行雲」右の內何れにても何卒妾の左の書と御交換を願ひます「花袋集」「夏子」「言文一致女子書翰文」「言葉の華」「女學生訓」「梅二輪」「理科敎科書」「文の手ほどき」「レース絹糸と紹刺」右の內二册でも三册でも差上ます(秋田縣沼舘町泉川けん子)○諸姉上樣御手許に新小說、文藝倶樂部、二月の女子文壇がお有りならば妾の女學世界か少女世界か外の本と交換致て下さい又お玉章給はかきの御交際も願ひます(水戶市上市柵町綿引まさ子)○誌友の皆々樣よ妾の許に「不如歸の歌」「金色夜叉の歌」「女夫波の歌」「夜半之追懷」等不用てすから入用の御方は繪葉書て御知らせ下さい(千葉縣東葛飾郡福田村上三ケ尾字佐見露江)○皆樣のうち左の御不用の書がありましたらお惠み下さい女學生訓、食道樂、(夏、冬)我輩は猫てある、婦人畫報、同じく增刊美容の栞、女學校畫報、日本富豪家風、明治の令孃、明治少女鏡用(石川縣金澤市上新町加藤きのゑ子)

交際を望む

○北米より　なつかしき古鄕の姉樣方よ私は北米の果に終日慰藉なく暮して居る獨身物てす何卒同情寄せられ永久に繪葉書の交換や寫眞の交換を願ます私の交際は一時的てなく一生てす一時的の御方は御斷はり宛名は左の如く(秋山初子 H. AKIYAMA. 216. ELM. AVE. LONG BEACH. CAL. U. S. A.)

○英語の研究　誌友の姉樣方と交際が致し度う御座います、英語に志して被居る姉樣方不肖な此身と共に研究なされて下さいませな。(神戶市中山手通り一丁目四十六ノ十四岸本新子)

○弟の願ひ　皆樣弟のお願ひてございますが地方て有名な神社佛院の印を押してある繪葉書或は繪葉書臺紙の御交換をお願ひいたします(姬路市本町富岡綾子)

○少女　皆樣、私未だ十四才て本誌の少女文壇へ投書する少女てすが御手紙下さる御方へ、おれいとして伯母樣から御年玉にいたゞいたきいろのリボンと白羽二重のハンカチを上げます、それから私の少女の友が三册に少女世界が三册ありますから皆樣の少女界昨年の少女の友とお交換して ちようだい(靜岡市馬場町十六番地鈴木ます子)

○形式的はご免　そして紋切形の御挨拶はもとより、お世じをのぞいた交際を望む(廣島縣

賀茂郡仁方町手島政子）

○米國より　　水彩畫、油繪、日本繪及び諸國、樣の內繪端書て御交際を願ひます男子のお方でも宜しう御座ります（在米國元しげ子、S. Moto Box G. Silver City. New Mex. U. S. A.）

○看護婦の方に　　皆樣の內で看護事業に從事して御出ての方ありますなら何卒御交際下さいませ時々は看護上の實驗も御敎へ下さいませ御返事は必ず致しますから（山形縣西田川郡鶴岡町下番町齋藤樽治方思出草）

○諸嬢樣方雜誌玉章繪葉書等おめぐみ下され母も誠によろこび！て厚く御禮申上ます私は只皆々樣の御情のある爲に愉快に〳〵日を送つておりますこれからも相變らずお親しみ下さい（和歌山市三本町南町諏訪たま子）○姉樣私先號に御交りを願ひましたら皆樣から御やさしい御文を下さいました大抵御返事を出しました心算でしたが中でもれた方にはこゝに御禮を申上げて置きますなほこれよりもほんのはがきでよろしいですから和歌など添へて御交り遊して下さいましな（三河寶飯郡形原小學校內今井はつ子）○諸友の皆々樣よ妾は彼の歷史上有名なる關ケ原の古戰場の繪葉書（極彩色）や養老の瀧のを持てゐます風景美人水彩畫帖等を御送り被下先着者五名へ進上致します（美濃大須字藤枝峠上濟子）○皆々さま御玉章やエハガキを御めぐみ下され誠に有がたう存じます御ひきつゞきエハガキの交換をねがひます（和歌山市岡山町諏訪三郎方たま子）○繪はがき玉章の取り交しを願ひます又、寫眞も御望みでしたら差上ます（神戸市兵庫須佐野通り佐々木きぬえ）○諸友の諸姉よ繪端書やレターの御交際を願ひます（熊本縣飽託郡長者村杉山しげ子）○敬愛する皆樣いろ〳〵御親切な御手紙有がたく皆拜見致しましたが中に御住所の不明なのはいかんながら御返事申上る事が出來なかつた次第何卒惡からずそれでれ！皆樣私はこんど病氣のため四月末頃迄信濃の山奥へ行く事になりましたが一ケ月もしたら歸りますから又其時は御知らせ致します（芝愛宕下桶口）○本誌愛讀諸姉樣どうか御交際を願ひます就ては當地名所繪葉書や寫眞なども送ますからどうか御手紙を下さい（青森八戶柵橫町小野寺旅館方小池うめ）○諸友の諸嬢樣よ何卒御交際を願ひます、妾は御齡を澤山召してならる方を欽仰します（伊豫松山市木屋町一丁目一入長美智子）○皆さまも御手紙下さい御返事はきつと致ますから（福岡市荒戶四番丁船越岬子）○諸友御姉上樣雜誌エハガキ玉章の交換を願ひます（肥前國佐賀縣東松浦郡西唐津大園溪水）○寫眞を御惠み下さる御方先着五名樣に限り銀の卒牌や婦人世界や文藝倶樂部を差上げます其他のお方には玉章繪葉書相當の品で御禮致します（大阪市東區上本九丁目一五三坂田清方坂田芳子）○諸友の諸姉樣妾はこの一月より本誌の愛讀者となりました繪葉書や玉章御寫眞等をお送り下さいませ妾も屹度お送り申しますわ（横須賀市米ケ濱百二十九番地森まる方森瀧子）○諸友の諸嬢樣方よ此後何卒雁の御玉章給ひてよ御返事は屹度致しますから（石川縣河北郡津幡町字加賀爪石本ぬひ子）○諸友の皆樣どうか繪はがきの交換を姉樣方にかぎりねがひます（靜岡縣掛川町停車場通り後藤とみ子）○御同情ある皆樣よ何卒厚き御交際を乞ふ（京都市高辻通新町東入西池庄次郎方今阪奈良枝）○妾は賤い女ですが以後御玉章並に繪葉書の御交換を願ひます（靜岡縣濱松榮町山田政一方平岩）○諸友の諸嬢先日は誠にうるわしき繪葉書や御手紙御惠み下され誠に有かたく誌上を以て御禮申上候なほ今後ともよろしく御交りを願申上候（宮城縣宮城郡原町南目新屋敷淸水良子）○美人繪葉書三枚以上送つて下すつたお姉樣には私の寫眞に上等繪葉書添へて送りますから……恥しながら男子の方でも情の深い優しい方なら交換いたします又玉章も下さいな（神奈川縣橘樹郡旭村駒岡堂の前金子作次郎方稻葉てる子）○御姉上樣方玉章御寫眞繪葉書等の御交際を望みます御返事はきつと致します（茨城縣水戶上市鐵砲町卅二橋詰道子）○諸姉樣よ妾は此度都合により皆樣と御別れ致します故何卒失禮は御免下さい又御交際致す時が參りましたら御願致します（東京日本橋區本町一ノ廿四莊司方高橋照子）○親しき諸友の諸嬢さまよ妾は海拔三百餘尺て各紳士の別莊地て三月もなほ積雪が一尺餘の富士見高原に淋しき月日を過しをる文壇の愛讀者てすよ是非れ末永く御交際を願ます又繪端書寫眞雜誌の交換もれ尤も女の方に限ますよ（長野縣諏訪郡富士見村富士見銀行內名取とき子）○御なつかしき御兄姉樣何卒レターや寫眞栞を御交換御願ひます（岡山市下石北渡過辰吉內渡邊菊子）○諸友の皆樣方私は音樂や文學に趣味を以て居りますもので同趣味て御厚情に富んだお方がありますなら御交際願ます（越後國北蒲原郡葛塚町大口小山文陽堂葉滴子）○どうか繪葉書玉章

津御交換を、御返事は、必つとします（攝津武庫郡新在家柴田冠夫方木村操子）○私は小學校本年卒業したばかりて未だ世間見ずの一小女てすが今後御交際を願ます、御又繪葉書、小說、ゆ寫眞レター御交換もれ（千葉縣東葛飾郡田村大字上三ヶ尾四二一荒卷げん子）○趣味を同じうする姉樣方どうぞ繪端書や玉章の御交際を願ひます（大阪市北區上福島北一百八二小原方濱田とし子）○お閑暇な時に御玉章を下さいませ私も屹度差上げます（東京市京橋區木挽町一丁目れノ十一番地田中方淸水奈美）○三月號の口繪中身すがたの船津香齡子樣貴孃は五年前小樽の小學校にゐらした御方てはございませんか私は貴孃と仝じクラスに居りました高瀨と申します（前名水澤）ほんとうにおなつかしう御座いますのれ此れからはあらためて御交際下さいませ失禮てすが御住所を御知らせ下さいませんか（向島高瀨）○皆樣シオリ、寫眞玉章、等にて御交際を御願ひ申します（大阪市北區信保町一丁目百三十七番戸奧田商店方奧田花子）○繪へがき圖畫の交換を浮山願ひ升先着者八名に姿の寫眞を一枚づつ差上升其の外の御方には當地風景繪へがきを上升（千葉縣長生郡二宮本郷村眞名新町藤田龜次郎方牧田靜枝）○誌友の皆樣私は今までは一度も投書した事はありませんがこれからは不束ながらも少しづゝ致そうと思つてゐます何とぞよろしく御交際下さいまし（東京府下澁谷町三〇七岡部喜榮子）○親愛なる諸姉樣妾は此度浪花に文學ぶ身となりましたが未だ日淺うして語る友もない者てす以後宜しく御交際を願ひます（大阪市北區西野田今開町伊東時房方上田やす子）○下記へ轉宅しました（和歌山市本町貳丁目吉川內橋本良）○各方面に勤務遊ばす皆樣の御樣子を伺ったり、各地の風俗習慣を語り合ふたり致すのも定めし興ある事と存じます御同感の御方はどうぞ下名へ……御返しは必ず〳〵致します（神戶市中山手通ノ一四十六ノ十四岸本君子）○皆樣方よ私事昨年より誌友の一人となりました此後よろしく玉章繪葉書等の御交際をねがひます（福岡縣福岡市博多下堅町六番地中野きかへ子）○親愛なる諸姉さん妾は非常の繪葉書狂てすどうか上等の繪葉書を送て戴下ろ方はありまんか若し惠んて戴下つたら親友として御交際をしませう玉章てくわしきお話も致しませう（大阪市東成郡中本村本庄七百九十五番地稲井太郎方稲井東月子）○なつかしの姉君よ妾は不幸にして八年前母を失ひ只今は淋しく日を送つて居ろ者てすが何卒御交際をねがひます（滋賀縣神崎郡山上村中寺久子）○皆樣よ私この前交際願つたら來るわ〳〵全國到る所から下さるのてうれしくて夢中て交際して居る中一人へり二人へり今てはたつた二人ぎりよ皆樣よ永久的の御心を以てレター寫眞の交かんをして下さいませんか（靜岡市沼津町川廓山村樣圓）○折角御玉章に接しましても御處のわからないのや記入してございませんのやらて大層私は心配いたしてゐます。何とぞ御知らせ下さい（川崎道江）○誌友の皆さん私の手許に私の地方の京都名勝三十枚、保津川十二枚其の他戰役紀念大演習紀念、皇太子殿下行啓紀念等の繪葉書が澤山あります是れを私も一人の所有とせずして皆さんにおわかち致さうと思ひますからお望みの方は申込て下さい（京都府南桑田郡東別院村中川美枝子）○妾は最愛の兄に別れ今は淋しい春を送つて居る者てす、皆樣の中に兄ともなり妹とも愛して下さるお方が有りましたら親密なる交際を願ひます（美濃國大垣町室酒井とみ子）○誌友の諸姉上樣よ妾は常陸の片田舍に住むものてありますが、御交際を願ひます（常陸久慈郡河內村字町屋根本靜枝）○私は前號て讀者の御方に御交際を求めましたらそれはそれは大へん參りましたので一々御返事申すとが出來ませんから本誌を御拜借致しまして皆々樣に御禮を致しますからどうぞあしからず思召下さいなそしてこんどは先着一人の方には私の手製極く粗末の編物を差し上げます御ほ後着の方も何れ禮狀は上げます但し十名まて（東京市牛込區市ヶ谷佐內坂町三八小山方佐藤いつ子）○壹月の誌上にて募集致しました俳句は壹月卅一日迄て八拾六通來ました、御約束通り拾名の方々に繪はがき御送り申しました、次に皆々樣本月廿日迄に俳句か和歌か又は新體詩を葉書に三つ迄送つて下さい、良い方貳拾名に褒賞を御送り致します（石川縣石川郡上金石町味噌屋町岡谷靜枝）○おなつかしの諸姉樣妾は昨年の冬少し都合上てよして居りましたが一月號から誌友の組に入りました故、御心切有るお方は玉章や編物の御交換をして頂戴な（豐前國門司市外青濱濱崎兵次郎方千代子）○皆さん諸國の神社佛院の印を押してある葉書又は繪はがきの御交換を願ひます（姬路市本町富岡綾子）○諸姉樣方のエヘガキ玉章の御交換へ御願ひ申します又寫眞も御願ひ申します私も屹度御返事には私のみにくき寫眞と

佐世保名所エハガキを御送り申ます（長崎縣佐世保市花園町榊原辯次郎様方中村静惠）○愛讀者の皆様御玉章の交換を願ひます（愛讀者門司市畑田吉木琴子）○私は明石町を去る三里北の山里に住む淋しい少女でございます、どうか御交際を願ひます（兵庫縣明石郡押部谷村ノ内高知村小林秀能子）○誌友の諸姉様よ妾は繪はがきや玉章の交換が何よりの樂みてす姉上様何卒親しく御交際下さいな（栃木縣下都賀郡寺尾村字下梅澤川田よし子）○芝の吉子様、京橋の芳子様御ヘガキ有難う、私は上京して只今は下宿の所に居ります、遊びに御出下さい、尙皆々様御交際下さい（神田區須田町二十二熊井方香子）○不束なるわらはなるにもかゝはらず、華やかなる御玉章御寄せ下され御厚志の程誠に感謝なる誌上を借りて左の諸嬢に御禮申します牛込のふさ子様、神田の松野様、弘前の錦女様、横濱のたか子様、牛込の英子様（牛込區矢來町一ノ乙六三塚原けん子）○只一つの慰藉なるこの御雑誌、月に一回が御待ち遠しくつて。情深い誌上の姉様方、どうぞ繪端書、玉章等の交換をして下さい（茨城縣稻敷郡柴崎村大字戌渡新田市村利右衛門方うち子）○妾は靜寂な田舎に日を暮して自然の美に憧憬れて居るのよ！誌友諸姉君方と永へに文通の交りをしたいのよ。妾高等女學校卒業してからたゞ〳〵寂しいわ（新潟縣中魚沼郡水澤村村山總正方村山潮子）○岩崎節子様あなたと妾はあの女學校に昨年まではお一しよでしたそれから妾は故郷にあなたは上京なされてからお便りが有りませんが どうなさいましたかお尋ね致します（信濃安坂富美子）○諸姉上様よ不肖乍ら私も今年から愛讀者の一名に加はりました以後宜敷御願み申します（三重縣南牟婁郡入鹿村大江正一様方關口菊子）○熊本の入江靜子様濟國の山本さく子様御兩人様共御情け深き御葉書誠に有難とう存じます、御住所が葉書のぬれた爲め不明に就き失禮致しました、何卒御許し下さいまし、其外皆様玉章繪葉書雑誌の御交換下さいまして厚く御禮を申上げます（周防國熊毛郡平生町小野貞子）○いとも御なつかしき誌上の皆様より妾修學の爲滯京してるのよ何卒以後末長く御交際して下さいな妾玉章や繪端書寫眞の交換大望みてす必ず返禮致しますわ（東京淺草區福富町二九番高橋倉藏方和田房子）

問合せ

○宮澤玉井先生　靜岡縣のお生れの方て明治九年頃は廣島市の私立女學校の先生になつてならしやいましたが今は何處に居らるゝや御住處が知れません私は宮澤先生をしたうて居る者てす御存じの御方は誌上にて御知らせをねがひます（門司市鈴木靜枝）

○平山みゆき様に　お探しの通りて御座います、大さう遠方に御住居遊ばして被入いますのね、當地も昨年師團の所在地になりましてからはにぎやかになりましたよ、立派な兵營が澤山出來ました、先月から電話も出來ました、町内は兵隊だらけて、日曜日には兵士にぶつつかりさうよ、今度御歸鄕遊ばせば吃驚遊ばしてよ（高田にて秀子）

○門司の辻本愛子様　貴女様はもしや小倉の小學校に通學して居らした御方ては御座いませんか、左様て御座いますならば幼なじみでおなつかしくてたまりません何卒御住所を御知らせ下さいませ又私のもおたづれて御座いましたから只今御通知申上ます（佐賀市水ケ江町鷹匠小路廿八田中要子）

○田中華子様に　同縣に居て誌友でもありながら一通のたよりもしません住所を委しく知らして下さい（周防都濃郡久保村切山河村しづ子）

○東京の丹波さの子様　以前妾の郷に來て居つた看護婦で妾と一しよに本誌を愛讀して居りましたが、その後東京に行つてからは、何處にどの様な生活をして居るか少しも解りません。知つてる方は何うぞ誌上でも直接でもいゝてすから御知らせ下さい（秋田平鹿里見佐々木穗子）

○渡邊露子様　岐阜今小町にゐらした方てす以前お別れしてから一度も音信がありません。若し御存知の方がありましたらおしらせ下さい（宮崎縣宮崎町松浦みれ）

○阪本はる様　結城郡山川村の阪本はる子様先日手紙とエハガキを送りました處本人行先不明の附箋で戻つて來ました現在の住所を下記までお知らせを乞ふ（新潟縣佐渡郡兩津町字福浦一二入田村貞）

○谷河岩子様　昨年の五月廿六七日頃荏原郡大井村へ御轉居になりましてお手紙を出しても單に大井村ては不明と附箋して戻つて來ましたので字番地が不明て困つて居りますが若し御存じのお方はお知らせ下さいませ必ず御禮致します（小石川丸山町十七香川富士）

雜報

婦人界消息

○周宮内親王殿下の御慶事

北白川宮成久王殿下と御成婚相成るべき周宮房子内親王殿下の御慶事は、愈々近く御大禮を擧げさせらるゝとにて、たゞ其御運びの御日取の發表を剩まして居る丈けですが、孰れ近き吉日を御選定遊ばさるゝとで御座いませう、又御移轉の御豫定なる高輪別御殿は、嚮に竹田宮殿下御慶典の當時、假りの御殿に充て給ひし處で多少御改築の箇所もあり、御大典に關する必要の御調度品はもとより、御移轉後の御賄ひは新世帶に在らせらるゝ故、勝手道具に至るまで洩れなく御新調に相成りし次第だそうで御座います、尤も此の別御殿とても當分の御假住ひにて新御殿御造營は既に設計を終り、竹田宮邸に隣れる一萬四千坪の地所に、工事三ヶ年間の御豫定にて洋館御建築の御都合なりと承はります、

○愛國婦人會總會

第八回愛國婦人會總會は四月五日を以て、日比谷公園に開催せられました、音樂堂前の式場の、紫の帷幄深く繞たる會場をめぐらせたる處、ゆるやかに起る君が代の奏樂につれて、總裁殿下の御名代たる東伏見宮妃殿下は、名譽會員伏見若宮妃殿下と相携へて、會長岩倉公爵夫人の御先導にて御臺臨になりましたが、御名代宮には御帽も御服も、共に桃色なるを召させられ、伏見若宮には水色の涼しげなる御姿美はしく拜しました。式は岩倉會長の開會の辭に始められ、令旨及び奉答文の朗讀があつて後、有功章の親授を受くる者總べて四十五人、式を了つて、後方に設けた大天幕内に茶話會が開かれました、此時殿下には御つゝましう面覆を御上げになり、一同と共に、會員同樣の食物を聞し召したので、支部から來た人々の中には、身に餘まる光榮に感泣して居る者も少くなかつた樣でした。

○日本女子商業學校卒業式

市ヶ谷見附内なる同校卒業式は三月廿八日午前九時半から擧行されました、校長和田垣博士敎育勅語と戊申詔書を捧讀し、卒業生高等科十四名本科三十一名速成科十六名裁縫科十一名に證書授與並びに優等及精勤者に對する表彰ありて、卒業生に對し自重すべき旨、懇篤な訓辭がありました(其大意は本欄にあり)來賓天野博士亦親切なる奬勵の演説をせられました、それから式終つて常磐會大會に移り活人畫歌劇等があつた就中英語對話の近江聖人が尤も見物でありました。實用學校丈けに學監嘉悦女史卒先して接待ぶりもきびきびと拔目なく、生徒方お手料理の所謂和漢洋の御馳走のお手並も結構と賞めた人も少くなかつた樣でした。

○東京女子美術學校卒業式

男爵夫人佐藤靜子氏校長たる同校にては、四月一日午前十時より、本郷菊坂町に建築中の新校舍で卒業式が開かれました、勅語を捧讀して後、繪畫造花刺繡編物裁縫等各科卒業生及び優等精勤者に證書を授與し、校長の諭告、東京市長代理の祝辭朗讀、來賓男爵辻新次氏校務監督正木直彦氏の演説等あり校歌を歌つて閉會しました。新築の同校舍では當日なほ雜作中でしたが、三階作りの立派な建物でした、又同校にては二日より三日間生徒の製作品展覽會を開きましたが、造花刺繡物の紛紅亂紫眼もあやなる美しい眺めでした。

○日本女學校卒業式

本郷龍岡町なる同校にては、四月七日午後一時より卒業式を擧行しました、卒業生本科七十二名家政科五名。

○學習院女學部卒業式

三月三十日午前學習院女學部卒業式擧行、周宮内親王殿下の御成りあり、卒業生は專修科五名、中學科六十二名、同別科二名、北白川宮武子女王殿下には專修別科を御修了遊ばされたのであります。

○青山女學院の卒業式と文學會

青山女學院にては三月廿九日夜芙蓉會水幼年の三文學會聯合の公開文學會を催うしました、當夜ひどい雨てしたが會衆滿堂なか〳〵盛んてした、ヒヤノの獨奏英語の暗誦、唱歌とり〳〵に面白く、邦語てミルトンのコーマスの劇、英語て沙翁のリヤ王の一齣を試みたのなぞ尤も振るつたものてした。翌三十日午後卒業式擧行、新渡戸博士の演說がありました。

文藝革新會起る

文藝革新會と云ふ一團體が起つた、發起者は皆知名の文士である、動搖しつゝある我が文壇に何物か貢献しやうと云ふ主旨らしい、今は只主張及び發起者の名を左に掲げて、今後の運動は其折々に報導することゝしやう、

主張

惟ふに現代の日本は高遠雄大な十理想が新なる文明の下に實現せられんとする途上にあり。從つて吾人の文藝は光明ある新時代の精神を基礎として人生の爲にせる文藝ならざるべからず。現代英雄的日本の要求は剛健なる思想と淸新なる趣味との皷吹にあり。至醇なるなる新理想の建設にあり。生命ある新技巧の發揮にあり。眞摯なる人生の新價値を認むるにあり。文藝革新の機運は今や方に熱せるに庶幾し吾人同志の士は時代の要求に應じ、此機運に乘じて、沈滯せる局面の轉回に一臂の力を効さんことを期す。

明治四十二年三月　文藝革新會

發起人

林田春潮、登張竹風、小山鼎浦、
中島孤島、栗原古城、後藤宙外、
姉崎嘲風、齊藤野の人、佐々醒雪、
笹川臨風、樋口龍峽、

スヰンバーンの逝去

去る四月十日、英國現代の大詩人スヰンバーンが逝去した、彼は千八百三十七年倫敦に生る、父は海軍大將であつた、早くより各大學に學び詩をも作つた、彼の名はテニソン、ブラウニング、ロセッチと共にヴイクトリア王朝の四大詩人と稱揚された、彼は學者であり思想家であり詩人であつた、彼の著作は少からずある、詩集の外に數種の劇詩もあつた、有名なる作の梗概詩の飜譯等多少は我國にも行はれてゐる。

文界消息

▲パン（希臘の牛獸神）の會と云ふのは北原、吉井、平野、石川などの『スバル』に關係ある、君が主唱者となり、『方寸』の石井柏亭君などの畫家も加はり毎月一回雜談會を催ふす集りであるが、四月九日夕方より深川永代亭で其大會を催ふし、談論甚だ盛んであつた。

▲讀賣新聞は前月十七日新築の祝意を表する爲め開放的の園遊會を日比谷公園に開いた。

▲東京毎日新聞は有樂町に移轉した、紙面に文學的記事が多く載るやうになつた。

▲上田敏氏はアンドレフの『こゝろ』を譯了した多分春陽堂から出版されるだらう。

▲永井荷風氏の『フランス物語』は博文館より出版になつたが直ちに發賣禁止された。

▲佛國で近頃賣出しの作家アナトール、フランスの作物の飜譯、梗槪等は馬場胡蝶氏を初め其他の人々も往々試みるに至つた。

▲小山内薫氏、市川左團次の主唱にかゝる自由劇場は愈よ主意書を發布した、今秋第一回の興行を試みるさうだ、會費は一回分金貳圓五拾錢會員外の觀覽は許さないことになつてゐる。

▲小栗風葉氏は當分郷里三河に引籠りて、靜に創作に從事すると云ふ噂がある。

▲創作も評論も一切無名で掲載し、大いに文藝界、思想界の空氣を一新しやうとの主意で、雜誌『無名通信』と云ふものが現れた、初號は四月十五日に發行された、主幹は小杉天外氏。

▲美術學校成蹟展覽會は同校内に、小林、岡野山本、跡見、中澤諸氏の寫生旅行作品、展覽會は跡見女學校内に、川合玉堂氏門下の下萠會展覽會は神田の東洋女藝學校内に、孰れも前月初旬開催された。猶鳥合會展覽會は本月下旬例の常盤木倶樂部で開かれる筈。

▲支那文學に通曉して當代の碩儒と稱へられた南摩綱紀翁は八十七歳の高齡を以て前月十三日溘然として永眠した、翁の家系は代々會津藩士にして、翁は幼きより漢學に志し、後ち江戸に出て、深く儒學を修めた、後年、畏くも勅命に依り御前進講の榮を荷ふたこともある。

散りし花

都の花は例年よりは少し遲れて、四月の七八日頃から咲き初め、十一日の頃を絶頂として散り際に向かつた、花の時節は又運動會や展覽會なぞの時節て、花曇りの空の兎角惡まけ易く、生温るい風が盛んに塵埃を颺げる中を、三春の行樂今日で盡くると云つたわけて、醉ふが如く狂ふが如く出かける。上野は春まづ深けて紅の雲やうやくくづれかけると、花神江を渡つて向島が賑やいて來る、競漕の櫂に花吹雪する頃は單瓣のものは大方終りを告げる。九段の花は尤も人の寄る處て、花の密なる落花の雪に踏み迷ふと云つた處はあるが、どうも人氣多く花の色も埃に塗れて惡いやうてす、此處のみならず、人奥のある向島飛鳥山亦免がれない、江戸川は川幅狹くして花に趣きあり、山王境内は幽寂、清水谷公園は大方は小供の遊び場のやうてす、半藏門から先の花のトンチル、芝山内の花天井いづれも盛んなもの　てす、植物園庭内のは少しの塵にも塗れず、行人も悠々として樂んで見える、其他見附〳〵の並樹、山の手の家々の庭樹いづれ櫻ならぬは無く、さすがに花の都だと思はれるのであります。

新作家

本誌第二增刊『新作家』は愈よ本月十五日に發行いたします、今度の增刊は一寸目先の變つたもので、其人の眞の技倆を發揮させる爲に美文小說詩歌の類、寄稿全部を一括して選評し、其れに等級を附してありますから、御覽になる方も變化があつて面白からうと思ひます、其上、各作者の『日課表』が終に附いてありますから、對照して見ると一層の興味があるのです、附錄は新進閨秀作家の傑作を五六篇添へます、疎雜に編輯された投書雜誌とは自ら別の新面目を具へて居ります、發行の上は是非とも御覽下さい。
定價其他詳細は本誌廣告欄を見られよ

○國民文庫刊行會　今度神田小川町一番地に頭書の如き會が起つて、國民文庫と名くる全篇三十六册に、歷代文學の精華を拔き、美本に裝釘して出版する計畫があります、詳しくは前號に其廣告が出て居ります。

餘興課題　わが机上

今度の題はどなたでも書けますから、諸孃は有りの儘を書いて送つて下さい、說明を一寸左にいたします。

▲わが机上とは諸孃が毎日向はれろ机の上のことを書くのです▲先づ机の上には何が置いてあるか、書物、文房具、或は寫眞架か、繪葉書挿みか、花瓶か▲置いてあるものゝ名前だけ並べたのでは面白くありませんから、其物に就いての說明が願ひたい、由來も聞きたい、感想も好し▲簡にして要を得たるものが勝を占めますから、成るべくくだ〳〵しくなくして、面白く書いて下さい▲原稿は例の通り十六字詰十行内外「餘興、わが机上」とだけ題を書いて置いて下さい▲懸賞は矢張天、地、人の三人に差上ます▲しめきり本月十五日

新刊

○邪宗門　北原白秋著

詩集『邪宗門』を紹介するに先つて北原白秋君が詩に對する眞面目なる態度を紹介しなければなりません、君は五六年前から詩を作り出した人ですが、初めより才分はゆたかでした、精根も大いにありました、今日『邪宗門』が三百五十頁の大冊となつて表はれたのは決して偶然ではないのです、之を細評するにはなか〳〵時間のかゝることで、一寸今とは云つては出來ませんが、全體に概括して、君は詩の上に、極めて廣い、極めて自由な世界を持つてゐます、今までの日本人に無かつた官能の働き、情緖のゆらぎ、空想の力などが其作詩の上に大膽に、若々しく、而かも眞面目に試みられてゐます、君も亦生れたる詩人の一人です、感覺て云へば熱、色て云へば緋、君の詩の印象は明かな影を殘します、立派に獨創の世界を拓いてゐます、藝術家として尊敬すべき値は充分にあらうと思ひます、『邪宗門』の釘裝は拔目なく整うて美くしいものです、心持の好い書物です(定價一圓、麴町區飯田町六丁目易風社發兌)

○花袋集第二　田山花袋著

祖父母、兄、弟、死屍、不安、白紙、菜、ふれ實、八年前、墓、友、手紙、白鳥、古驛、放火犯、車の音、おし灸、土手の家の諸篇が收めてあります、皆最近の努力に成るもの、花袋氏の作は、一作毎に小說壇に新しい空氣をもたらす、作家としては目覺ましい活動を續けてゐるから、現代の小說を語らうとする者には見免しのならぬ集です(定價金一圓十五錢)

○長篠合戰　塚原澁柿著

澁柿翁はこれで第十篇を重ねました、塚原氏の歷史小說は外に類がないから、愛讀者を獨占してゐるやうです、製本の堅牢優美は例卷の通り(定價金八十五錢)

○野心　村山烏逕著

牧師にして小說を書く村山烏逕氏の作、短篇にうまいものがあつたのを記臆してゐますが、長篇もなか〳〵達者に書いております(定價金六十五錢、以上三書神田區富山町佐久良書房發兌)

○トルストイ小說集　百島操譯

懺狩、大惡魔小惡魔、富の力、愛の勝利、世捨人、親子三代、珈琲店、唯六尺の諸篇を集めてあるのです、譯者は經驗のある人です、筆の運びも雅馴です、トルストイの渴仰者は必ず一本を備ふべきもの(定價四十錢、府下巢鴨內外出版協會發兌)

○大成造花講義　美術造花傳習所編纂

近頃流行の造花の術を獨習し得らるゝやう分り易く書いた講義書です、是に附屬した『實用新式造花切形と合せて讀むと、獨りでも造花をうまくこしらへる稽古が出來ます(定價四十五錢、切形の分は二十錢、神田美土代町二ノ一日本彫業會發兌)

○女子大學講義

讀て評判のあつた日本女子大學の講義錄です、成瀨校長の實踐倫理を初めとし、各講師分擔の學科それ〳〵ありて、事情の爲め入學出來ざる女子の居ながら女子の學ぶべき學問を一通り知らうと云ふ人には甚だ有益です、會費一ヶ月五十錢、月二回の發行です、會員にはいろ〳〵の便宜があるやうです(小石川區久堅町精美堂發兌)

○雜誌

▲海老名彈正、安井哲子兩氏主筆の新女界第一號は發行されました、高潔な雜誌です(定價十錢、小石川區久堅町新人社)▲新世紀は政治經濟文學の各方面に涉つて評論をする健實な雜誌です、是も初號は四月一日に出ました、月二回の發行で形の大きい雜誌(定價十五錢、京橋區南佐柄木町新世紀社)▲家庭は女子大學講義錄を取る人に無代で頒布する雜誌ですが、紙數も多く編輯にも骨折つて居ます(定價拾錢、精美堂)▲スバルの森鷗外氏の『假面』は四月の創作の中で最も勝れて貫目のあるものでした▲趣味は例の通り趣味式の雜錄が面白い▲新小說は活氣がついたやうに思はれる(以上寄贈)

寫眞懇請

読友諸嬢にお望みいたします、本誌**愛讀者の面影**を紙上で紹介致したいと思ひますから、従來の如く盛んに御寫眞の寄送を願ひます、お一人の寫眞に限りません、愛讀者の方々が時々催される**小集の紀念**に撮つた寫眞など最興味があらうと存じます、或は二三人連れてお友達同士お寫しになつたのも結構です、なほ**家族の寫眞**も歓迎致します、女子の雜誌ですから家族でも女子の方が多く寫つて居るのを希望します、**女のお子様達**の寫眞も好いのです、人物以外には各地の**名所、風景、又は風俗**寫眞も勿論掲載致します、風景などは成べく餘り世間に紹介されて居ない新しい場所が好いのです、以上凡て御寄送の寫眞は**『乞返送』**と書添えて下さいますれば、用濟次第直ぐ御返し致します、何卒貸與を懇請します、且人物風俗其他何れの寫眞にても、奇拔にして餘り世間に類の無い好い寫眞でしたら**相當の報酬**を差上ることになつて居りますから、其邊の所も御承知置きを願ひます。

▲投稿締切日

凡ての投書は毎月十五日堅く締切ます

○女子文壇各種投稿懸賞定額

（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲特別賞金五圓

▲甲種（短篇小説、美文）
天賞金參圓。　地賞金壹圓五拾錢。　人賞金七拾錢。

▲乙種（お伽噺、家庭日記、新論文、書簡文、新體詩、散文詩）
天賞金貳圓。　地賞金八拾錢。　人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、笑話、歌謡、教への庭、少女文壇　圖畫は二寸の三寸の大さにて薄き日本紙に限る）
天賞金壹圓。　地賞金五拾錢。　人賞金貳拾錢。

◉各種とも金壹圓以上の價格當選者には相當の呉服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す　壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

◉賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽窃したるものは無効とす）

社告

女子文壇定價明細表

振替貯金口座　東京第壹七貳九番

○定期發行分　毎月一回（一日定期發行）

一冊（一回分）	定價金拾五錢	郵税一錢五厘	計金拾六錢五厘
三冊（三月分）	同前金四拾三錢五厘	同四錢五厘	計金四拾八錢
六冊（半年分）	同前金八拾四錢	同九錢	計金九拾三錢
十二冊（壹年分）	同前金壹圓五拾六錢	同拾八錢	計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分　年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）

一冊（一回分）	定價金貳拾錢	郵税一錢五厘	計金貳拾一錢五厘
二冊（半年分）	同前金三拾八錢	同三錢	計金四拾壹錢
四冊（壹年分）	同前金七拾貳錢	同六錢	計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部――十六回

四冊（三月分）	定價金六拾三錢五厘	郵税六錢	計金六拾九錢五厘
八冊（半年分）	同前金壹圓二拾二錢	同拾貳錢	計金壹圓三拾四錢
十六冊（壹年分）	同前金貳圓二拾八錢	同二拾四錢	計金貳圓五拾二錢

▼申込注意――振替にて拂込む時は誌代の外に貳錢登記料增すこと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增（收入印紙謝絶）、凡て前金拂込に限る

廣告料金

特等	上等	普通
一頁三十圓	一頁廿五圓	一頁廿三圓
半頁……	半頁……	半頁十二圓
部數多く有効に比し紙類の割安		一行四拾錢
〆切毎號十五日前		

特約取扱　○京橋　日本電報通信社　○京橋　明治廣告社　○神田　博報堂

明治四十二年四月廿九日印刷
明治四十二年五月一日發行

定價金拾五錢

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話（本局六〇七番）　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】



女子文壇 定價金拾五錢 郵稅壹錢五厘

【東京秀英舍印刷】